一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡南部町

清水川六反田遺跡

２０１３
一般財団法人　米子市文化財団

調査地遠景（北から）

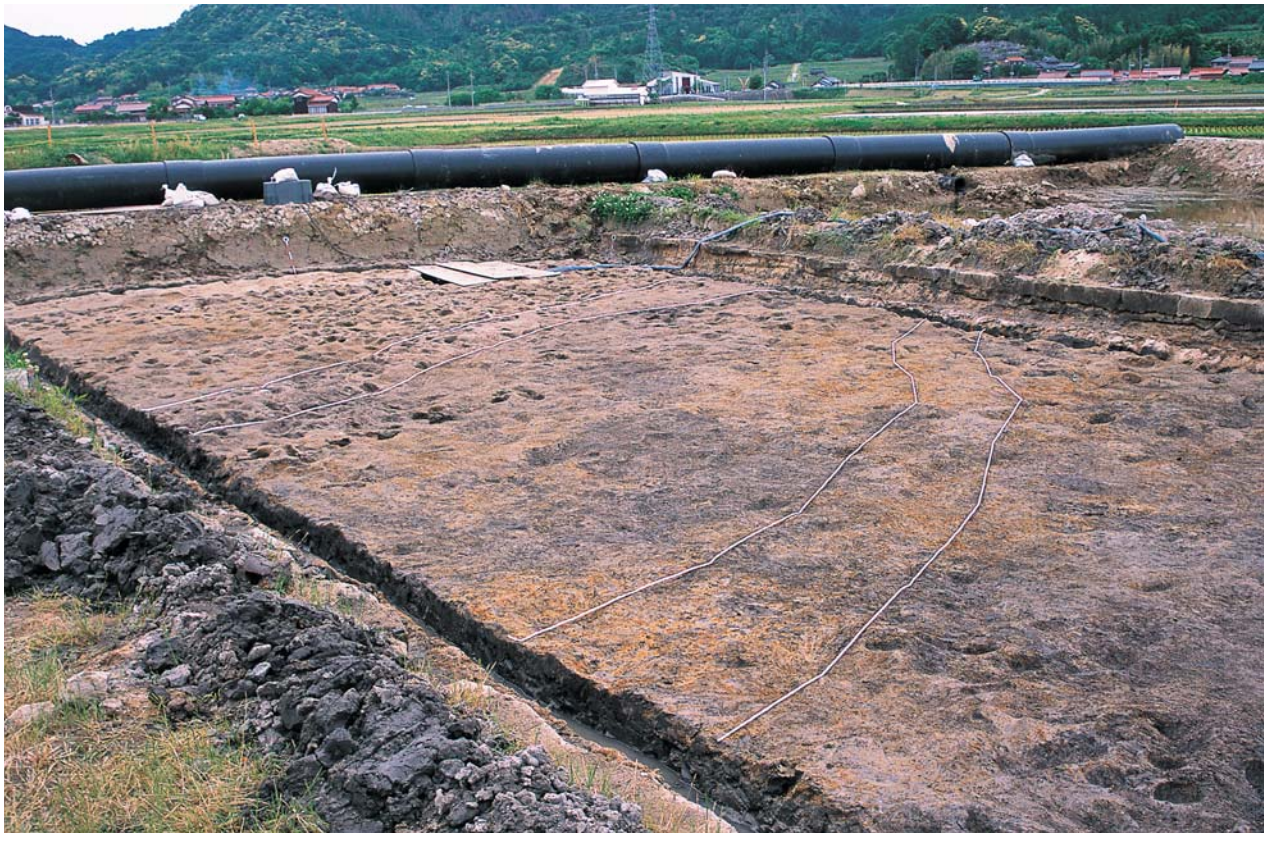
調査地遠景（北西から）

巻頭図版２

４区下層水田跡（西から）

４区下層水田跡（東から）

４区上層水田跡（西から）



４区上層水田跡（東から）

序

鳥取県西部、秀峰大山の西に位置する南部町は豊かな自然に恵まれた美しい町であります。さらに、古代からの遺跡の宝庫として知られており、山陰屈指の規模を誇る三崎殿山古墳、三角縁神獣鏡の出土した普段寺古墳群など古代人の生活や当時の活発な交流を物語る貴重な遺跡・遺物が数多く存在しています。

当財団では、平成20・21年度に鳥取県の委託を受け、一般国道180号（南部バイパス）の改良工事に伴い清水川六反田遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、弥生時代前期の溝状遺構や中世の水田跡など、数多くの遺構・遺物が確認されました。これらはこの地域の歴史を解明するための貴重な資料になると思われます。

この度、この調査成果をまとめ、発掘調査報告書として刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しております。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成２５年１２月

一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　　杉　原　弘一郎

例　言

1．本報告書は一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴い実施した清水川六反田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて財団法人 米子市教育文化事業団（現　一般財団法人 米子市文化財団）が実施した。

3．本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Y、Zの数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。また、レベルは海抜標高を示す。

4．本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の１／50,000地形図「米子」、及び南部町作成の１／5,000「南部町全図」を加筆して使用した。

5．本報告にあたり、剥片石器の鑑定を公益財団法人 鳥取県教育文化財団　北浩明氏に、石器の石材鑑定を鳥取県埋蔵文化財センター　高橋章司氏にお願いした。記して感謝いたします。

6．出土木製品の赤外線撮影については、出雲市弥生の森博物館の協力を得た。記して感謝いたします。

7．本報告にあたり、自然科学分析としてプラント・オパール分析、花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定、放射性炭素年代測定を（株）古環境研究所、木器と漆器の保存処理、及び漆器の塗膜分析を（株）吉田生物研究所、樹種同定を（株）古環境研究所と（株）吉田生物研究所にそれぞれ委託した。

8．本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。

9．本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。

10. 本報告書の執筆は、高橋、小原が行い、編集は高橋が行った。なお、文責は目次に記載した。

11. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類は米子市教育委員会、出土遺物は南部町教育委員会で保管している。

12. 発掘調査にあたっては、南部町教育委員会にご指導、ご協力いただいた。明記して深謝いたします。

凡　例

1．遺跡の略称は「ＳＲＫＴ」とした。

2．本報告書で用いた遺構の略称は以下のとおりである。
　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑

3．本報告書における遺構番号（新）は、発掘調査時のもの（旧）と一部変更した。新旧の遺構名・番号の対応は、目次末尾に付した新旧遺構名対照表に示した。

4．本報告書における遺物の掲載記号、縮尺は以下のとおりである。
　番号のみ：土器、土製品、陶磁器　１／４、１／２　　Ｓ：石器　１／１、１／４、２／３
　Ｗ：木製品　１／４、１／６　　Ｌ：鉛製品　１／２　　Ｂ：銅製品　１／１

5．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。

6．遺構図、遺物実測図に用いた網掛け及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
　：地山　　：赤色塗彩範囲　　：石器研磨痕　　：炭化範囲
　●：土器出土ポイント　▲：石器出土ポイント　■：木製品出土ポイント

7．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りとし、それ以外は白抜きで示した。また、遺物実測図中における記号は以下のとおりである。
　→：ケズリの方向　　↔：研磨範囲

8．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

9．本報告書における遺構、遺物の時期決定には下記参考文献を参照した。

参考文献

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ
玉木秀幸 2006「伯耆の土器様相」『山陰における中世前期の諸様相』山陰中世土器検討会
横田賢次郎･森田　勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』
　　九州歴史資料館

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査の経緯と経過　（高橋）
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 2
　第４節　調査体制 …… 3

第２章　位置と環境　（高橋）
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法 …… （高橋） 9
　第２節　１区の調査 …… （高橋） 10
　　１．概　　要 …… 10
　　２．基本層序 …… 10
　　３．第２遺構面の調査 …… 13
　　４．第１遺構面の調査 …… 17
　　５．遺構外出土遺物 …… 24
　第３節　２区の調査　（高橋）
　　１．概　　要 …… 25
　　２．基本層序 …… 25
　　３．第２遺構面の調査 …… 27
　　４．第１遺構面の調査 …… 50
　　５．遺構外出土遺物 …… 53
　第４節　３区の調査　（高橋）
　　１．概　　要 …… 63
　　２．基本層序 …… 63
　　３．第２遺構面の調査 …… 65
　　４．第１遺構面の調査 …… 68
　　５．遺構外出土遺物 …… 69
　第５節　４区の調査
　　１．概　　要 …… （高橋） 72
　　２．基本層序 …… （高橋） 72
　　３．第３遺構面の調査 …… （小原） 74
　　４．第２遺構面の調査 …… （小原） 79
　　５．第１遺構面の調査 …… （高橋） 80
　　６．遺構外出土遺物 …… （高橋） 81

第４章　理化学的分析
第１節　清水川六反田遺跡における自然科学分析 ……（株式会社　古環境研究所）83
第２節　清水川六反田遺跡における種実同定 ……（株式会社　古環境研究所）95
第３節　清水川六反田遺跡における放射性炭素年代測定 …（株式会社　古環境研究所）98
第４節　清水川六反田遺跡出土木材の樹種同定 ……（株式会社　古環境研究所）101
第５節　清水川六反田遺跡出土木製品の樹種同定 ……（株式会社　吉田生物研究所）104
第６節　清水川六反田遺跡出土漆器の塗膜構造 ……（株式会社　吉田生物研究所）105

第５章　総　　括
第１節　清水川六反田遺跡における遺構の変遷 ……（高橋）107
第２節　法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代前期の遺跡について ……（小原）109
第３節　清水川六反田遺跡出土の石器について ……（高橋）115

遺物観察表 …… 123
写真図版 …… 図版1～54

新旧遺構対照表

新	旧
ＳＤ60	３区　ＳＤ54
ＳＤ61	３区　ＳＤ55
ＳＤ62	３区　ＳＤ56
ＳＤ63	３区　ＳＤ57
ＳＤ64	３区　ＳＤ23

挿図目次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　周辺遺跡分布図 …… 8
第４図　調査区配置図 …… 9
第５図　２区・３区グリッド設定図 …… 9
第６図　１区土層図 …… 11
第７図　１区遺構分布図 …… 12
第８図　ＳＤ１３ …… 13
第９図　ＳＤ１４ …… 13
第10図　ＳＤ１５ …… 14
第11図　ＳＤ１６・１７ …… 14
第12図　ＳＤ１８ …… 15
第13図　ＳＤ１９・２０・２２ …… 16
第14図　ＳＤ２１ …… 17
第15図　ＳＤ３・１０・１１ …… 18
第16図　ＳＤ３・１０出土遺物 …… 18
第17図　ＳＤ４・８・９ …… 19
第18図　ＳＤ４出土遺物 …… 19
第19図　ＳＤ５・６・７及びＳＤ５
　　出土遺物 …… 20
第20図　ＳＤ１２ …… 22
第21図　ＳＤ１２出土遺物 …… 22
第22図　１区遺構外出土遺物（１）…… 23
第23図　１区遺構外出土遺物（２）…… 24
第24図　２区土層図 …… 26
第25図　２区遺構分布図 …… 28
第26図　ＳＤ３７・５０ …… 29
第27図　ＳＤ３７出土遺物（１）…… 30
第28図　ＳＤ３７出土遺物（２）…… 31
第29図　ＳＤ３８ …… 32
第30図　ＳＤ３８出土遺物 …… 33
第31図　ＳＤ３９ …… 34
第32図　ＳＤ４０ …… 34
第33図　ＳＤ４１・５３ …… 36
第34図　ＳＤ４１出土遺物（１）…… 37
第35図　ＳＤ４１出土遺物（２）…… 38
第36図　ＳＤ４１出土遺物（３）…… 39
第37図　ＳＤ４１出土遺物（４）…… 40
第38図　ＳＤ４１出土遺物（５）…… 41
第39図　ＳＤ４２ …… 42
第40図　ＳＤ４２出土遺物 …… 42
第41図　ＳＤ４３・４４・４５ …… 43
第42図　ＳＤ４３出土遺物 …… 43
第43図　ＳＤ４９ …… 44
第44図　ＳＤ４９出土遺物 …… 45
第45図　ＳＤ５０出土遺物 …… 45
第46図　ＳＤ５１ …… 47
第47図　ＳＤ５８ …… 47
第48図　ＳＤ５９ …… 47
第49図　ＳＤ５４・５５・５６ …… 47
第50図　ＳＫ１ …… 48
第51図　ＳＫ１出土遺物 …… 48
第52図　ＳＫ２ …… 48
第53図　ＳＫ３ …… 48
第54図　ＳＫ４ …… 49
第55図　ＳＫ４出土遺物 …… 49
第56図　ＳＫ５ …… 49
第57図　ＳＫ５出土遺物 …… 49
第58図　ＳＫ６ …… 49
第59図　ＳＤ２７・３０出土遺物 …… 50
第60図　ＳＤ３１ …… 51
第61図　ＳＤ３２～３６ …… 52
第62図　ＳＤ３４・３５出土遺物 …… 52
第63図　２区遺構外出土遺物（１）…… 55
第64図　２区遺構外出土遺物（２）…… 56
第65図　２区遺構外出土遺物（３）…… 57
第66図　２区遺構外出土遺物（４）…… 58
第67図　２区遺構外出土遺物（５）…… 59
第68図　２区遺構外出土遺物（６）…… 60
第69図　２区遺構外出土遺物（７）…… 61

第70図　２区遺構外出土遺物（８）…… 62
第71図　３区土層図 …… 64
第72図　３区遺構分布図 …… 66
第73図　ＳＤ６０ …… 67
第74図　ＳＤ６１ …… 67
第75図　ＳＤ６２ …… 67
第76図　ＳＤ６３ …… 67
第77図　ＳＤ４６・４７・４８ …… 68
第78図　ＳＤ４７出土遺物 …… 68
第79図　ＳＤ６４ …… 69
第80図　３区遺構外出土遺物（１）…… 70
第81図　３区遺構外出土遺物（２）…… 71
第82図　４区土層図 …… 73
第83図　４区遺構分布図 …… 75
第84図　第３遺構面（下層水田跡）地形
　　測量図及び水田想定図 …… 76
第85図　自然流路１出土遺物 …… 77
第86図　第２遺構面（上層水田跡）地形
　　測量図及び水田想定図 …… 78
第87図　水田跡出土遺物 …… 79
第88図　ＳＤ２３ …… 79
第89図　ＳＤ１ …… 80
第90図　ＳＤ２ …… 81
第91図　４区遺構外出土遺物 …… 82
第92図　清水川六反田遺跡のプラント・
　　オパール分析結果 …… 90
第93図　清水川六反田遺跡における
　　花粉ダイアグラム …… 91
第94図　暦年較正結果 …… 100
第95図　法勝寺川・小松谷川流域の
　　弥生時代遺跡分布図 …… 114
第96図　器種組成 …… 116
第97図　石材組成及び石材別器種組成 … 117
第98図　清水川六反田遺跡と妻木法大神
　　遺跡における器種組成 …… 119
第99図　各遺跡における石鏃の石材組成… 120
第100図 各遺跡における石鏃の型式組成… 120
第101図 各遺跡における石鏃の長さ …… 121

挿表目次

第１表　清水川六反田遺跡におけるプラント・オパール分析結果 …… 90
第２表　清水川六反田遺跡における花粉分析結果 …… 92
第３表　清水川六反田遺跡における寄生虫卵分析結果 …… 94
第４表　清水川六反田遺跡における種実同定結果 …… 96
第５表　測定試料及び処理 …… 98
第６表　測定結果 …… 99
第７表　清水川六反田遺跡出土木材の樹種同定結果 …… 103
第８表　塗膜構造調査資料 …… 105
第９表　断面観察結果表 …… 105
第10表　法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代遺跡一覧 …… 113
第11表　石器石材別組成表 …… 115
第12表　土器・土製品・陶磁器観察表 …… 123
第13表　石器観察表 …… 135
第14表　木製品観察表 …… 136
第15表　金属製品観察表 …… 137

図版目次

巻頭図版１　調査地遠景
　　調査地遠景
巻頭図版２　４区下層水田跡
　　４区下層水田跡
巻頭図版３　４区上層水田跡
　　４区上層水田跡
図版１　１区第２遺構面全景
　　１区第２遺構面全景
図版２　ＳＤ１３
　　ＳＤ１４・１５
　　ＳＤ１６・１７・１８
　　ＳＤ１９・２０・２２
図版３　１区第１遺構面全景
　　１区第１遺構面全景
図版４　ＳＤ３
　　ＳＤ３土層
　　ＳＤ１０
　　ＳＤ１１
図版５　ＳＤ４・８・９
　　ＳＤ４
　　ＳＤ４土層
図版６　ＳＤ４遺物出土状況
　　ＳＤ８
　　ＳＤ９
図版７　ＳＤ５・７
　　ＳＤ５土層
　　ＳＤ６土層
図版８　ＳＤ６
　　ＳＤ７
　　ＳＤ１２
　　ＳＤ１２磨製石斧（Ｓ１）出土状況
図版９　２区第２遺構面全景
　　２区第２遺構面全景
図版10　ＳＤ３７・３９・４０・５０
　　ＳＤ３７・３９・４０・５０
　　ＳＤ３７
図版11　ＳＤ３８
　　ＳＤ３８
　　ＳＤ３８磨製石斧（Ｓ18）出土状況
図版12　ＳＤ３９
　　ＳＤ４０
　　ＳＤ５０
図版13　ＳＤ４１
　　ＳＤ４１遺物出土状況
　　ＳＤ４１遺物出土状況
図版14　ＳＤ４２
　　ＳＤ４３・４４・４５
　　ＳＤ４３石鏃（Ｓ28）出土状況
　　ＳＤ４９
　　ＳＤ４９石出土状況
図版15　ＳＫ１遺物出土状況
　　ＳＫ１
　　ＳＫ２
図版16　ＳＫ３
　　ＳＫ４
　　ＳＫ５
　　ＳＫ６
図版17　２区第１遺構面全景
　　２区第１遺構面全景
図版18　ＳＤ２４～３０
　　ＳＤ３２～３６
　　ＳＤ３１
図版19　ＳＤ３２・３３
　　ＳＤ３４・３６
　　ＳＤ３５
図版20　３区第２遺構面全景
　　ＳＤ６０
　　ＳＤ６１
　　ＳＤ６２
　　ＳＤ６３

図版21　３区第１遺構面全景
３区稲株痕、足跡検出状況
３区段状落差
図版22　ＳＤ４６・４７・４８
ＳＤ４６・４７
ＳＤ４８
ＳＤ６４
図版23　４区第３遺構面全景
４区第３遺構面全景
図版24　４区第３遺構面下層水田跡
４区第３遺構面下層水田跡
４区第３遺構面下層水田跡
畦畔４
畦畔４
図版25　下層水田跡直下植物遺体検出状況
図版26　４区第２遺構面全景
４区第２遺構面上層水田跡
図版27　４区第２遺構面上層水田跡
４区第２遺構面上層水田跡
図版28　畦畔１
畦畔２
畦畔２
図版29　畦畔３
畦畔３
ＳＤ２３
図版30　４区第２遺構面上層水田跡稲株痕・
足跡検出状況
図版31　棒状木製品（Ｗ２）出土状況
棒状木製品（Ｗ２）出土状況
漆器椀（Ｗ３）出土状況
棒状木製品（Ｗ１）出土状況
棒状木製品（Ｗ５）出土状況
図版32　４区第１遺構面全景
ＳＤ１
ＳＤ２
図版33　１区ＳＤ３・４・５・10出土遺物
１区遺構外出土土器
図版34　１区遺構外出土陶磁器
１区遺構外出土石器
１区ＳＤ12出土石器
図版35　２区ＳＤ37出土土器
２区ＳＤ37出土石器
図版36　２区ＳＤ38出土土器
２区ＳＤ38出土石器
図版37　２区ＳＤ41出土土器（１）
２区ＳＤ41出土土器（２）
図版38　２区ＳＤ41出土土器（３）
２区ＳＤ41出土土笛
２区ＳＤ41出土磨製石剣
図版39　２区ＳＤ41出土石器（１）
２区ＳＤ41出土石器（２）
２区ＳＤ42出土遺物
２区ＳＤ49出土遺物
図版40　２区ＳＤ43出土石器
２区ＳＤ50出土遺物
２区ＳＫ１出土遺物
２区ＳＫ４出土遺物
２区ＳＫ５出土石器
図版41　２区遺構外出土土器（１）
２区遺構外出土土器（２）
図版42　２区遺構外出土土器（３）
２区遺構外出土土器（４）
図版43　２区遺構外出土陶磁器、鉄砲玉
２区遺構外出土石器（１）
図版44　２区遺構外出土石器（２）
２区遺構外出土石器（３）
図版45　３区ＳＤ47出土遺物
３区遺構外出土遺物（１）
３区遺構外出土遺物（２）
３区遺構外出土遺物（３）
３区遺構外出土石器・金属製品
図版46　４区自然流路１出土木製品（１）
４区自然流路１出土木製品（２）
４区自然流路１出土木製品（Ｗ２）
頭部拡大
図版47　４区第２遺構面上層水田跡出土土器

４区第２遺構面上層水田跡出土漆器
４区第２遺構面上層水田跡出土木製品
４区遺構外出土土器（１）
４区遺構外出土土器（２）
４区遺構外出土石器
４区遺構外出土木製品
図版48　清水川六反田遺跡のプラント・オパール顕微鏡写真
図版49　清水川六反田遺跡の花粉顕微鏡写真
図版50　清水川六反田遺跡出土の種実
図版51　清水川六反田遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅰ
図版52　清水川六反田遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅱ
図版53　清水川六反田遺跡出土木製品の顕微鏡写真
図版54　清水川六反田遺跡出土漆器及び漆器の断面写真

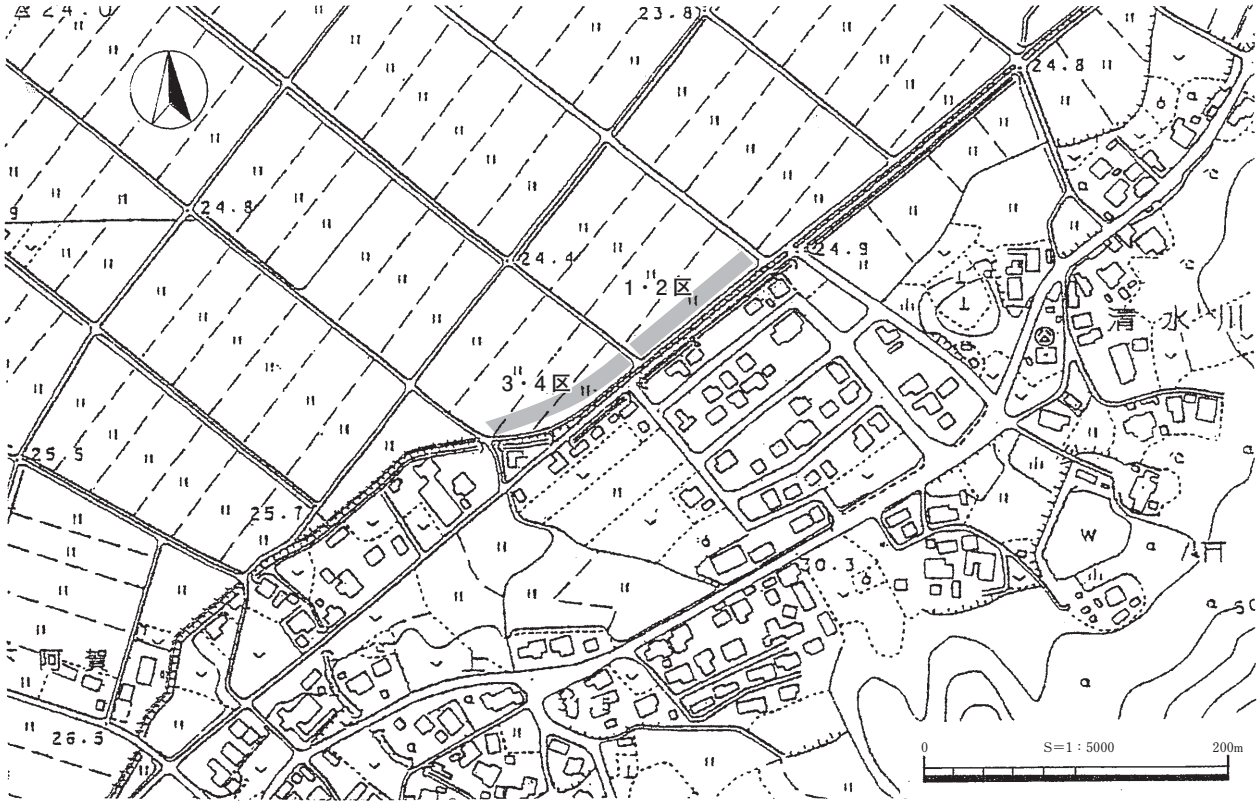
第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、平成20・21年度に一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事を原因とし、鳥取県西伯郡南部町清水川地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

工事予定地内は周知の遺跡として認識されてはいなかったため、工事に先立って工事予定地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。そのため平成19年度に南部町教育委員会が試掘調査を実施したところ、竪穴状遺構と溝状遺構が確認され、弥生土器、須恵器、陶磁器が出土し、遺跡の存在が確認された。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と南部町教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。このことに基づき、鳥取県西部総合事務所は文化財保護法第94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会に提出し、事前発掘の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所は発掘調査を南部町教育委員会に依頼したが、南部町教育委員会は、体制上、発掘調査は困難であるという回答を行った。そのため、協議の結果、鳥取県西部総合事務所は、財団法人米子市教育文化事業団（平成25年４月１日に一般財団法人米子市文化財団に改称）に調査を委託することとなり、当財団は鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、当財団埋蔵文化財調査室が調査を実施した。



第１図　調査地位置図

第２節　調査の経過

現地の発掘調査は、平成20・21年度に実施した。

平成20年度の調査は、平成21年３月12日に着手した。３月12日から17日にかけて重機により１区の表土剥ぎを実施した後、３月17日から31日にかけて発掘作業員の稼動による包含層の掘削作業を実施し、３月31日に平成20年度の調査は終了した。

平成21年度の調査は、４区の南西側での工事の緊急性から、まず、４区の調査に着手した。４月８日から10日にかけて重機により表土剥ぎを実施した後、４月13日から発掘作業員の稼動による包含層の掘削及び遺構検出作業を実施した。

４区では、３面の遺構面が確認された。第１遺構面は４区全域に存在するが、第２・第３遺構面は調査区の南西側（緊急工事部分）では大規模な自然流路あるいは水性堆積層によって失われていた。そのため、第１遺構面の調査を終了した後、時間の許す限り、この自然流路あるいは水性堆積層を掘り下げて４月24日にこの部分の調査を終了し、４月27日から工事が行われた。

４月27日からは一時中断していた１区の調査に着手し、これと並行して５月13日から４区の残りの部分の調査を行った。５月25日に１区の調査は終了し、５月26日から28日にかけて埋め戻しを実施した。４区の調査は、２区の調査と並行して引き続き６月20日まで行い、６月22日から６月26日にかけて埋め戻しを実施した。

２区の調査は、１区の埋め戻しが終了した後に着手した。５月29日から６月２日にかけて重機による表土剥ぎを実施した後、６月３日から９月14日にかけて発掘作業員の稼動による包含層の掘削及び遺構検出作業を実施した。２区の調査は９月14日に終了し、９月15日から24日にかけて埋め戻しを実施した。

３区の調査は、２区の調査と並行して実施した。６月25日から26日にかけて重機による表土剥ぎを実施した後、７月２日から９月24日にかけて発掘作業員の稼動による包含層の掘削及び遺構検出作業を実施した。３区の調査は９月24日に終了し、９月25日から29日にかけて埋め戻しを実施し、すべての調査が完了した。

なお、９月３日には記者発表を行い、９月５日には現地説明会を実施した。当日は天候にも恵まれ、66名の参加があった。

第３節　整理作業の経過

平成21年度は、現地調査と並行して、出土遺物の洗浄、注記を行った後、出土遺物を器種、出土遺構、出土層位毎に分別し、接合を行った。また、遺構図の第２原図の作成も行った。

平成22年度は、実測遺物を抽出した後、実測を行った。

平成23年度は、当事業に係る他遺跡の発掘調査とその整理作業を優先させたため、当遺跡の整理作業は実施しなかった。

平成24年度は、遺構及び遺物のトレース、版下の作成、出土遺物の写真撮影を行った。

平成25年度は、原稿の執筆、編集を行い、平成25年12月27日に報告書を刊行した。

第４節　調査体制

平成20年度

調査主体　　財団法人　米子市教育文化事業団
　　理　事　長　杉原弘一郎
　　常 務 理 事　中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）
　　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）
調査担当　　埋蔵文化財調査室
　　統括調査員　平木裕子
　　嘱　　託　秦　美香

平成21年度

調査主体　　財団法人　米子市教育文化事業団
　　理　事　長　杉原弘一郎
　　常 務 理 事　中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）
　　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）
　　事　務　長　小原貴樹
　　非常勤職員　田中昌子（事務員）
調査担当　　埋蔵文化財調査室
　　主任調査員　高橋浩樹
　　調　査　員　小原貴樹（事務長兼務）
　　嘱　　託　秦　美香

平成22～25年度

事業主体　　財団法人　米子市教育文化事業団（平成22～24年度）
　　一般財団法人　米子市文化財団（平成25年４月１日に改称）
　　理　事　長　杉原弘一郎
　　常 務 理 事　中村智至（当事業団事務局長、当財団事務局長）
　　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　角　昌之（米子市教育委員会文化課長　～平成24年３月31日）
　　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長　平成24年４月１日～）
　　事　務　長　小原貴樹
　　非常勤職員　田中昌子(事務員)
事業担当　　埋蔵文化財調査室
　　主任調査員　高橋浩樹
　　調　査　員　小原貴樹（事務長兼務）
　　嘱　　託　秦　美香

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

清水川六反田遺跡は、鳥取県西伯郡南部町清水川に所在する。平成16年10月１日に西伯町と会見町が合併して誕生した南部町は、鳥取県の西部に位置し、北は米子市、東は伯耆町、南は日野町、日南町、西は島根県安来市に接している。面積は114.03㎢、人口は約11,600人である。

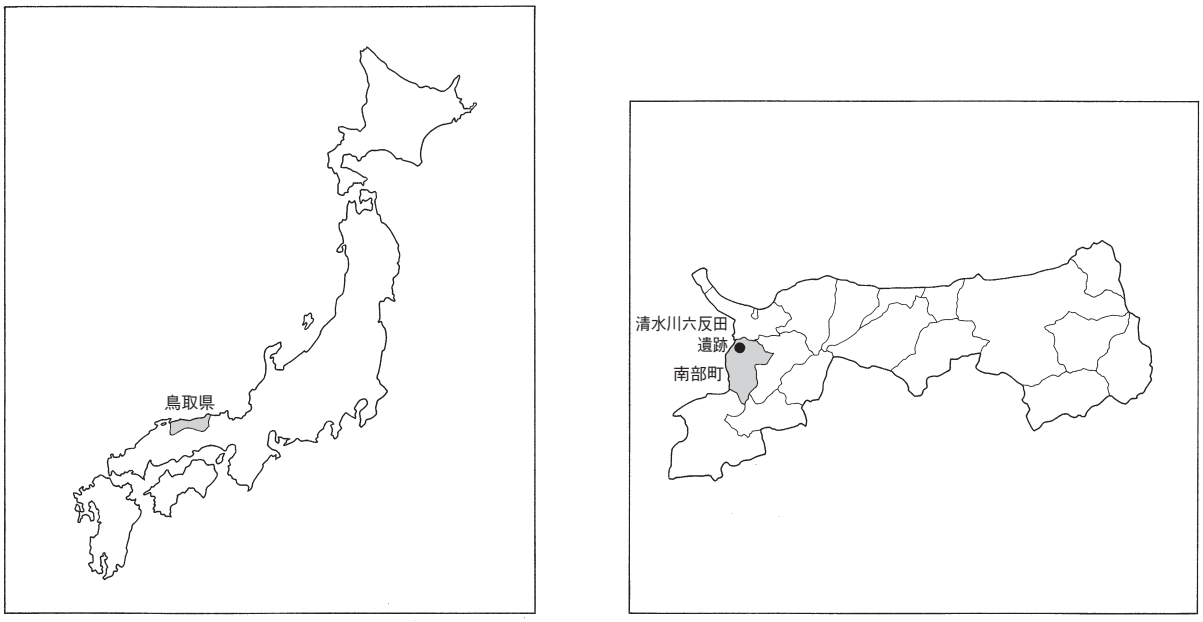
地形的には東、南、西側にある山稜が、法勝寺川及び小松谷川水系をＹ字型に囲み、米子市に接する北側が平野となって開ける南高北低の地形をしており、町域の大部分が山岳地域で、法勝寺川ならびに小松谷川によってもたらされた肥沃な沖積地に集落の大半が形成されている。

法勝寺川は粗粒花崗岩山地に発源し、上流部は急流で浸蝕が進み、中流部の南部町鴨部、能竹の辺りからは、急に緩流となり花崗岩の風化、崩落した砂礫、表土を流送・堆積して中下流部に幅広い河谷低地（法勝寺低地）を発達させている。

法勝寺低地は上流山地から運ばれた花崗岩質粗粒堆積物からなり、水はけがよく、現法勝寺川流路に沿って自然堤防が発達し、耕作地が多い。なお、低地の周縁に青灰色粘土からなる海抜20～30ｍの低い台地があるが、これは大山火山噴出物による堰止湖に由来する湖成段丘である。

低地周縁の支谷では、両側の山腹からでる小河川の小扇状地や崖錘などの流下物が両側の丘陵裾部に並んで陸上堆積物の様相を呈している。

清水川六反田遺跡は法勝寺川中流域の右岸に位置し、要害山（標高329ｍ）から派生する丘陵の北西麓に形成された扇状地状の台地裾部に位置する。調査地の現況は水田で、南西から北東へ緩やかに傾斜し、現地面の標高は23～25ｍを測る。



第２図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

旧石器時代

南部町域ではこれまでに旧石器時代の遺構は確認されていない。米子平野南縁に位置する長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡（73）では、ローム層中から頁岩製のナイフ形石器が１点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が１点出土している。また、坂長村上遺跡（72）では、ローム漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が１点出土している。

縄文時代

草創期には、これまでは大山北、西麓を中心に尖頭器が発見されていたが、法勝寺川左岸の福成石佛前遺跡（20）や境矢石遺跡（17）、境北井埒遺跡（16）、吉谷亀尾ノ上遺跡（３）、奈喜良遺跡（１）、法勝寺川右岸の諸木遺跡（69）などでも発見され、さらに近年、長者原台地や越敷山山麓からも出土しており、その分布範囲は広がりつつある。

早期は、大山西麓の台地上の小河川流域に押形文土器を出土する遺跡が多く分布するが、近年の調査で法勝寺川左岸の清水谷遺跡（24）や新山山田遺跡（７）、東長田川流域の今長龍徳遺跡や八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡などでも押形文土器が出土しており、八金小ブケ遺跡では住居跡も確認されている。

前期には、大山西麓では早期から継続する遺跡が多く、その一方、中海沿岸では早期末～前期初頭になると集落が形成され始め、大山西麓から中海沿岸の低湿地への進出が窺える。南部町域では、法勝寺川最上流域の河岸段丘上に営まれた早田第１遺跡で住居跡が確認され、条痕文土器と爪形文土器が出土している。

中期の様相は明確ではないが、後期になると米子平野周辺の丘陵上に遺跡が形成されるようになる。この時期の遺跡には、早田第２遺跡と口朝金遺跡（61）があり、早田第２遺跡では石器製作段階で生じる多量の安山岩剥片や石囲炉、漆塗土器が出土している。口朝金遺跡では後期と晩期の土器とともに石斧や石鏃が多量に出土している。また、後期から晩期にかけて丘陵や山岳地域では落し穴が多数確認され、青木遺跡（74）では228基、越敷山遺跡群（67）では341基が確認されている。

晩期になると口朝金遺跡や才ノ木遺跡（38）、枇杷谷遺跡（37）、金田堂ノ脇遺跡（57）、三崎遺跡、高姫五反田遺跡、浅井遺跡、絹屋遺跡、馬場遺跡、落合遺跡、福成早里遺跡（19）、福成石佛前遺跡など、丘陵裾部の平野部でも遺跡が確認されるようになる。枇杷谷遺跡ではドングリ貯蔵穴が確認され、口朝金遺跡からは、ほぼ完全な注口土器が出土している。また、田住枕田遺跡からは人面土器が出土している。人面土器は、外面に高い鼻と丸く空いた口を表現し、眉には刻みを入れた粘土紐が貼り付けられている。

弥生時代

前期の遺跡としては、諸木遺跡、天王原遺跡（53）、清水谷遺跡が知られており、これらは低丘陵上に立地する集落跡でＶ字状の環濠が巡る。Ｖ字状の環濠は続く中期の宮尾遺跡（43）でも確認されており、当地は県下でも有数の環濠が集中する地域といえる。

中期の遺跡としては宮前遺跡（46）、天万遺跡（44）、浅井土居敷遺跡（48）、清水谷遺跡、境矢石遺跡、

天王原遺跡、越敷山遺跡群、鶴田合清水遺跡などがあり、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、高原地域にまで見られるようになる。浅井土居敷遺跡では、中期中葉の竪穴住居跡内で検出された方形土坑から丹塗りの台付注口土器をはじめ黒漆塗りの甕、ガラス玉等、玉類約50個体分や焼けただれた土器片が多数出土している。また、柱穴からは銅釧も出土している。清水谷遺跡では３基の土壙墓が確認され、このうちの１基は標石を伴い、15点の石鏃が出土している。宮前遺跡では36基の木棺墓や貯蔵穴が検出され、境矢石遺跡では前期後葉～中期の木棺墓と土壙墓が確認されている。鶴田合清水遺跡からは、中期後葉の土器と石器が住居跡から一括して出土している。

後期の遺跡は中期から継続して営まれるものが多く、青木遺跡や福市遺跡（75）、越敷山遺跡群では住居跡が多数確認されており、拠点的な集落として展開している。また、この時期には遺跡は低地から低丘陵上に移動するようになり、このような遺跡には、前葉の福成石佛前遺跡や中葉以降の清水谷遺跡、北福王寺遺跡（28）、倭孫谷山遺跡（32）、竹山遺跡（29）、北方廣畑遺跡（26）、諸木遺跡、荻名第５遺跡、八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡などがあるが、これらはごく短期間で廃絶する。天萬土井前遺跡（42）では終末期から古墳時代初頭にかけての土器溜りが検出されており、良好な一括資料が出土している。朝金小チヤ遺跡（60）では末葉に比定される墳丘墓が確認され、田住松尾平遺跡（64）からは小型の仿製鏡が出土している。

古墳時代

前期の古墳には普段寺古墳群（41）がある。１号墳は全長23ｍの前方後方墳で、その規模はこの時期としては西伯耆最大を誇る。１号墳からは三角縁唐草文帯二神二獣鏡が出土しており、これは島根県安来市大成古墳、大阪府伝鎌足塚古墳出土の鏡と同笵である。２号墳は径22～23ｍの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。

中期になると三崎殿山古墳（39）や浅井11号墳（47）、後塔山古墳（68）、福成春日山古墳（21）など、全長40ｍを越える前方後円墳が築造されている。三崎殿山古墳は全長108ｍ、後円部径58ｍを測り、山陰地方でも最大級の規模を誇る。浅井11号墳は30基近い円墳で構成される浅井古墳群の盟主的な古墳で、全長45ｍを測り、後円部からは画文帯神獣鏡が出土している。後塔山古墳は中期後半の築造で、全長55ｍを測り、三角帽子状の冠を付けた垂髪の人物埴輪が出土している。福成春日山古墳は全長40ｍを測り、後円部に２基の箱式石棺が並び、東側の石棺からはＶ字状石枕と朱塗りの頭蓋骨が出土している。

後期になると、丘陵上に多くの古墳群が形成されるようになり、法勝寺川及び小松谷川流域の平野を取り囲むように境古墳群（６）、福成古墳群（23）、鴨部古墳群、落合古墳群、田住古墳群（66）、井上古墳群（52）、朝金古墳群（62）、御内谷古墳群、高姫古墳群（49）、金田古墳群などの古墳群が築かれている。寺内８号墳（40）からは当地唯一の陶棺が出土している。

６世紀後半になると、横穴墓の造営が開始される。マケン堀横穴墓群（27）では、35基の横穴墓と７基の後背墳丘が確認されている。玄室形態は断面三角形に限定されており、当地域の特殊性を示している。この他に県内で唯一の二室が連結した横穴墓をもつ小堤山横穴墓群（30）や谷川横穴墓群（22）、西横穴墓群（31）、今長龍徳横穴墓群、福成早里横穴墓（19）などがある。

古墳時代の集落は、清水谷遺跡や北方廣畑遺跡、宮尾遺跡、宮前遺跡、高姫根小松遺跡（50）、高姫近藤遺跡（51）などがあり、北方廣畑遺跡、高姫近藤遺跡では前期、宮前遺跡、高姫根小松遺跡

では中期、宮尾遺跡、八金小ブケ遺跡、八金清水田遺跡、福成早里遺跡では後期の竪穴住居跡が確認されている。また、清水谷遺跡では前期から後期の竪穴住居跡が確認されている。

古　代

律令制下の町域は『和名類聚抄』によると伯耆国会見郡鴨部郷、天万郷、星川郷に相当する。郡衙は近年の調査により伯耆町坂長に所在する可能性が高まってきた。鴨部郷は古墳群の分布状況などから南部町鴨部の周辺にその中心地が推定されている。鴨部は「賀茂部」とも記されており、神護景雲４年（770）の東大寺文書には賀茂郷住民の賀茂部秋麻呂という青年が僧になったことを記している。天万郷は、南部町天万周辺がその中心地であると考えられ、天平勝宝９年（756）の正倉院文書が初見である。星川郷は、小松谷川の流域が郷域と推定され、他国の同名郷との関連から紀氏の流れをくむ星川臣の一族の居住地と推定されている。金田瓦窯跡（54）は白鳳期の大寺廃寺に葺かれた瓦の生産地とされ、その南東には両部太郎窯跡（56）があり、内面に車輪文を施す須恵器が確認されている。また､朝金天田遺跡（59）からは奈良時代のものと思われる瓦塔（瓦製塔婆）が出土している。瓦塔は須恵質で、丸軒、垂木を粘土紐で写実的に表現している。

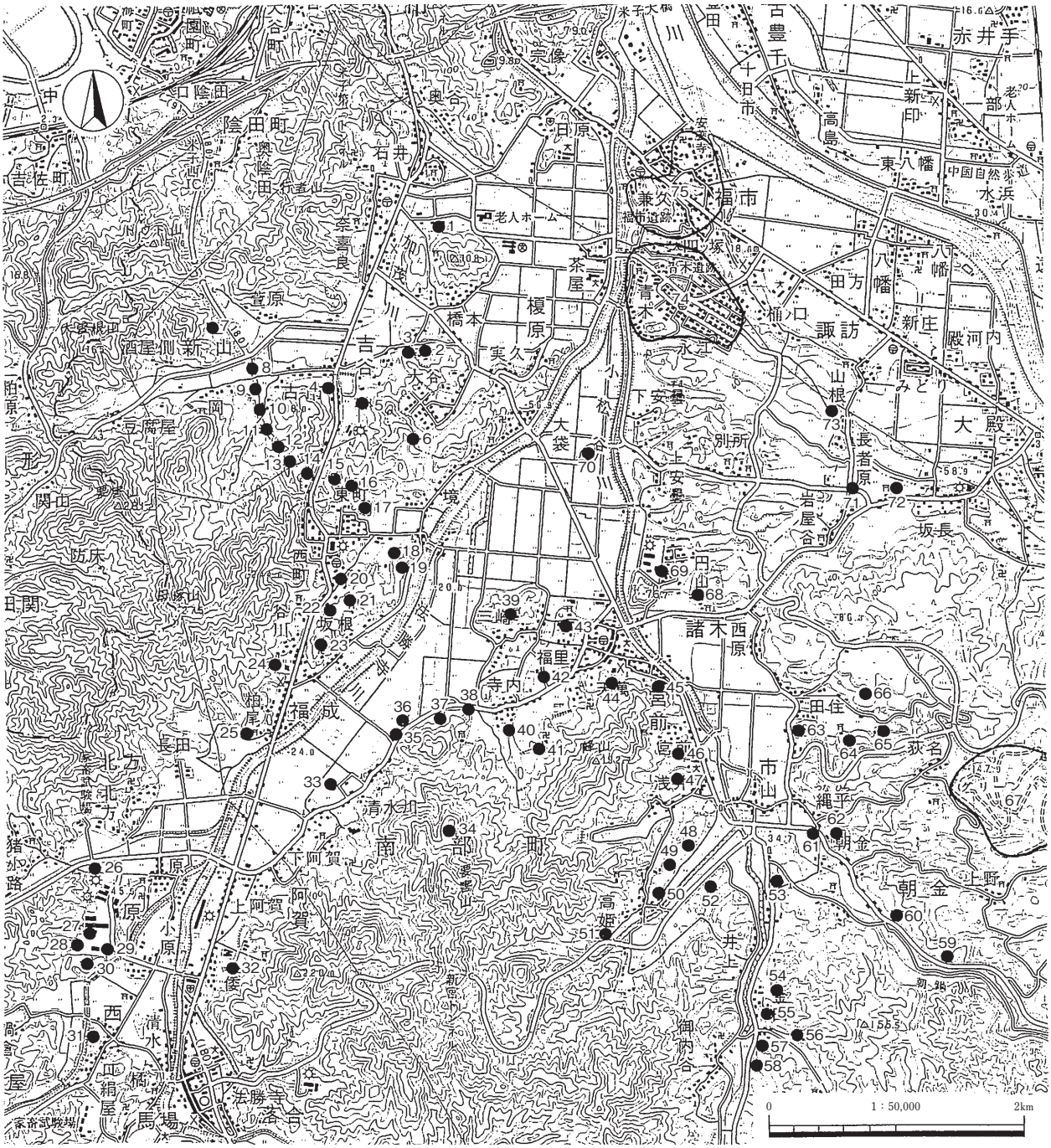
この時期の遺跡は、丘陵上に形成され、奈良時代の北福王寺遺跡や福成早里遺跡、平安時代の倭孫谷山遺跡、福成石佛前遺跡、清水谷遺跡、福成早里遺跡、八金清水田遺跡がある。福成早里遺跡からは、製塩土器や赤色塗彩を施した土師器が出土しており、官衙的な性格が窺える。八金清水田遺跡では９世紀前半の土器溜りが確認されており､「厨」と記された墨書土器とともに良好な一括資料が出土している。また、清水谷遺跡のピットには平安時代後期の和鏡が埋納され、金華山からは平安時代後期のものと考えられる経筒が出土している。

中　世

中世の遺跡としては、南北朝時代に塩冶高貞によって攻略されたと伝えられる小松城跡（55）や戦国時代後期の尼子、毛利の対立を背景にして要害山の山頂に築かれた手間要害（34）があり、手間要害は近年の調査で郭配置などが確認されている。また、手間要害の周辺には数多くの郭や堀切が確認され､砦や居館の存在が想定されている。この他､法勝寺城跡､柏尾城跡（小鷹城跡ともいう）(25)、鎌倉城跡、原城山遺跡などの城郭がある。

近　世

西伯耆は吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と領主が交代し、元和３年（1617）に因幡・伯耆32万石を領する池田光政が鳥取藩主となる｡町域の南部は良質な砂鉄を含む風化花崗岩が広く分布しており、日野郡と同様に古くからたたら製鉄の行われた所で、現在のところ15ケ所のたたら関係の遺跡が確認されている。鎌倉山の山麓に位置する奥山鉄山所たたらは江戸後期（文化年間）に操業された高殿たたらで、近世の代表的なたたら跡である。また、田住桶川遺跡（63）では土葬墓21基が確認されている。



第３図　周辺遺跡分布図

1　奈喜良遺跡	2　橋本徳道西遺跡	3　吉谷亀尾ノ上遺跡	4　吉谷上ノ原山遺跡	5　吉谷トコ遺跡
6　境古墳群	7　新山山田遺跡	8　古市流田遺跡	9　古市カワラケ田遺跡	10　古市河原田遺跡
11　古市コガノ木遺跡	12　古市宮ノ谷山遺跡	13　吉谷屋奈ヶ埒遺跡	14　吉谷銭神遺跡	15　吉谷中馬場山遺跡
16　境北井埒遺跡	17　境矢石遺跡	18　境内海道西遺跡	19　福成早里遺跡	20　福成石佛前遺跡
21　福成春日山古墳	22　谷川横穴墓群	23　福成古墳群	24　清水谷遺跡	25　柏尾城跡（小鷹城跡）
26　北方廣畑遺跡	27　マケン堀古墳群	28　北福王寺遺跡	29　竹山遺跡	30　小堤山横穴墓群
31　西横穴墓群	32　倭孫谷山遺跡	33　清水川六反田遺跡	34　手間要害	35　清水川御崎前遺跡
36　福成大坪上遺跡	37　枇杷谷遺跡	38　才ノ木遺跡	39　三崎殿山古墳	40　寺内８号墳
41　普段寺古墳群	42　天萬土井前遺跡	43　宮尾遺跡	44　天万遺跡	45　宮前古墳群
46　宮前遺跡	47　浅井 11 号墳	48　浅井土居敷遺跡	49　高姫古墳群	50　高姫根小松遺跡
51　高姫近藤遺跡	52　井上古墳群	53　天王原遺跡	54　金田瓦窯跡	55　小松城跡
56　両部太郎窯跡	57　金田堂ノ脇遺跡	58　御内谷向田遺跡	59　朝金天田遺跡	60　朝金小チヤ遺跡
61　口朝金遺跡	62　朝金古墳群	63　田住桶川遺跡	64　田住松尾平遺跡	65　田住滝山遺跡
66　田住古墳群	67　越敷山遺跡群	68　後埒山古墳	69　諸木遺跡	70　大袋丸山遺跡
71　長者屋敷遺跡	72　坂長村上遺跡	73　諏訪西山ノ後遺跡	74　青木遺跡	75　福市遺跡

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査地は農道と水路によって２分され、さらに、排土置き場を確保する必要があったため、調査区を４つに分けて順次調査を実施した。調査区名は北東から南西へ向かって順番に１～４区とした（第４図）。

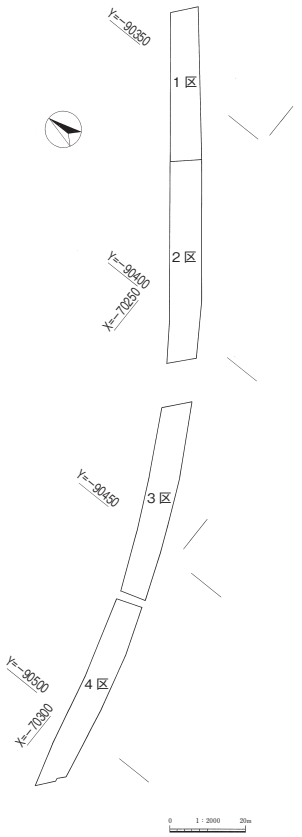
調査は排土置き場の都合や工事の優先を考慮して、１区→４区→２区→３区の順に着手した。

遺構の検出にあたっては、南部町教育委員会が実施した試掘調査の結果から、当初は遺構面が１面のみであると判断されたが、これを再確認するために重機による表土掘削が終了した後、調査区際に排水処理と土層観察を兼ねた溝を掘削した。その結果、１区･２区･３区では遺構面が２面、４区では３面の遺構面が存在することが明らかとなり、順次、各遺構面まで人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。

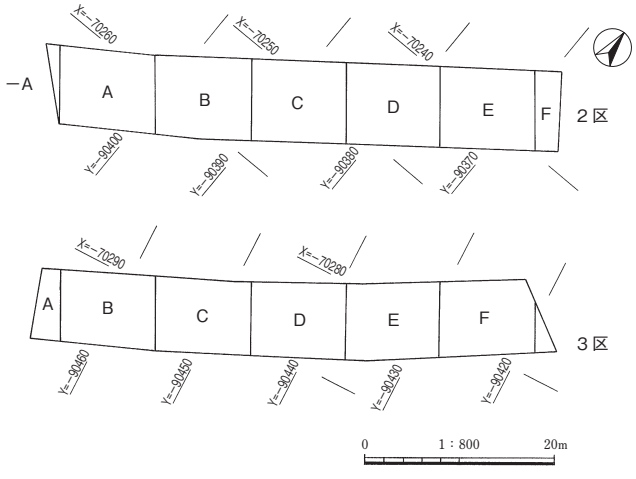
検出した遺構は、原則としてトータルステーションを用いて記録、図化し、必要に応じて実測した。

出土遺物は、包含層から出土したものは、１区と４区では層位毎に任意に一括して取り上げた。また、２区と３区は調査区の主軸に沿うように10ｍ画のグリッドを設定し（第５図）、層位及びグリッド毎に一括して取り上げた。グリッド名は、南西から北東にかけて順にアルファベットを付し、２区では－Ａ～Ｆ、３区ではＡ～Ｆとした。遺構内から出土した遺物は、一括して取り上げたが、時期判断が可能なものや特徴的な遺物については、出土位置を記録して取り上げた。

現地での写真撮影は35㎜判カメラを用い、モノクロフィルムとカラーポジフィルムで撮影し、カラーネガフィルムを用いたコンパクトカメラとデジタルカメラで補足撮影した。



第４図　調査区配置図



第５図　２区・３区グリッド設定図

第２節　１区の調査

１．概　　要

１区は、調査地の最も北東に位置する調査区で、現地表面の標高は23.7～23.9ｍである。

１区では２面の遺構面を確認した。第２遺構面は基盤層である灰白色粘土層上面を遺構面とする。遺構面の微地形は南から北へ緩やかに傾斜し、調査区の南端の標高は23.23ｍ、北端の標高は22.96ｍを測る。

第２遺構面では溝状遺構を12基検出した。ＳＤ13～18は調査区の南西側に、ＳＤ19～22は調査区の北東側に位置し、いずれも形態的に自然流路と考えられる。いずれの遺構からも遺物が出土していないために、時期の詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。なお、調査区の中央は上層（第１遺構面）で検出したＳＤ３、４が掘り込まれているため遺構は確認できなかった。

第１遺構面は暗灰色土層（第６図の46層）上面を遺構面とする。遺構面の微地形は南から北へ緩やかに傾斜し、調査区の南端の標高は23.29ｍ、北端の標高は23.10ｍを測る。

第１遺構面では溝状遺構を10基検出した。調査区の中央やや北東寄りにＳＤ３、調査区の中央にＳＤ４、調査区の南西側にＳＤ５の規模の大きな溝状遺構があり、その周辺に複数の溝状遺構が認められる。いずれも形態的に自然流路と考えられる。これらの溝状遺構は、出土遺物などから古墳時代後期に帰属すると考えられる。

２．基本層序（第６図）

１区の堆積環境は比較的安定していたと考えられ、現水田耕作土層以下、基盤層までほぼ水平に堆積している。

基本層序は、現水田耕作土層下に水田基盤層と旧耕作土層が堆積し、その下に遺物包含層が確認された。

各層の概要は以下のとおりである。

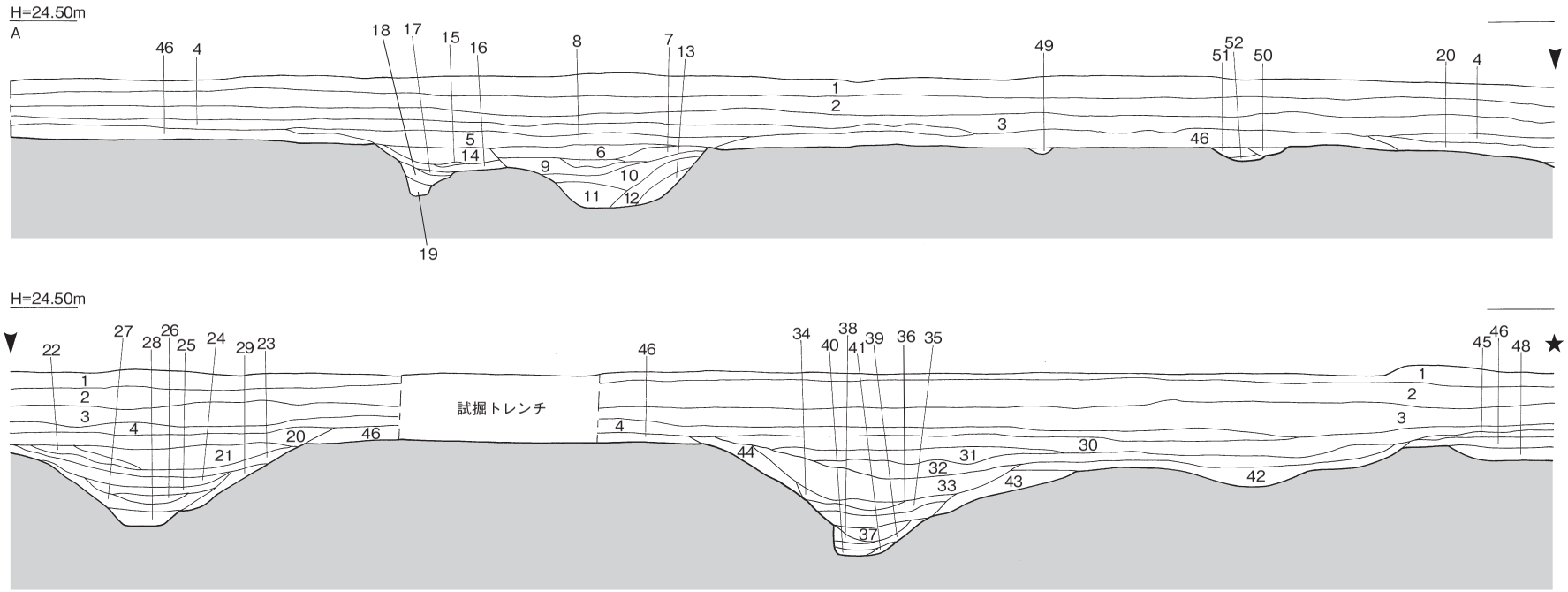
Ⅰ層：Ⅰ層（１層）は現水田耕作土層で、層厚は0.05～0.25ｍを測る。

Ⅱ層：Ⅱ層（２層）は水田基盤層と考えられる。茶灰色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は0.15～0.35ｍを測り、主に近世の遺物が出土した。

Ⅲ層：Ⅲ層（３、４層）は旧耕作土層と考えられ、上下２層（Ⅲ－１層、Ⅲ－２層）に細分できる。Ⅲ－１層（３層）は灰褐色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は0.1～0.4ｍを測り、弥生時代～近世の遺物が出土した。Ⅲ－２層（４層）は暗灰褐色を呈し、古墳時代～近世の遺物を含む。Ⅲ－１層によって削平されており、ＳＤ３の北東側とＳＤ４とＳＤ５との間は部分的に遺存していない。層厚は0.05～0.15ｍを測る。

Ⅳ層：Ⅳ層（46層）は暗灰色を呈する遺物包含層で、弥生時代～古墳時代の遺物を含む。層厚は0.08～0.2ｍを測る。Ⅳ層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

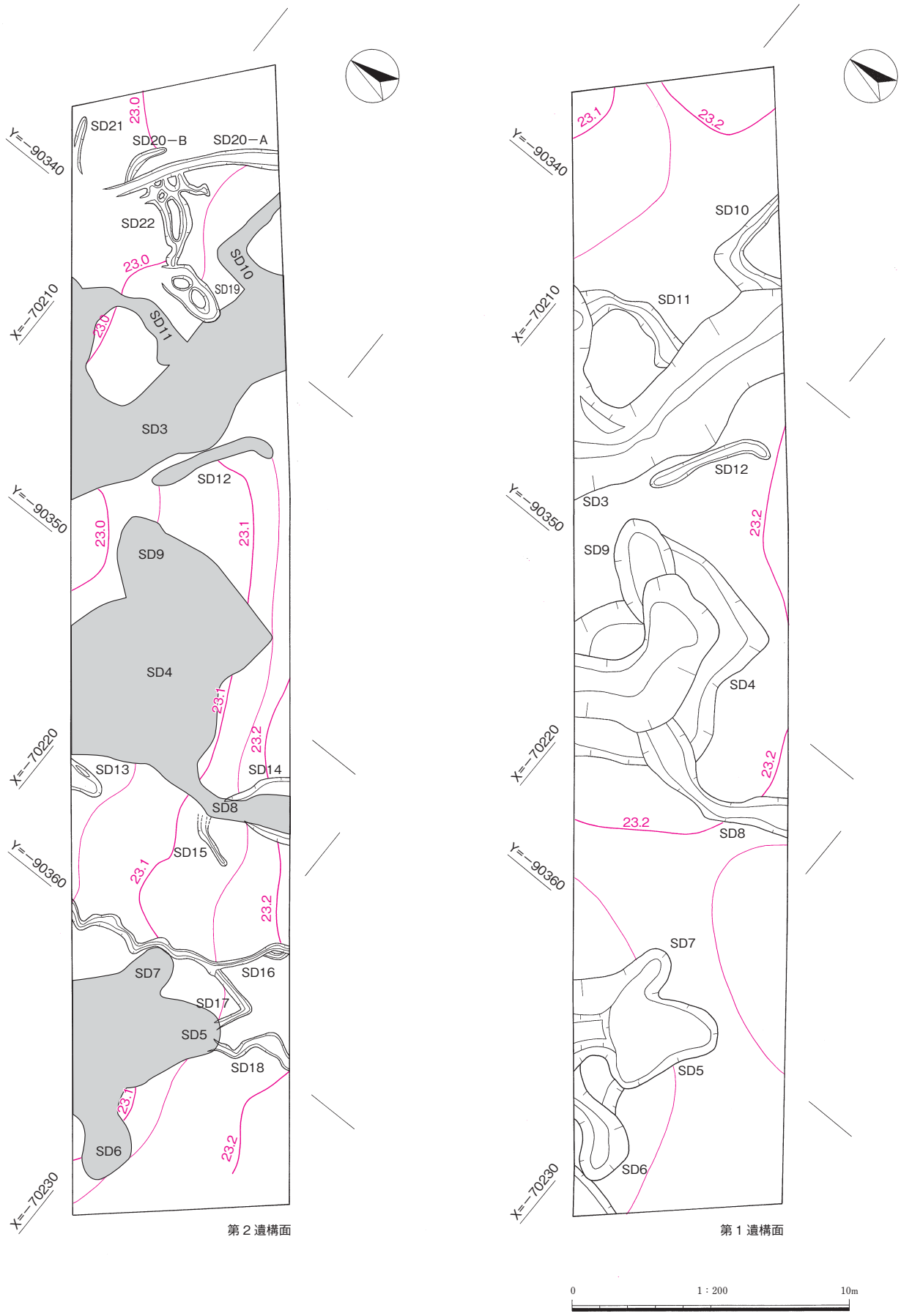
Ⅴ層：Ⅴ層は基盤層の灰白色粘土層である。Ⅴ層上面を第２遺構面として遺構を検出した。



1 淡茶灰色土（Ⅰ層）
2 茶灰色土（Ⅱ層、鉄分混じり）
3 灰褐色土（Ⅲ－1層、鉄分混じり）
4 暗灰褐色土（Ⅲ－2層、鉄分混じり）
44 淡灰褐色土（砂、礫混じり）
45 淡灰褐色土（礫混じり）
46 暗灰色土（Ⅳ層、鉄分混じり）
47 灰色細粒砂
48 暗灰色粘質土（砂、鉄分混じり）
49 灰褐色土（SD16、鉄分混じり）
50 灰色土（SD13）
51 暗灰色土（SD13、鉄分混じり）
52 灰色砂質土（SD13）

5～13：SD5
14～19：SD6
20～29：SD4
30～43：SD3

第6図　1区土層図


Y=−90340
Y=−90350
Y=−90360
X=−70210
X=−70220
X=−70230
SD21
SD20−B
SD20−A
SD22
SD19
SD10
SD11
SD3
SD12
SD9
SD4
SD13
SD14
SD8
SD15
SD7
SD16
SD17
SD5
SD18
SD6
23.0
23.1
23.2
第２遺構面
SD10
SD11
SD12
SD3
SD9
SD4
SD8
SD7
SD5
SD6
23.1
23.2
第１遺構面
0
1：200
10m

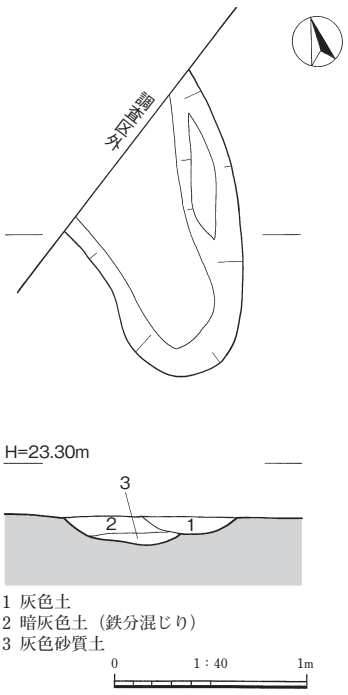
第７図　１区遺構分布図

３．第２遺構面の調査

ＳＤ13（第８図）

ＳＤ13は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南から北へ直線的にのび、北側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは1.45ｍ、幅0.65～1.0ｍ、検出面からの最大の深さ17㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.95ｍ、北端が22.86ｍで、南から北へ流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は暗灰色土、下層は灰色粘質土で、流水の痕跡は窺えない。また、ＳＤ13の東側は埋没後溝が再び形成されたと考えられ、土層断面から幅0.5ｍ、検出面からの最大の深さ９㎝が想定される。埋土は灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。



第８図　ＳＤ１３

ＳＤ14（第９図）

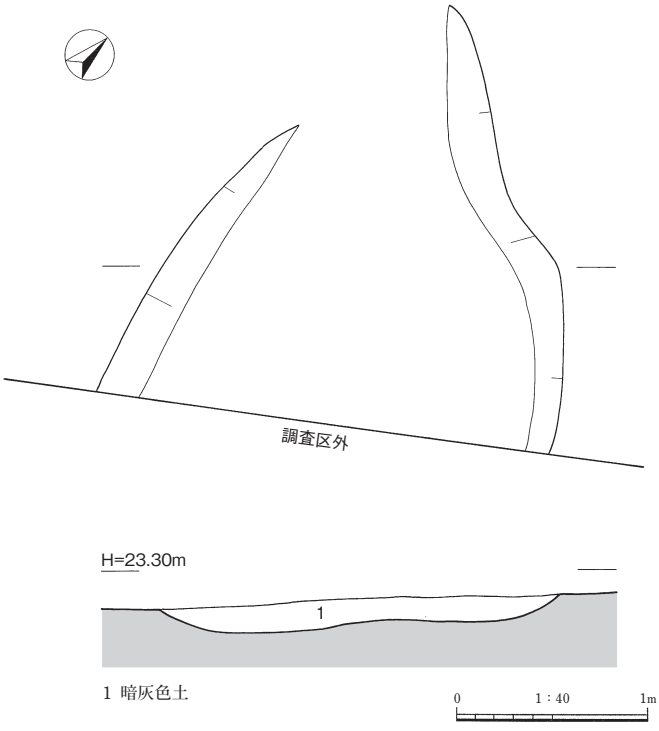
ＳＤ14は調査区の中央やや南西寄りに位置する。北西側は削平され、南東から北西へ「ハ」字にすぼまり、南東側は調査区外へのびる。検出した長さは2.25ｍ、幅1.0～2.4ｍ、検出面からの最大の深さ14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.21ｍ、北西端が22.98ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

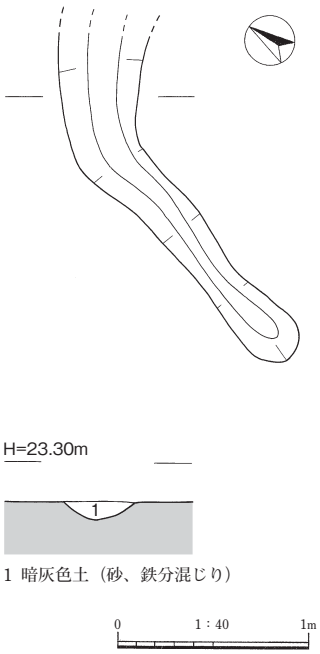
ＳＤ15（第10図）

ＳＤ15は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南から北東へ「く」字状にのび、北東側は削平されている。検出した長さは2.0ｍ、幅0.2～0.5ｍ、検出面からの最大の深さ15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は凹凸が著しい。底面の標高は南端が23.12ｍ、北東端が22.98ｍで、南から北東へ流下する。埋土は砂が混じる暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。



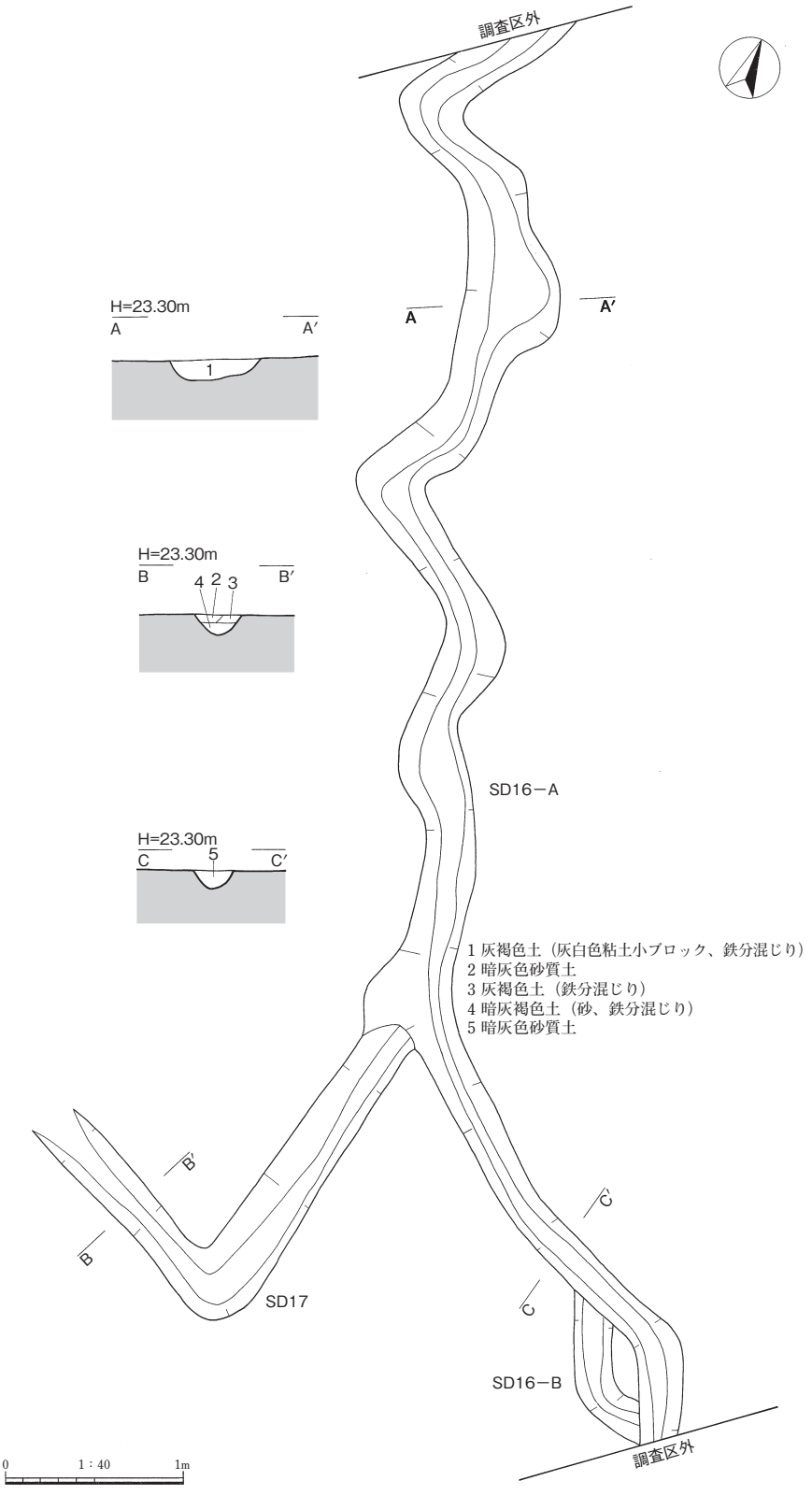
第９図　ＳＤ１４



第10図　ＳＤ１５

ＳＤ16（第11図）

ＳＤ16は調査区の中央やや南西寄りに位置する。ＳＤ16－Ａは南東から北西へ蛇行しながら湾曲してのび、両端は調査区外へのびる。南東側ではＳＤ16－ＢとＳＤ17を切っている。検出した長さは9.3ｍ、幅0.2～0.55ｍ、検出面からの最大の深さ22㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面は凹凸が著しい。底面の標高は南東端が23.20ｍ、北西端が22.93ｍで、南東から北西へ流下する。



第11図　ＳＤ１６・１７

埋土は北側のＡ－Ａ′では灰褐色土の単層で、基盤層の灰白色粘土ブロックが混じり、南側のＣ－Ｃ′では暗灰色砂質土の単層で、いずれも流水の痕跡は窺えない。

ＳＤ16－Ｂは南東から北東へ「く」字状に湾曲し、両端はＳＤ16－Ａに切られている。検出した長さは0.95ｍ、幅0.2ｍ、検出面からの最大の深さ７㎝を測る。

ＳＤ16－Ａ、ＳＤ16－Ｂのいずれからも遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

ＳＤ17（第11図）

ＳＤ17は調査区の中央やや南西寄りに位置する。西から東へ「く」字状に大きく屈曲し、西側は削平され、東側はＳＤ16に切られている。検出した長さは3.1ｍ、幅0.2～0.35ｍ、検出面からの最大の深さ12㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は西端が23.08ｍ、北端が23.03ｍで、西から東へ緩やかに流下する。埋土は大きく上下２層に分かれ、上層は暗灰色砂質土と灰褐色土からなり、下層は暗灰褐色土で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

ＳＤ18（第12図）

ＳＤ18は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南から北へＳ字状にのび、北側は削平されているが、南側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは3.3ｍ、幅0.3～0.75ｍ、検出面からの最大の深さ９㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.20ｍ、北端が23.01ｍで、南から北へ流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は暗灰色土で、基盤層の灰白色粘土ブロックと炭化物が混じる。下層は炭化物が混じる暗灰色砂質土で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

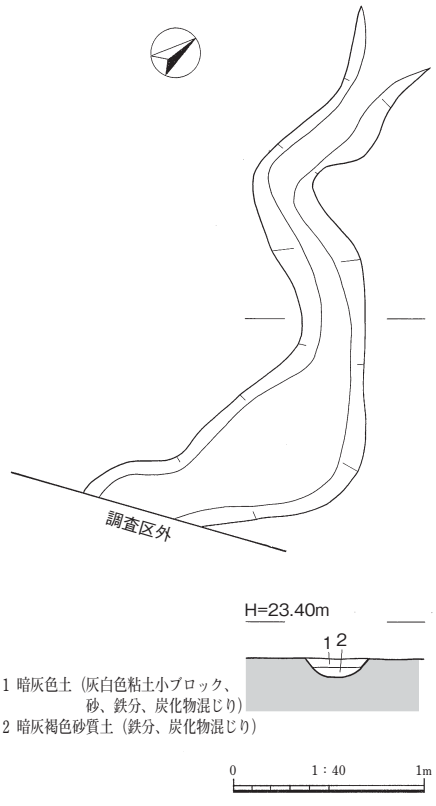
ＳＤ19（第13図）

ＳＤ19は調査区の北東側に位置する。南から北へのび、楕円状を呈する。検出した長さは2.7ｍ、幅1.1～1.2ｍ、検出面からの最大の深さ18㎝を測る。底面の標高は南端が22.88ｍ、北端が22.89ｍで、ほぼ水平である。中央には２つの中州状の高まりがあり、北側の高まりは長さ0.78ｍ、幅0.5ｍ、高さ0.13ｍ、南側の高まりは長さ1.03ｍ、幅0.6ｍ、高さ0.2ｍを測る。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

ＳＤ20（第13図）

ＳＤ20は調査区の北東側に位置する。ＳＤ20－Ａは南東から北西へ緩やかに湾曲しながら直線的にのび、南東側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは6.4ｍ、幅0.4～0.7ｍ、検出面からの最大の深さ10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.03ｍ、北西端



第12図　ＳＤ１８

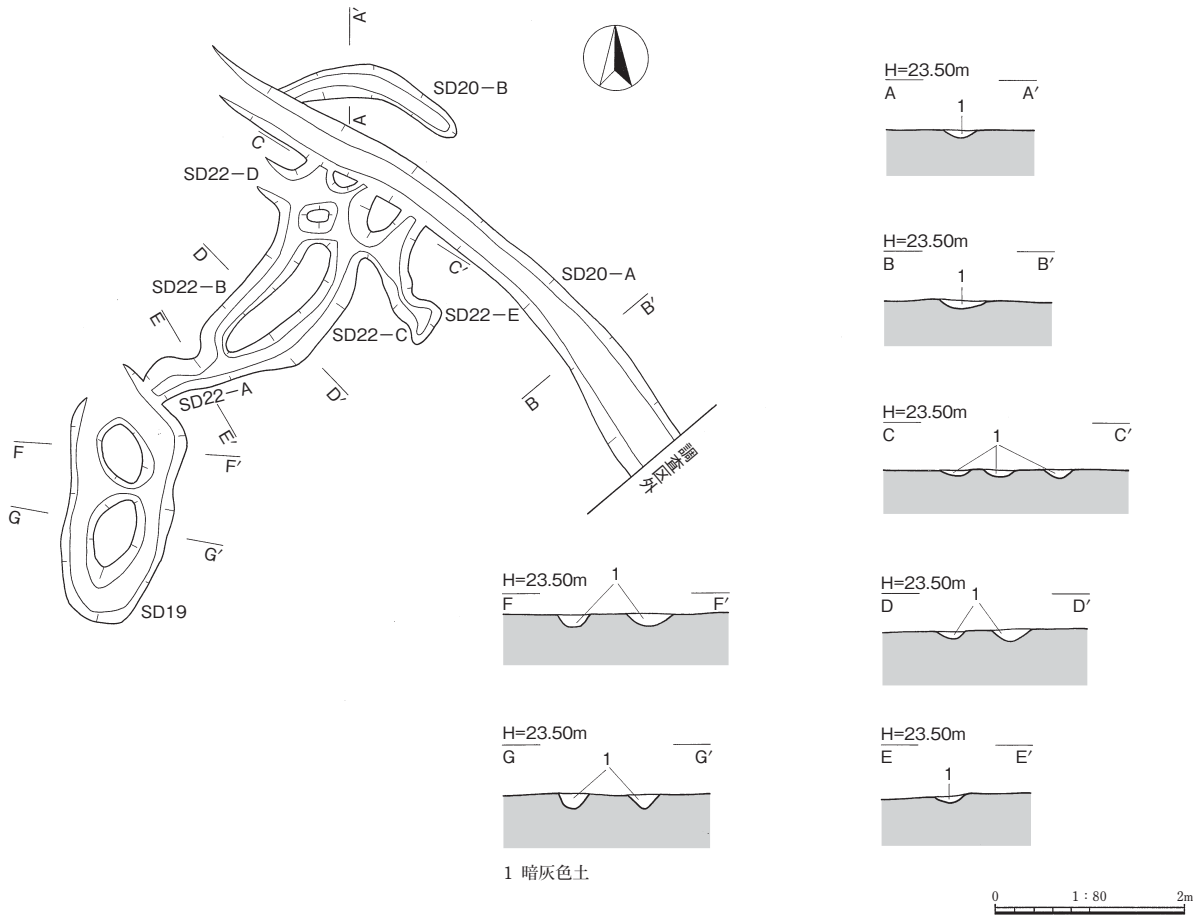
が22.88ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。ＳＤ20－Ｂは東から西へ「く」字状に湾曲してＳＤ20－Ａの北西側に合流する。検出した長さは2.0ｍ、幅0.26～0.4ｍ、検出面からの最大の深さ７㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は東端が22.97ｍ、西端が22.89ｍで、東から西へ緩やかに流下して、ＳＤ20－Ａに合流する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

ＳＤ20－Ａ、ＳＤ20－Ｂのいずれからも遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

ＳＤ21（第14図）

ＳＤ21は調査区の北東側に位置する。南西側は削平されているが、やや湾曲して北東へ直線的にのびる。検出した長さは2.1ｍ、幅0.25～0.3ｍ、検出面からの最大の深さ８㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が22.92ｍ、北東端が22.88ｍで、南西から北東へ緩やかに流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。

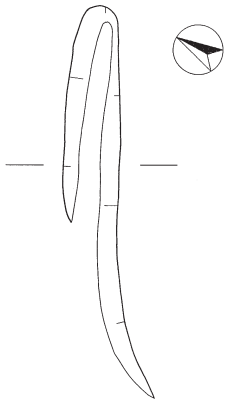


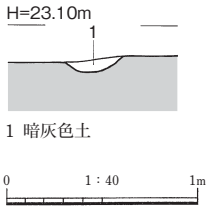
第13図　ＳＤ１９・２０・２２

ＳＤ22（第13図）

ＳＤ22は調査区の北東側に位置する。ＳＤ22は複数の溝からなっており、全体的には南西から北東へのび、南西端はＳＤ19に、北東端はＳＤ20－Ａに切られている。南西側では１条の溝（ＳＤ22－Ａ）であるが、これが２条（ＳＤ22－Ｂ、ＳＤ22－Ｃ）に分岐し、さらに北東側では２条（ＳＤ22－Ｄ、ＳＤ22－Ｅ）の溝が合流する。底面の標高は南西端が22.93ｍ、北東端が22.95ｍで、ほぼ平坦である。埋土はＳＤ22－Ａ～Ｄいずれも暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から古墳時代後期を下限とすると考えられる。





第14図　ＳＤ２１

４．第１遺構面の調査

ＳＤ３（第15・16図）

ＳＤ３は調査区の中央やや北東寄りに位置する。東から西へのび、西側は北へ屈曲するか、あるいは２つに分岐して調査区外へのびるものと考えられる。また、中央部と北側ではＳＤ11を、東側ではＳＤ10を切っている。検出した長さは8.7ｍ、幅2.4～4.7ｍ、検出面からの最大の深さ1.47ｍを測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は平坦である。底面の標高は東端が22.10ｍ、西端が21.59ｍで、東から西へ流下する。埋土は下層から大別して細粒砂、粘土、シルト、粘質土、粘土の順に堆積しており、堆積状況から当初は流水と滞水とを繰り返していたが、最終的には滞水的な状況にあったと考えられる。

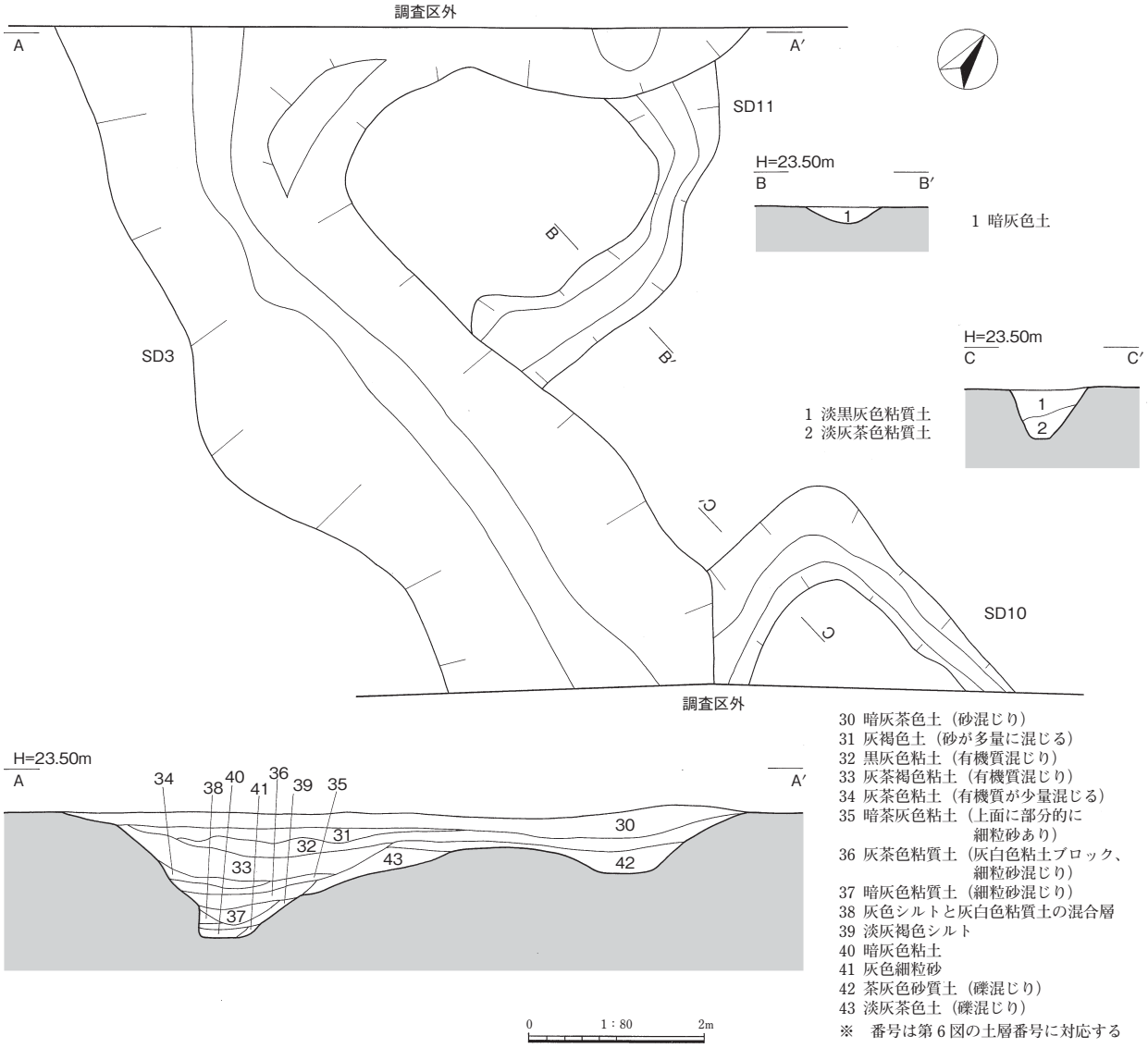
本遺構からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。ほとんどが細片で、このうち２点を図示した。１、２は灰茶色粘土層（34層）から出土したもので、１は土師器低脚坏の脚部、２は須恵器の坏蓋である。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

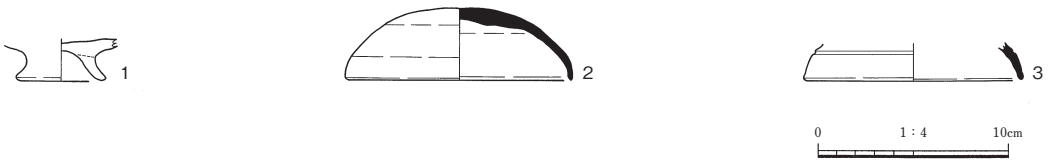
ＳＤ４（第17・18図）

ＳＤ４は調査区の中央に位置する。東から西へのび、西側はさらに調査区外へのびる。全体的に肩が２段となっており、外側の肩は、北西側では深さが最大で54㎝を測るが、それ以外は最大で12㎝と浅く、底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。内側の肩は南側で深さ53～87㎝、北側で深さ21～48㎝を測り、底面は平坦である。検出した長さは7.2ｍ、幅4.7～6.4ｍ、検出面からの最大の深さ1.05ｍを測る。断面形態はＵ字状を呈する。底面の標高は東端が22.31ｍ、西端が22.00ｍで、東から西へ流下する。埋土は下層から大別して細粒砂、粘質土、シルト、粘土の順に堆積しており、堆積状況から流水と滞水とを繰り返していたと考えられる。

本遺構からは弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪が出土した。ほとんどが細片で、このうち３点を図示した。４～６は淡黒灰色粘質土層（27層）から出土したものである。４、５は円筒埴輪で、４は断面台形の突帯をもち、外面は摩耗のため調整は不明である。５は突帯が剥離しており、突帯の下には楕円状の透し孔がある。外面は摩耗のため調整は不明である。６は須恵器の坏蓋で、天井部に



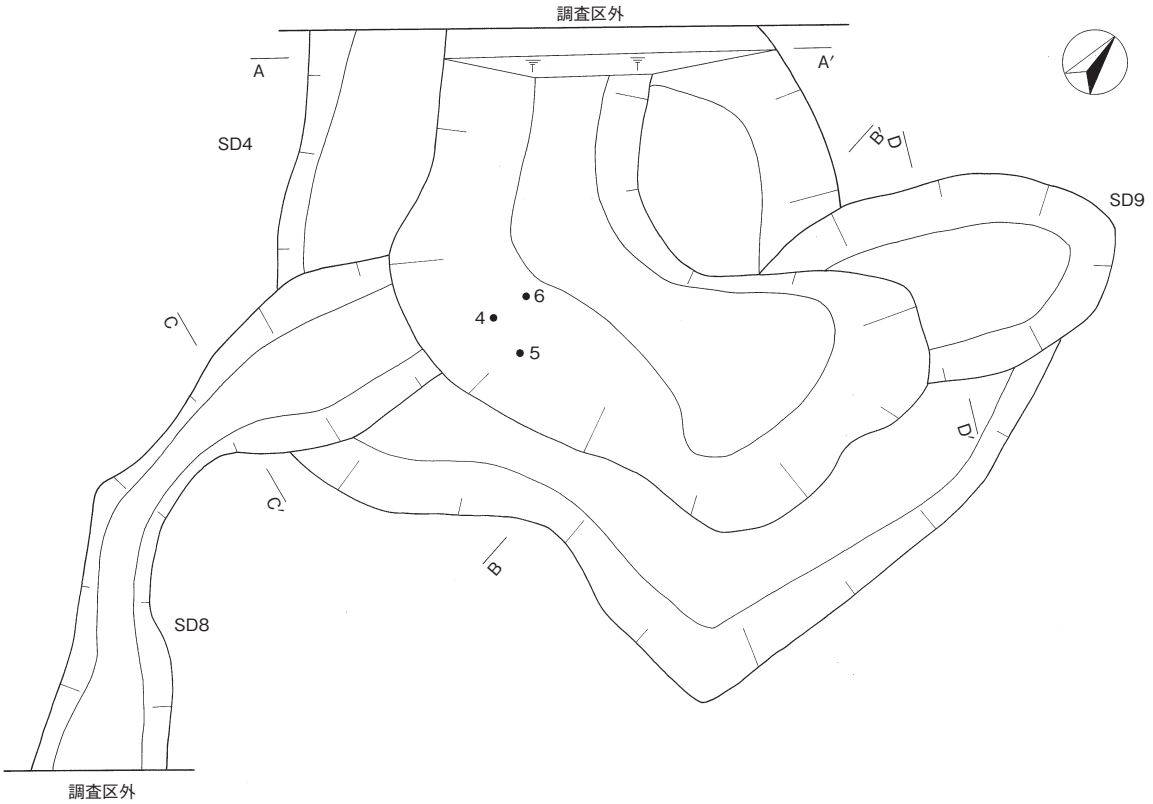
第15図　ＳＤ３・10・11

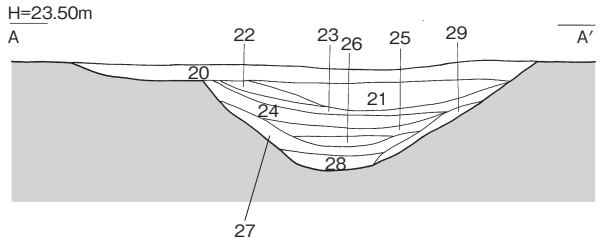


第16図　ＳＤ３・10出土遺物

宝珠つまみがつくと考えられる。

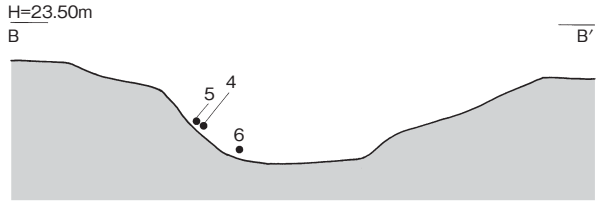
本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

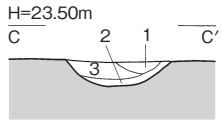


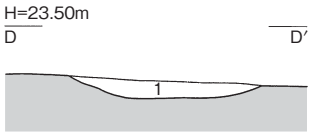


20 暗灰茶色土（砂混じり）
21 灰褐色土（砂が多量に混じる）
22 暗灰色土（砂、小礫、
灰白色粘土ブロック混じり）
23 黒灰色粘土（有機質混じり）
24 灰茶褐色粘土（有機質混じり）
25 灰茶色粘土（有機質が少量混じる）
26 灰褐色シルト
27 淡黒灰色粘質土（有機質混じり）
28 灰色細粒砂（有機質混じり）
29 淡灰褐色砂質土

※　番号は第６図の土層番号に対応する



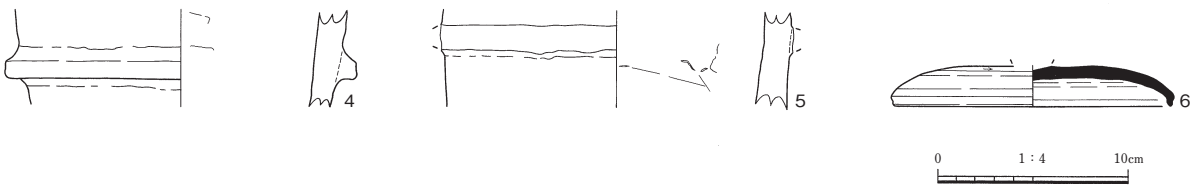




1 暗灰色土

1 暗茶灰色土（砂、鉄分混じり）
2 黒灰色土（砂混じり）
3 灰褐色土（砂が少量混じる）

第17図　ＳＤ４・８・９



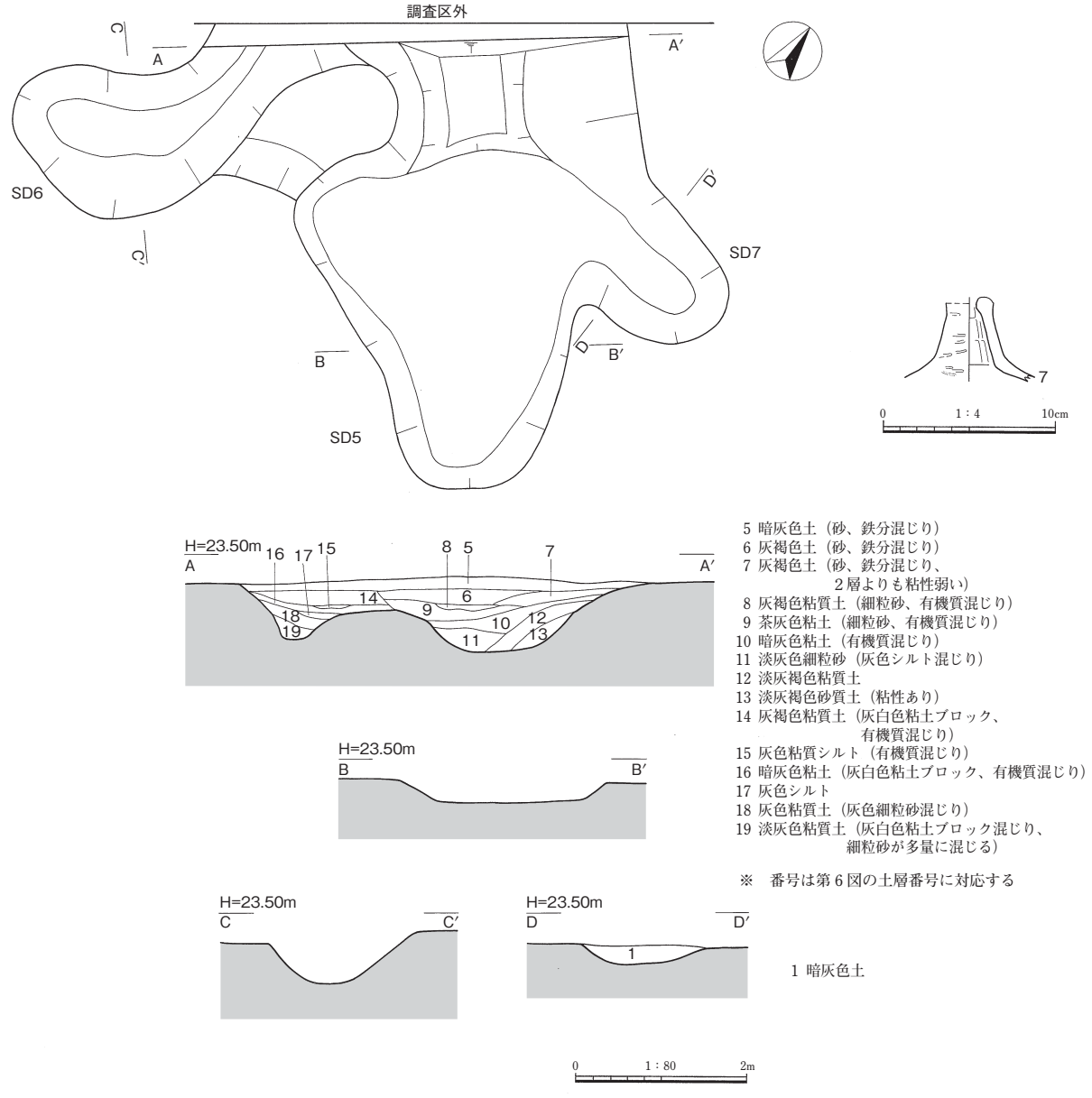
第18図　ＳＤ４出土遺物

ＳＤ５（第19図）

ＳＤ５は調査区の南西側に位置する。南東から北西へのび、北西側はさらに調査区外へのびる。南側の肩の一部が２段となり、さらに北西側の底面が一段低くなっている。検出した長さは5.45ｍ、幅2.0～5.0ｍ、検出面からの深さは北西側の一段低くなった部分で最大88㎝、南東側で最大26㎝を測る。断面の形態は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.12ｍ、北西側の一段低い部分の南東側の肩が22.75ｍ、北西側の一段低い部分が22.26ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は下層から大別して砂質土、粘質土、細粒砂、粘土の順に堆積しており、堆積状況から流水と滞水とを繰り返していたと考えられる。

本遺構からは土師器と須恵器が出土した。ほとんどが細片で、このうち１点を図示した。７は上層から出土した土師器高坏の脚部で、外面には横方向のミガキ調整が施されている。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。



第19図　ＳＤ５・６・７及びＳＤ５出土遺物

ＳＤ６（第19図）

ＳＤ６は調査区の南西側に位置する。南西から北へ湾曲してのび、北側はＳＤ５に切られているが、さらに調査区外へのびる。検出した長さは3.5ｍ、幅1.0～1.7ｍ、検出面からの最大の深さ66㎝を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が22.83ｍ、北端が22.40ｍで、南西から北へ流下する。埋土は粘質土とシルトが互層状に堆積しており、堆積状況から流水と滞水とを繰り返していたと考えられる。

本遺構からは弥生土器と土師器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、ＳＤ５との切合関係から古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ７（第19図）

ＳＤ７は調査区の南西側に位置する。東から西へのび、西側はＳＤ５に合流する。検出した長さは1.7ｍ、幅1.7ｍ、検出面からの最大の深さ32㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は東端が22.89ｍ、西端が22.66ｍで、東から西へ流下し、ＳＤ５に合流する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは土師器が１点出土したが、細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、ＳＤ５との関連から古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ８（第17図）

ＳＤ８は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北へ湾曲してのび、北側はＳＤ４に合流している。また、南東側は調査区外へのびる。検出した長さは6.3ｍ、幅0.55～1.75ｍ、検出面からの最大の深さ34㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面は凹凸が著しい。底面の標高は南東端が23.07ｍ、北端が22.59ｍで、南東から北へ流下し、ＳＤ４に合流する。埋土は大きく上下２層に分かれ、上層は砂が混じる黒灰色土を主体として、砂が混じる暗茶灰色土が認められる。下層は砂が少量混じる灰褐色土で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ４との関連から古墳時代後期に帰属すると考えられる。

ＳＤ９（第17図）

ＳＤ９は調査区の中央に位置する。平面形態は楕円形を呈しており、形態的には土坑の可能性もあるが、ここでは溝状遺構として報告する。検出した長さは3.7ｍ、幅2.05～2.1ｍ、検出面からの最大の深さ25㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は北東端が22.87ｍ、南西端が22.72ｍで、北東から南西へ流下し、ＳＤ４に合流する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは土師器が１点出土したが、細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、ＳＤ４との関連から古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ10（第15・16図）

ＳＤ10は調査区の北東側に位置する。「く」字状に大きく屈曲して、南側はＳＤ３に切られ、東側

は調査区外へのびる。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。検出した長さは4.8ｍ、幅0.4～1.0ｍ、検出面からの最大の深さ69㎝を測る。底面の標高は東端が23.16ｍ、南端が22.33ｍで、東から南へ流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は淡黒灰色粘質土、下層は淡灰茶色粘質土で、いずれも流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは須恵器１点と土師器１点が出土したが、土師器は細片であるため図示できなかった。３は須恵器の坏蓋で、天井部と口縁部との境界に沈線が巡る。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ11（第15図）

ＳＤ11は調査区の中央やや北東寄りに位置する。南から西へ湾曲してのび、両端はＳＤ３に切られている。検出した長さは4.2ｍ、幅0.4～1.3ｍ、検出面からの最大の深さ32㎝を測る。断面の形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.94ｍ、西端が22.67ｍで、南から西へ流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

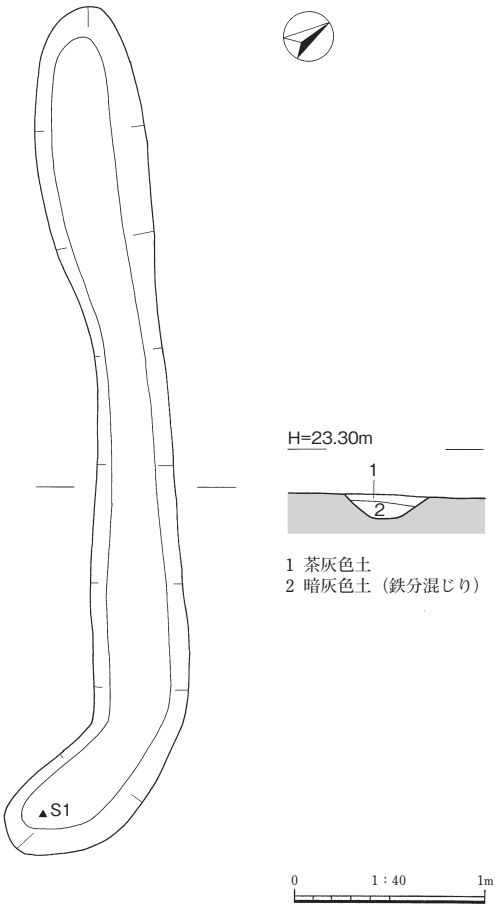
本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ３との切合関係から古墳時代後期に帰属すると考えられる。

ＳＤ12（第20・21図）

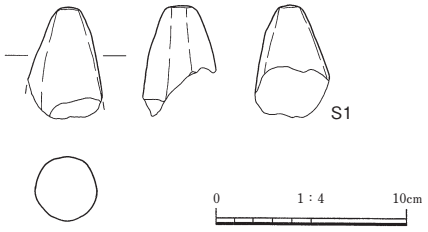
ＳＤ12は調査区の中央やや北東寄りに位置する。ＳＤ３の南西側に沿うように位置し、南東から北西へ直線的にのびるが、南西端は南へ湾曲している。検出した長さは4.65ｍ、幅0.4～0.6ｍ、検出面からの最大の深さ16㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.06ｍ、北西端が22.95ｍで、南東から北西へ緩やかに流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は茶灰色土、下層は暗灰色土で、いずれも流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは南東端で磨製石斧（Ｓ１）が出土した。Ｓ１は砂岩製の太型蛤刃石斧で、刃部が欠損する。

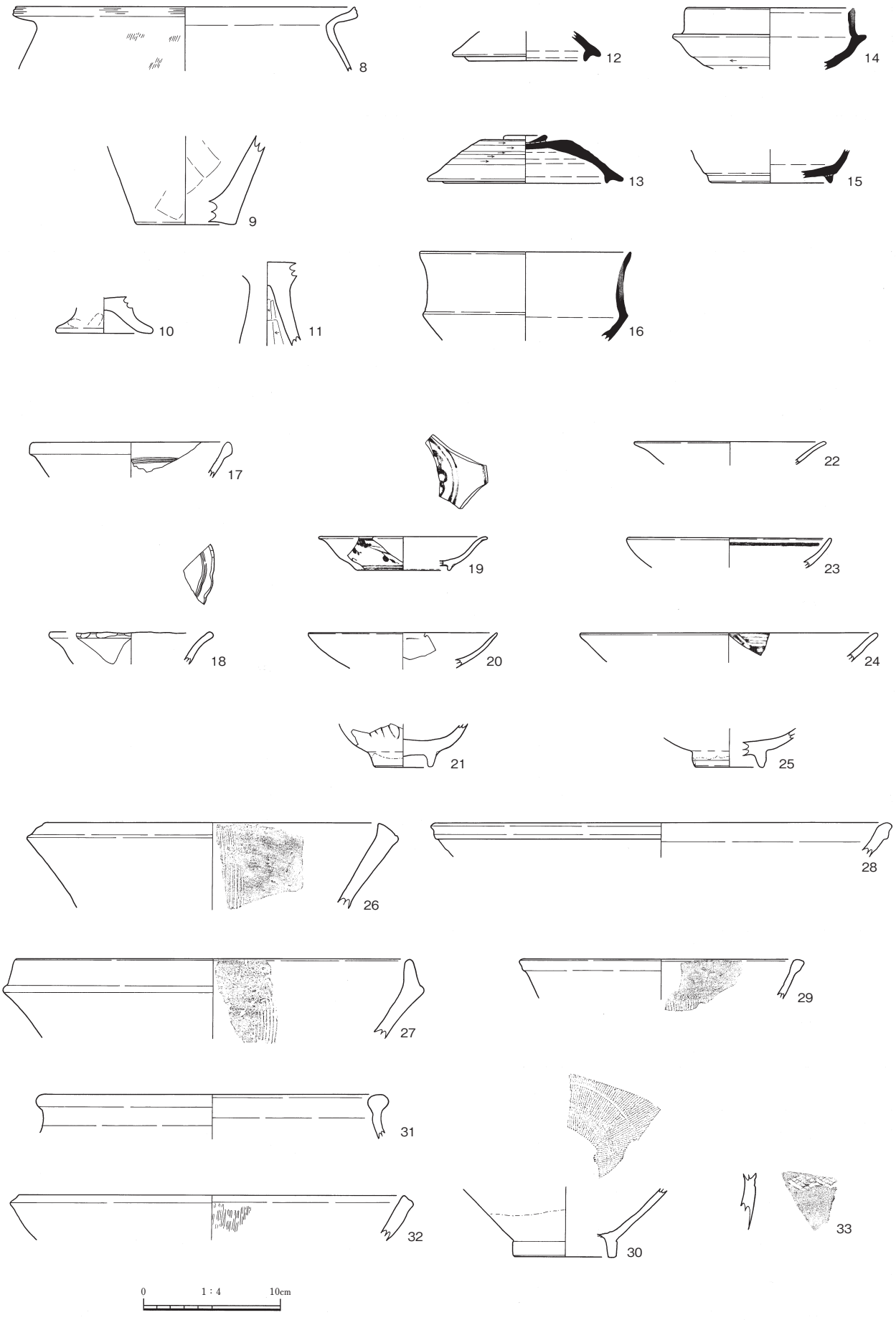
本遺構の時期は、ＳＤ３との関連から古墳時代後期と考えられる。



第20図　ＳＤ１２



第21図　ＳＤ１２出土遺物



第22図　１区遺構外出土遺物（１）

５．遺構外出土遺物（第22・23図）

１区からは弥生時代～近世の遺物が出土した。量的には少ないが、陶磁器はⅡ層、土器はⅣ層からの出土が主体で、Ⅲ層からは土器と陶磁器の出土が認められる。

８、９は弥生土器で、８はⅣ層、９はⅢ－１層から出土した。８は甕で、口縁端部を僅かにつまみ上げている。９は底部である。

10、11は土師器で、いずれもⅣ層から出土した。10は低脚坏の脚部、11は高坏の脚部である。

12～16は須恵器である。12・13は坏蓋で、いずれも口縁部に返りを有する。13は天井部に径の小さい輪状つまみを有する。14・15は坏身で、15は高台を有する。16は高坏の坏部で、胴部が屈曲し、口縁部は外反する。

17～31は陶磁器で、いずれもⅡ層とⅢ層から出土した。17は玉縁状の口縁をもつ白磁碗で、内面には櫛描平行線が施されている。18は青磁の稜花皿、19は青花皿で、いずれも景徳鎮産である。

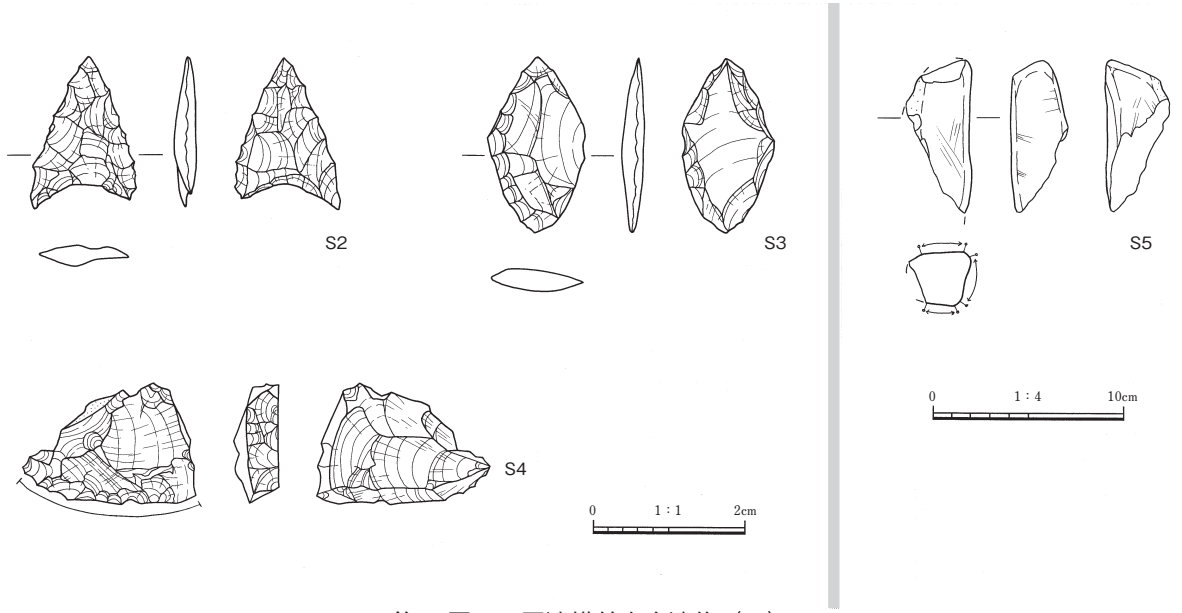
20、21は肥前産の磁器である。20は皿、21は碗で、21の高台は露胎である。

22～25は肥前産の陶器である。22～24は皿で、23は２次的に被熱し、24の内面には刷毛装飾が施されている。25は埦で、青磁釉が施され、高台は露胎である。

26～30は擂鉢で、26・27は備前焼、28は須佐唐津焼である。29・30は在地産と考えられ、いずれも褐色の釉がかかり、30は底部外面と高台は露胎である。31は鉢あるいは甕で、口縁端部が内外に肥厚する。

32、33は瓦質土器である。32は擂鉢、33は火鉢と考えられ、菱形のスタンプ陰文が施されている。

Ｓ２～Ｓ５は石器である。Ｓ２は黒曜石製で、浅い抉りをもつ凹基式の石鏃、Ｓ３はサヌカイト製で、凸基式の石鏃である。Ｓ４は黒曜石製の楔形石器である。Ｓ５は凝灰岩製の砥石で、左側面が欠損するが、表裏面及び、右側面の３面を使用している。



第23図　１区遺構外出土遺物（２）

第３節　２区の調査

１．概　　要

２区は、１区の南西に位置する調査区で、現地表面の標高は23.7～23.8ｍである。南西側は圃場整備によって大きく削平されていると考えられ、２区の南西に位置する３区の現地表面との標高差は0.9ｍを測る。

２区では２面の遺構面を確認した。第２遺構面は基盤層である灰白色粘土層上面を遺構面とする。遺構面の微地形は調査区の北東側と南西側に尾根状地形が南東から北西に向かって緩やかに張り出し、調査区の中央やや北東寄りには谷状地形が入り込んでいる。

第２遺構面では溝状遺構18基と土坑６基を検出した。遺構は主に尾根状地形部に位置し、ＳＤ54・55・56・58・59は調査区の北東側に、ＳＤ38は調査区の中央から北東側にかけて、これ以外の遺構は調査区の南西側に位置している。これらの遺構は、出土遺物から縄文時代晩期～弥生時代前期に帰属すると考えられる。

第１遺構面は灰色土層（第24図の12層）と茶灰色土層（第24図の13、14層）上面を遺構面とする。遺構面の微地形は調査区の中央に南東から北西へ緩やかに傾斜する尾根状地形があり、その北東側と南西側に谷状地形が入り込む。尾根状地形部の標高は最高所で23.58ｍを測り、北東側の谷状地形部の最低所の標高は23.35ｍ、南西側の谷状地形部の最低所の標高は23.40ｍを測る。

第１遺構面では溝状遺構を13基検出した。ＳＤ24～30は調査区の南西側に、ＳＤ31～36は調査区の北東側の谷状地形部に位置している。調査区の中央は遺構面が若干高くなっているため、削平された可能性がある。調査区の南西側は、現耕作土直下が第１遺構面となっており、ＳＤ24～30は平行、直交するように直線状にのび、ＳＤ28とＳＤ30からは陶磁器が出土していることから、これらは近世以降の耕作に伴う溝と判断した。なお、ＳＤ27からはサヌカイト製の石鏃（第59図　Ｓ32）と黒曜石製の楔形石器（第59図　Ｓ33）、ＳＤ30からは黒曜石製の楔形石器（第59図　Ｓ34）が出土している。ＳＤ31～36は形態的に自然流路と考えられ、検出面から近世に帰属する可能性がある。

２．基本層序（第24図）

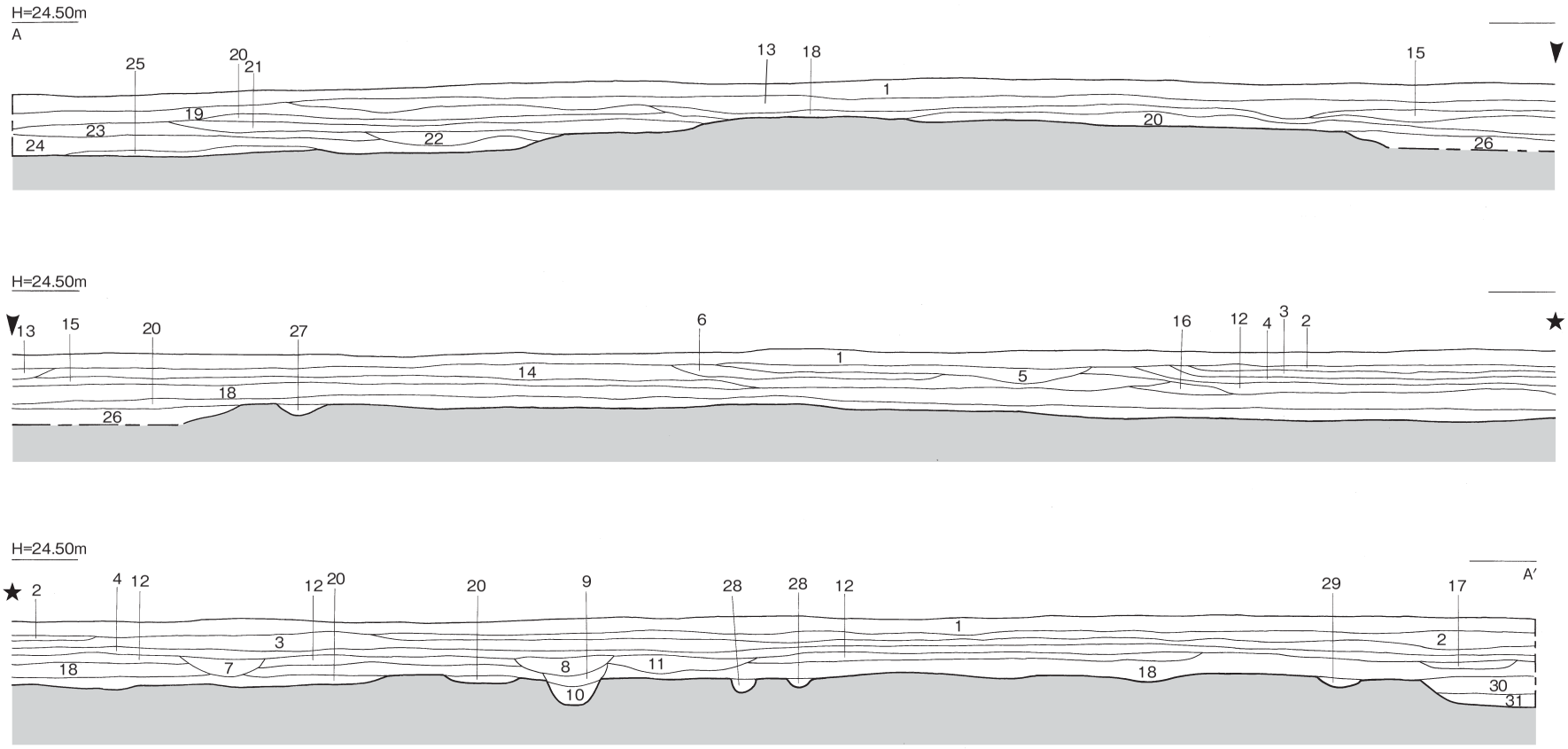
調査区の北西壁で土層の堆積状況を確認した。２区は、かつてはＣグリッドとＤグリッドとの境界付近を境として２枚の水田に分かれていたと考えられ、この部分を境に北東側（以下、北東側とする。）と南西側（以下、南西側とする。）とでは土層の堆積状況が異なっている。

各層の概要は以下のとおりである。

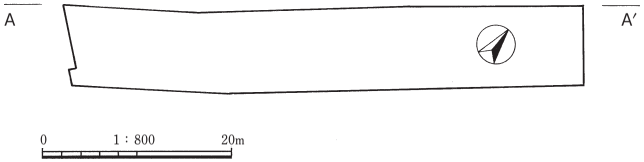
Ⅰ層：Ⅰ層（１層）は現水田耕作土層で、層厚は0.1～0.25ｍを測る。

Ⅱ層：Ⅱ層（２層）は水田基盤層と考えられる。茶灰色を呈し、北東側に堆積する。層厚は0.05～0.25ｍを測り、主に近世の遺物が出土した。Ⅱ層は１区のⅡ層に対応する。

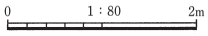
Ⅲ層：Ⅲ層（３、４層）は旧耕作土層と考えられ、上下２層（Ⅲ－１層、Ⅲ－２層）に細分できる。Ⅲ－１層（３層）は灰褐色、Ⅲ－２層（４層）は暗灰褐色を呈し、いずれも北東側に堆積する。層厚は、Ⅲ－１層は0.05～0.25ｍ、Ⅲ－２層は0.05～0.15ｍを測り、いずれの層からも弥生時代～近世の遺物が出土した。Ⅲ－１層、Ⅲ－２層は各々１区のⅢ－１層、Ⅲ－２層に対応する。



第24図　2区土層図



1 淡茶灰色土（Ⅰ層）
2 茶灰色土（Ⅱ層、鉄分混じり）
3 灰褐色土（Ⅲ－1層、鉄分混じり）
4 暗灰褐色土（Ⅲ－2層、鉄分混じり）
5 暗灰色土
6 灰褐色土
7 暗灰褐色土（ＳＤ31）
8 灰褐色土(ＳＤ32、砂、鉄分混じり)
9 暗灰色土(ＳＤ32、砂、鉄分混じり)
10 灰色土(ＳＤ32、砂、鉄分混じり)
11 暗灰褐色土(ＳＤ33、鉄分混じり)
12 灰色土（Ⅳ層、鉄分混じり）
13 茶灰色土（Ⅴ－1層）
14 茶灰色土（Ⅴ－1層）
15 茶灰色土（Ⅴ－2層、鉄分混じり）
16 暗茶灰色土（Ⅴ－2層）
17 暗灰色土
18 暗灰色土（Ⅵ層、鉄分混じり）
19 暗茶灰色土(Ⅵ層)
20 灰色砂（Ⅶ層、鉄分混じり）
26 暗茶灰色粘土（ＳＤ38、炭化物混じり）
27 暗茶灰色粘質土
28 灰褐色土（ＳＤ58、砂が少量混じる）
29 暗灰色粘質土（ＳＤ59）
30 暗灰色粘土（ＳＤ38）
31 黒灰色粘土（ＳＤ38、砂が少量混じる、炭化物混じり）



21～25：ＳＤ49

Ⅳ層：Ⅳ層（12層）は灰色を呈し、北東側に堆積するが、北東端（Ｆグリッド）ではⅢ－２層に削平されており遺存していない。層厚は0.03～0.15ｍを測り、弥生時代～古墳時代の遺物が出土した。調査区の北東側では、Ⅳ層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

Ⅴ層：Ⅴ層（13～16層）は旧耕作土層と考えられ、上下２層（Ⅴ－１層、Ⅴ－２層）に大別できる。Ⅴ－1層（13、14層）は茶灰色を呈し、南西側に堆積するが、南西端（－Ａグリッド）ではⅠ層に削平されており遺存していない。層厚は0.1～0.25ｍを測り、弥生時代～近世の遺物が出土した。Ⅴ－２層（15、16層）は茶灰色と暗茶灰色を呈し、ＢグリッドとＣグリッドに堆積する。層厚は0.05～0.15ｍを測り、弥生時代～近世の遺物が出土した。調査区の南西側ではⅤ－１層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

Ⅵ層：Ⅵ層（18、19層）は遺物包含層で、弥生時代の遺物を含む。暗灰色と暗茶灰色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は0.05～0.25ｍを測る。Ⅵ層は１区のⅣ層に対応する。

Ⅶ層：Ⅶ層（20層）は遺物包含層で、弥生時代の遺物を含む。灰色を呈する砂層で、－ＡグリッドからＤグリッドにかけて堆積する。層厚は0.05～0.2ｍを測る。

Ⅷ層：Ⅷ層は基盤層の灰白色粘土層である。Ⅷ層上面を第２遺構面として遺構を検出した。

３．第２遺構面の調査

ＳＤ37（第26～28図）

ＳＤ37は調査区の南西側に位置する。南西から北東へ直線的にのび、北東側は東へやや湾曲して調査区外へのびると考えられる。北東側ではＳＤ43とＳＤ44を切り、中央ではＳＤ40に切られている。また、南西側ではＳＤ50を切っているが、ＳＤ41に切られている。検出した長さは9.0ｍ、幅0.9～2.25ｍ、検出面からの最大の深さ24㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は南西側はほぼ平坦であるが、北東側は凹凸がある。底面の標高は南西端が23.42ｍ、北東端が23.35ｍで、南西から北東へ流下する。

本遺構からは弥生土器と石器が多量に出土した。ほとんどが細片で、このうち25点を図示する。

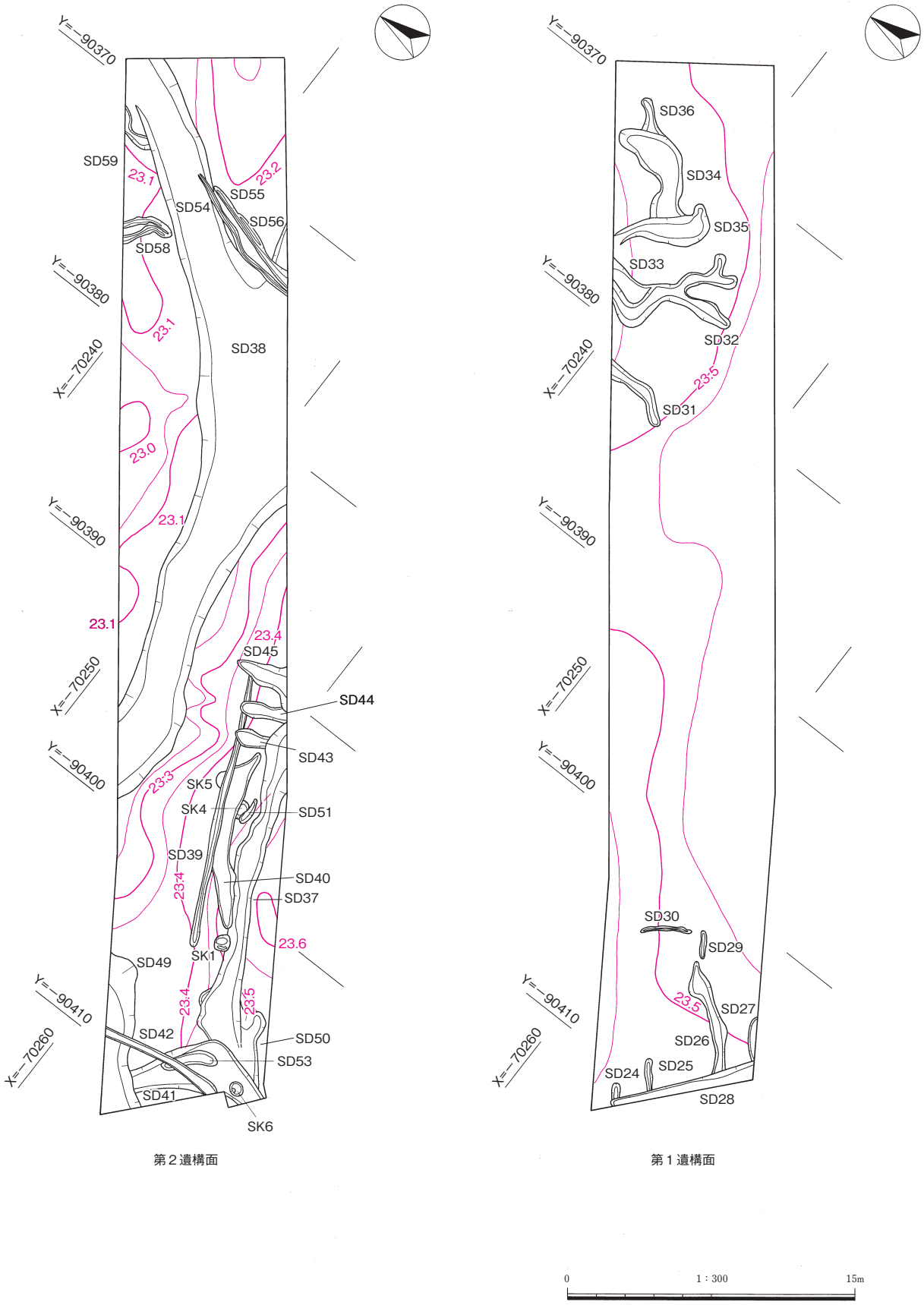
34～49は弥生土器である。34～38は壺で、35は口縁部と頸部との間が欠損するが、２条以上のヘラ描沈線が巡ると考えられる。36は頸部に３条のヘラ描沈線が巡る。37は頸部に３条以上のヘラ描沈線が巡り、ヘラ描沈線の間に竹管文が認められる。38は口縁端部をつまみ上げ、その端面には２条の凹線が巡る。

39～43は甕である。39、40は頸部にヘラ描沈線が巡るもので、39は１条、40は３条のヘラ描沈線が巡る。また、40の口縁部には刻み目が施されている。41は頸部にヘラ描沈線が認められないものである。42は頸部に楕円形の連続刺突文があり、口縁部には刻み目が施されている。

44～49は底部で、44～48は内外面ともナデ調整が施され、49は外面にミガキ調整が施されている。

Ｓ６～Ｓ14は石器である。Ｓ６はサヌカイト製の石鏃で、左側半分が欠損する。Ｓ７は黒曜石製の楔形石器、Ｓ８は黒曜石製の加工痕のある剥片（ＲＦ）である。Ｓ９は凝灰岩製の小型の砥石で、長方形を呈し、表裏面及び両側面の４面を使用している。Ｓ10～Ｓ14はいずれも安山岩製の石鏃である。Ｓ11～Ｓ13は撥形を呈し、Ｓ14はしゃもじ形を呈する。Ｓ13は基部右側縁に素材面を残す。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。



第25図　２区遺構分布図

ＳＤ38（第29・30図）

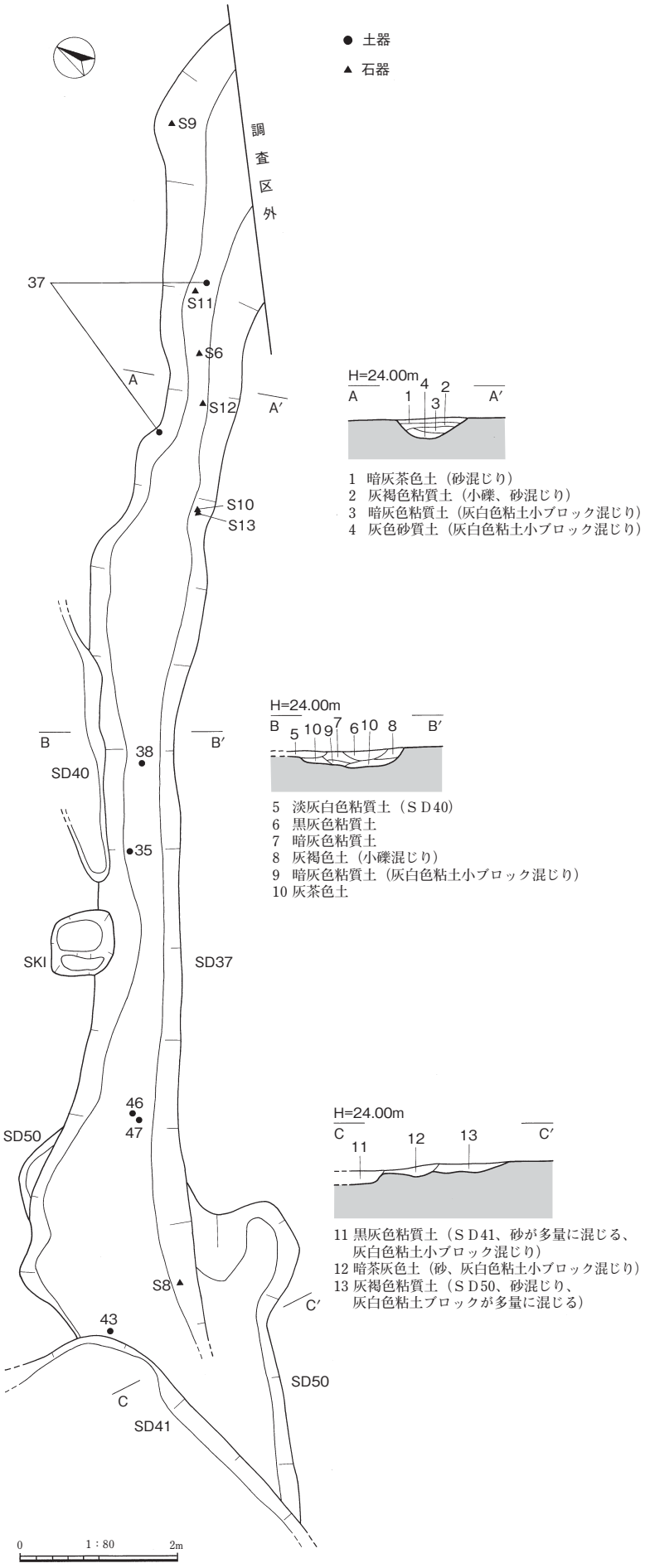
ＳＤ38は調査区の中央から北東側にかけて位置する。尾根状地形の裾部に沿うように南西から北東へ湾曲してのび、両端はさらに調査区外へのびる。また、中央では東方向からの溝（ＳＤ38－Ｂ）が合流し、ＳＤ54・55・56に切られている。

ＳＤ38－Ａは検出した長さ39.2ｍ、幅2.5～3.9ｍ、検出面からの最大の深さ34㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が22.98ｍ、北東端が22.72ｍで、南西から北東へ流下する。埋土はＡ－Ａ′とＤ－Ｄ′では炭化物が混じる暗茶灰色粘土の単層となっているが、Ｂ－Ｂ′では暗茶灰色粘土層の下に炭化物が混じる暗灰色粘土の堆積が認められ、埋土の堆積状況から滞水的な状況が窺える。

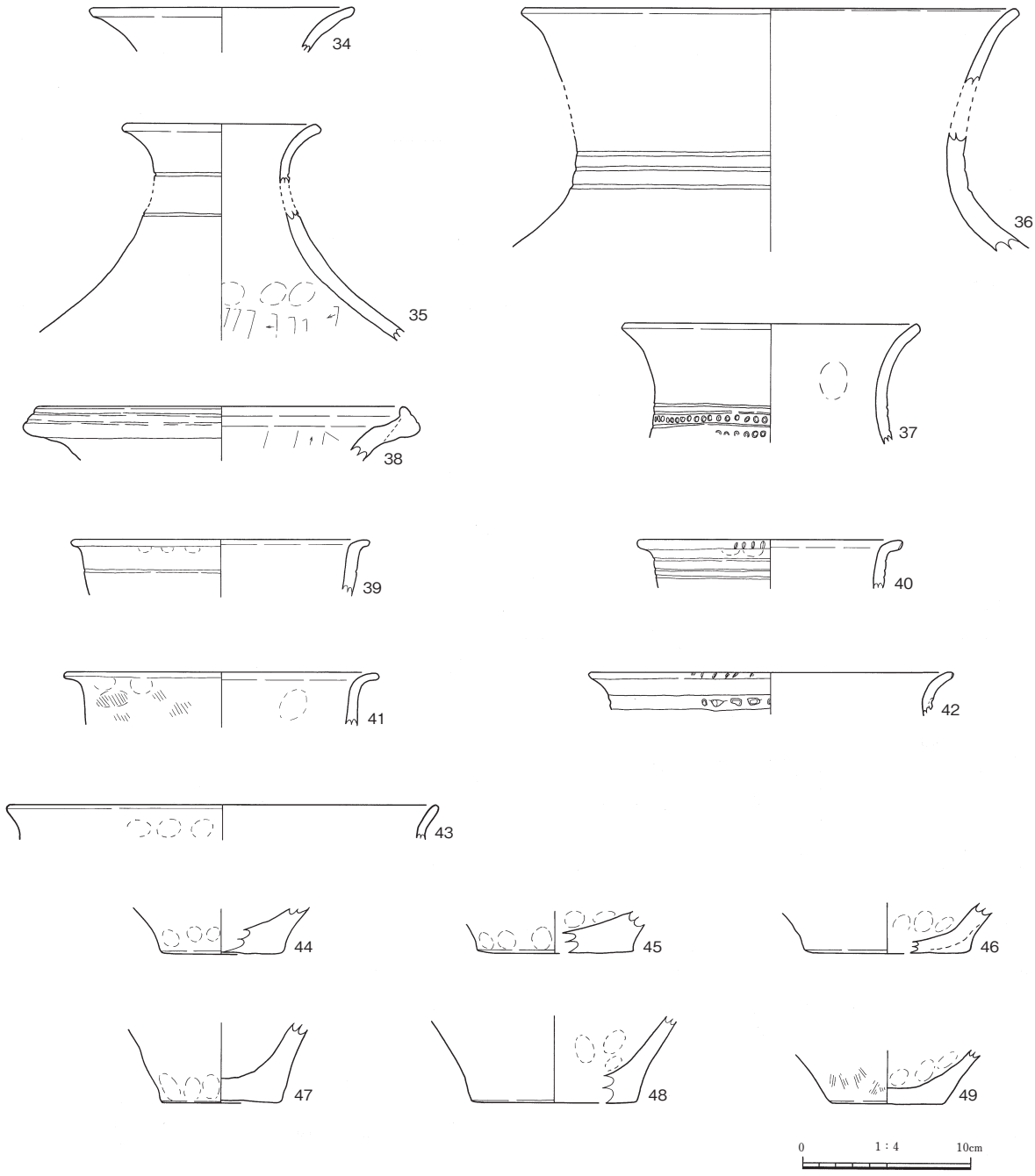
ＳＤ38－Ｂは東から西へのび、西側はＳＤ38－Ａに合流する。東側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは4.0ｍ、幅14.6ｍ、検出面からの最大の深さ34㎝を測る。底面の標高は東端が23.04ｍ、西端が22.93ｍで、東から西へ流下し、ＳＤ38－Ａに合流する。埋土は２層に分かれ、上層は黒灰色粘土、下層は淡黒灰色粘土で、いずれも砂と炭化物、基盤層の灰白色粘土小ブロックが混じっているが、流水の状況は窺えない。

本遺構からは縄文土器、弥生土器、石器が出土した。ほとんどが細片で、このうち６点を図示する。

50は縄文土器で、外面に籾状の



第26図　ＳＤ３７・５０

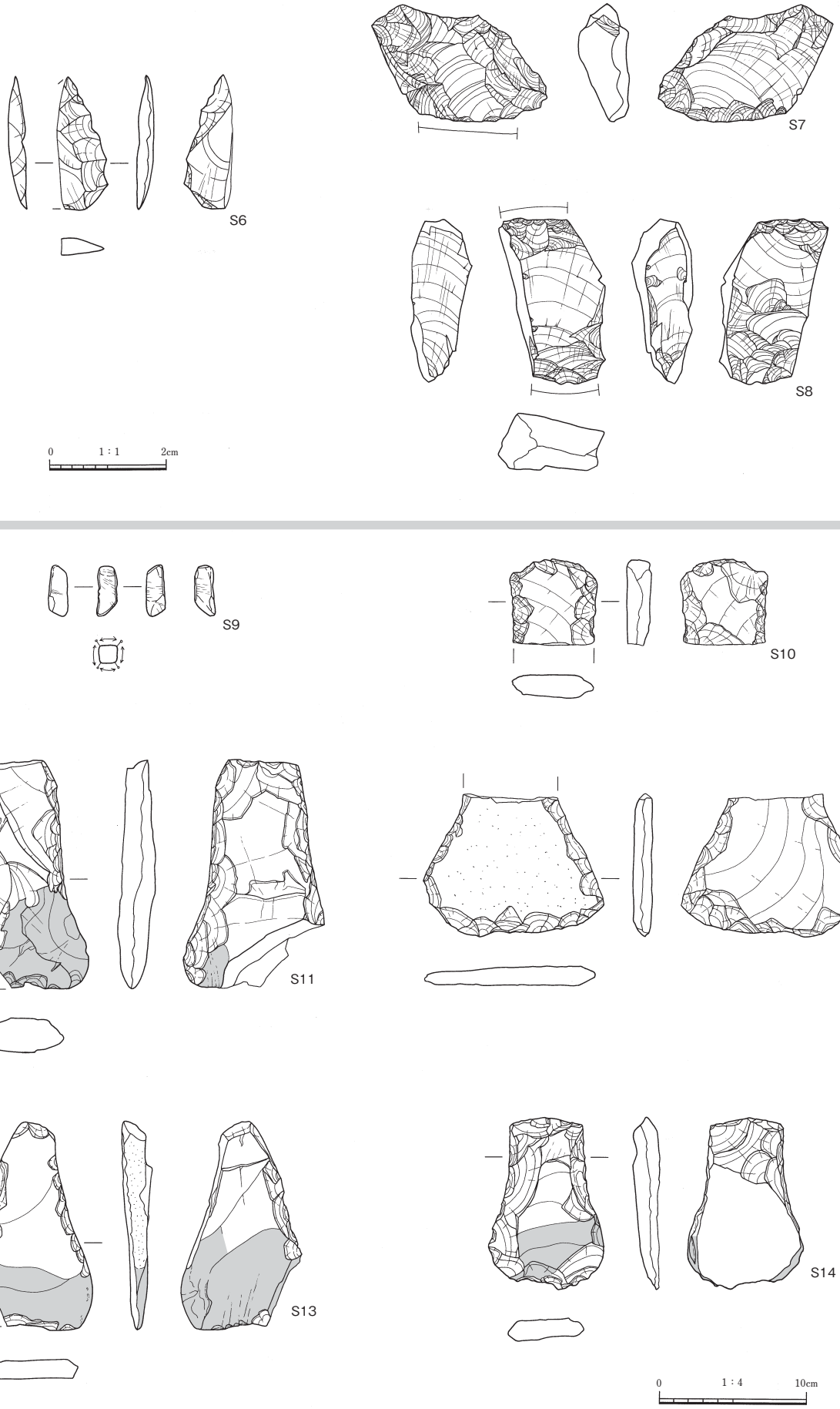


第27図　ＳＤ３７出土遺物（１）

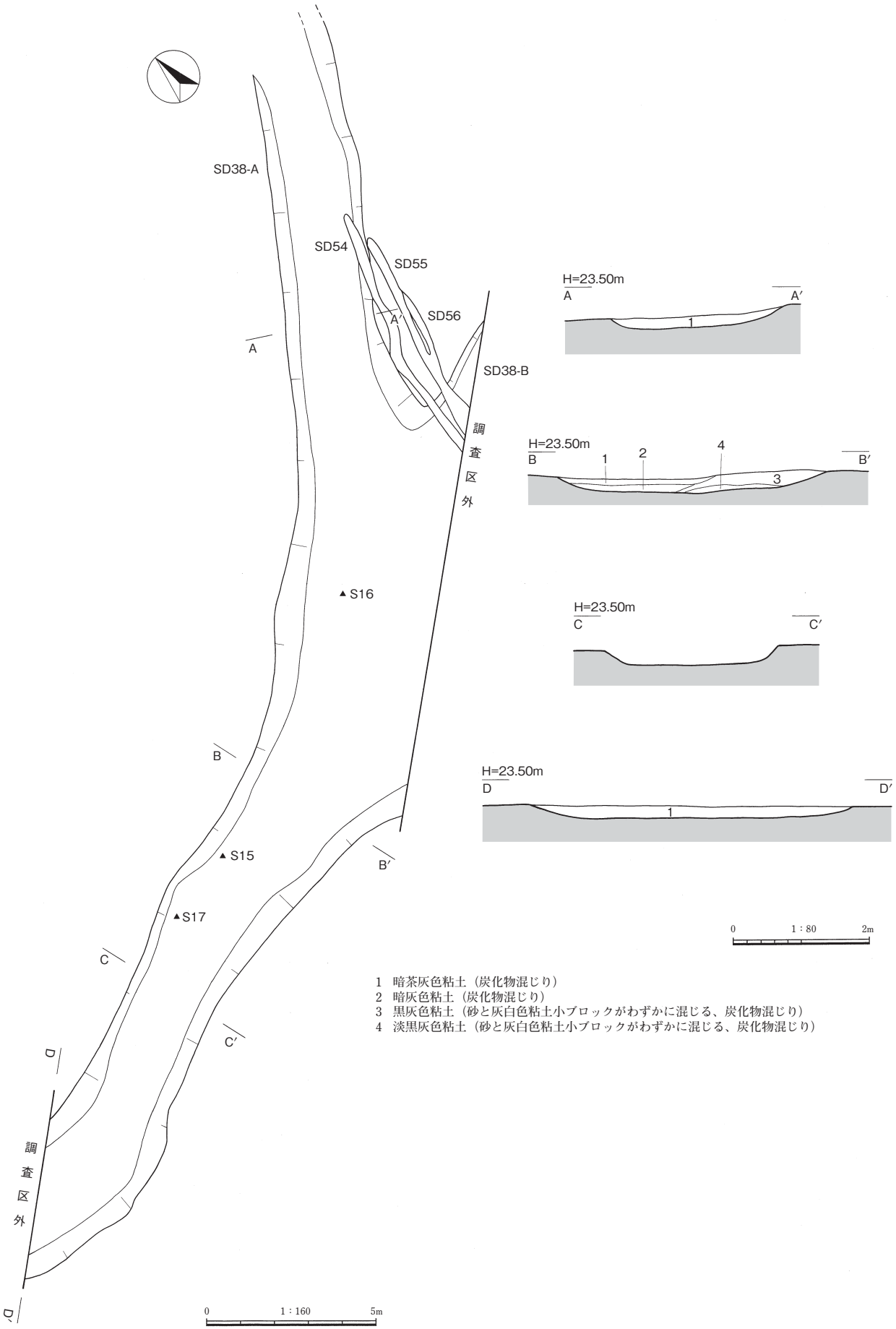
圧痕が認められる。

Ｓ15～Ｓ19は石器である。Ｓ15はサヌカイト製で、浅い抉りをもつ凹基式の石鏃である。Ｓ16、17はいずれも安山岩製の石鏃である。Ｓ16は刃部、基部左側、右側縁が欠損するが、左側縁を抉り状に加工していることから、平面形態はしゃもじ形を呈すると考えられる。Ｓ17は基部が欠損するが、撥形を呈し、刃部先端を尖らせている。Ｓ18は砂岩製の太型蛤刃石斧で、刃部先端には使用によると考えられる剥離が認められる。Ｓ19は白雲母花崗岩製の磨石･凹石である。扁平で長楕円形を呈し、表面は使用により内湾している。

本遺構の時期は、出土遺物と放射性炭素年代測定の結果から縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる。

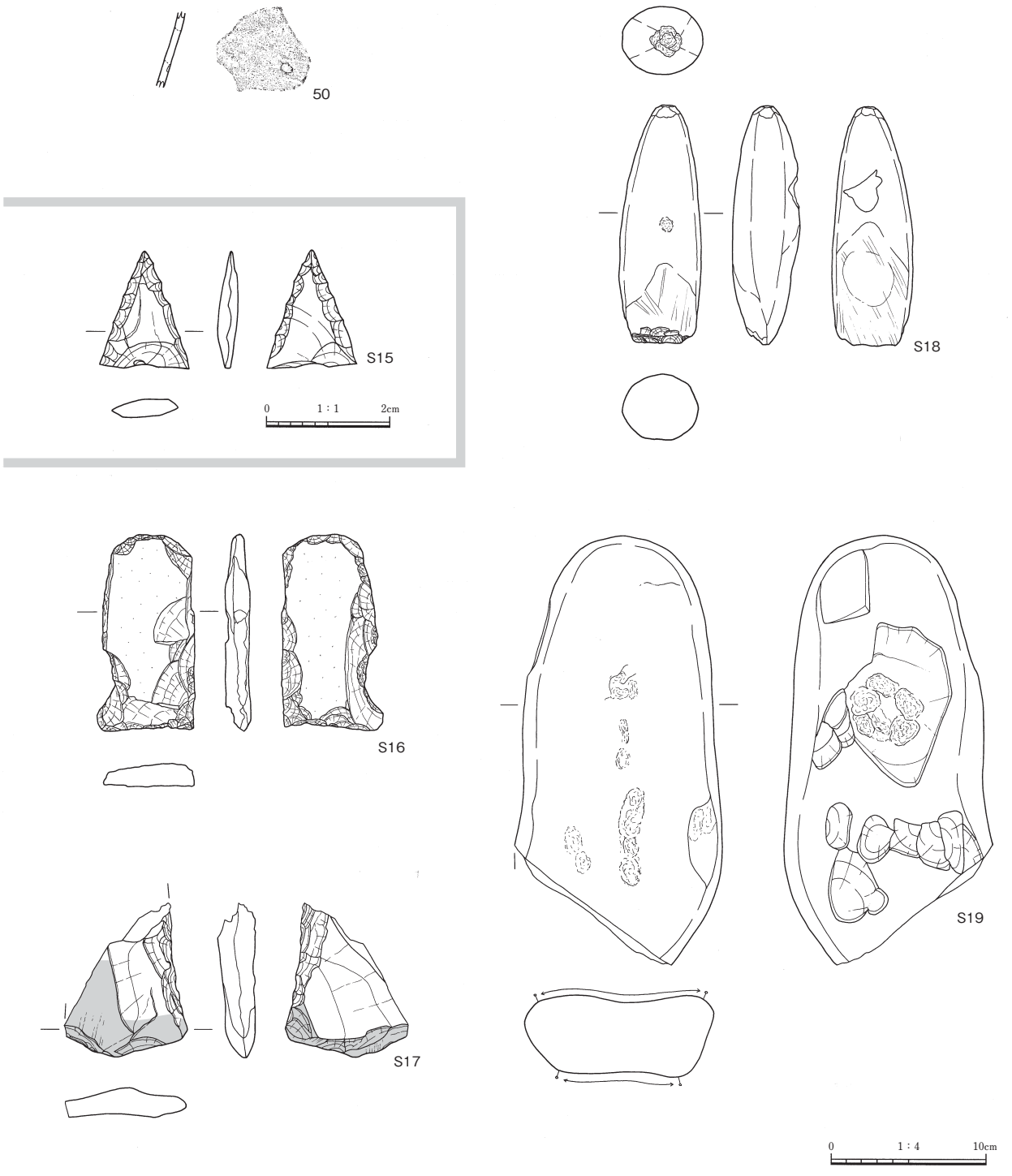


第28図　ＳＤ３７出土遺物（２）



1 暗茶灰色粘土（炭化物混じり）
2 暗灰色粘土（炭化物混じり）
3 黒灰色粘土（砂と灰白色粘土小ブロックがわずかに混じる、炭化物混じり）
4 淡黒灰色粘土（砂と灰白色粘土小ブロックがわずかに混じる、炭化物混じり）

第29図　ＳＤ３８



第30図　ＳＤ３８出土遺物

ＳＤ39（第31図）

ＳＤ39は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南西から北東へ直線的にのび、北東側はＳＤ43・44・45に切られているが、中央はＳＤ40、ＳＫ５を切っている。検出した長さは14.4ｍ、幅0.25～0.5ｍ、検出面からの最大の深さ11㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が23.40ｍ、北東端が23.33ｍで、南西から北東へ緩やかに流下する。埋土は淡橙灰色土

の単層で、砂が多量に混じっており、流水があった可能性がある。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

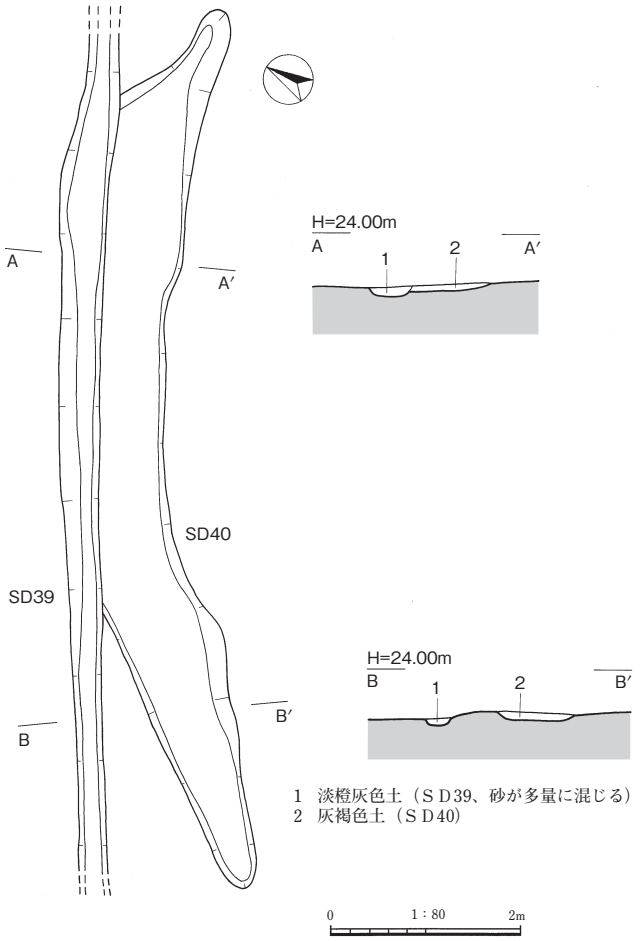
本遺構の時期は、出土遺物とＳＤ40との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。

ＳＤ40（第32図）

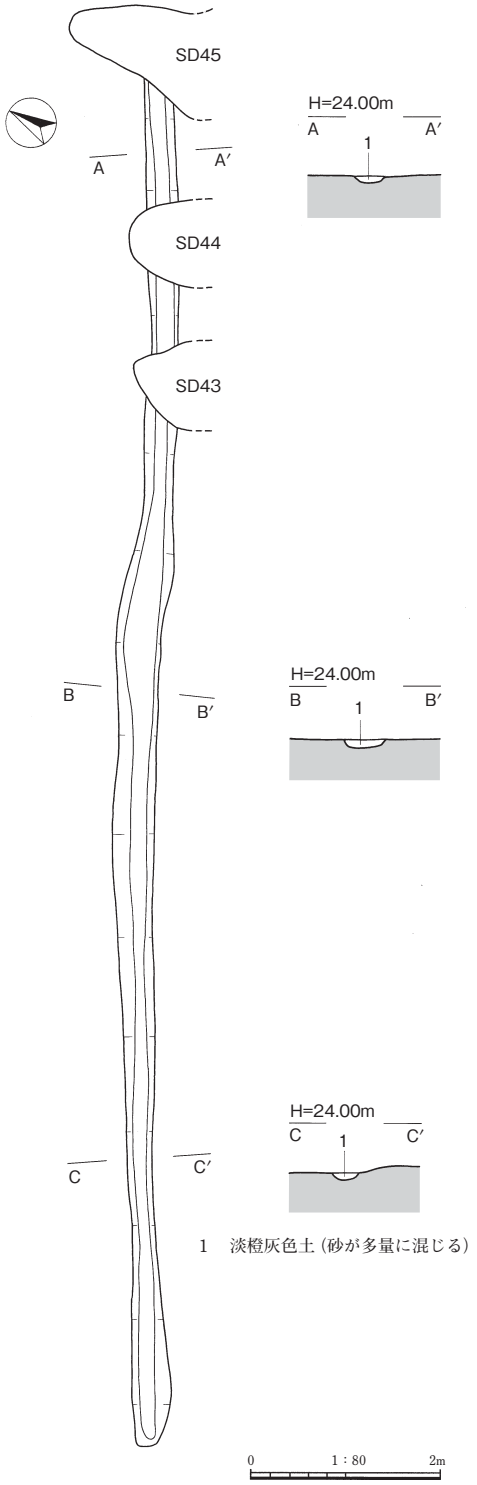
ＳＤ40は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南西から北東へやや湾曲してのび、ＳＤ39に切られているが、南側はＳＤ37を切っている。検出した長さは9.6ｍ、幅0.4～1.05ｍ、検出面からの最大の深さ９㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が23.48ｍ、北東端が23.39ｍで、南西から北東へ流下する。埋土は灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物とＳＤ37との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。



第32図　ＳＤ４０



第31図　ＳＤ３９

ＳＤ41（第33～38図）

ＳＤ41は調査区の南西端に位置する。南から北西へ湾曲してのび､両端はさらに調査区外へのびる。ＳＤ37･50･53を切っているが、ＳＤ42･49に切られている。検出した長さは7.2ｍ、幅2.35～2.95ｍ、検出面からの最大の深さ14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.34ｍ、北西端が23.13ｍで、南から北西へ流下する。埋土は黒灰色粘質土の単層で、基盤層の灰白色粘土の小ブロックと砂が混じる。

本遺構からは弥生土器と石器が多量に出土した。遺物は屈曲部の外縁から集中して出土し、その出土状況は、完形品や個体としてのまとまりが認められず、破片が散在した状況である。埋土の堆積状況や土器が著しくローリングを受けていないことから、上流から流れ込んだのではなく、この部分に土器等の破片を投棄したと考えられる。

51～162は弥生土器である。51～62は壺で、51、52の頸部には３条、55の口縁部には１条のヘラ描沈線が巡る。56は口縁端部が大きく外反するものである。57は頸部と胴部に２条のヘラ描沈線が巡る。59～62は胴部に刻み目をもつ貼付突帯が巡るもので、59は２条、60～62は上下が欠損しているが、１条の突帯が巡る。

63～95は甕である。63～66は頸部に１～２条のヘラ描沈線が巡るもので、さらに口縁端部には刻み目が施されている。63、64は内外面ともハケ調整、67は外面にハケ調整が施されている。68～73は頸部に３条のヘラ描沈線が巡るもので、63～71は口縁端部に刻み目が施されている。71は直口口縁を有し、72は内外面ともハケ調整が施されている。74～85は頸部に４～６条のヘラ描沈線が巡るもので、74～84は口縁端部に刻み目が施されている。74～77・79は内外面ともハケ調整、78、80は外面にハケ調整が施されている。85は口縁端部に刻み目が認められないもので、外面にハケ調整が施されている。86～91は頸部にヘラ描沈線が巡るが、頸部以下が欠損しているため、その条数が不明なものである。86～90は口縁端部に刻み目が施され、86は外面にハケ調整が施されている。92は頸部以下が欠損しているため、ヘラ描沈線の有無が不明なもので、口縁端部には刻み目は認められない。93～95は頸部にヘラ描沈線が巡らないものである。

96～99は鉢である。いずれも胴部が内湾して立ち上がり、96、97は口縁端部を外方へつまみ出し、98、99は口縁端部に粘土紐を貼り付けて肥厚させている。

100～162は底部で、100は内外面に、101～103は内面に、104～126は外面にハケ調整が施されている。127～157は内外面ともナデ調整で仕上げている。158、162は内外面に、159は内面に、160、161は外面にミガキ調整が施されている。

163は土笛で、下段に径４㎜の孔が２つあり、上段は欠損しているが、１つの孔が認められる。

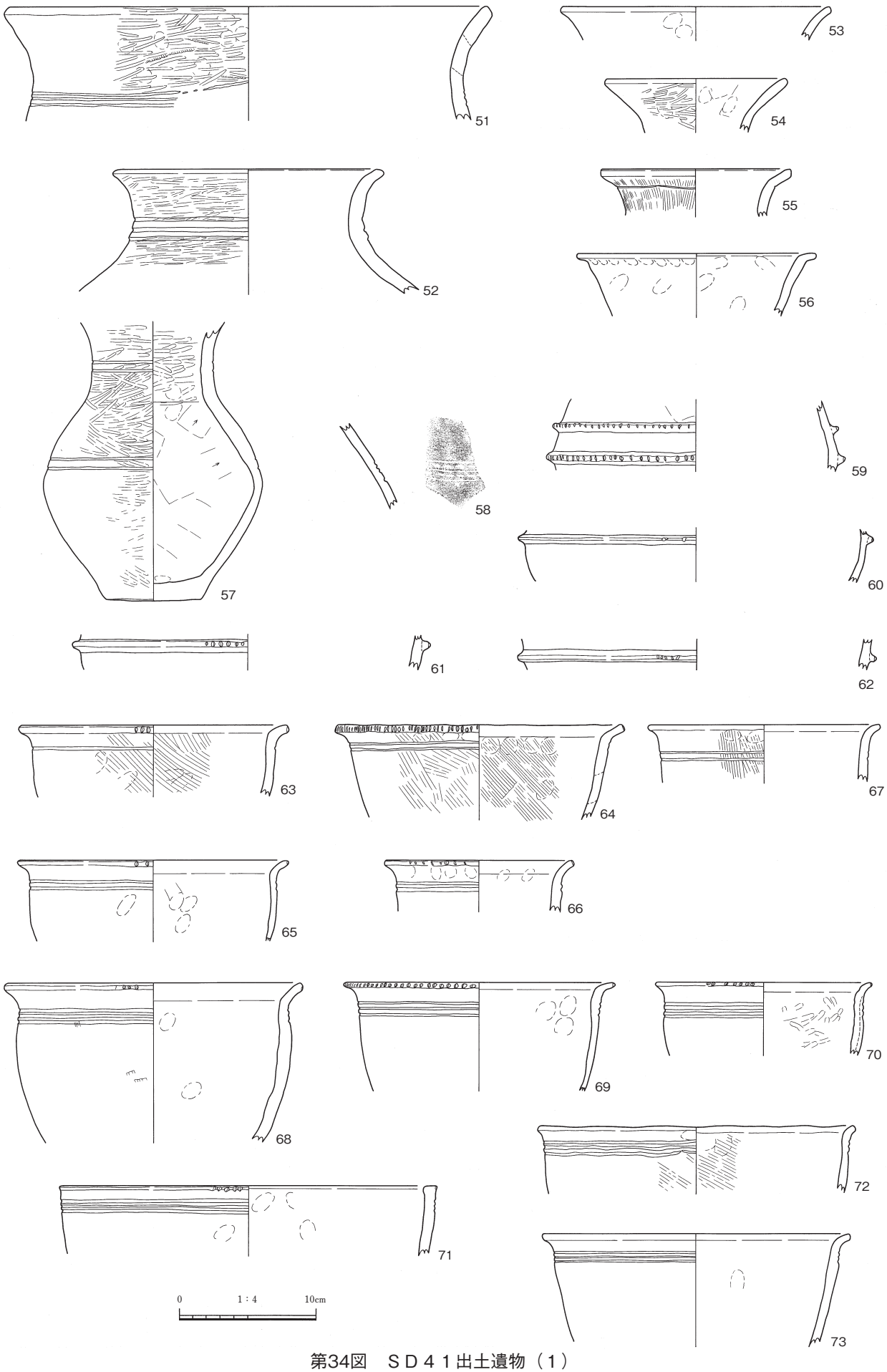
164は土錘である。下半部が欠損するが、残存長2.4㎝、幅2.9㎝を測る。

Ｓ20～Ｓ27は石器である。Ｓ20は黒曜石製で、深い抉りをもつ凹基式の石鏃である。基部は左側が長く左右非対称形である。Ｓ21～23は楔形石器で、Ｓ21、Ｓ22は黒曜石製、Ｓ23は玉髄製である。Ｓ24は粘板岩製の磨製石剣で、先端部と基部が欠損する。Ｓ25、26はいずれも安山岩製の石鏃で、Ｓ26は板状の素材の周囲を調整しているが、上端部及び両縁辺部に平坦面が残る。Ｓ27はデイサイト製の磨石・敲石である。長楕円形を呈し、上端部と下端部に敲打痕が認められる。側面は４面とも使用により、平坦状となり、断面は方形状を呈する。

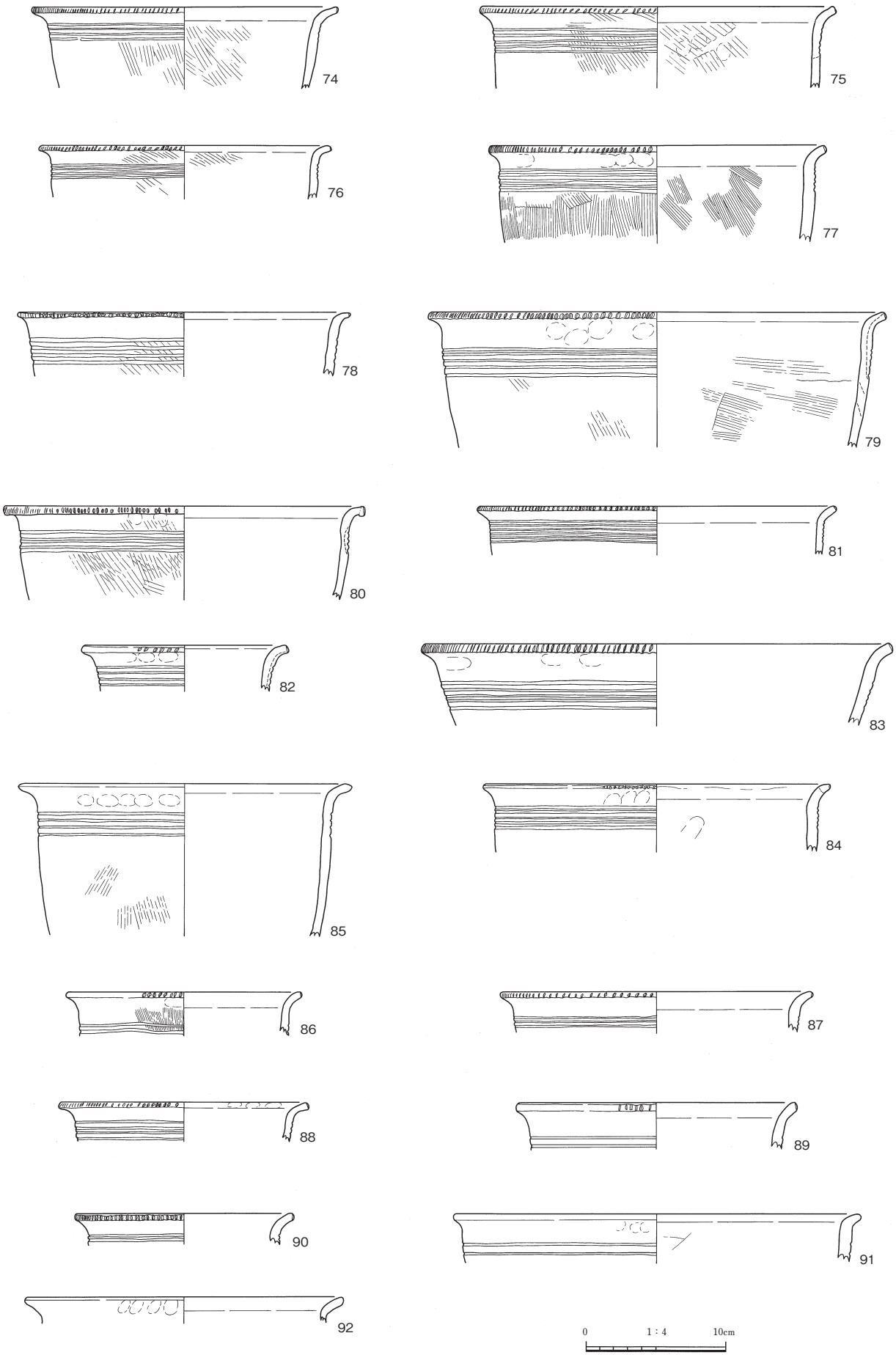
本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。

SD49
91
119
134
● 土器
▲ 石器
調査区外
SD53
134
156
77
S20
157
55
108
116
69
58
93
135
57
SD41
調査区外
H=23.60m
2
1
1 黒灰色粘質土（ＳＤ41、灰白色粘土小ブロック混じり、砂が多量に混じる）
2 茶灰色砂質土（ＳＤ53、砂が多量に混じる）
H=23.60m
134
57
134
91
119
77
156
55
S20
116
108
93
157
58
135
69
0
1：40
1m

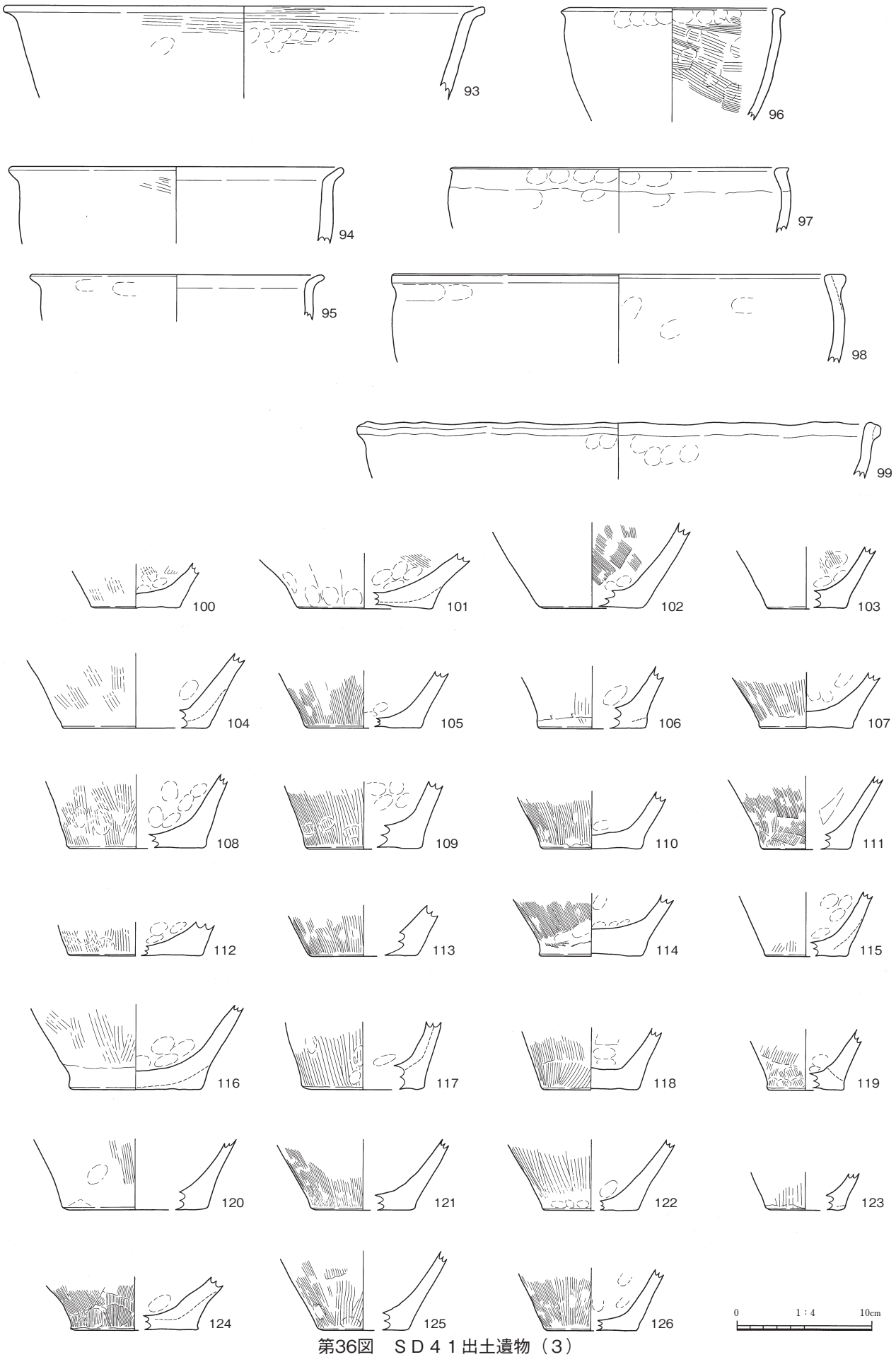
第33図　ＳＤ４１・５３



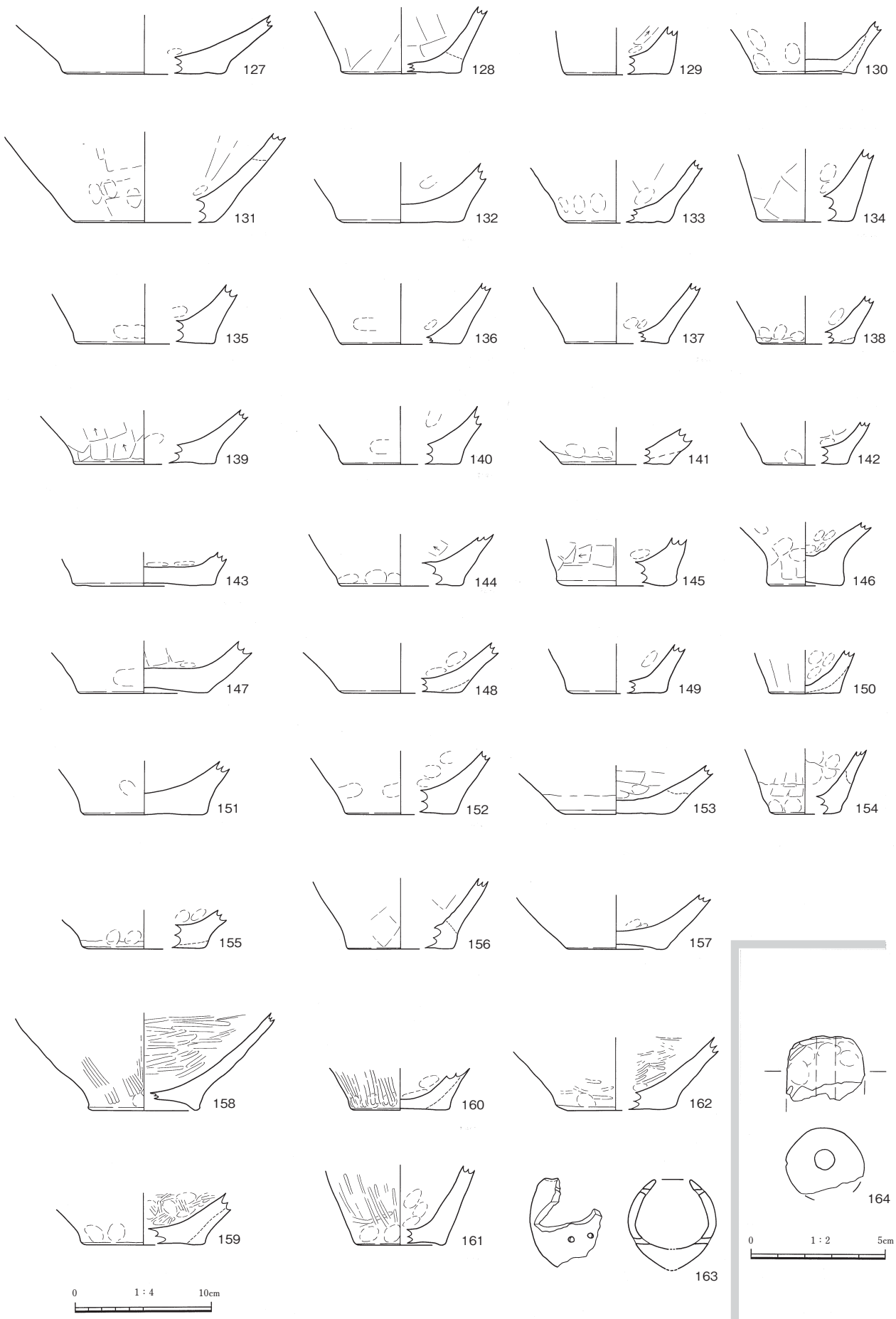
第34図　ＳＤ４１出土遺物（１）



第35図　ＳＤ４１出土遺物（２）



第36図　ＳＤ４１出土遺物（３）



第37図　ＳＤ４１出土遺物（４）

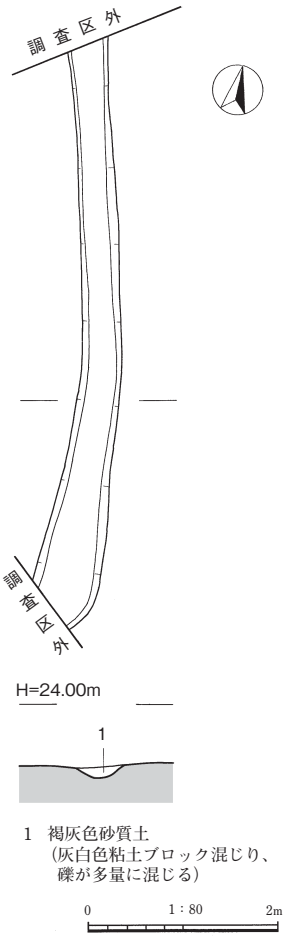
第38図　ＳＤ４１出土遺物（５）

ＳＤ42（第39・40図）

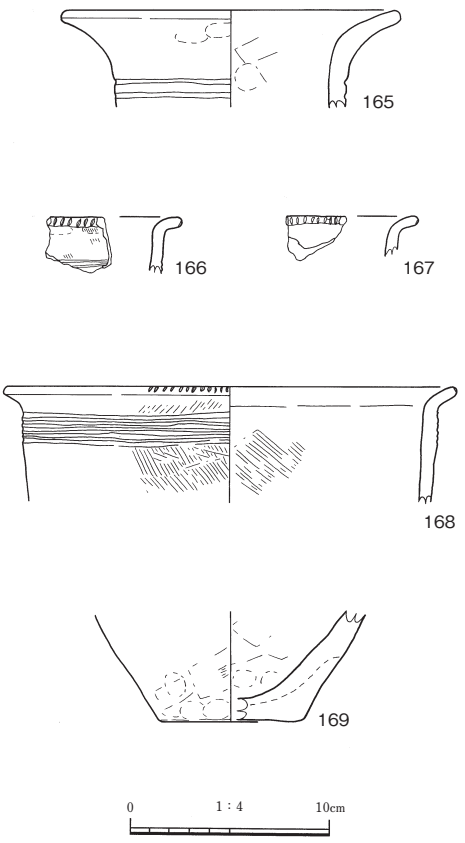
ＳＤ42は調査区の南西端に位置する。南から北へ直線的にのび、両端はさらに調査区外へのびる。ＳＤ41とＳＤ49を切り、南側は南西にやや湾曲してのびると考えられる。検出した長さは6.3ｍ、幅0.4～0.7ｍ、検出面からの最大の深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.27ｍ、北端が23.26ｍで、水平である。埋土は褐灰色砂質土の単層で、基盤層の灰白色粘土ブロックと礫が多量に混じっており、流水があったと考えられる。

本遺構からは弥生土器が出土した。ほとんどが細片で、このうち５点を図示した。

165～169は弥生土器である。165は壺で、頸部に２条のヘラ描沈線が巡る。



第39図　ＳＤ４２



第40図　ＳＤ４２出土遺物

166～168は甕で、いずれも口縁端部に刻み目が施されている。166は２条以上、168は５条のヘラ描沈線が巡る。169は底部で、外面はハケ調整を施している。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。

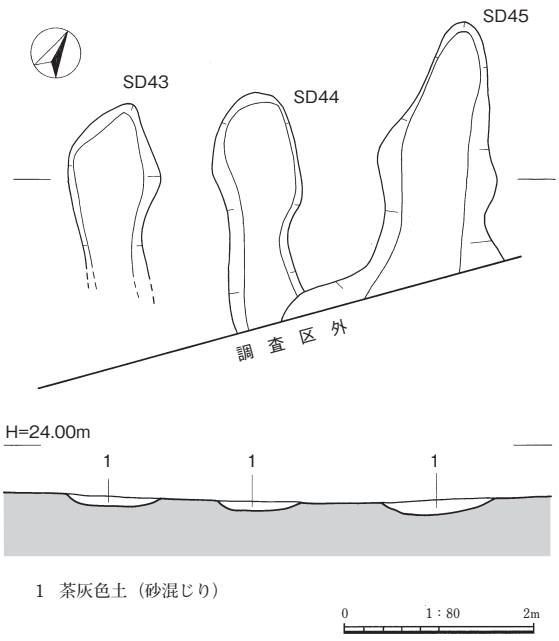
ＳＤ43（第41・42図）

ＳＤ43は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北西へ直線的にのび、南東側はさらに調査区外へのびる。南東側はＳＤ37と切り合っており、平面的には先後関係は確認できなかったが、北西側ではＳＤ39を切っており、その切合関係からＳＤ37よりも新しいと考えられる。検出した長さは1.8ｍ、幅0.6～1.0ｍ、検出面からの最大の深さ10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.41ｍ、北西端が23.34ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は砂が混じる茶灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

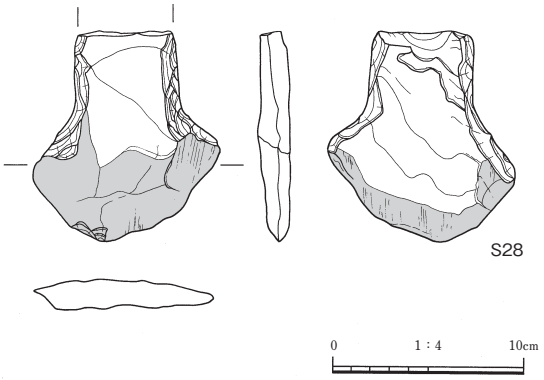
本遺構からは弥生土器と石器が出土した。ほとんどが細片で、このうち１点を図示する。

Ｓ28は安山岩製の石鏃で、基部が欠損するが、刃部が大きく広がり、銀杏形を呈する。

本遺構の時期は、出土遺物とＳＤ39との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。



第41図　ＳＤ４３・４４・４５



第42図　ＳＤ４３出土遺物

ＳＤ44（第41図）

ＳＤ44は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北西へ直線的にのび、南東側はさらに調査区外へのびる。南東側はＳＤ37と切り合っており、平面的には先後関係は確認できなかったが、北西側ではＳＤ39を切っており、その切合関係からＳＤ37よりも新しいと考えられる。検出した長さは2.5ｍ、幅0.6～0.9ｍ、検出面からの最大の深さ８㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.38ｍ、北西端が23.28ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は砂が混じる茶灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物とＳＤ39との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。

ＳＤ45（第41図）

ＳＤ45は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北西へ直線的にのび、南東側はさらに調査区外へのびる。北西側はＳＤ39を、南東側はＳＤ44を切っている。検出した長さは3.2ｍ、幅0.6～1.4ｍ、検出面からの最大の深さ16㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は北西側はほぼ平坦であるが、南東側は凹凸がある。底面の標高は南東端が23.38ｍ、北西端が23.24ｍで、南東から北西に流下する。埋土は砂が混じる茶灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物とＳＤ44との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。

ＳＤ49（第43・44図）

ＳＤ49は調査区の南西端に位置する。南西から北東へのび、南西側はさらに調査区外へのびる。北東側はこの部分で完結するかあるいは北へ湾曲して調査区外へのびると考えられる。検出した長さは7.8ｍ、幅2.2ｍ以上、検出面からの最大の深さ43㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が23.12ｍ、北東端が23.21ｍで、北東から南西へ流下する。埋土は粘質土、砂質土、粘土、シルト、細粒砂からなり、滞水と流水を繰り返していたと考えられる。なお、中央やや北東寄りの床面直上には３石があるが、性格は不明である。

本遺構からは弥生土器が出土した。ほとんどが細片で、このうち13点を図示する。

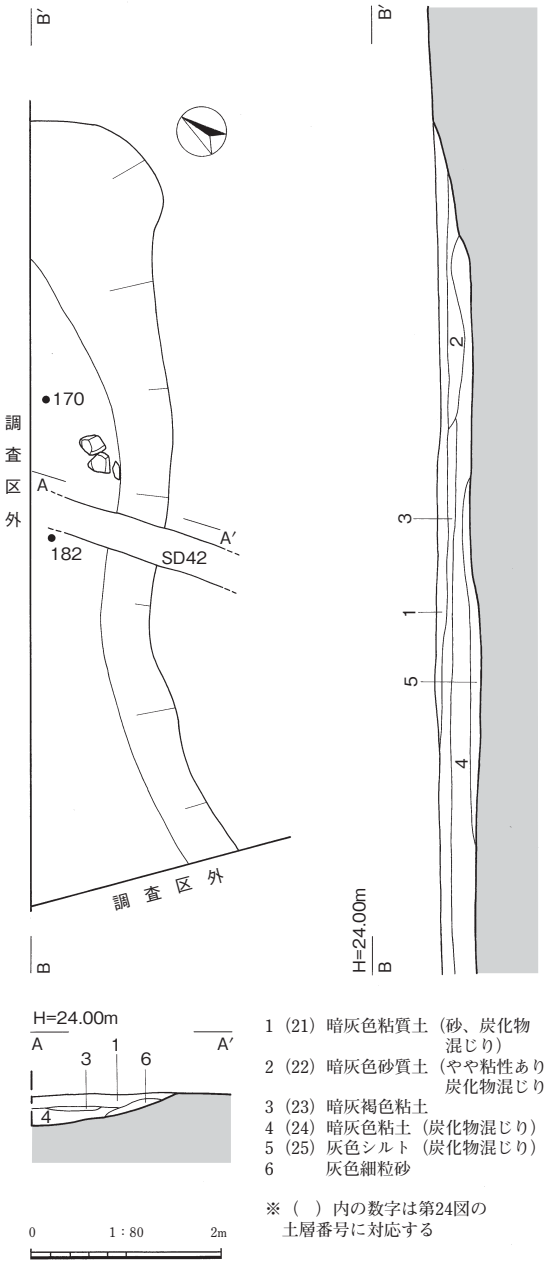
170～182は弥生土器である。170、171は壺で、170は口縁端部に１条の沈線が巡る。171は口縁端部に１条の沈線が巡り、さらに刻み目が施されている。また、頸部には２条のヘラ描沈線が巡る。

172～177は甕である。173は頸部に３条のヘラ描沈線が巡り、口縁端部には刻み目が施されている。174～177はいずれも頸部にヘラ描沈線が認められないもので、174の口縁端部には刻み目が施されている。

177は鉢と考えられ、胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚する。

178～182は底部で、178～180は外面にハケ調整、181、182は外面にミガキ調整を施している。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。



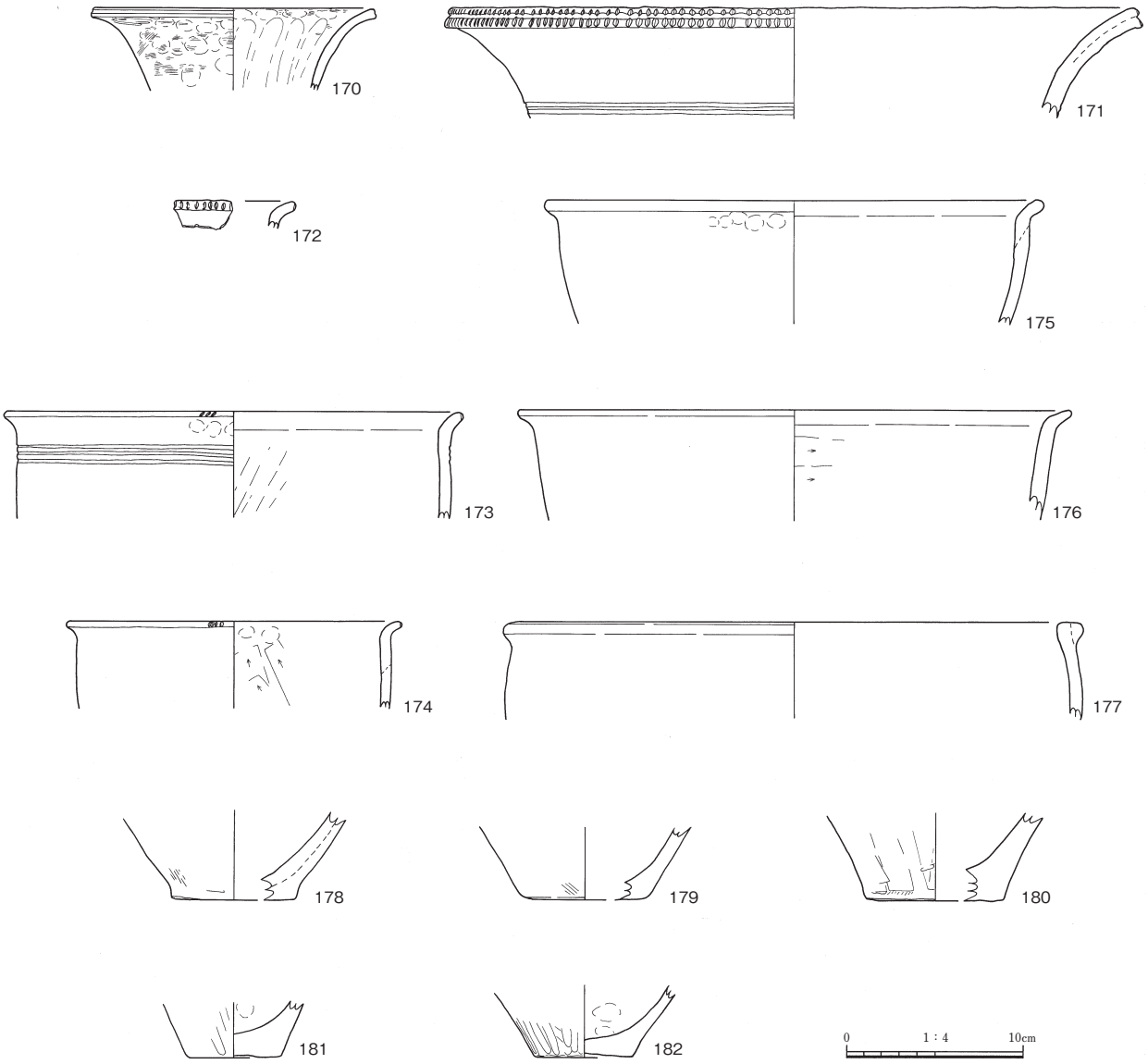
第43図　ＳＤ４９

ＳＤ50（第26・45図）

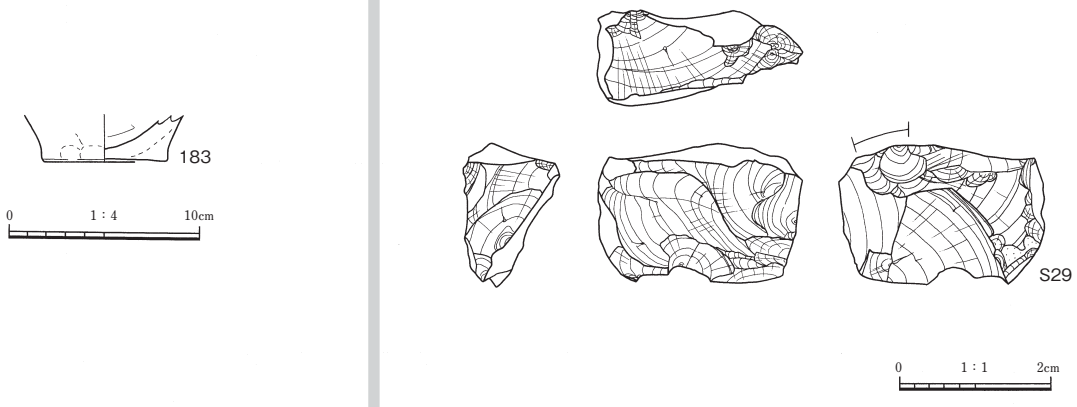
ＳＤ50は調査区の南西端に位置する。南西から北東へのび、ＳＤ37とＳＤ41に切られている。検出した長さは5.9ｍ、幅2.2～2.6ｍ以上、検出面からの最大の深さ22㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は凹凸がある。底面の標高は南西端が23.40ｍ、北東端が23.32ｍで、南西から北東へ流下する。埋土は灰褐色粘質土の単層で、基盤層の灰白色粘土ブロックが多量に混じるが、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは弥生土器と石器が出土した。ほとんどが細片で、このうち２点を図示する。183は弥生土器の底部で、外面にハケ調整を施している。Ｓ29は黒曜石製の楔形石器である。

本遺構の時期は、出土遺物と、ＳＤ37とＳＤ41との切合関係から弥生時代前期後葉と考えられる。



第44図　ＳＤ４９出土遺物



第45図　ＳＤ５０出土遺物

ＳＤ51（第46図）

ＳＤ51は調査区の中央南西寄りに位置する。西から東へやや湾曲してのび、ＳＫ４を切っている。検出した長さは1.5ｍ、幅0.3～0.5ｍ、検出面からの最大の深さ７㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は西端が23.37ｍ、東端が23.43ｍで、東から西へ緩やかに流下する。埋土は砂が混じる灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から弥生時代前期に帰属すると考えられる。

ＳＤ53（第33図）

ＳＤ53は調査区の南西端に位置する。上部はＳＤ41に削平されているが、南東から北西へ直線的にのび、南東側は南へ湾曲している。検出した長さは3.1ｍ、幅1.05～0.7ｍ、検出面からの最大の深さ16㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.28ｍ、北西端が23.18ｍで、南東から北西へ流下する。埋土は茶灰色砂質土の単層で、砂が多量に混じる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ41との切合関係から弥生時代前期に帰属すると考えられる。

ＳＤ54（第49図）

ＳＤ54は調査区の北東側に位置する。ＳＤ38を切り、南から北へやや湾曲してのび、南側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは7.8ｍ、幅0.2～0.35ｍ、検出面からの最大の深さ８㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.91ｍ、北端が22.92ｍで、ほぼ水平である。埋土は灰色細粒砂の単層で、流水があったと考えられる。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

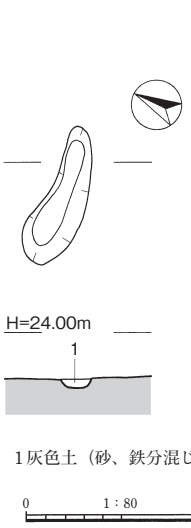
ＳＤ55（第49図）

ＳＤ55は調査区の北東側に位置する。南から北へ直線的にのび、南側はさらに調査区外へのびる。ＳＤ38を切るが、東側はＳＤ56に切られている。検出した長さは6.65ｍ、幅0.15～0.3ｍ、検出面からの最大の深さ９㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.85ｍ、北端が23.04ｍで、北から南へ流下する。埋土は灰色細粒砂の単層で、流水があったと考えられる。

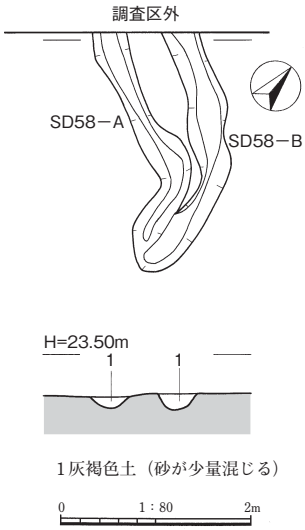
本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ54の埋土との類似から弥生時代前期に帰属すると考えられる。

ＳＤ56（第49図）

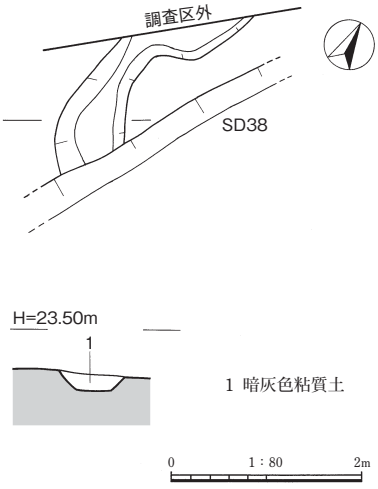
ＳＤ56は調査区の北東側に位置する。南から北へやや湾曲してのび、南側はさらに調査区外へのびる。ＳＤ38とＳＤ55を切っている。検出した長さは4.4ｍ、幅0.2～0.3ｍ、検出面からの最大の深さ８㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.88ｍ、北端が23.05ｍで、北から南へ流下する。埋土は灰色細粒砂の単層で、流水があったと考えられる。



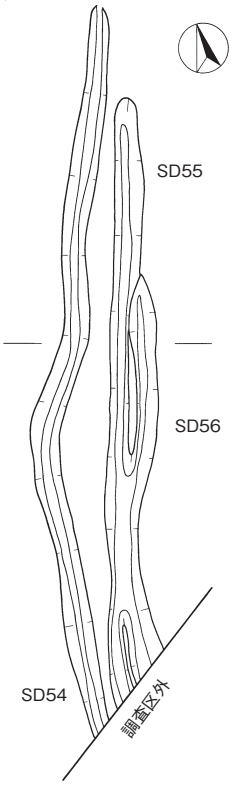
第46図　ＳＤ５１



第47図　ＳＤ５８



第48図　ＳＤ５９

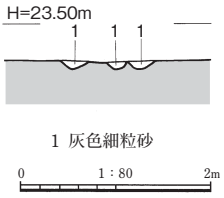


本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ54の埋土との類似から弥生時代前期に帰属すると考えられる。

ＳＤ58（第47図）

ＳＤ58は調査区の北東側に位置する。ＳＤ58－ＡとＳＤ58－Ｂはいずれも南から北西へ湾曲してのび、北西側はさらに調査区外へのびる。南側ではＳＤ58－ＡがＳＤ58－Ｂを切っている。

ＳＤ58－Ａは検出した長さ2.7ｍ、幅0.2～0.4ｍ、検出面からの最大の深さ24㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.98ｍ、北西端が22.97ｍで、ほぼ水平である。



第49図　ＳＤ54・55・56

ＳＤ58－Ｂは検出した長さ2.7ｍ、幅0.25～0.4ｍ、検出面からの最大の深さ24㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.96ｍ、北西端が22.94ｍで、ほぼ平坦である。埋土はＳＤ58－ＡとＳＤ58－Ｂいずれも砂が少量混じる灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは弥生土器と土師器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から古墳時代まで下る可能性がある。

ＳＤ59（第48図）

ＳＤ59は調査区の北東側に位置する。南東から北へ湾曲してのび、北側はさらに調査区外へのびる。南東側はＳＤ38と切り合っているが、先後関係は明らかにできなかった。検出した長さは2.5ｍ、幅0.4～0.75ｍ、検出面からの最大の深さ28㎝を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が22.91ｍ、北端が22.87ｍで、南東から北へ緩やかに流下する。埋土は暗灰色粘質土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

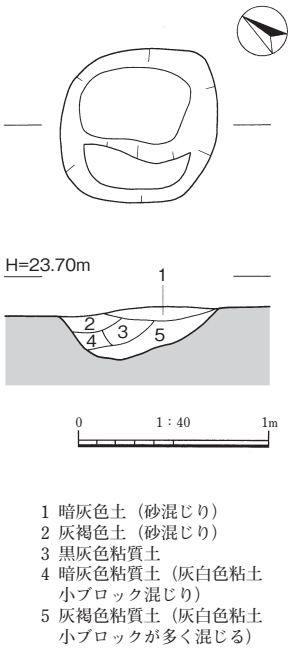
本遺構の時期は、遺物が出土していないため不明である。

ＳＫ１（第50・51図）

ＳＫ１は調査区の南西側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.83ｍ、短軸0.81ｍ、深さ27㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、南西側は２段となっている。

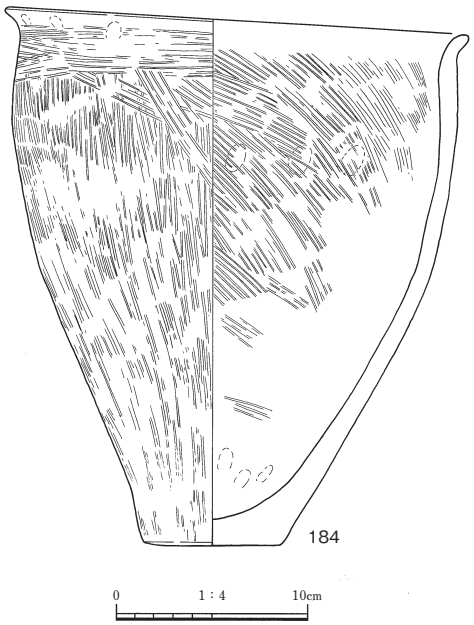
本遺構からは、底面から少し浮いた状態で弥生土器（184）が出土した。184はほぼ完形の甕で、口縁部外面には横方向のハケ調整、胴部外面には縦方向のハケ調整、内面にはハケ調整が施されている。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉と考えられる。



1 暗灰色土（砂混じり）
2 灰褐色土（砂混じり）
3 黒灰色粘質土
4 暗灰色粘質土（灰白色粘土小ブロック混じり）
5 灰褐色粘質土（灰白色粘土小ブロックが多く混じる）

第50図　ＳＫ１



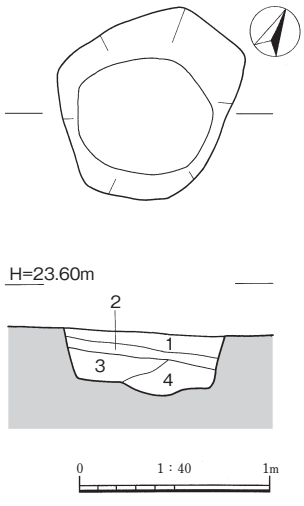
第51図　ＳＫ１出土遺物

ＳＫ２（第52図）

ＳＫ２は調査区の中央やや南西寄りに位置する。上部はＳＤ45に削平されているが、平面形態は五角形状を呈し、規模は長軸1.09ｍ、短軸0.93ｍ、深さ34㎝を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は西側ではほぼ平坦となっているが、東側は僅かに窪んでいる。

本遺構からは弥生土器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

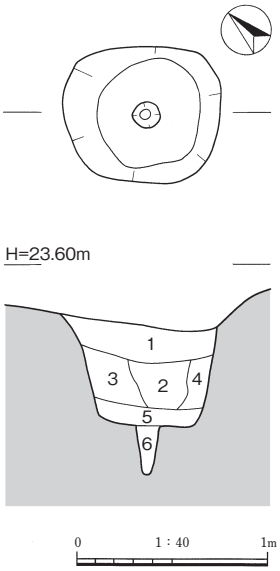


1 暗茶灰色土（砂混じり）
2 灰褐色土（砂、灰白色粘土ブロック混じり）
3 暗灰色粘質土（砂混じり）
4 灰褐色土（灰白色粘土ブロックが多量に混じる）

第52図　ＳＫ２

ＳＫ３（第53図）

ＳＫ３は調査区の中央南西寄りに位置する。上部はＳＤ39とＳＤ40に削平されているが、平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.83ｍ、短軸0.72ｍ、深さ56

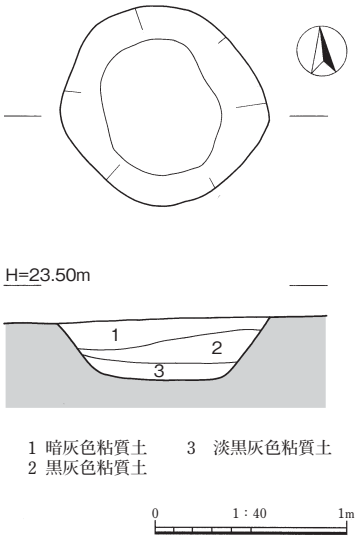


1 暗茶灰色土（灰白色粘土小ブロック混じり）
2 暗灰色粘質土（灰白色粘土小ブロック混じり）
3 暗灰褐色粘質土（砂、灰白色粘土小ブロック混じり）
4 灰色シルトと暗灰色粘質土の混合層
5 黒灰色粘質土
6 淡黒灰色粘質土

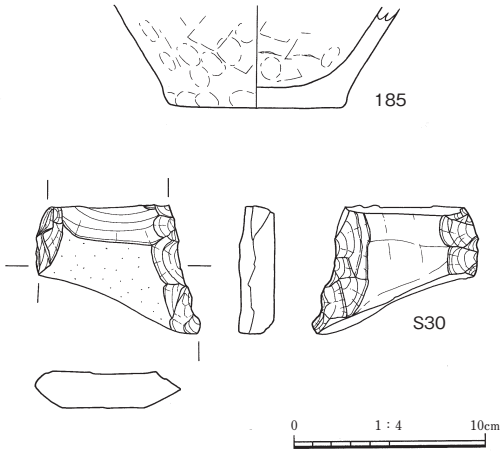
第53図　ＳＫ３

cmを測る。底面の中央には径15cm、深さ27cmの小ピットがあり、形態的に落し穴と考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかった。



第54図　ＳＫ４



第55図　ＳＫ４出土遺物

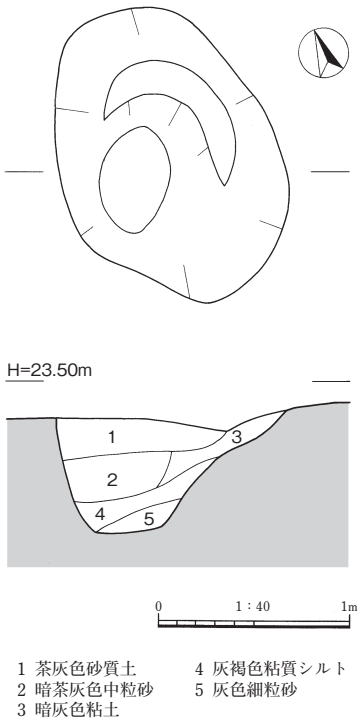
ＳＫ４（第54・55図）

ＳＫ４は調査区の中央南西寄りに位置する。平面形態は隅丸五角形状を呈し、規模は長軸1.1ｍ、短軸1.06ｍ、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は平坦である。

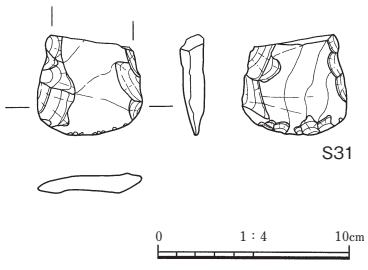
本遺構からは弥生土器と石器が出土した。ほとんどが細片で、このうち２点を図示する。

185は弥生土器の底部、Ｓ30は安山岩製の石鏃である。

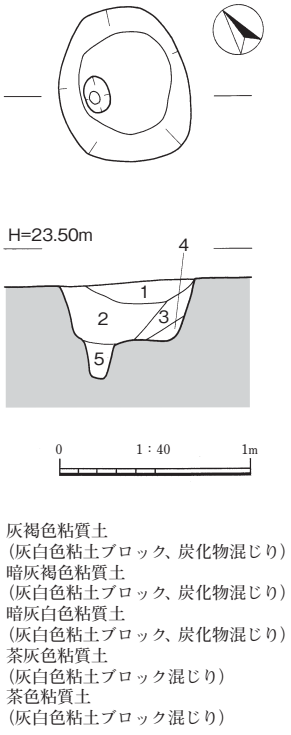
本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。



第56図　ＳＫ５



第57図　ＳＫ５出土遺物



第58図　ＳＫ６

ＳＫ５（第56・57図）

ＳＫ５は調査区の中央南西寄りに位置する。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長軸1.62ｍ、短軸1.18ｍ、深さ66㎝を測る。断面形態は逆台形を呈するが、北東側には段があり、この部分では壁が緩やかに立ち上がっている。

本遺構からは石器（Ｓ31）が出土した。Ｓ31は小型の石鏃で、上半部が欠損する。石材は泥岩である。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ６（第58図）

ＳＫ６は調査区の南西端に位置する。平面形態は隅丸方形状を呈し、規模は長軸0.82ｍ、短軸0.68ｍ、深さ34㎝を測る。底面の西側に径20×13㎝、深さ20㎝の小ピットがあり、形態的に落し穴と考えられる。

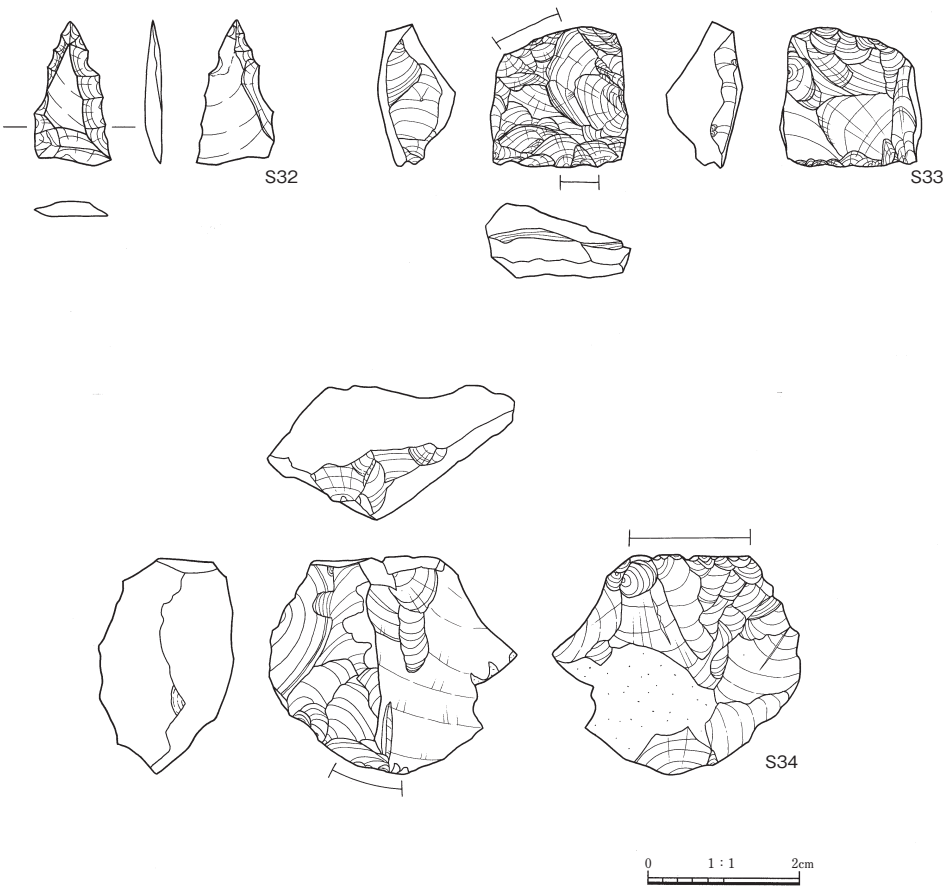
本遺構からは遺物は出土しなかった。

４．第１遺構面の調査

ＳＤ24～30（第59図）

ＳＤ24～30は調査区の南西端に位置する。いずれも平行、直交するように直線状にのびる。検出面直上まで耕作土が及んでいることと、ＳＤ28とＳＤ30からは陶磁器が出土していることから、これらは近世以降の耕作に伴う溝と判断した。

ＳＤ27からはサヌカイト製の石鏃（Ｓ32）と黒曜石製の楔形石器（Ｓ33）、ＳＤ30からは黒曜石製の楔形石器（Ｓ34）が出土した。

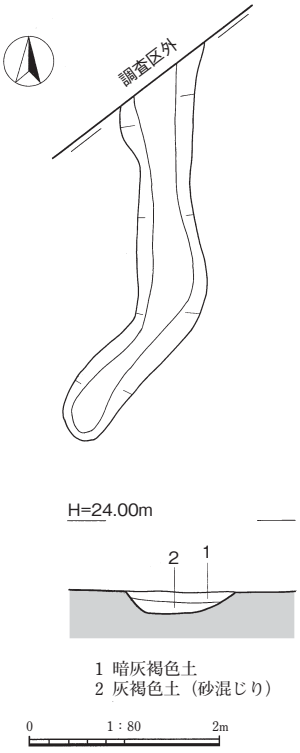


第59図　ＳＤ２７・３０出土遺物

ＳＤ31（第60図）

ＳＤ31は調査区の中央やや北東寄りに位置する。南西から北へ「く」字状にのび、北側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは4.4ｍ、幅0.5～0.75ｍ、検出面からの最大の深さ17㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が23.48ｍ、北端が23.28ｍで、南西から北へ流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は暗灰褐色土、下層は砂が混じる灰褐色土で、いずれも流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは遺物が出土しなかったが、検出面から近世に帰属すると考えられる。



第60図　ＳＤ31

ＳＤ32（第61図）

ＳＤ32は調査区の北東側に位置する。南東側で３本の溝（ＳＤ32－Ａ～Ｃ）が合流して、南東から北西へ蛇行しながらのび、北西側はさらに調査区外へのびる。また、北東側ではＳＤ33を切っている。

ＳＤ32－Ａは検出した長さ8.1ｍ、幅0.5～1.2ｍ、検出面からの最大の深さ57㎝を測る。断面形態は北西側では逆台形を呈するが、中央から南東側にかけては皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.33ｍ、北西端が23.18ｍで、南東から北西へ流下する。

ＳＤ32－Ｂは検出した長さ3.3ｍ、幅0.55～0.75ｍ、検出面からの最大の深さ14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.43ｍ、北西端が23.24ｍで、南東から北西へ流下し、ＳＤ32－Ａに合流する。

ＳＤ32－Ｃは検出した長さ1.2ｍ、幅0.45～0.55ｍ、検出面からの最大の深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は北東端が23.38ｍ、南西端が23.29ｍで、北東から南西へ流下し、ＳＤ32－Ｂに合流する。埋土はＳＤ32－Ａは、Ｂ－Ｂ′とＣ－Ｃ′では上下２層に分かれ、上層は砂が混じる茶灰色土、下層は炭化物が混じる灰褐色粘質土である。ＳＤ32－Ｂは砂が混じる茶灰色土で、ＳＤ32－Ａ、ＳＤ32－Ｂとも流水の痕跡は窺えない。

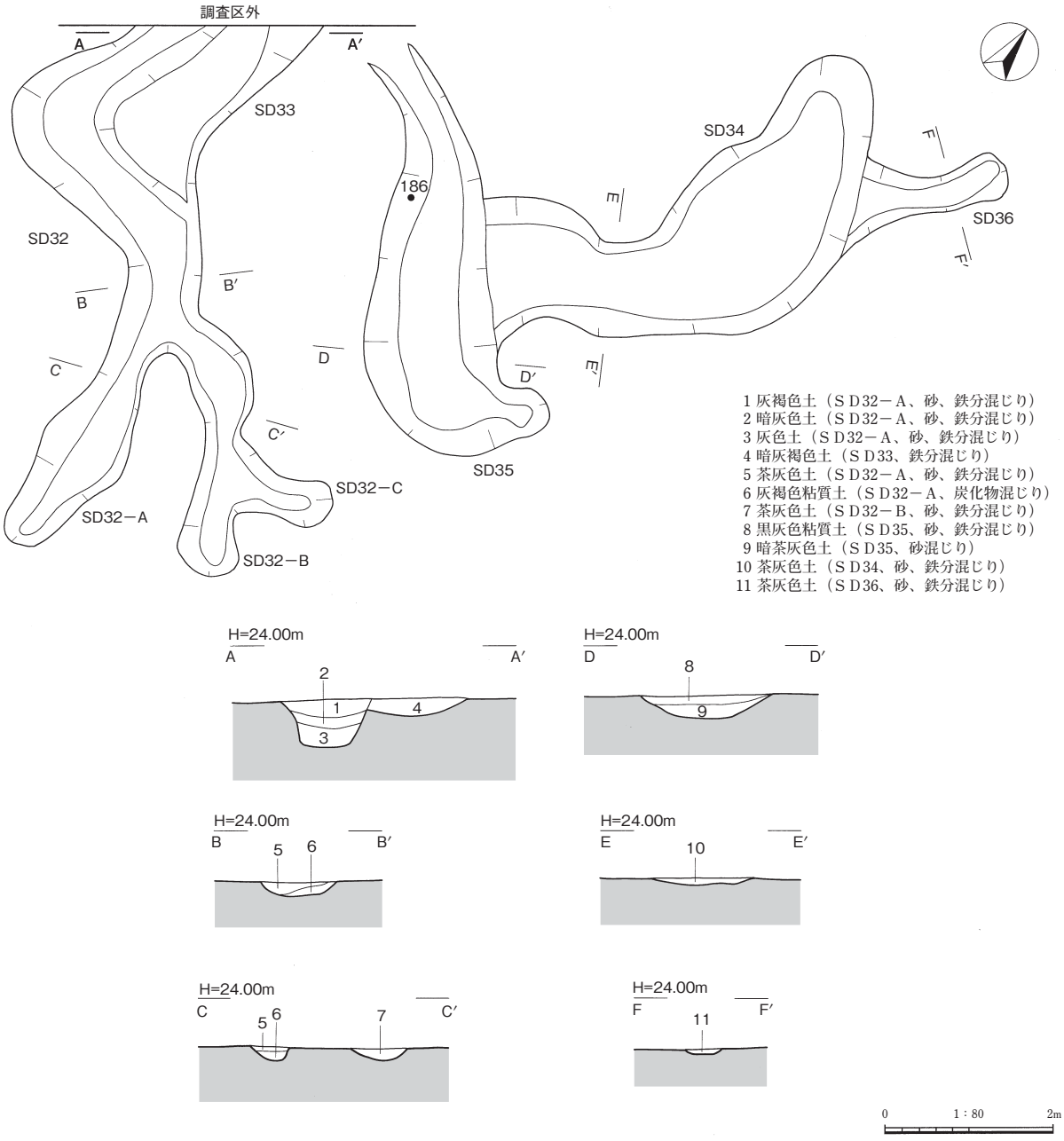
本遺構からは弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、検出面から近世に帰属すると考えられる。

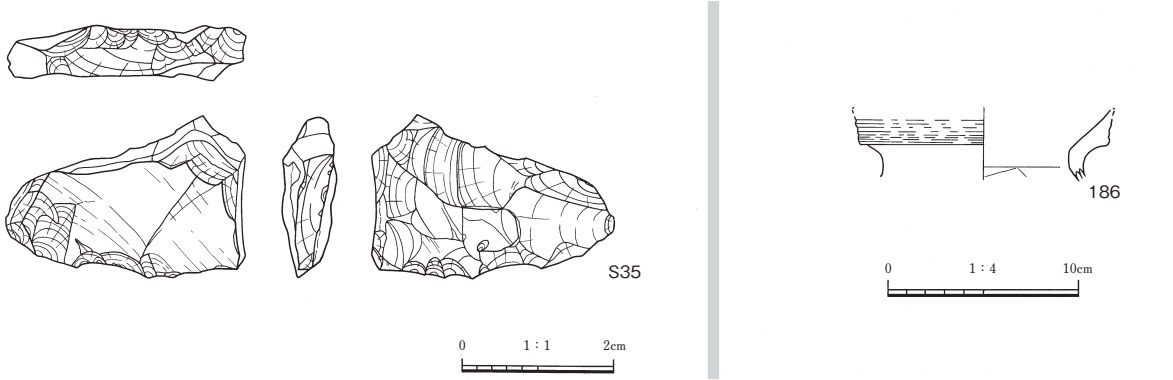
ＳＤ33（第61図）

ＳＤ33は調査区の北東側に位置する。南から北へ直線的にのび、北側はさらに調査区外へのびるが、西側及び南側はＳＤ32に切られている。検出した長さは2.6ｍ、幅はＳＤ32に切られているために不明であるが1.1ｍ以上、検出面からの最大の深さ20㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が22.94ｍ、北端が22.67ｍで、南から北へ流下する。埋土は暗灰褐色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは遺物が出土しなかったが、検出面から近世に帰属すると考えられる。



第61図　ＳＤ３２～３６



第62図　ＳＤ３４・３５出土遺物

ＳＤ34（第61・62図）

ＳＤ34は調査区の北東側に位置する。北から南西へ屈曲し、北東側はＳＤ36を切っているが、南西側はＳＤ35に切られている。検出した長さは5.8ｍ、幅1.1～2.0ｍ、検出面からの最大の深さ18㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は北端が23.27ｍ、南西端が23.24ｍでほぼ水平である。埋土は砂が混じる茶灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは土師器、須恵器、石器が出土した。ほとんどが細片で、このうち１点を図示した。Ｓ35は黒曜石製の楔形石器である。

本遺構の時期は、検出面から近世に帰属すると考えられる。

ＳＤ35（第61・62図）

ＳＤ35は調査区の北東側に位置する。南東から北西へ緩やかに蛇行し、ＳＤ34を切っている。検出した長さは4.9ｍ、幅0.55～1.6ｍ、検出面からの最大の深さ26㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.31ｍ、北西端が23.37ｍで、北西から南東へ緩やかに流下する。埋土は上下２層に分かれ、上層は黒灰色粘質土、下層は暗茶灰色土で、いずれの層にも砂が混じるが、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは土師器が出土した。ほとんどが細片で、このうち１点を図示した。186は弥生土器の甕で、複合口縁を有し、口縁端部を欠損するが、４条の凹線が巡っている。

本遺構の時期は、検出面から近世に帰属すると考えられる。

ＳＤ36（第61図）

ＳＤ36は調査区の北東側に位置する。北東から南西へのび、南西側はＳＤ34に切られている。検出した長さは1.9ｍ、幅0.45～0.9ｍ、検出面からの最大の深さ９㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は北東端が23.33ｍ、南西端が23.30ｍで、ほぼ水平である。埋土は砂が混じる茶灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構からは遺物が出土しなかったが、検出面から近世に帰属すると考えられる。

５．遺構外出土遺物（第63～70図）

２区からは縄文時代～近世の遺物が出土した。量的に多く、当遺跡出土遺物の大半を占める。弥生土器はⅥ、Ⅶ層、須恵器はⅤ層から多く出土し、陶磁器はすべてⅡ層から出土した。

187～192は突帯文土器で、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層から出土した。187は口縁端部から下がった位置に、188、189は口縁端部から少し下がった位置に、190～192は口縁端部に接するように突帯が付く。いずれも突帯には刻み目は認められない。

193～268は弥生土器で、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層から出土し、特にⅥ、Ⅶ層からの出土が多い。193～215は前期、216～230は中期中葉～後期のものである。193～198は壺で、頸部には193は１条、195は３条、196は１条、197は２条のヘラ描沈線が巡る。198は胴部に刻み目を有する貼付突帯が巡る。

199～215は甕である。199～203は頸部にヘラ描沈線が巡り、なおかつ、口縁端部に刻み目が施されているもので、199は５条、200は４条、201は６条、202は５条、203は２条のヘラ描沈線が巡る。204、205は頸部にヘラ描沈線が巡るが、口縁端部に刻み目が施されていないものである。206～209

は口縁端部には刻み目が施されているが、頸部にヘラ描沈線が認められないものである。211～215は頸部にヘラ描沈線が巡らないもので、口縁端部には刻み目が施されていない。

216は壺で、口縁部の屈曲部は大きく垂下する。217～230は甕である。217は口縁端部に斜めの刻み目が施されている。218～220は口縁端部を上下に僅かにつまみ出したもので、口縁端部には218は４条、219は２条、220は２条の凹線が巡る。また、219、220は口縁端部に斜めの刻み目が施され、頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。221～224は口縁端部を上方につまみ出したもので、口縁端部には222は２条、223は３条、224は３条の凹線が巡る。また、221の頸部には指頭圧痕貼付突帯が巡る。225は口縁端部を上下に大きくつまみ出したもので、６条の凹線が巡る。

226～230は複合口縁を有するものである。226、227は口縁部の屈曲部が垂下しないもので、226は口縁部が外傾し、227は口縁部が僅かに外反する。228は口縁部が僅かに外反し、口縁部の屈曲部が大きく垂下する。229、230は口縁部の屈曲部がわずかに垂下するもので、229の口縁部には６条の凹線が巡る。

231～268は底部で、231～258は胎土に粗い砂粒を含むものである。231～255はいずれも内面をナデ調整で仕上げているが、231、232の外面はハケ調整が施され、233～255の外面はナデ調整で仕上げられている。256～258はいずれも外面にミガキ調整が施されている。内面は256はハケ調整が施され、257はナデ調整で仕上げられている。258は内面もミガキ調整が施されている。

259～268は胎土に粗い砂粒を含まないもので、いずれも内面はナデ調整で仕上げているが、259の外面はハケ調整が施されている。260～268は外面もナデ調整で仕上げられている。

269はⅥ層から出土した土師器高坏の坏部で、外面にはハケ調整が施されている。

270～283は須恵器で、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層から出土し、特にⅤ層からの出土が多い。270～274は坏蓋で、271は天井部と口縁部との境界に僅かな段が認められる。272、273は271よりも器高が低く、扁平なものである。275は有蓋高坏の坏部である。276～282は坏身で、276～280は受け部を有する。281、282は底部で、282は高台を有する。283は平底の壺の底部である。

284～290は陶磁器で、いずれもⅡ層から出土した。284～286は肥前産の磁器で、284、285は碗、286は皿である。284の外面には「寿」字が描かれ、285の高台畳付部には砂が付着している。287～290は陶器である。287～289は肥前産の陶器で、287は埦、288、289は皿である。288は見込に胎土目、289は見込に砂目が認められる。290は須佐唐津焼の擂鉢である。

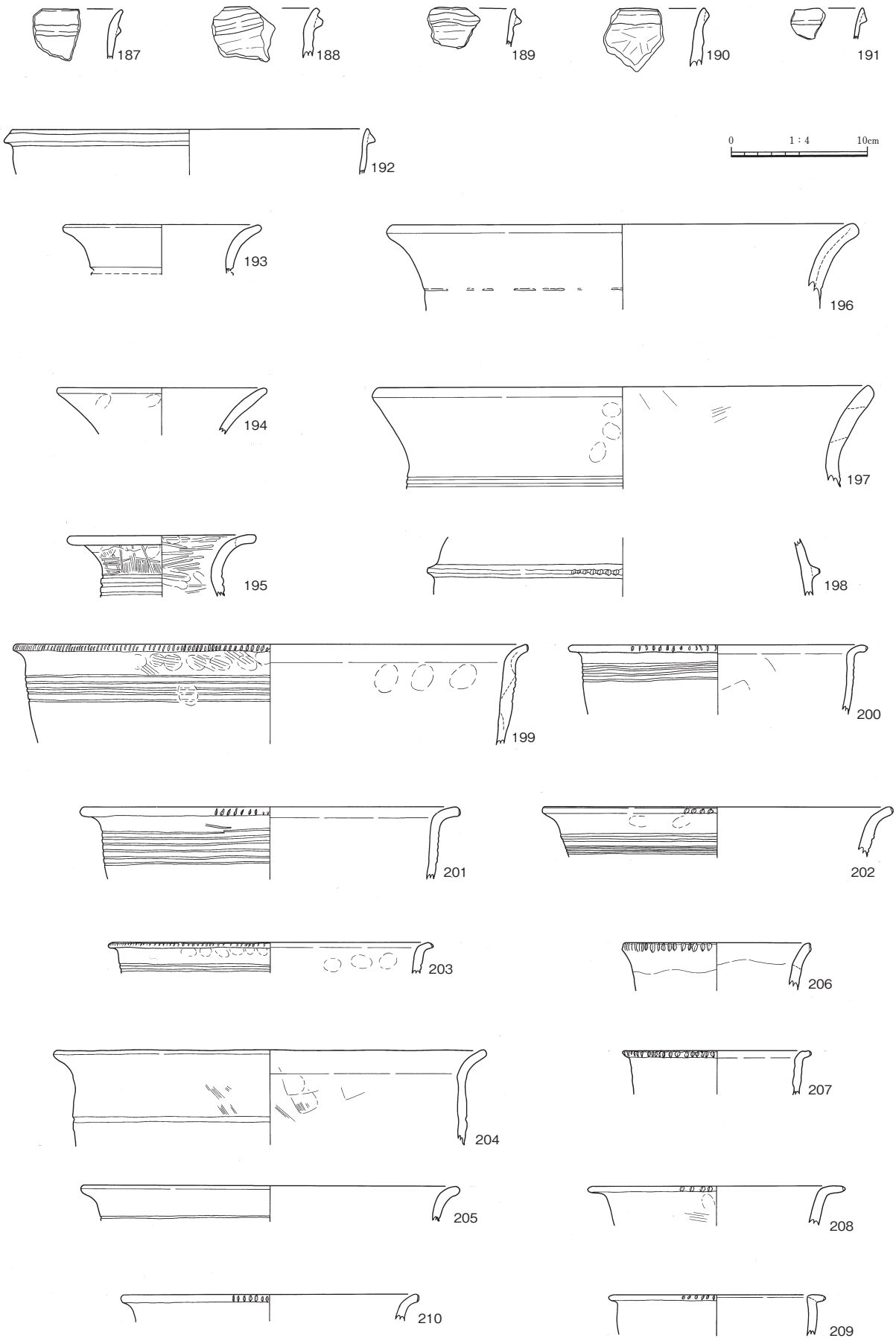
291は管状土錘で、長さ3.5㎝、径0.9㎝、重量2.2ｇを測る。

Ｌ１、Ｌ２は鉛製の火縄銃の弾丸で、いずれも1.3㎝×1.1㎝のやや扁平な球形を呈し、Ｌ１は重量10.4ｇ、Ｌ２は重量10.9ｇを測る。

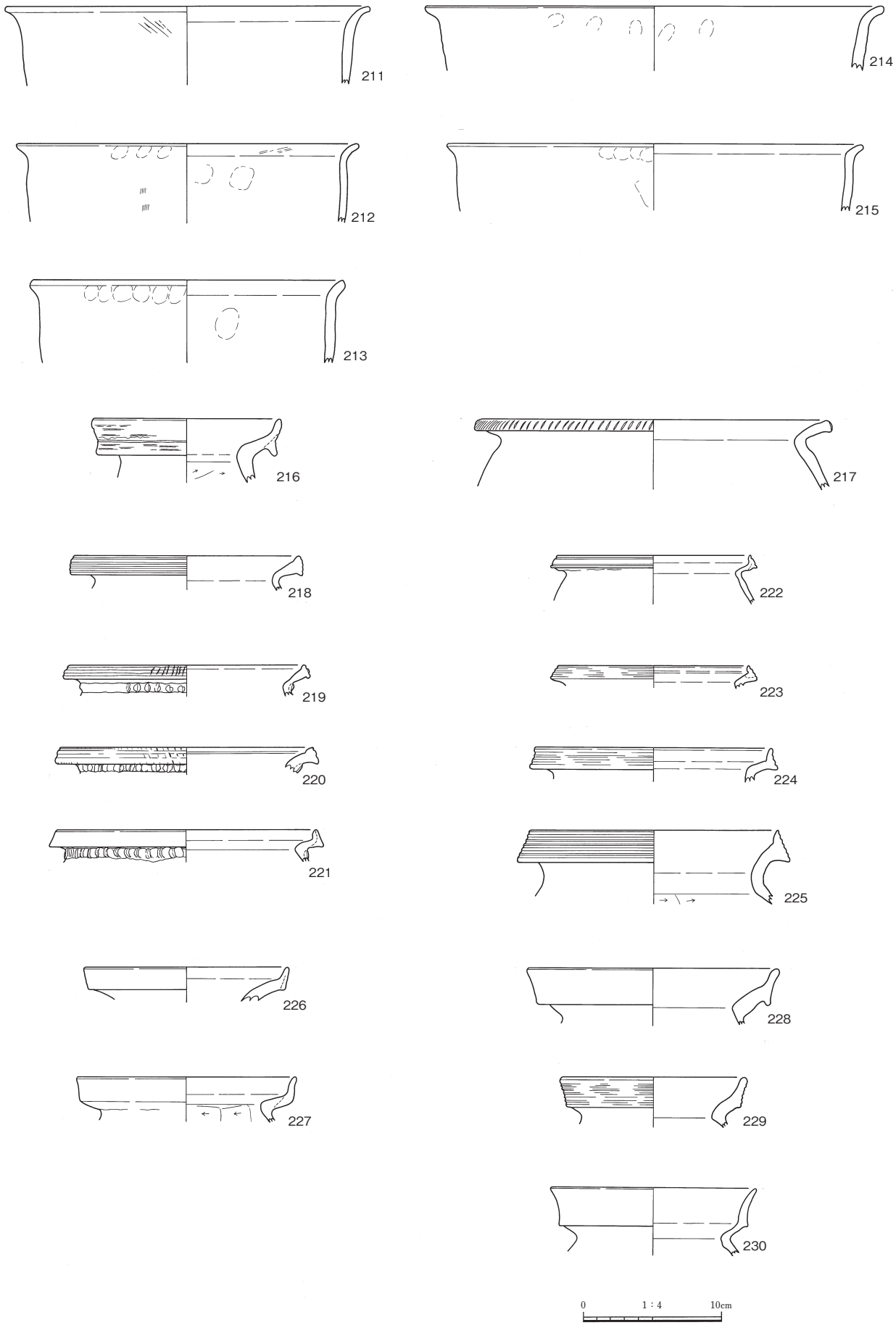
Ｓ36～Ｓ78は石器である。Ｓ36～Ｓ42はサヌカイト製の石鏃で、Ｓ36は細長く、柳葉形を呈する。Ｓ37は深い抉りをもつ凹基式で、先端部が欠損する。Ｓ38～Ｓ41は浅い抉りをもつ凹基式で、Ｓ39は基部左側が僅かに欠損し、Ｓ40は先端部が欠損する。Ｓ42は平基式である。

Ｓ43～Ｓ52は黒曜石製の石鏃で、Ｓ43～Ｓ45は深い抉りをもつ凹基式である。Ｓ43は基部左側が欠損し、Ｓ45は先端部と基部左側が欠損する。Ｓ46～Ｓ51は浅い抉りをもつ凹基式で、Ｓ49は基部左側、Ｓ51は基部右側が欠損する。Ｓ52は平基式で、基部左側が僅かに欠損する。Ｓ53は黒曜石製の石鏃の未製品で、先端部が欠損する。

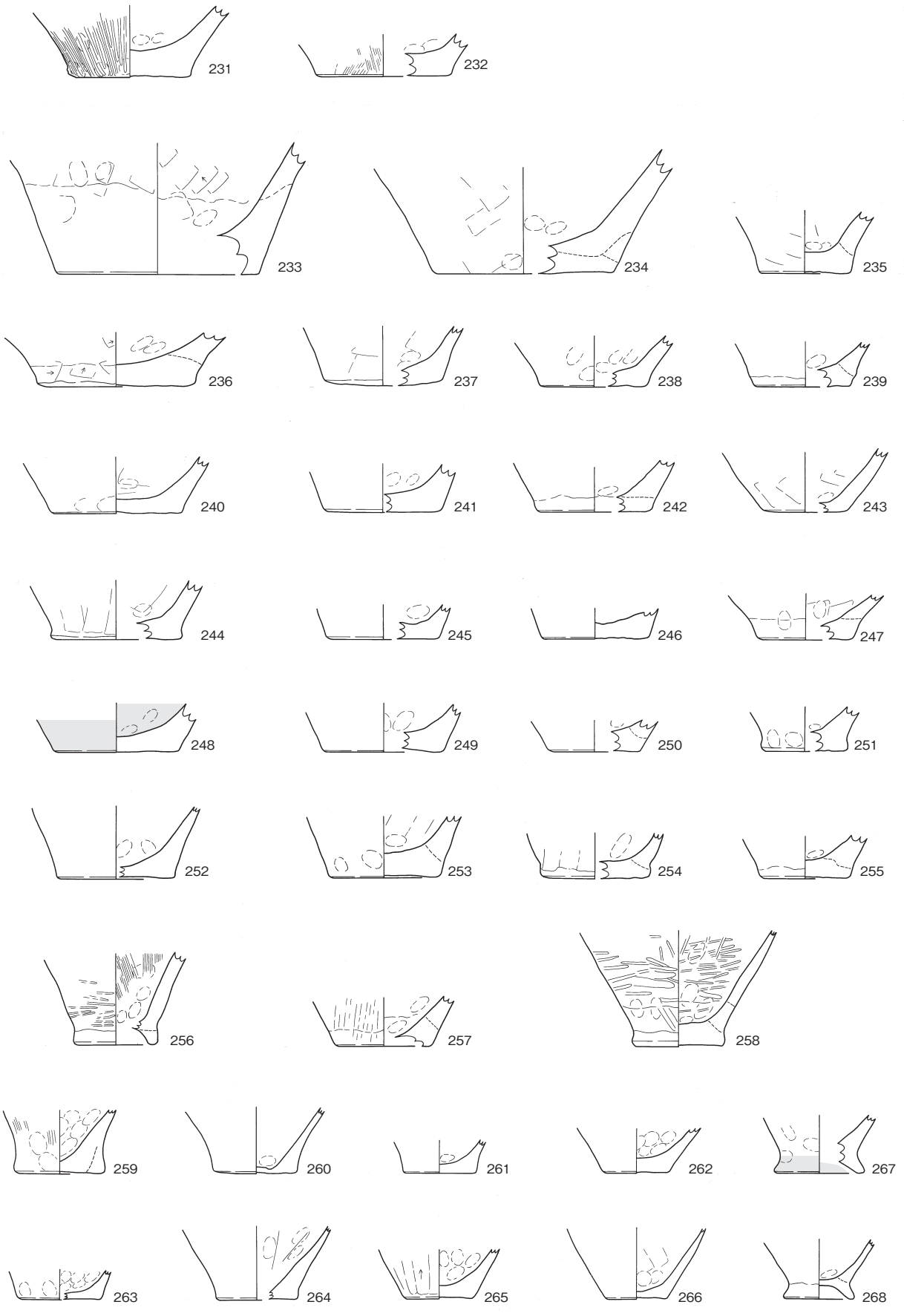
Ｓ54はサヌカイト製の石錐と考えられ、Ｓ55は玉髄製の石鏃あるいは石錐の未製品である。Ｓ56



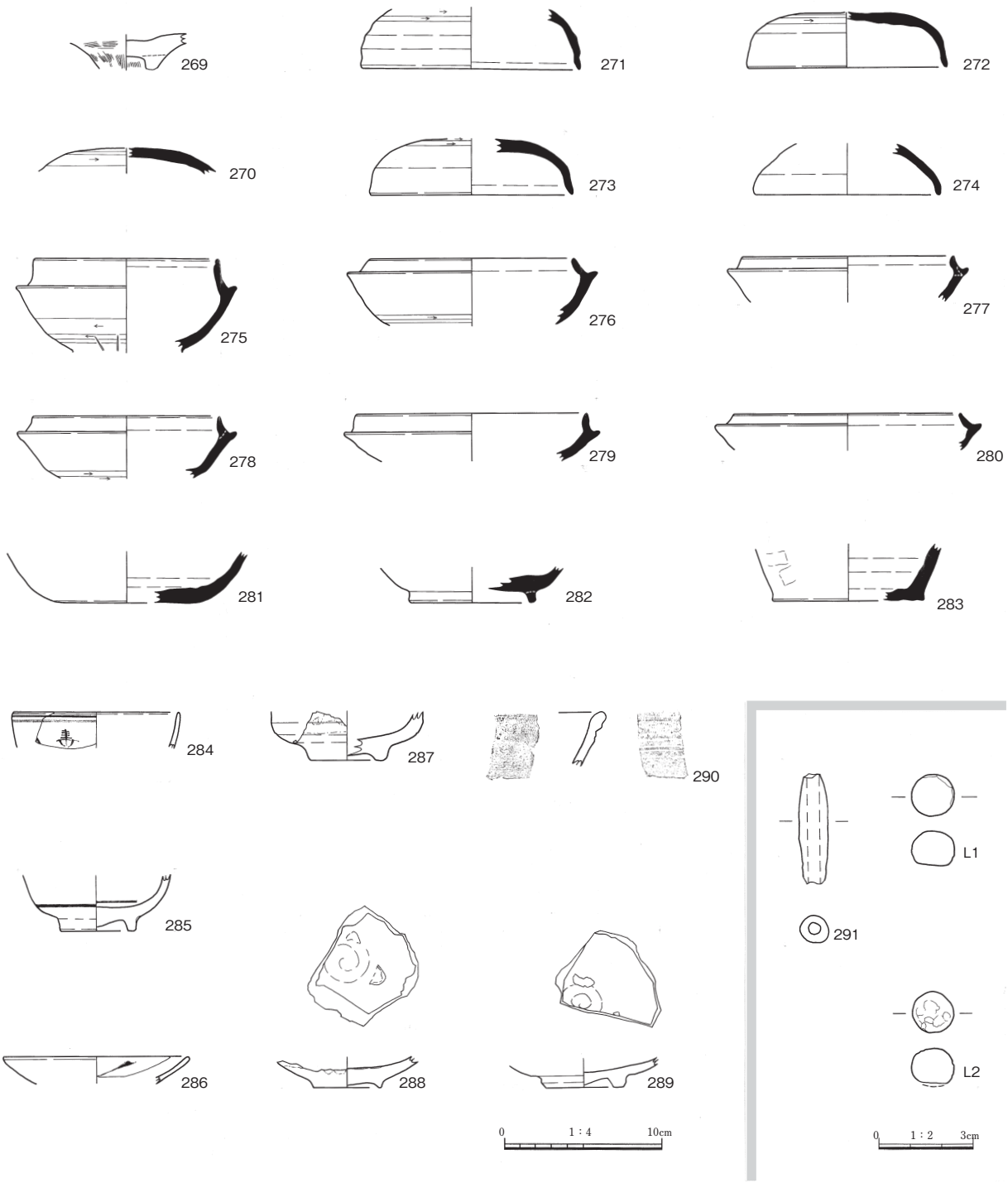
第63図　２区遺構外出土遺物（１）



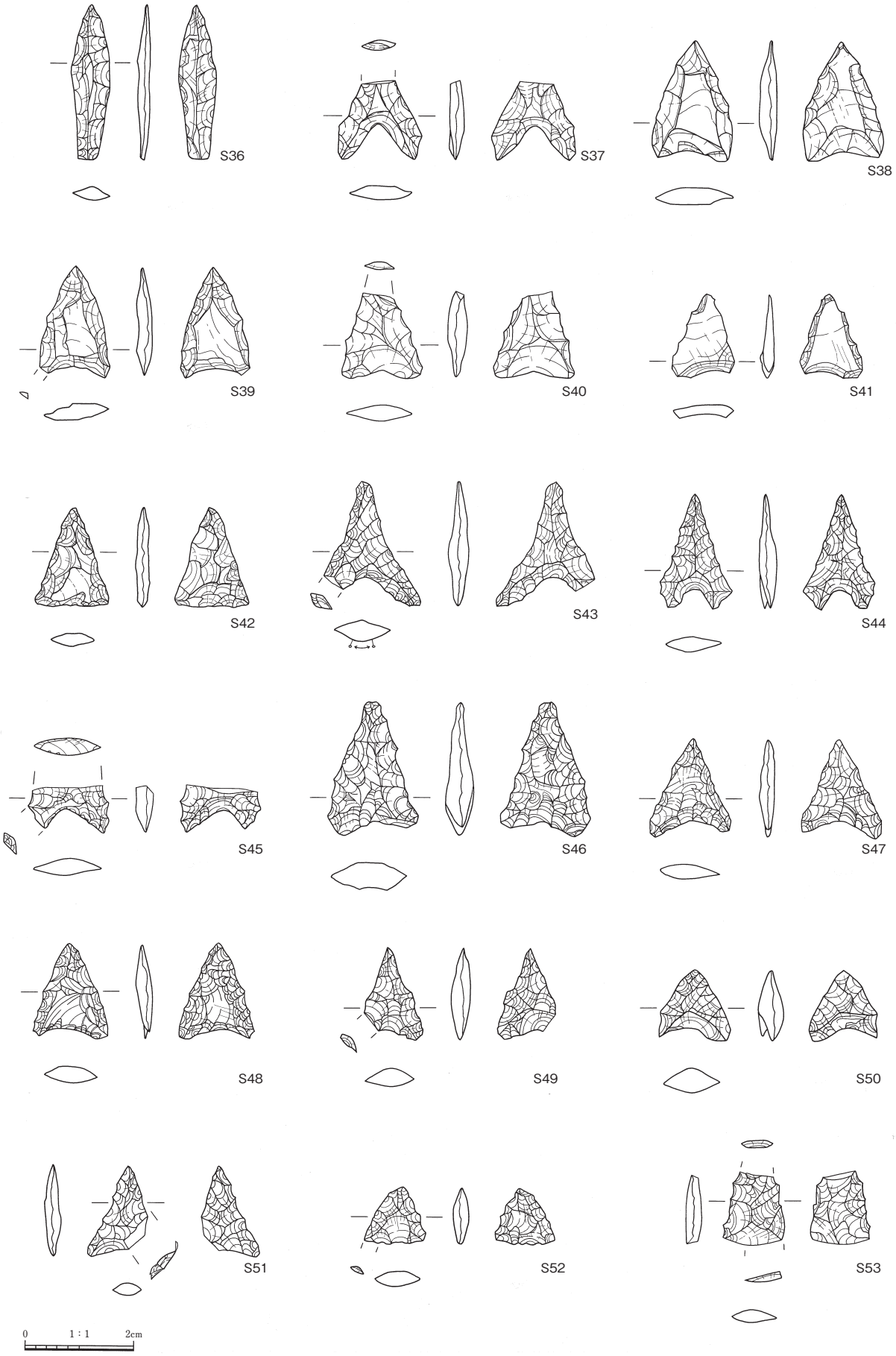
第64図　２区遺構外出土遺物（２）



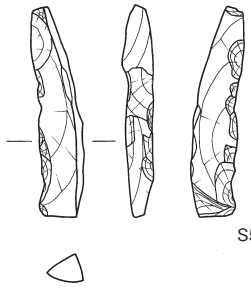
第65図　２区遺構外出土遺物（３）

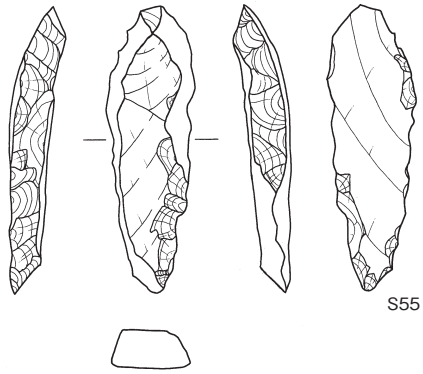


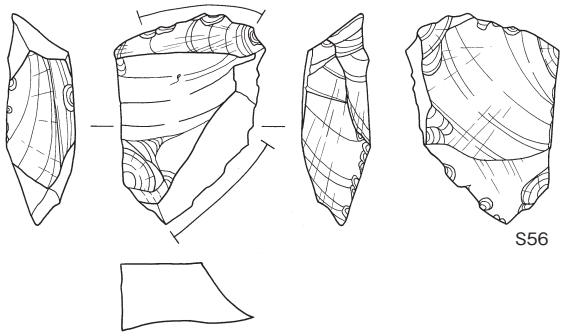
第66図　２区遺構外出土遺物（４）

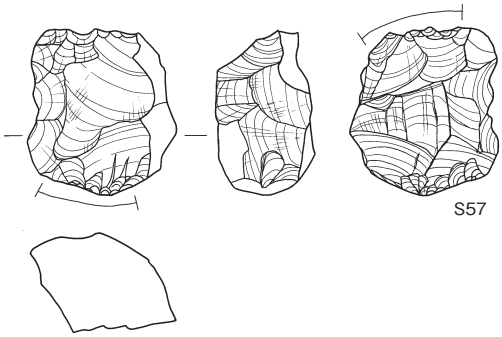


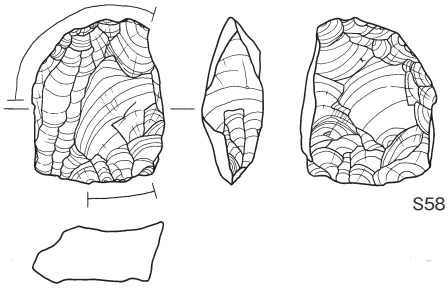
第67図　２区遺構外出土遺物（５）

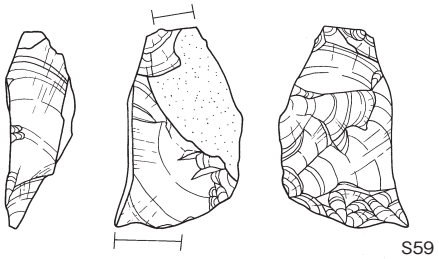


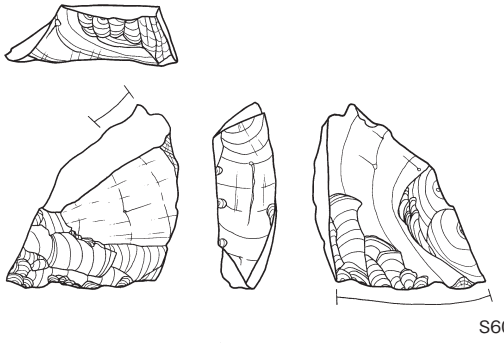


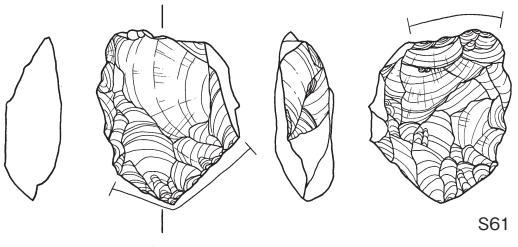


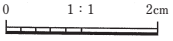




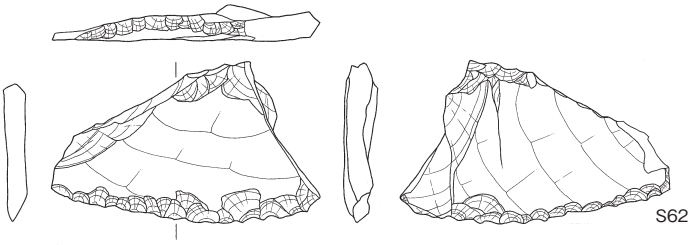


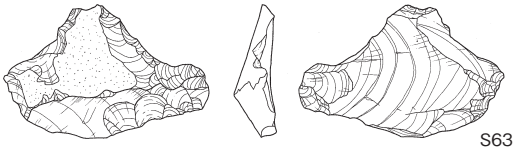


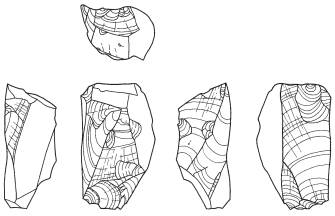


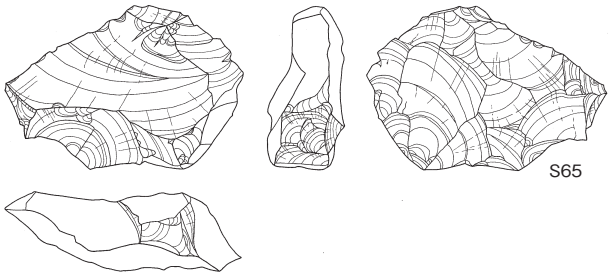


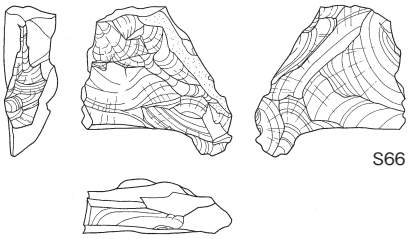
第68図　２区遺構外出土遺物（６）

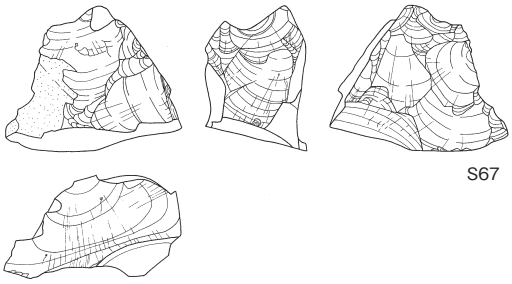


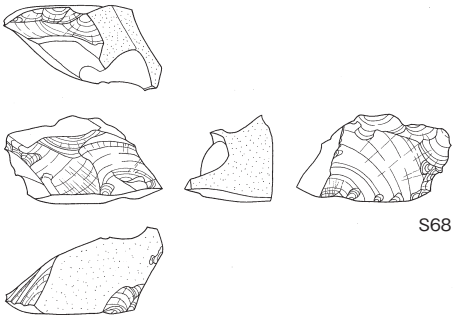


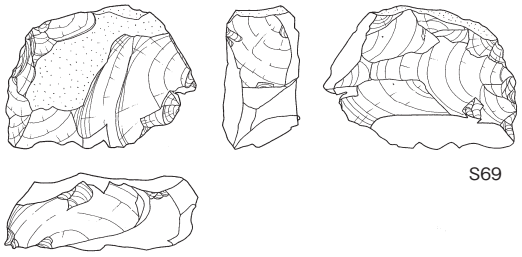


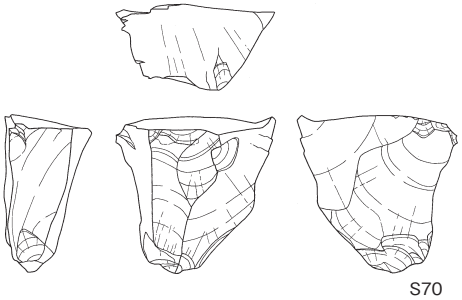






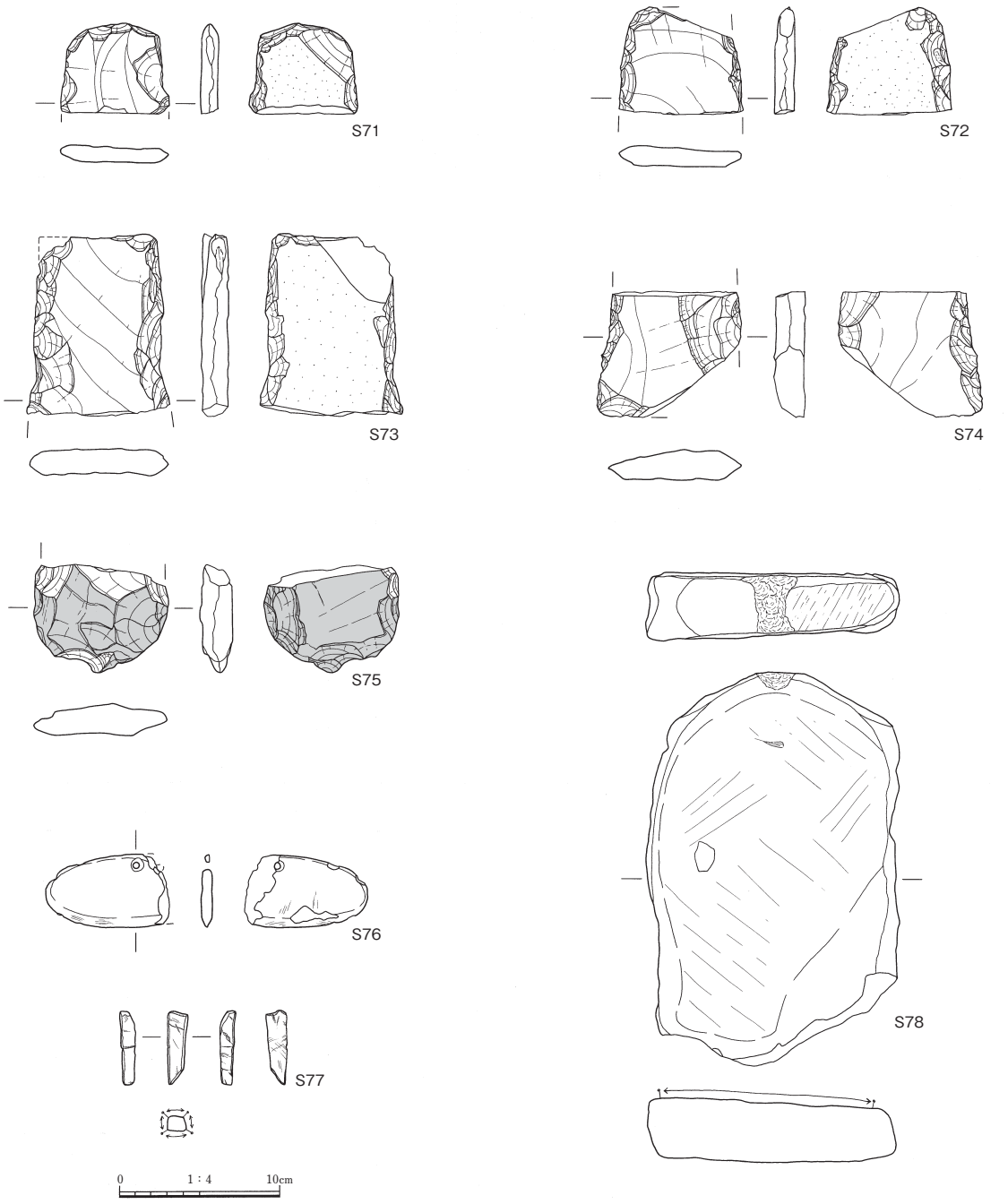






0 2：3 3cm

第69図　２区遺構外出土遺物（７）



第70図　２区遺構外出土遺物（８）

～Ｓ61は黒曜石製の楔形石器である。Ｓ62、Ｓ63はスクレイパーで、Ｓ62はサヌカイト製、Ｓ63は黒曜石製である。Ｓ64～Ｓ70は石核で、Ｓ64～Ｓ68は黒曜石製、Ｓ69、Ｓ70は玉髄製である。

Ｓ71～Ｓ75はいずれも安山岩製の石鏃である。Ｓ76は結晶片岩製の石包丁で、両側から穿孔された１孔を残して右側半分が欠損する。Ｓ77は凝灰岩製の小型の砥石である。長方形を呈し、表裏面及び両側面の４面を使用している。Ｓ78は凝灰角礫岩製の台石である。下部が欠損するが、扁平で長楕円形を呈し、表面には擦痕が認められる。

第４節　３区の調査

１．概　　要

３区は、２区の南西に位置する調査区で、現地表面の標高は24.6～24.7ｍである。

３区では２面の遺構面を確認した。第２遺構面は灰色砂質土層（第71図の５層）上面を遺構面とする。遺構面の微地形は、調査区の中央やや北東寄りに南から北へ緩やかに傾斜する尾根状地形があり、その北東側と南西側に谷状地形が入り込む。尾根状地形の標高は最高所で24.19ｍを測り、北東側の谷状地形部の最低所の標高は23.94ｍ、南西側の谷状地形部の最低所の標高は23.90ｍを測る。

第２遺構面では溝状遺構を４基検出した。調査区の中央から北東側では遺構は確認されず、ＳＤ60は調査区の中央やや南西寄りに、ＳＤ61～63は調査区の南西側に位置する。いずれも形態的に自然流路と考えられる。また、ＳＤ60～62周辺で２段の段状落差（段１・２）を確認した。上層の第１遺構面では、段１と重複するように稲株痕や足跡と考えられる小さな窪み穴を確認していることから、この段状落差は水田の区画である可能性がある。いずれの遺構からも遺物が出土していないために、時期の詳細は不明であるが、検出面から中世を下限とすると考えられる。

第１遺構面は淡黒灰色土層（第71図の４層）上面を遺構面とする。遺構面の微地形は調査区の中央やや北東寄りに南から北へ緩やかに傾斜する尾根状地形があり、その北東側と南西側に谷状地形が入り込む。尾根状地形の標高は最高所で24.29ｍを測り、北東側の谷状地形部の最低所の標高は24.07ｍ、南西側の谷状地形部の最低所の標高は24.06ｍを測る。

第１遺構面では溝状遺構を４基検出した。遺構は調査区の南西端でのみ確認され、いずれも自然流路と考えられる。ＳＤ47からは近世の遺物が出土しているが、これ以外の遺構からは遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、ＳＤ47と４区の層序との関連から、ＳＤ46～48は近世、ＳＤ23は中世～近世に帰属すると考えられる。

２．基本層序（第71図）

調査区の南東壁及び調査区の北東端に設定したトレンチ（Ｂ－Ｂ′）で土層の堆積状況を確認した。トレンチでは土層の堆積は13層に分かれ、上層（２～４層）はほぼ水平に堆積し、中層から下層（５～14層）は地形に沿うように南東から北西へ緩やかに傾斜堆積している。なお、７、９層からは弥生土器、土師器、石器が少量出土したが、５、６、８層及び10～14層は遺物が出土しなかったため、５層上面を最終遺構面として認識した。

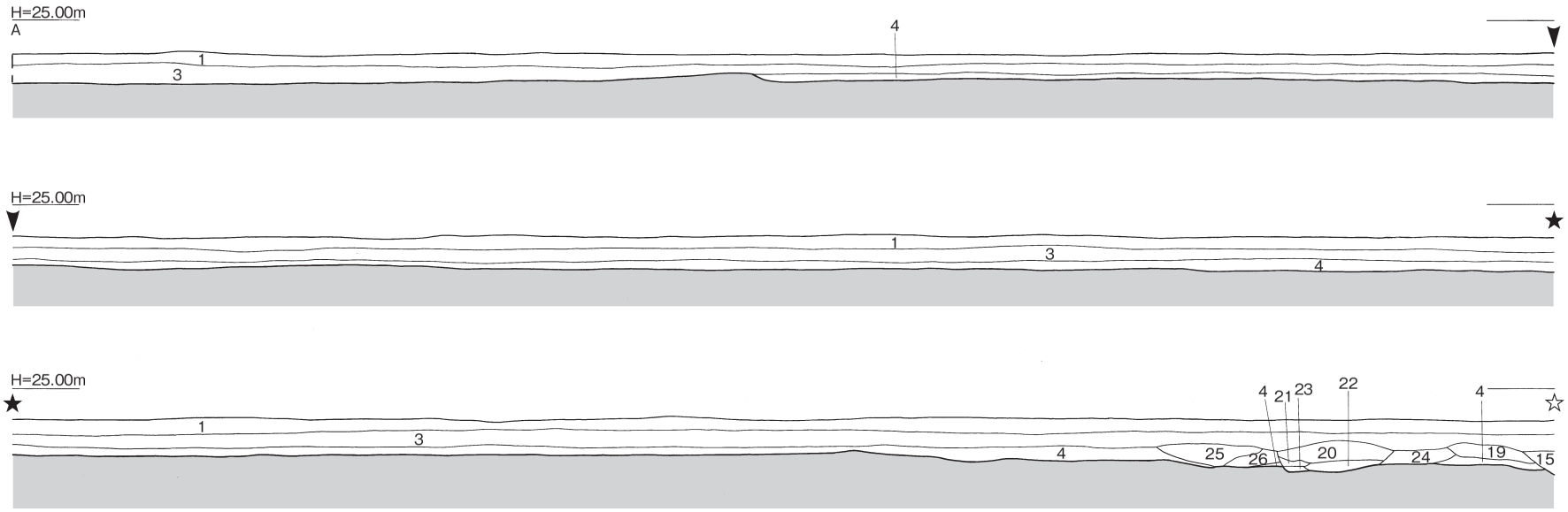
各層の概要は以下のとおりである。

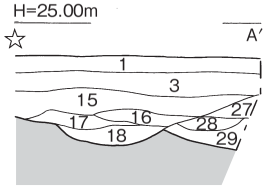
Ⅰ層：Ⅰ層（１層）は現水田耕作土層で、層厚は0.1～0.2ｍを測る。

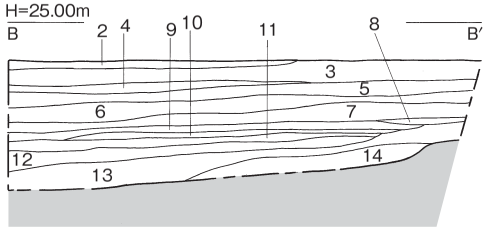
Ⅱ層：Ⅱ層（２層）は旧耕作土層と考えられ､調査区北東側のトレンチでのみ確認した。層厚は0.05～0.1ｍを測る。

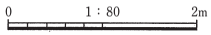
Ⅲ層：Ⅲ層（３層）は水田基盤層と考えられる。淡灰茶色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は0.1～0.2ｍを測り、近世の遺物が出土した。

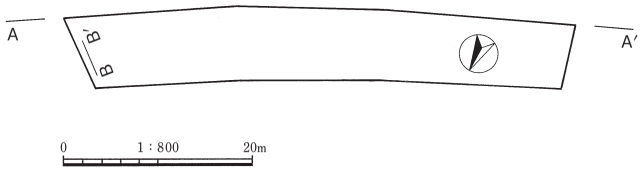
Ⅳ層：Ⅳ層（４層）は調査区の南西側で足跡を確認し、プラント・オパール分析の結果から、水田耕作土層と考えられる。ＢグリッドとＣグリッドとの境界付近に比高差0.1ｍの段があり、Ⅳ層はこの段より南西側に認められる。淡黒灰色を呈し、粘性があり、層厚は0.05～0.15ｍ











1 淡茶灰色土（Ⅰ層）
2 淡灰褐色土（Ⅱ層）
3 淡灰茶色土（Ⅲ層、鉄分混じり）
4 淡黒灰色土（Ⅳ層、砂、鉄分混じり）
5 灰色砂質土（Ⅴ－１層、鉄分混じり）
6 淡灰茶色砂質土（Ⅴ－２層、鉄分混じり、５層よりも砂質が強い）
7 茶灰色粘質土（Ⅵ－１層、鉄分混じり）
8 淡灰色細粒砂（Ⅵ層）
9 灰褐色粘質土（Ⅵ－２層、鉄分混じり）
10 灰色砂質土（Ⅶ－１層、やや粘性あり）
11 暗灰色粘質土（Ⅶ－１層、砂混じり）
12 灰褐色粘質土（Ⅶ－１層、微細粒砂混じり）
13 暗灰色粘土（Ⅶ－２層、上面に灰白色粘土ブロックあり）
14 灰色粘土（Ⅶ－２層）
15 淡茶灰色土（ＳＤ48）
16 灰褐色土（ＳＤ48、３層がブロック状に混じる）
17 褐灰色細粒砂（ＳＤ48、鉄分混じり）
18 暗灰色粘質土（ＳＤ48、砂が多量に混じる）
19 灰色シルト（ＳＤ48）
20 茶灰色土（ＳＤ47、小礫が多量に混じる）
21 暗灰色粘質シルト（ＳＤ47）
22 灰色中粒砂（ＳＤ47）
23 灰色細粒砂（ＳＤ47）
24 灰色シルト（ＳＤ47、灰色微細粒砂がラミナ状に混じる）
25 茶灰色土（ＳＤ46）
26 灰色細粒砂（ＳＤ46）
27 暗灰色土（砂が多量に混じる）
28 灰褐色粘土（有機質混じり）
29 暗灰色粘土（有機質混じり）

第71図　３区土層図

を測る。Ⅳ層からは量的には少ないが、弥生時代～中世の遺物が出土した。Ⅳ層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

Ⅴ層：Ⅴ層（５、６層）は砂質土を主体とし、上下２層（Ⅴ－１層、Ⅴ－２層）に細分できる。Ⅴ－１層（５層）は灰色を呈し、調査区全体に堆積する。層厚は0.1～0.15ｍを測る。Ⅴ－２層は淡灰茶色を呈し、層厚は0.1～0.2ｍを測る。Ⅴ層からは遺物が出土しなかったため堆積時期は不明である。Ⅴ層上面を第２遺構面として遺構を検出した。なお、調査区の南西端ではⅢ層とⅤ層との間に暗灰色土層（27層）、灰褐色粘土層（28層）、暗灰色粘土層（29層）があり、28、29層は有機物を包含する。これより南西側（４区）は谷状に傾斜し、水性堆積が卓越している。27層は４区の11層に、29層は４区の35層に対応する。

Ⅵ層：Ⅵ層（７～９層）は粘質土を主体として、地形に沿うように南東から北西へ緩やかに傾斜堆積している。上下２層（Ⅵ－１層、Ⅵ－２層）に細分でき、さらにⅥ－１層（７層）とⅥ－２層（９層）との間に間層として淡灰色細粒砂層（８層）が存在すると考えられる。Ⅵ－１層は層厚0.05～0.2ｍ、Ⅵ－２層は層厚0.05～0.1ｍを測り、両層からは弥生土器、土師器、石器が少量出土した。

Ⅶ層：Ⅶ層（10～14層）は粘質土及び粘土を主体として、地形に沿うように南東から北西へ緩やかに傾斜堆積している。さらにⅦ－１層（10～12層）とⅦ－２層（13、14層）とに細分できると考えられるが、いずれの層からも遺物は出土しなかった。Ⅶ－２層以下は未掘削であるために、これ以下の土層の堆積状況は確認できなかったが、南東側では14層の下に基盤層の灰白色粘土層が存在する。

３．第２遺構面の調査

ＳＤ60（第73図）

ＳＤ60は調査区の中央やや南西寄りに位置する。南東から北西へ直線的にのび、北西側はさらに調査区外へのびる。検出した長さは2.4ｍ、幅0.5～0.6ｍ、検出面からの最大の深さ14㎝を測る。断面形態は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が23.83ｍ、北西端が23.72ｍで、南東から北西へ緩やかに流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

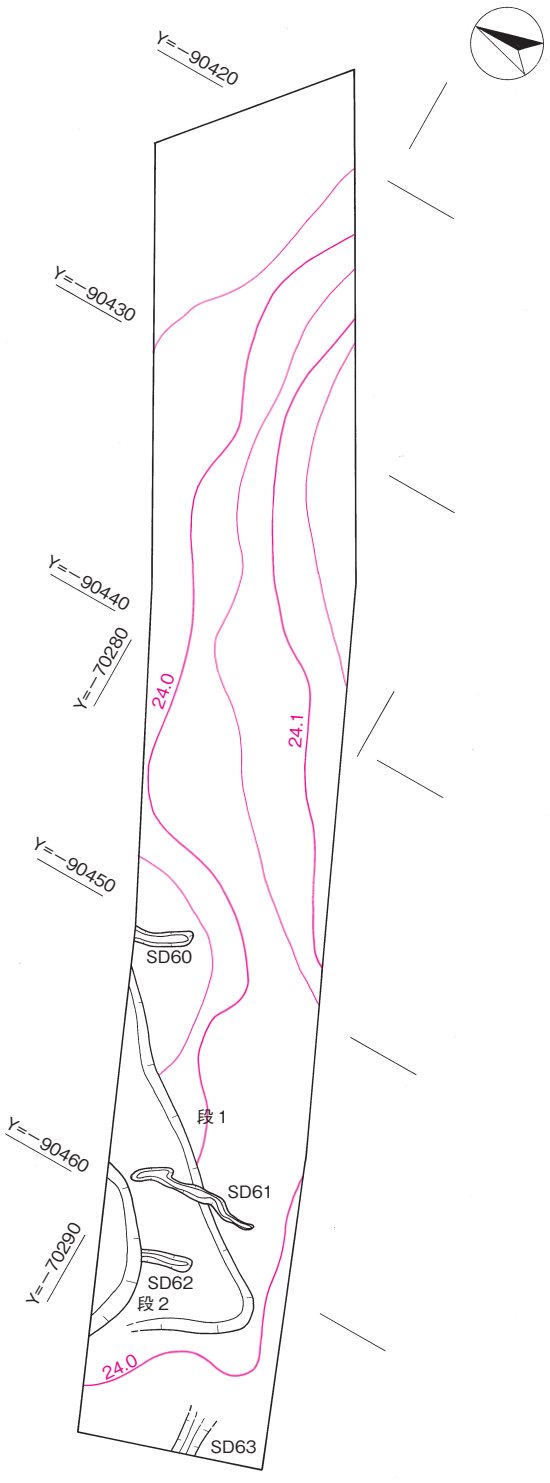
本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から中世を下限とすると考えられる。

ＳＤ61（第74図）

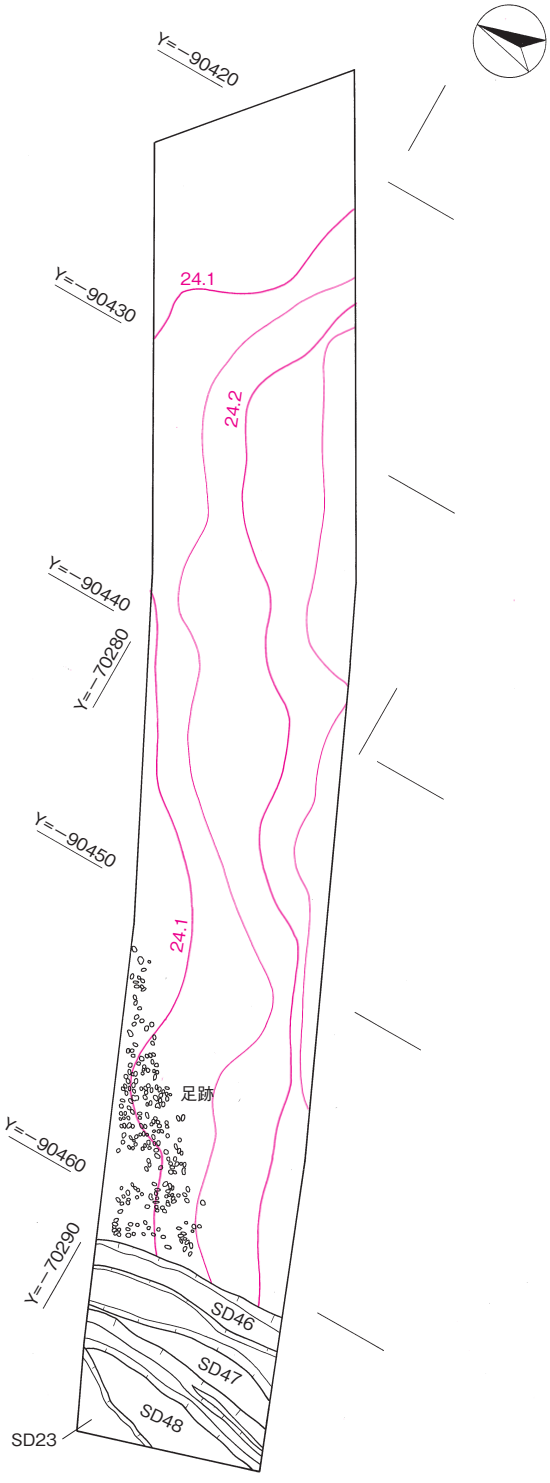
ＳＤ61は調査区の南西側に位置する。南から北へ蛇行しながら直線的にのび、北側には別の溝（ＳＤ61－Ｂ）が存在するが、先後関係は確認できなかった。

ＳＤ61－Ａは検出した長さ4.3ｍ、幅0.25～0.55ｍ、検出面からの最大の深さ16㎝を測り、ＳＤ61－Ｂは検出した長さ1.7ｍ、幅0.45～0.5ｍ、検出面からの最大の深さ12㎝を測る。断面形態はいずれもＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。ＳＤ61－Ａの底面の標高は南端が24.01ｍ、北端が23.81ｍを測り、ＳＤ61－Ｂの底面の標高は南東端が23.823ｍ、北西端が23.790ｍを測る。埋土はいずれも暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から中世を下限とすると



第２遺溝面



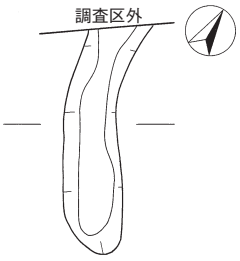
第１遺溝面

0　1：300　15m

第72図　３区遺構分布図

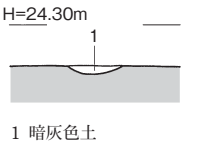
考えられる。

ＳＤ62（第75図）



ＳＤ62は調査区の南西側に位置する。南から北へ直線的にのび、北側は段２に切られている。検出した長さは2.05ｍ、幅0.45～0.6ｍ、検出面からの最大の深さ14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.86ｍ、北端が23.83ｍでほぼ水平である。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から中世を下限とすると考えられる。

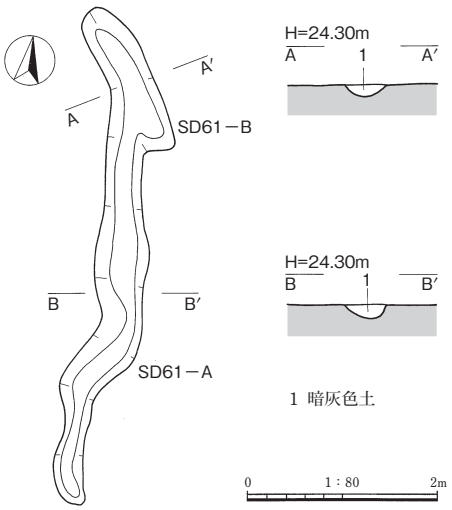


第73図　ＳＤ６０

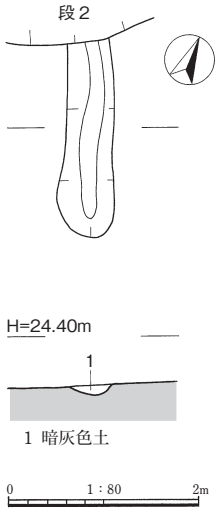
ＳＤ63（第76図）

ＳＤ63は調査区の南西端に位置する。東から西へ直線的にのび、さらに西側は４区へとのびると考えられるが、４区では確認できなかった。検出した長さは1.1ｍ、幅0.9～1.05ｍ、検出面からの最大の深さ29㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は東端が23.68ｍ、西端が23.58ｍで、東から西へ緩やかに流下する。埋土は暗灰色土の単層で、流水の痕跡は窺えない。

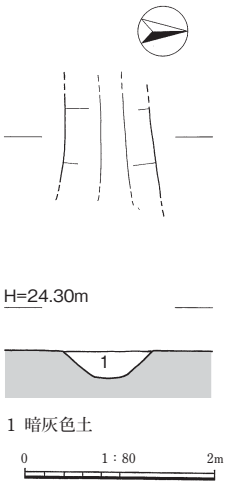
本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から中世を下限とすると考えられる。



第74図　ＳＤ６１



第75図　ＳＤ６２



第76図　ＳＤ６３

４．第１遺構面の調査

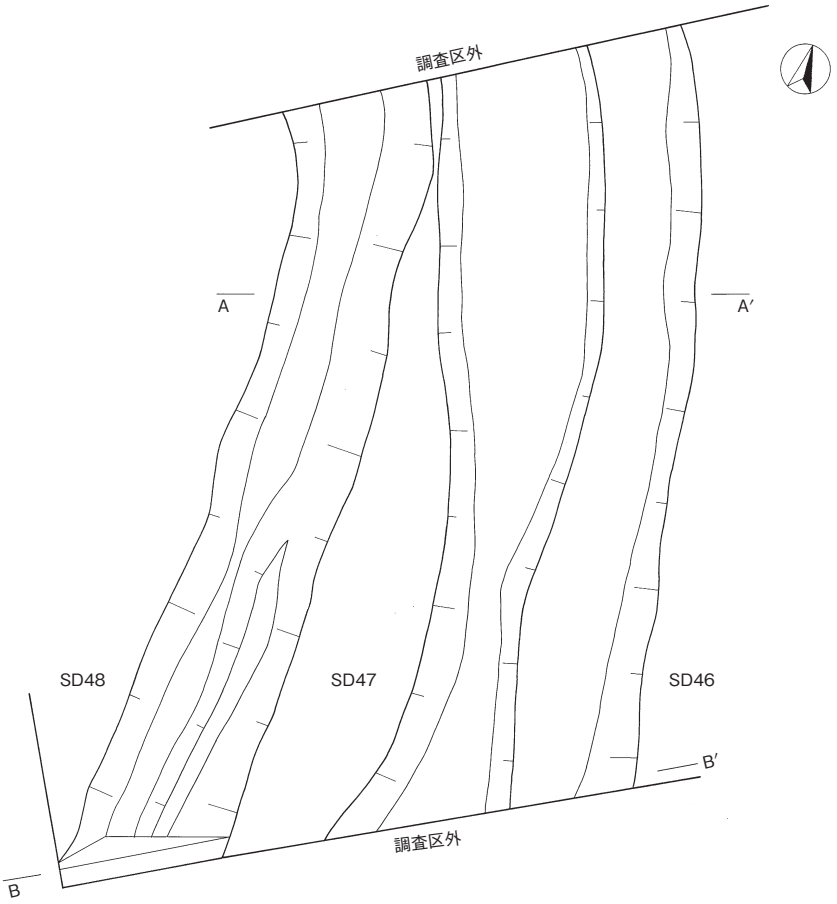
ＳＤ46（第77図）

ＳＤ46は調査区の南西端に位置する。南から北へ直線的にのび、両端はさらに調査区外へのびる。西側はＳＤ47に切られている。検出した長さは8.1ｍ、幅はＳＤ47に切られているため不明であるが1.4ｍ以上、検出面からの最大の深さ28㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は凹凸が著しい。底面の標高は南端が24.10ｍ、北端が23.89ｍで、南から北へ流下する。埋土は東側に茶灰色土（10層）、西側に灰色細粒砂（11層）の堆積が認められ、埋土の状況から流水があったと考えられる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ47との関連から近世と考えられる。

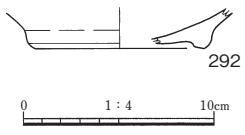
ＳＤ47（第77・78図）

ＳＤ47は調査区の南西端に位置する。南から



1 淡茶灰色土（ＳＤ48）
2 灰褐色土（ＳＤ48、３層がブロック状に混じる）
3 褐灰色細粒砂（ＳＤ48、鉄分混じり）
4 暗灰色粘質土（ＳＤ48、砂が多量に混じる）
5 茶灰色土（ＳＤ47、小礫が多量に混じる）
6 暗灰色粘質シルト（ＳＤ47）
7 灰色中粒砂（ＳＤ47）
8 灰色細粒砂（ＳＤ47）
9 灰色シルト（ＳＤ47、灰色微細粒砂がラミナ状に混じる）
10 茶灰色土（ＳＤ46）
11 灰色細粒砂（ＳＤ46）

0　1：80　2m



第78図　ＳＤ４７出土遺物

第77図　ＳＤ４６・４７・４８

北へ直線的にのび、両端はさらに調査区外へのびる。東側はＳＤ46を切っている。平面的には確認できなかったが、南側の土層断面から、２時期の溝の存在が示唆できる。検出した長さは8.7ｍ、幅0.9～1.75ｍ、検出面からの最大の深さ38㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面は凹凸が著しい。底面の標高は南端が24.08ｍ、北端が23.92ｍで、南から北へ流下する。埋土は新段階の溝は大きく上下２層に分かれる。上層は径５㎜前後の礫が多量に混じる茶灰色土（５層）と暗灰色粘質シルト（６層）で、下層（７、８層）は砂を主体とする。古段階の溝（９層）は灰色シルトの単層で、層内には灰色微細粒砂がラミナ状に堆積している。埋土の状況から新古段階いずれの溝も流水があったと考えられる。

本遺構からは陶器（292）が出土した。292は在地産の鉢の底部で、内外面とも無釉である。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と考えられる。

ＳＤ48（第77図）

ＳＤ48は調査区の南西端に位置する。南から北へ直線的にのび、両端はさらに調査区外へのびる。南側は肩が２段となっている。検出した長さは8.6ｍ、幅1.2～1.6ｍ、検出面からの最大の深さ60㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.62ｍ、中央が23.53ｍ、北端が23.80ｍで、中央が低くなっている。埋土は４層に分かれ、１層は淡茶灰色土、２層は灰褐色土で、下層（３層）のブロックが混じる。３層は褐灰色細粒砂、４層は暗灰色粘質土で、砂が多量に混じっている。埋土の状況から流水があったと考えられる。

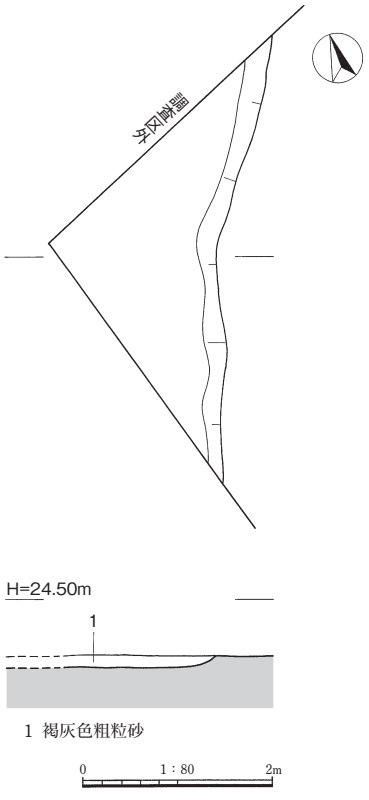
遺物は流れ込みと考えられる弥生土器と土師器が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。

本遺構の時期は、ＳＤ47との関連から近世と考えられる。

ＳＤ64（第79図）

ＳＤ64は調査区の南西端に位置する。南西から北東へ直線的にのび、北東側はさらに調査区外へのび、南西側は４区へとのびると考えられるが、４区では確認できなかった。検出した長さは4.5ｍ、幅は北西側の肩を確認できていないため不明であるが、1.8ｍ以上、検出面からの最大の深さ16㎝を測る。断面形態は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南西端が23.82ｍ、北東端が23.28ｍで、南西から北東へ流下する。埋土は褐灰色粗粒砂の単層で、流水があったと考えられる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、ＳＤ47と４区の層序との関連から中世～近世と考えられる。



第79図　ＳＤ６４

５．遺構外出土遺物（第80・81図）

３区からは弥生時代～近世の遺物が出土した。量的には少ないが、陶磁器はⅢ層、土器はⅣ層からの出土が主体で、石器はⅥ層から出土した。

293は弥生土器の底部である。294は円筒埴輪で、断面台形の

突帯が巡る。295は土師質土器坏身の口縁部である。296は須恵器坏身で、底部外面には回転糸切りが施されている。297は内面を黒色処理した黒色土器の底部で、底部外面には回転糸切りが施されている。

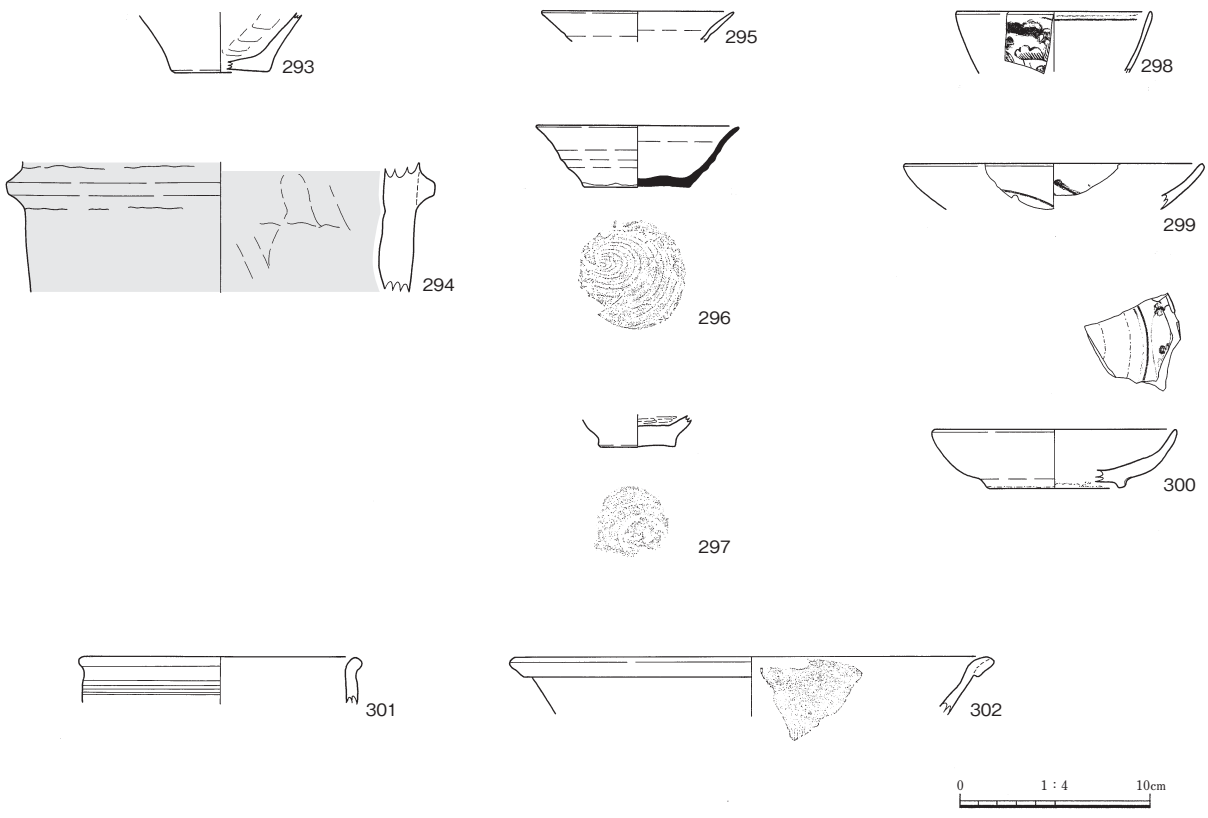
298～302は陶磁器で、いずれもⅢ層から出土した。298～300は肥前産の磁器である。298は碗で、焼継ぎが施されている。299、300は皿で、300の見込には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。301は肥前産の陶器の鉢、302は須佐唐津焼の擂鉢である。

Ｓ79～Ｓ88は石器である。Ｓ79～Ｓ81は黒曜石製の石鏃である。Ｓ79は深い抉りをもつ凹基式で、基部左側が欠損する。Ｓ80はやや深い抉りをもつ凹基式、Ｓ81は浅い抉りをもつ凹基式である。Ｓ82、Ｓ83はサヌカイト製で、いずれも浅い抉りをもつ凹基式の石鏃である。

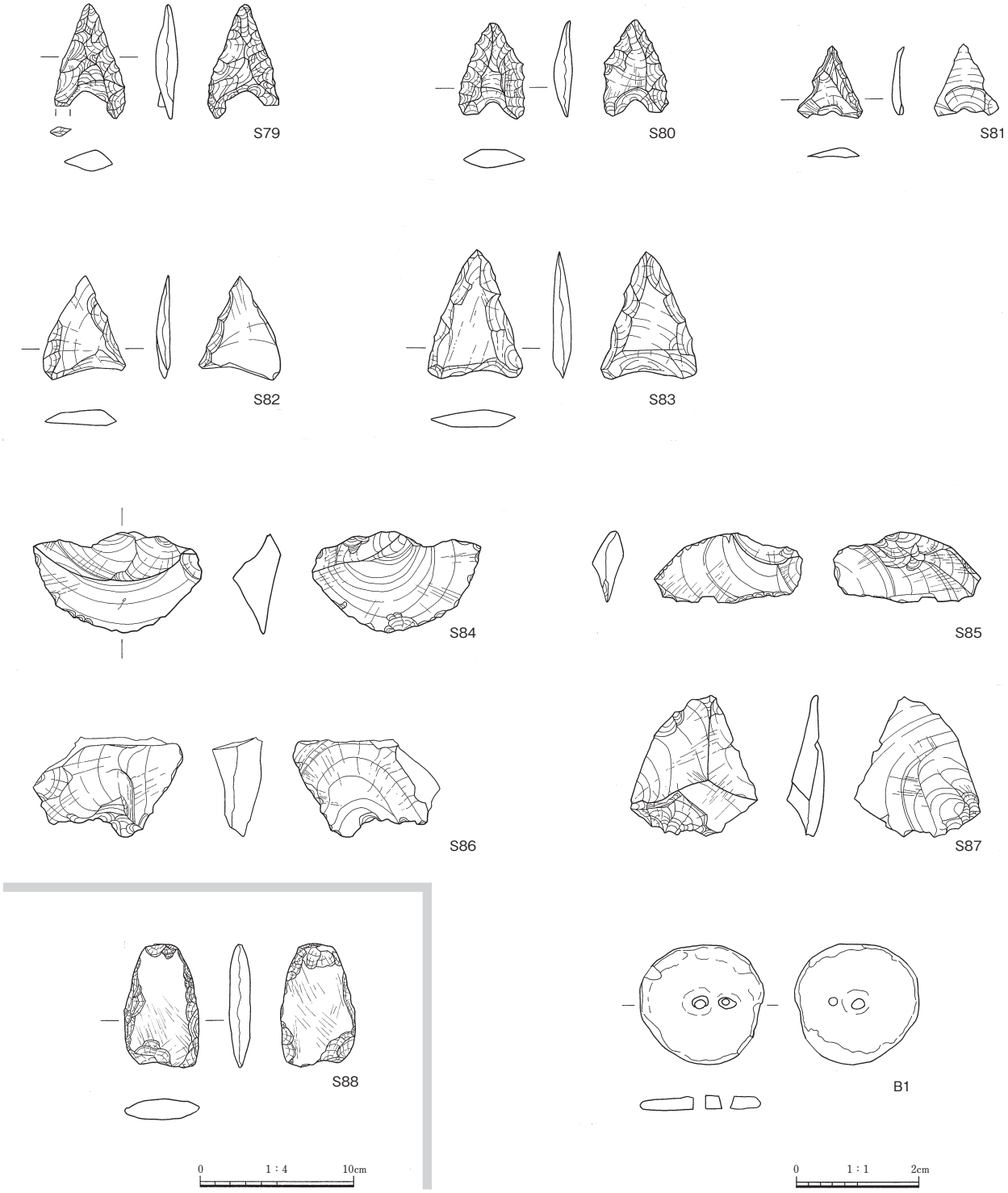
Ｓ84、Ｓ85は黒曜石製の使用痕のある剥片（ＵＦ）、Ｓ86は黒曜石製の加工痕のある剥片（ＲＦ）、Ｓ87は黒曜石の剥片である。

Ｓ88は粘板岩製の小型の石鏃で表裏面を丁寧に研磨して整形している。

Ｂ１は青銅製品である。径2.1㎝、厚さ２㎜の円板状を呈し、中央と中央からやや離れた位置に２孔を穿つ。



第80図　３区遺構外出土遺物（１）



第81図　３区遺構外出土遺物（２）

第５節　４区の調査

１．概　　要

４区は調査地の最も南西に位置する調査区で、現地表面の標高は24.4～24.7ｍである。

４区では３面の遺構面を確認した。第３遺構面は灰色砂礫層（第82図の39層）上面を遺構面とし、水田跡と自然流路を１基検出した。調査区の西側半分には氾濫原状の自然流路、東側には自然流路１があり、その間に水田跡（上層水田跡）が存在し、調査区の中央には畦畔４と畦畔５の２本の畦畔がある。

第２遺構面は淡黒灰色粘質土（第82図の24層）、暗灰色粘質シルト（第82図の25層）上面を遺構面とし、水田跡と溝状遺構を１基検出した。第３遺構面と同様に、調査区の西側には氾濫原状の自然流路があり、上層水田と同様の範囲に水田跡（下層水田跡）が広がる。また、調査区の中央には畦畔１～３の３本の畦畔がある。

第１遺構面は河川の氾濫による堆積層である淡灰色細粒砂層（第82図の20層）と淡灰色粗粒砂層（第82図の22層）上面を遺構面とし、溝状遺構を２基検出した。いずれも自然流路と考えられる。

２．基本層序（第82図）

４区の旧地形は谷状を呈しており、下層は全体的に水性堆積が卓越しているが、調査区中央のＳＤ１とＳＤ２付近を境としてその東側（以下、東側とする。）と西側（以下、西側とする。）とでは土層の堆積状況が異なる。

東側では砂、砂礫、粘質シルト、シルト、粘質土、粘土の各層が互層状に堆積し、その堆積状況から総じて流水と滞水とを繰り返す湿地状の様相を呈していたと考えられる。この湿地を利用して10～12世紀には淡黒灰色粘質土層（24層）、暗灰色粘質シルト層（25層）、暗灰色粘質土層（26層）に水田が営まれるが､水田は間もなく河川の氾濫によって堆積した淡灰色粗粒砂（22層）に被覆される。その後は調査区全域にわたって比較的安定した状態になると考えられる。

一方、西側では砂礫層が卓越しており、なかでも暗橙色砂礫層（49層）と灰色砂礫層（50層）は１～20㎝大の礫が多量に含まれており、土石流状の堆積が想定される。なお、４区から出土した遺物の大半は、50層から出土したものである。

各層の概要は以下のとおりである。

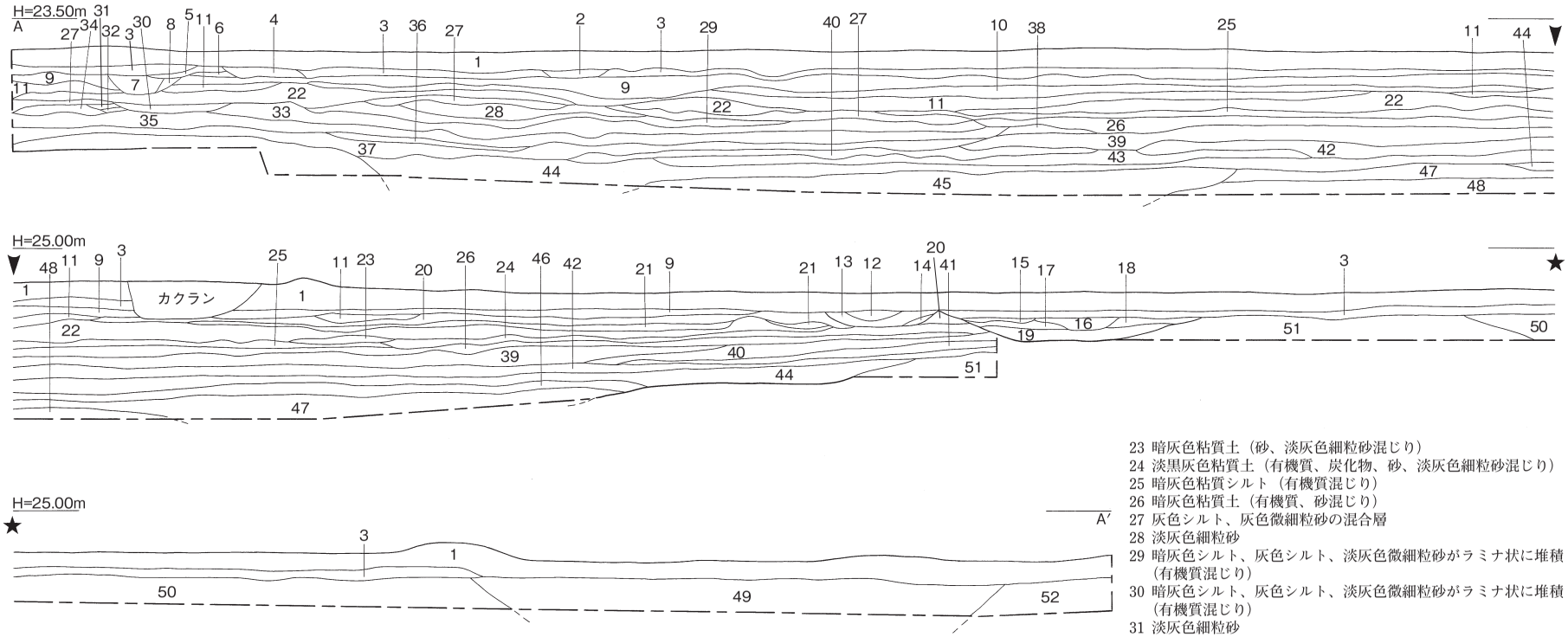
Ⅰ層：Ⅰ層（１層）は現水田耕作土層で、層厚は0.2～0.4ｍを測る。

Ⅱ層：Ⅱ層（３層）は旧耕作土層と考えられ、調査区の中央と西端ではⅠ層に削平されており遺存していない。層厚は0.05～0.15ｍを測る。

Ⅱ層以下は、東側と西側とで堆積状況が異なり、東側では以下のⅢ～Ⅶ層の堆積が認められる。一方、西側ではⅡ層の下に砂礫層（49、50層）と５～15㎝大の礫が多量に混じる灰褐色土層（51層）が厚く堆積するが、これ以下は未掘削であるために、これらの層厚及びさらに下層の堆積状況は確認できなかった

Ⅲ層：Ⅲ層（９層）は水田基盤層と考えられる。灰茶色を呈し、調査区の東側に堆積する。層厚は0.05～0.3ｍを測り、近世の遺物が出土した。Ⅲ層は３区のⅢ層に対応する。

Ⅳ層：Ⅳ層（11層）は暗灰色を呈し、砂が多量に混じり、硬くしまる。調査区の東側に堆積し、



1 淡茶灰色土
2 灰褐色粘質土
3 褐灰色土
4 暗灰色土、淡褐色土、橙褐色土の混合層
5 暗橙色土
6 橙灰色土
7 淡灰褐色土（暗灰色土ブロック混じり）
8 灰色土（砂、鉄分混じり）
9 灰茶色土（砂、鉄分混じり）
10 暗灰茶色土（砂混じり）
11 暗灰色土（砂が多量に混じる、硬くしまる）
12 灰褐色粗粒砂（ＳＤ２）
13 淡灰褐色細粒砂（ＳＤ２、灰色粘土ブロック混じり）
14 淡灰褐色粘質土（ＳＤ２、暗灰色粘土ブロック混じり）
15 暗灰色粘質土（ＳＤ１、下面に淡灰色シルトが堆積）
16 暗灰色粘質土、淡灰色シルト、灰色細粒砂の混合層（ＳＤ１）
17 橙灰色中粒砂（ＳＤ１）
18 茶灰色細粒砂（ＳＤ１）
19 暗灰色土（ＳＤ１、砂、細粒砂、炭化物混じり）
20 淡灰色細粒砂
21 灰色粘質土
22 淡灰色粗粒砂
23 暗灰色粘質土（砂、淡灰色細粒砂混じり）
24 淡黒灰色粘質土（有機質、炭化物、砂、淡灰色細粒砂混じり）
25 暗灰色粘質シルト（有機質混じり）
26 暗灰色粘質土（有機質、砂混じり）
27 灰色シルト、灰色微細粒砂の混合層
28 淡灰色細粒砂
29 暗灰色シルト、灰色シルト、淡灰色微細粒砂がラミナ状に堆積（有機質混じり）
30 暗灰色シルト、灰色シルト、淡灰色微細粒砂がラミナ状に堆積（有機質混じり）
31 淡灰色細粒砂
32 灰色シルト
33 淡橙灰色中粒砂
34 淡褐灰色細粒砂
35 暗灰色粘土（有機質混じり）
36 灰褐色シルト（暗灰色粘土ブロック混じり）
37 灰褐色粘質土（有機質、灰色粘土ブロック混じり）
38 暗茶灰色粘質土
39 灰色砂礫（礫が多量に混じる）
40 灰褐色粘質土
41 灰色細粒砂
42 暗灰色粘質土（有機質、暗茶灰色砂質土ブロック混じり）
43 淡灰色シルト（有機質混じり）
44 茶灰色粘質シルト
45 灰茶色細粒砂
46 淡灰色微細粒砂
47 茶灰色土（砂、炭化物混じり）
48 灰色細粒砂
49 暗橙色砂礫（１～20㎝大の礫が多量に混じる、細粒砂混じり）
50 灰色砂礫（１～20㎝大の礫が多量に混じる）
51 灰褐色土（５～15㎝大の礫が多量に混じる）
52 淡灰色シルト
53 灰白色粘土

第82図　４区土層図

層厚は0.05～0.2ｍを測る。Ⅳ層は３区の27層に対応する。

Ⅴ層：Ⅴ層（20、21層）は河川の氾濫後の水性堆積層で、上下２層（Ⅴ－１層、Ⅴ－２層）に細分できる。Ⅴ－１層（20層）は淡灰色細粒砂層で、調査区の中央やや東寄りに堆積する。層厚は0.05～0.1ｍを測る。Ⅴ－２層（21層）は灰色粘質土層で、Ⅴ－1層と同様の範囲に堆積する。層厚は0.05～0.1ｍを測る。Ⅴ－１層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

Ⅵ層：Ⅵ層（22層）は河川の氾濫による堆積層で、調査区の東側に堆積する。層厚は0.05～0.25ｍを測り、木片が多く出土した。東側はⅤ－１層が遺存していないため、この部分ではⅥ層上面を第１遺構面として遺構を検出した。

Ⅶ層：Ⅶ層（23～26層）は水田層で、上下２層（Ⅶ－１層、Ⅶ－２層）に細分できる。Ⅶ－１層（23～25層）は暗灰色粘質土（23層）、淡黒灰色粘質土（24層）、暗灰色粘質シルト（25層）からなり、その上面を第２遺構面として上層水田跡を検出した。層厚は0.05～0.1ｍを測り、10～12世紀の遺物が出土した。なお、23層は畦畔２である。Ⅶ－２層（26層）は暗灰色粘質土で、下層水田跡の水田層に相当するが、当層上面では畦畔状の高まりを確認出来なかったため当層を薄く残して直下層の灰色砂礫層（39層）上面を第２遺構面として遺構を検出した。層厚は0.05～0.2ｍを測る。

Ⅶ層以下は、水性堆積が卓越し、砂、砂礫、粘質シルト、シルト、粘質土、粘土の各層が互層状に堆積している。また、東端では基盤層の灰白色粘土層（53層）が認められ、東から西方向へ下降している。

３．第３遺構面の調査

水田跡（第83、84図）

水田跡は第２遺構面（上層水田跡）下層の有機質を含む砂混じり暗灰色粘質土層（26層）上面で検出した。検出範囲は調査区の西側の氾濫原状の自然流路と東側の自然流路１との間に残存していた幅８ｍ、長さ20ｍの約160㎡の範囲である。

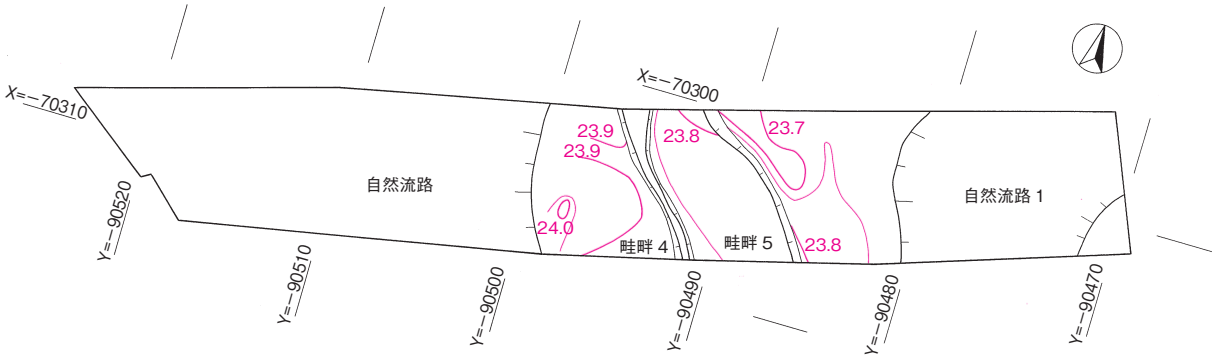
第３遺構面の下層水田跡は、上層水田跡の淡黒灰色粘質土層（24層）と暗灰色粘質シルト層（25層）を除去した面では畦畔状の高まりを確認出来なかった。そのため淡黒灰色粘質土層（24層）と暗灰色粘質シルト層（25層）を薄く残して直下層の灰色砂礫層（39層）直上で検出を試みた。その結果、明確な畦畔として確認されたのは畦畔４の１本のみであった。その他に畦畔の高さが確認されないが棚田状の段状落差が認められたものを畦畔５と考えた。

畦畔は上層水田とほぼ同様な位置と方向を持つものであり、２㎝等高線から推定される水田区画は６区画で小区画水田であったと考えられる。

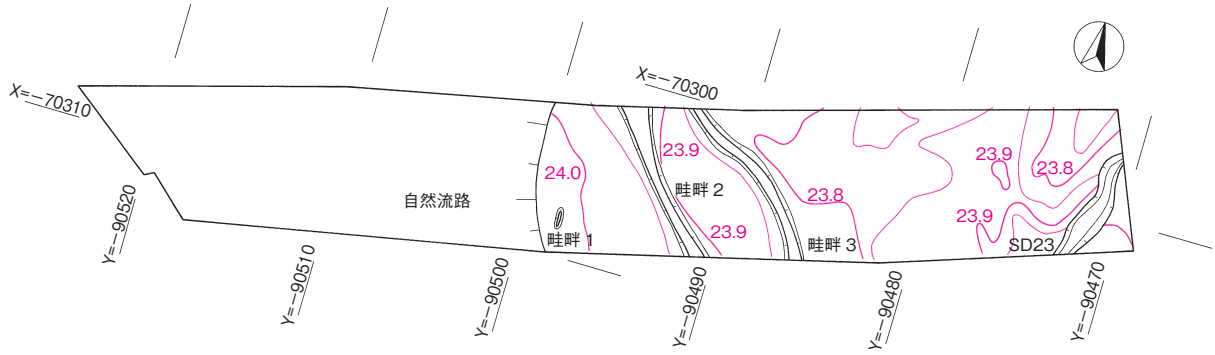
畦畔４は北西から南東に伸びる高さ２～６㎝、幅0.6～0.8ｍで長さ８ｍが確認された。畦畔５とした段は下の水田面と９㎝前後の段状の落差が認められ長さ９ｍが確認された。

土層中には足跡や株痕跡と考えられる窪みが存在したが、畦畔検出を下層の灰色砂礫層（39層）直上で試みたため検出しなかった。水田面は上層水田跡と同様に棚田状に北西へ下っている。

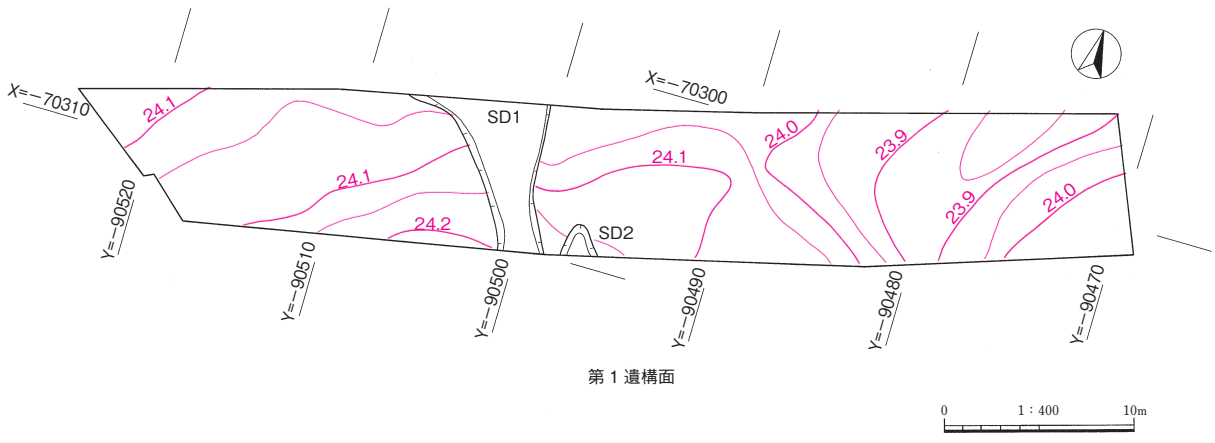
下層水田跡の時期は上層水田跡とほぼ同様な時期（10～12世紀）と推定される。また、この層のプラント・オパールと花粉の土壌分析によると、密度的には少ないものの水田の可能性が示唆されており、ソバ属、ササゲ属などの畑作も行われていたとの結果が出ている。また、本下層水田跡の直下



第 3 遺構面（下層水田跡）

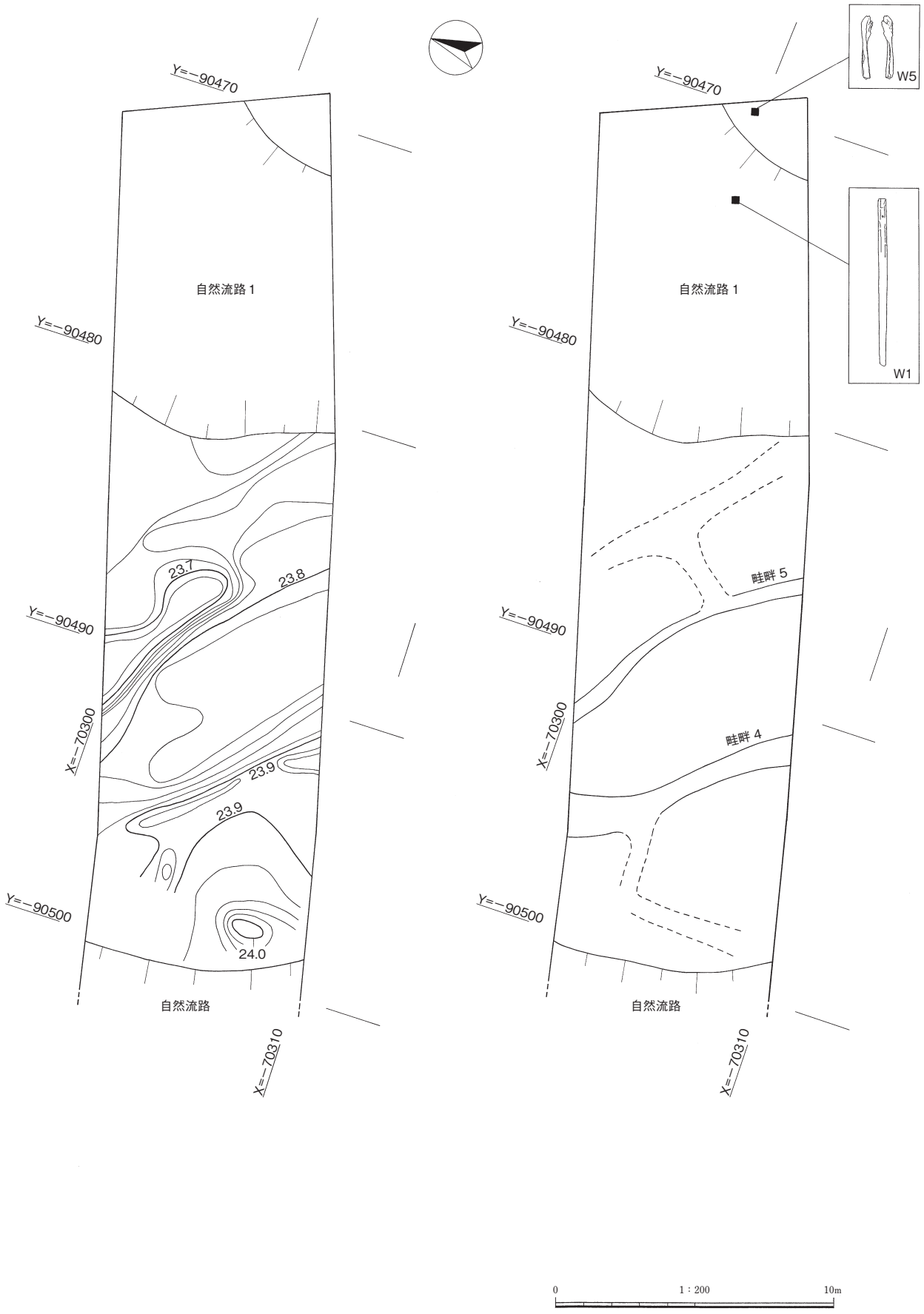


第 2 遺構面（上層水田跡）



第 1 遺構面

第83図　４区遺構分布図



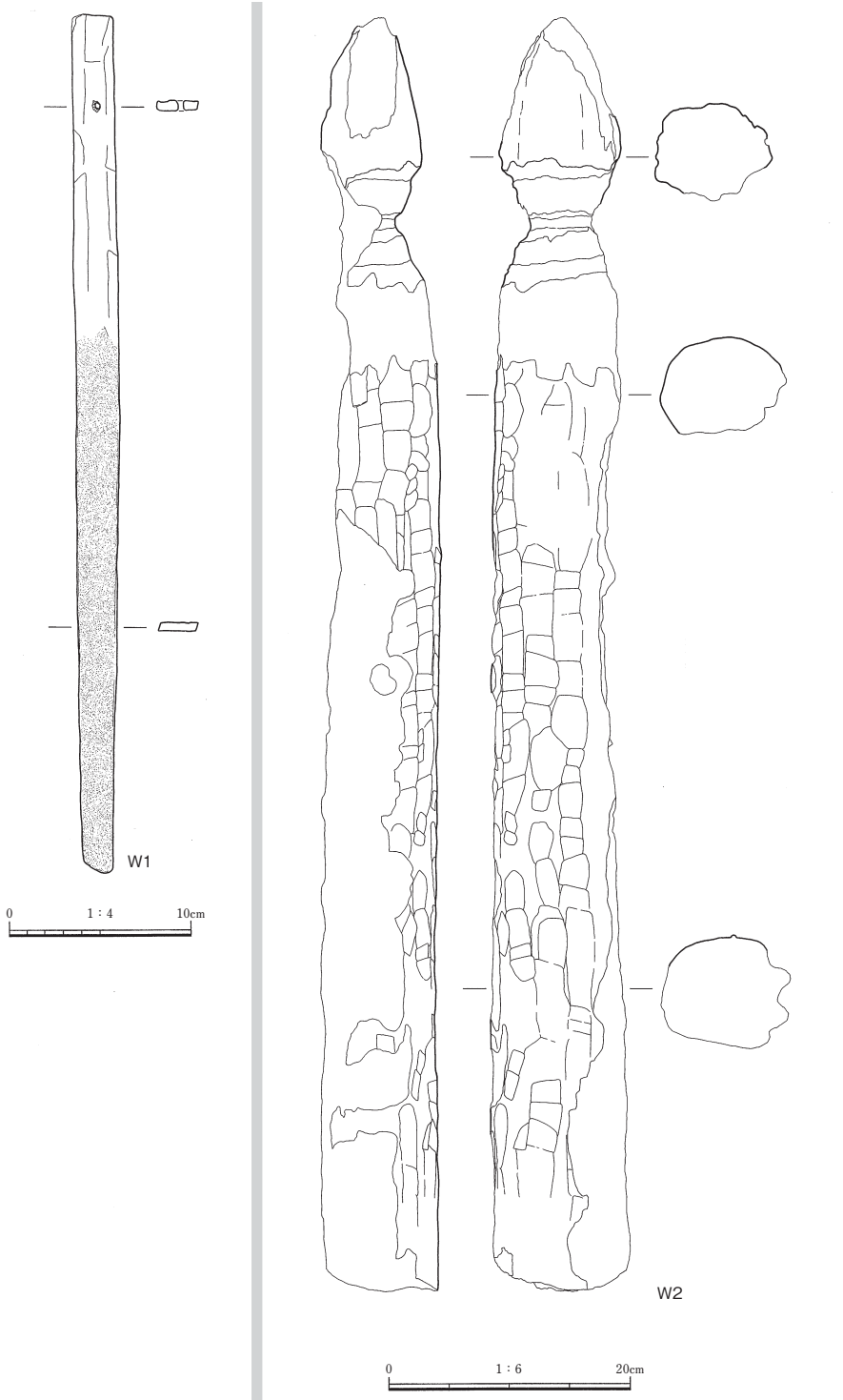
第84図　第３遺構面（下層水田跡）地形測量図及び水田想定図

層の灰色砂礫層（39層）には、一見オモダカ科のクワイの球茎のような植物遺体が多数検出されており、浅い池状の湿潤な環境であったと考えられる。

自然流路１（第83～85図）

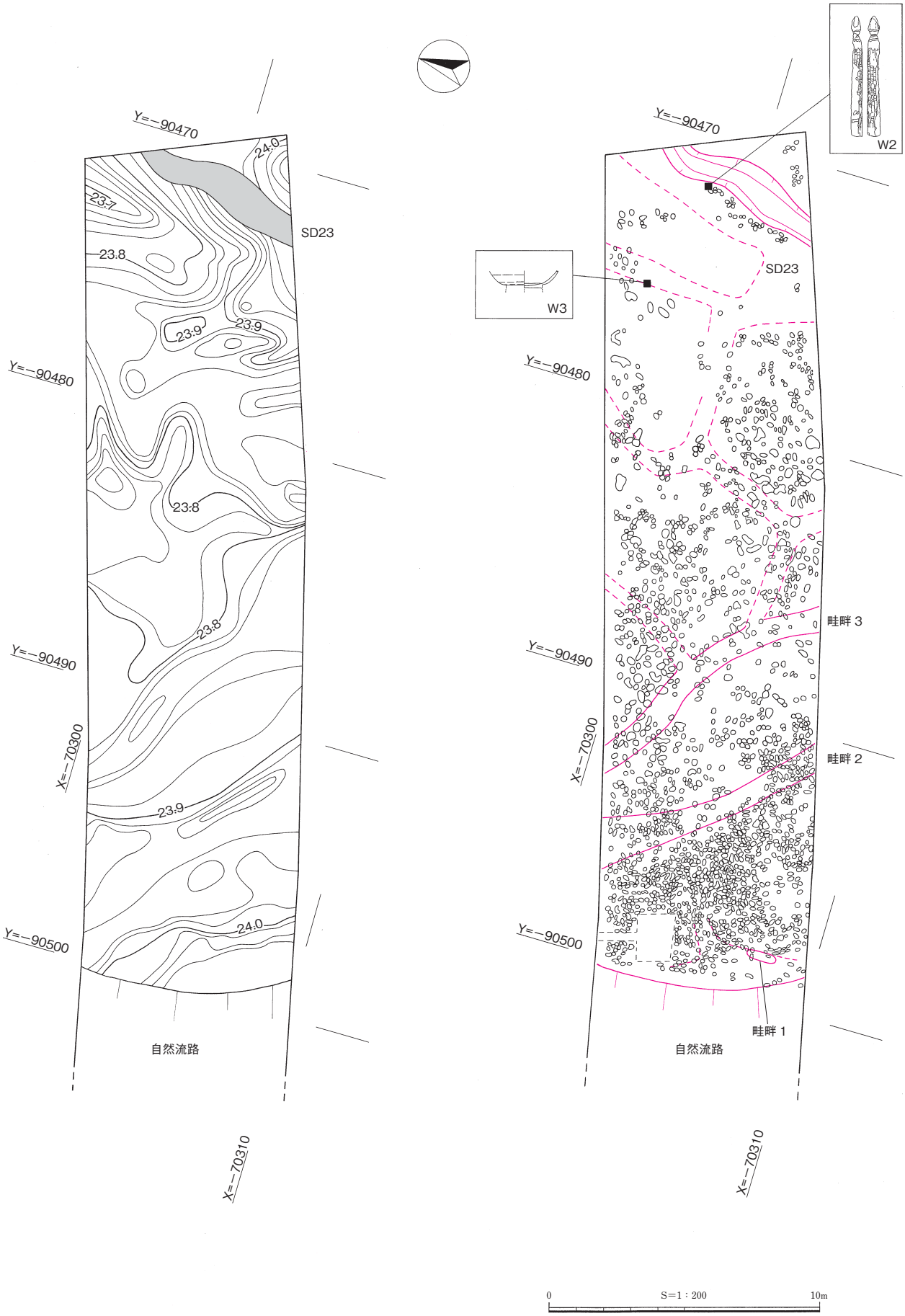
自然流路１は調査区の東端に位置する。南から北へ湾曲してのび、両端はさらに調査区外へのびる。また、東側は３区へとのびると考えられるが、３区では確認できなかった。検出した長さは8.0ｍ、幅9.5～11.5ｍ、検出面からの最大の深さ20㎝を測る。底面の標高は南端が23.617ｍ、北端が23.452ｍで、南から北へ流下する。埋土は砂とシルトが互層状に堆積し、流水があったと考えられる。

本遺構からは木製品が出土した。Ｗ１は長さ47.5㎝、幅2.5㎝、厚さ0.6㎝を測り、上部には孔が１つ穿たれている。表面の下半部には墨が付着しているが、赤外線カメラでの観察の結果、表裏面とも文字等は認められなかった。Ｗ２は長さ104.9㎝、幅11.3㎝を測り、先端部が擬宝珠状に加工されている。樹種はマツ科モミ属である。



第85図　自然流路１出土遺物

本遺構の時期は、水田跡との関連から中世に帰属すると考えられる。

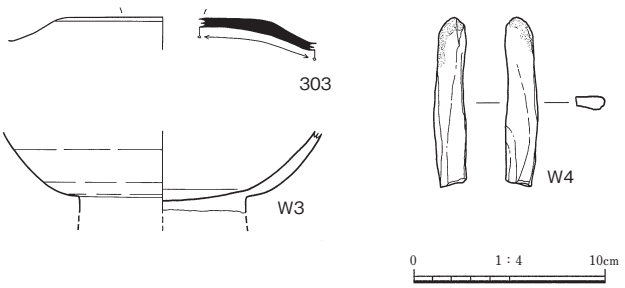


第86図　第２遺構面（上層水田跡）地形測量図及び水田想定図

４．第２遺構面の調査

水田跡（第83、86、87図）

第２遺構面で水田跡を検出した。検出範囲は第２遺構面とほぼ同様の範囲である。水田跡を検出した層位は、現地表の水田面下約70㎝に堆積した淡灰色粗粒砂層（22層）と灰色砂礫層（39層）との間に堆積していた淡黒灰色粘質土層（24層）と暗灰色粘質シルト層（25層）である。この層のプラント・オパールと花粉の土壌分析によると、密度的には少ないものの水田の可能性が示唆されており、ソバ属、ササゲ属などの畑作も行われていたとの結果が出ている。



第87図　水田跡出土遺物

第２遺構面（上層水田跡）は淡灰色粗粒砂層（22層）を徐去した面で検出され、畦畔状の高まりとともに粗粒砂で埋もれた足跡や株痕跡と思われる窪み穴を多数確認した。

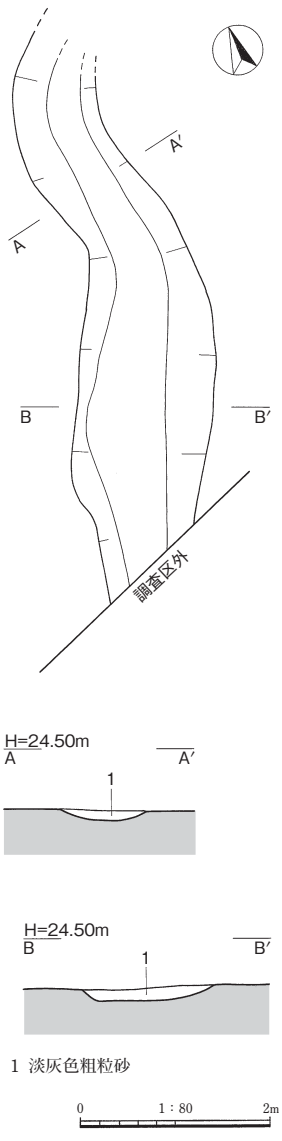
明確な畦畔として確認されたものは畦畔１～畦畔３の３本であるが、２㎝等高線から推定される水田区画は９区画あると考えられ、小区画の水田であった可能性が高い。等高線から推定される畦畔は上層の淡灰色粗粒砂層を堆積した氾濫で削られ消失したと考えられる。

畦畔１は氾濫流路脇に高さ４㎝、幅0.6ｍの若干の高まりが認められた程度あるが、畦畔２は北西から南東に伸びる高さ６㎝、幅0.9ｍで長さ８ｍが確認された。畦畔３は北西から南東に伸びる高さ４～６㎝、幅0.9ｍで長さ９ｍが確認された。

水田面は大まかに３段の棚田状に北西へ下っており、水田面には径10㎝前後の不整な円形や不整な長楕円形の窪みが多数残されていた。その形状から足跡や株痕跡と考えられる。

水田跡からは、ほとんど遺物が検出されなかったが、須恵器坏蓋（303）、木製漆塗椀（Ｗ３）、棒状木製品（Ｗ４）が出土した。303は天井部が残存するのみであるが、つまみを有し、口縁部の返りが消失したものと考えられる。Ｗ３は口縁部と高台が欠損し、底部外面には漆が塗布されていない。樹種はケヤキである。なお､塗膜構造については第４章第６節を参照されたい。Ｗ４は粗雑な加工が施された棒状材で、先端部に焼痕が認められる。火付け木としての使用が窺える。

上層水田跡の時期は水田検出層を覆った淡灰色粗粒砂層中の木片の^{14}Ｃの測定値は10～12世紀の間の測定値を示しており、返りの消失した須恵器坏蓋片（303）と水田シルト層中の漆塗椀（Ｗ３）から見ても大差がないため、10～12世紀の間に営まれた山裾の小規模な水田であったと考えられる。



第88図　ＳＤ２３

ＳＤ23（第88図）

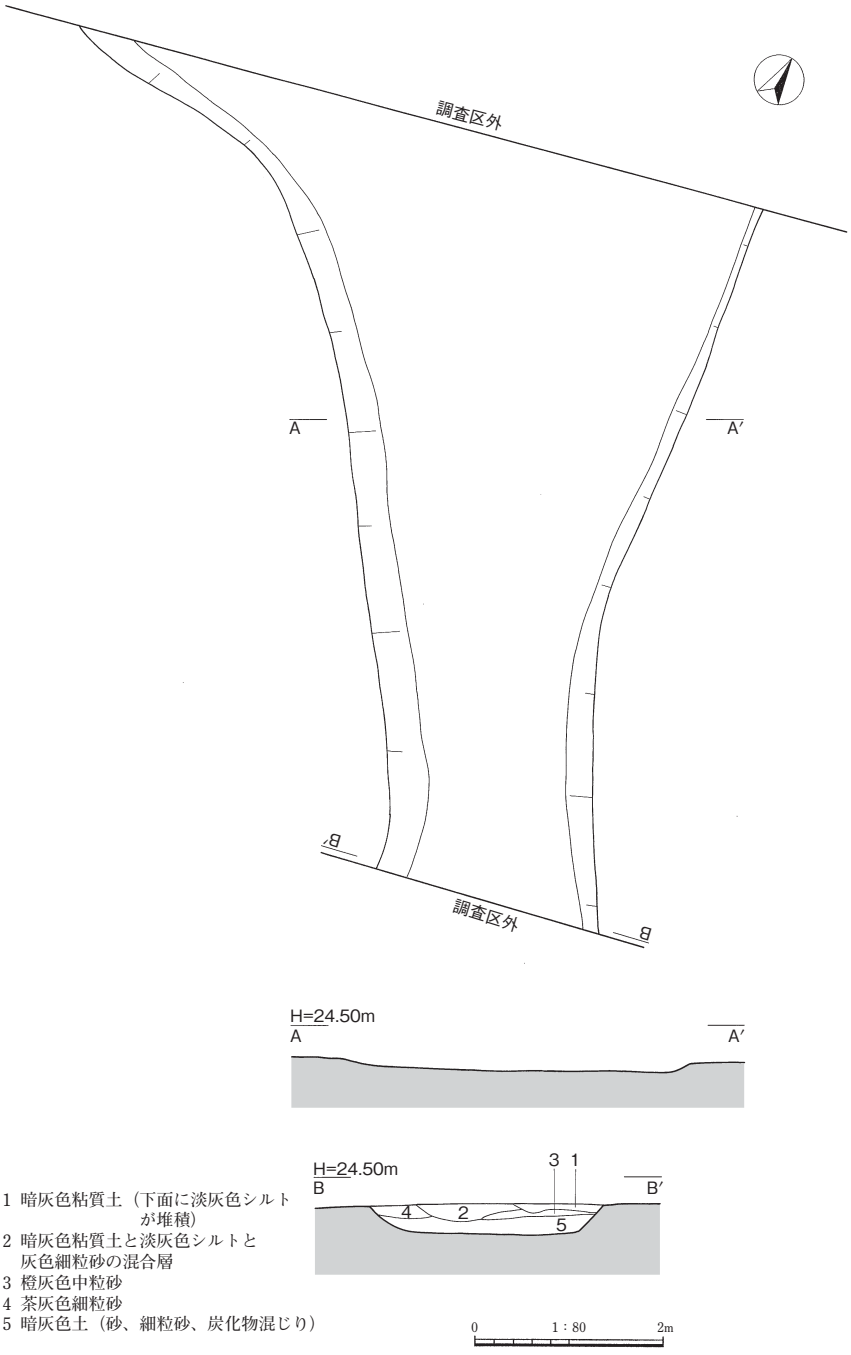
ＳＤ23は調査区の東端に位置する。南から北へＳ字状に蛇行してのび、南側はさらに調査区外へのびる。また、東側は３区へとのびると考えられるが、３区では確認できなかった。検出した長さは6.1ｍ、幅0.8～1.45ｍ、検出面からの最大の深さ15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南端が23.93ｍ、北端が23.68ｍで、南から北へ流下する。埋土は淡灰色粗粒砂の単層で、流水があったと考えられる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から中世に帰属すると考えられる。

５．第１遺構面の調査

ＳＤ１（第89図）

ＳＤ１は調査区の中央やや西寄りに位置する。南東から北西へ「ハ」字状に広がり、両端はさらに調査区外へのびる。



第89図　ＳＤ１

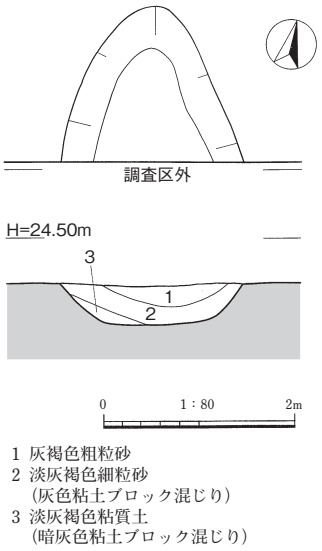
検出した長さは8.5ｍ、幅2.15～7.5ｍ、検出面からの最大の深さ33㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の標高は南東端が24.11ｍ、北西端が24.08ｍで、ほぼ水平である。埋土は、上層は粘質土とシルトが主体で、中層は砂、下層は砂と炭化物が混じる暗灰色土となっており、堆積状況から流水があったと考えられる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から12世紀以降と考えられる。

ＳＤ２（第90図）

ＳＤ２は調査区の中央に位置する。平面形態は楕円形を呈し、南側は調査区外にかかっているため、全容は不明であり、形態的には細長い土坑の可能性もあるが、埋土の状況から溝状遺構と判断した。検出した長さは0.8ｍ、幅0.95ｍ、検出面からの最大の深さ20㎝を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は砂が主体で、下層に淡灰褐色粘質土が認められる。堆積状況から流水があったと考えられる。

本遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、検出面から12世紀以降と考えられる。



第90図　ＳＤ２

６．遺構外出土遺物（第91図）

４区からは弥生時代～近世の遺物が出土した。量的には少なく、調査区西側の灰色砂礫層（39層）からの出土が大半を占める。

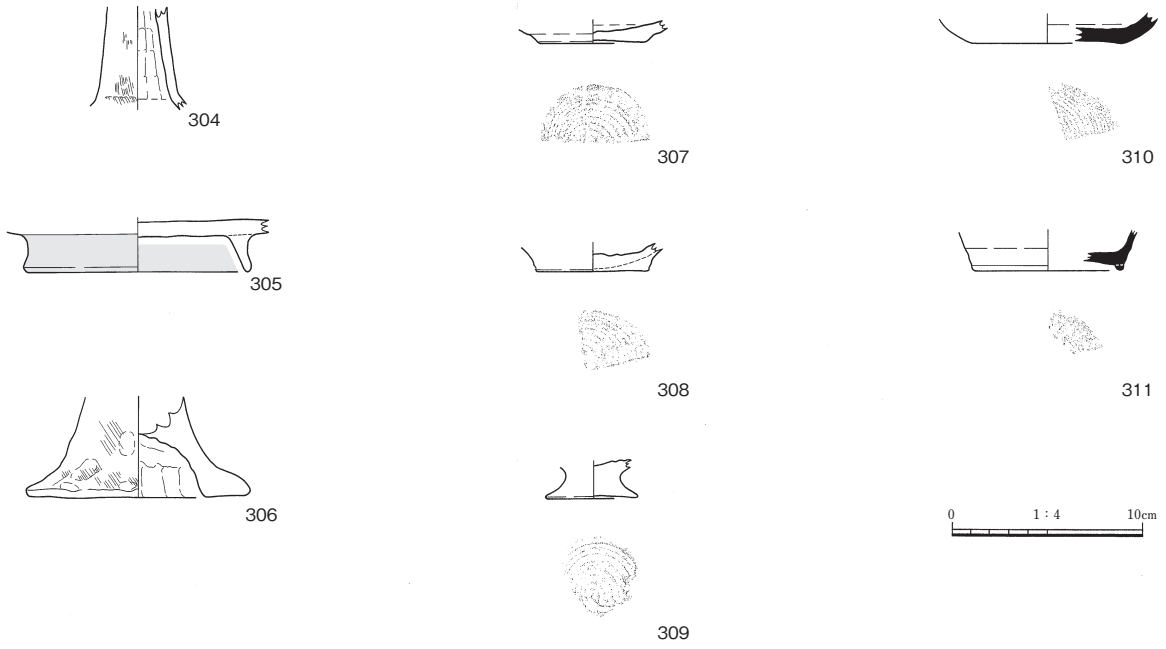
304、305は土師器である。304は高坏の脚部、305は高台を有する坏身で、内外面には赤彩が施されている。306は土製支脚で、底部は上げ底となっている。

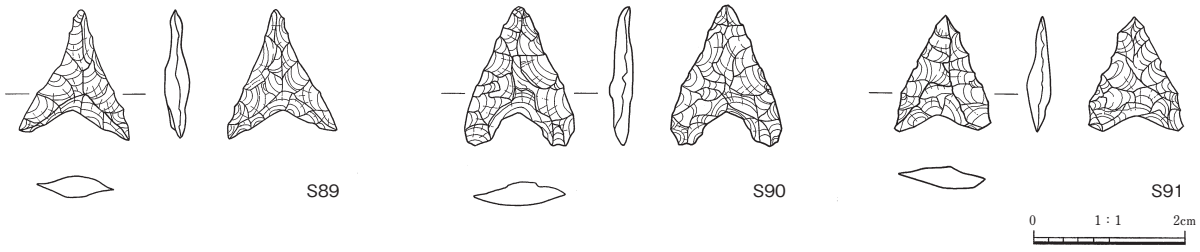
307～309は土師質土器である。307、308は坏身で、いずれも底部外面に回転糸切りが施されている。309は柱状高台で、底部外面に回転糸切りが施されている。

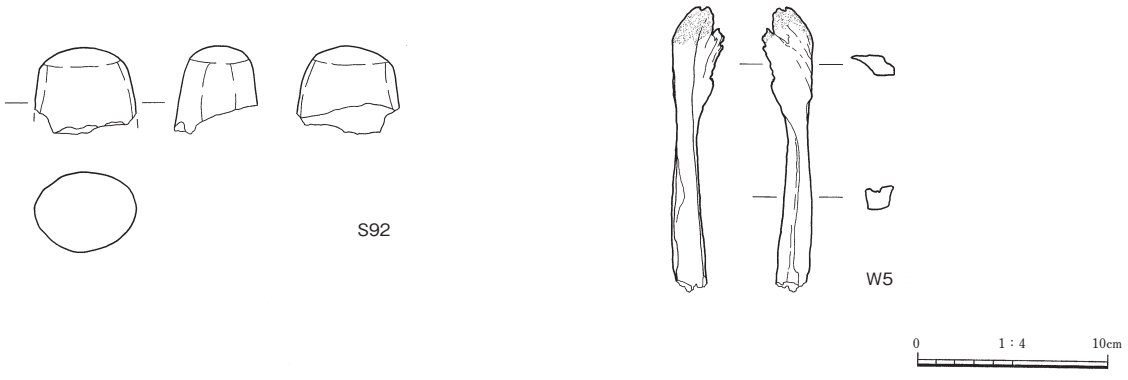
310、311は須恵器坏身である。いずれも底部外面に回転糸切りが施され、311は底部の脇に低い高台がつく。

Ｓ89～Ｓ92は石器である。Ｓ89～Ｓ91は黒曜石製の凹基式の石鏃である。Ｓ92は閃緑岩製の太型蛤刃石斧で、下半部が欠損する。

Ｗ５は粗雑な加工が施された棒状の木製品で、先端部に焼痕が認められる。火付け木としての使用が窺える。







第91図　４区遺構外出土遺物

第４章　理化学的分析

第１節　清水川六反田遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．プラント・オパール分析、花粉分析

１．はじめに

鳥取県西伯郡南部町清水川に所在する清水川六反田遺跡の発掘調査では、中世の水田耕作層、古墳時代後期の溝状遺構、弥生時代前期の溝状遺構さらに縄文時代晩期～弥生時代前期の溝状遺構が検出された。そこで、中世水田耕作層における稲作の検証ならびに周辺植生の検討、また古墳時代後期、弥生時代前期および縄文時代晩期～弥生時代前期の各時期における農耕と周辺植生を検討する目的で、プラント・オパール分析と花粉分析を行うことになった。

２．原　　理

（１）プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生･古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。とくに、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山，1984）。

（２）花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生･環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

３．試　　料

分析試料は、ＳＤ38の暗灰色粘土（第29図の２層、縄文時代晩期から弥生時代前期、試料１）、ＳＤ37の暗灰色粘質土（第26図の３層、弥生時代前期、試料２）、ＳＤ４の淡黒灰色粘質土（第17図の27層、古墳時代後期、試料３）、４区水田耕作層１（第82図の25層、暗灰色粘質シルト、中世：10～12世紀、試料４）、４区水田耕作層２（第82図の26層、暗灰色粘質土、中世：10～12世紀、試料５）、３区水田耕作層（第71図の４層、淡黒灰色土、中世：10～12世紀、試料６）の６点である。

４．分析方法

（１）プラント・オパール分析

プラント･オパールの抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節型は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。

（2）花粉分析

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。
1）試料から１cm³を採量
2）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
3）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
6）再び氷酢酸を加えて水洗処理
7）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
8）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

５．分析結果

（1）プラント・オパール分析

1）分類群

分析試料から検出されたプラント・オパールは、以下のとおりである。
〔イネ科〕
イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）
〔イネ科ータケ亜科〕
メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属など）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他
〔イネ科ーその他〕
未分類等

２）プラント・オパール群集の特徴
①ＳＤ38
イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。チマキザサ節型が優勢であり、次いでメダケ節型が多い。他は低い密度である。
②ＳＤ37
イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。チマキザサ節型が優勢であり、メダケ節型がこれに続く。他はやや低いか低い密度である。
③ＳＤ４
イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。ススキ属型が優勢であり、次いでチマキザサ節型が多い。イネとヨシ属もやや高い密度である。他はやや低いか低い密度である。
④４区水田耕作層１・２
水田耕作層１ではイネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。チマキザサ節型がやや優勢であり、メダケ節型とススキ属型がこれに続く。他はやや低いか低い密度である。
水田耕作層２ではイネ、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。ススキ属型がやや優勢であり、次いでメダケ節型がやや多い。他はやや低いか低い密度である。
⑤３区水田耕作層
イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。チマキザサ節型がやや優勢であり、ヨシ属がこれに続く。他はやや低いか低い密度である。
（２）花粉分析
１）分類群
出現した分類群は、樹木花粉32、樹木花粉と草本花粉を含むもの５、草本花粉30、シダ植物胞子３形態の計70である。これらの学名と和名および粒数を第２表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第93図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真（図版49）に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ツバキ属、エゴノキ属、モクセイ科、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ノアズキ属、ササゲ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

２）花粉群集の特徴

①ＳＤ38

樹木花粉の占める割合が高く、約55％を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属を主に、マツ属複維管束亜属、スギ、クマシデ属－アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、キハダ属などが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的多く、オモダカ属、サジオモダカ属などが伴われ、ササゲ属、ミズワラビがわずかに出現する。

②ＳＤ37

草本花粉が約70％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）とヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科もやや多い。樹木花粉ではスギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。

③ＳＤ４

草本花粉が約70％を占める。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、次いでヨモギ属が多く集塊も認められる。カヤツリグサ科が伴われる。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科もやや多い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、シイ属、ニレ属－ケヤキなどが低率に出現する。

④４区水田耕作層１・２

４区水田耕作層１（試料４、中世：10～12世紀）では樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科が約50％を占め、草本花粉が約35％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主に、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われ、ソバ属、ササゲ属、ミズアオイ属、オモダカ属などがわずかに出現する。樹木花粉ではスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。

４区水田耕作層２（試料５、中世：10～12世紀）では草本花粉の占める割合が高く、約55％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主に、ミズアオイ属、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現し、ソバ属やササゲ属がわずかに出現する。樹木花粉ではスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属－アサダ、シイ属などが低率に出現する。

⑤３区水田耕作層

草本花粉の占める割合がやや高く、約55％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、ミズアオイ属、オモダカ属、ソバ属がわずかに出現する。樹木花粉ではスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属－アサダ、シイ属などが低率に出現する。

６．稲作の可能性と推定される植生と環境

１）ＳＤ38

ＳＤ38の周辺は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が繁茂し、メダケ節やチマキザサ節などのササ類の分布する環境が考えられた。オモダカ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属、ミズワラビなどの水生植物も伴われて生育していた。また、これらの水生植物は水田雑草の性格ももつこと、イネのプラント・オパールとイネ属型花粉が出現することなどから、周辺に水田が分布していた可能性が示唆される。なお、プラント・オパール密度は600個/gと低い値であるが、分析対象が溝内の堆積土であり、水田土壌そのものではないことから、稲作の可能性を否定するものではない。また、わずかではあるがササゲ属が出現し、畑の分布も示唆される。

森林要素としては、コナラ属アカガシ亜属が優占し、基本的にはコナラ属アカガシ亜属を主とし、シイ属を構成要素とする照葉樹林と、スギを主とする針葉樹林、キハダ属、コナラ属コナラ亜属、クマシデ属－アサダ、クリ、エノキ属－ムクノキ、トチノキなどの落葉広葉樹も生育していたと考えられる。スギやキハダ属、エノキ属－ムクノキ、トチノキは、谷沿いなどの湿潤地に分布していたと推定される。

２）ＳＤ37

草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）とヨモギ属が優占することから、堆積地はイネ科、ヨモギ属が生育する乾燥した草地の環境が考えられ、カラムシ、カナムグラなどのクワ科－イラクサ科の草本とメダケ節やチマキザサ節などのササ類も生育していた。イネのプラント・オパールとイネ属型花粉が出現することから、周辺に水田の分布も示唆される。プラント・オパール密度が低いことに関しては、ＳＤ38と同様の理由が考えられる。森林はやや遠方に分布し、スギ林やシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの広葉樹が分布していた。

３）ＳＤ４

草本花粉のイネ科とヨモギ属が優占することから、堆積地はイネ科、ヨモギ属が生育する乾燥した草地の環境が考えられる。カラムシ、カナムグラなどのクワ科－イラクサ科の草本やメダケ節、チマキザサ節などのササ類の生育も認められ、時期は異なるがＳＤ37と類似した環境が示唆される。周辺の森林は、コナラ属コナラ亜属、シイ属、ニレ属－ケヤキなどの広葉樹と、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹が分布していたと考えられる。イネ属型花粉は

低率であるが、イネのプラント・オパールが1.800個/gの密度で検出されていることから、周辺で稲作が営まれていた可能性が示唆される。

４）４区水田耕作層１・２

４区水田耕作層１では、イネのプラント･オパールとイネ属型を含むイネ科花粉に、ミズアオイ属、オモダカ属などの水田雑草の花粉が随伴して出現することから、当該層において水田稲作が営まれていた可能性が考えられる。優占するクワ科－イラクサ科はカラムシ、カナムグラなどの草本と考えられ、水田周囲にカヤツリグサ科、ヨモギ属などとともに生育していたとみられる。また、メダケ節やチマキザサ節などのササ類も周辺に生育していたと思われる。ソバ属、ササゲ属などが出現し、これらを作物とする畑作が行われていたと推定される。

４区水田耕作層２では、４区水田耕作層１と比較して水生植物のミズアオイ属の割合が高く、より湿潤な排水の悪い環境であったとみなされるが、堆積地には水田やソバ属、ササゲ属の畑が分布していたと考えられる。森林は、地域的にスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などの針葉樹やコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属－アサダ、シイ属などの照葉樹や落葉広葉樹が分布していた。

５）３区水田耕作層

イネのプラント・オパールが1,200個/gの密度で検出された。イネ属型花粉の割合が極めて高く、水田雑草のミズアオイ属､オモダカ属が伴われる。こうしたことから､堆積地および周囲は水田であったと推定される。またソバ属がわずかに出現することからソバの畑も分布していたと考えられる。近隣の森林植生は、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属の針葉樹林と、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属－アサダ、シイ属などの落葉広葉樹と照葉樹で構成されていた。

７．まとめ

清水川六反田遺跡においてプラント・オパール分析と花粉分析を実施し、稲作の可能性ならびに周辺植生と環境を検討した。以下に、下部より、植生と環境およびその変遷をまとめる。

１）縄文時代晩期から弥生時代前期（ＳＤ38）

ＳＤ38の近辺には、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が繁茂し、比較的乾燥した草地が分布しており、水田と小規模なササゲ属などの畑が営まれていた。周辺にはコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していた。

２）弥生時代前期（ＳＤ37）

イネ科、ヨモギ属、クワ科－イラクサ科の生育するやや乾燥した草地が拡大し、水田も拡大して分布する。周辺の照葉樹林は大きく減少し、やや遠方にスギ林やシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の広葉樹が分布していた。以後森林要素は大きく変化しない。

３）古墳時代後期（ＳＤ４）

イネ科とヨモギ属の生育するやや乾燥した草地が分布し、前時期と近似する森林植生が分布していた。周辺では水田も営まれていた。

４）中世：10～12世紀（４区水田耕作層１・２）

４区水田耕作層１では、水田の分布が示唆され、ソバ属、ササゲ属などの畑作も行われていた。

５）中世：10～12世紀（３区水田耕作層）

イネ属型花粉の割合が極めて高いこと、イネのプラント・オパールが検出されることなどから、水田の分布が示唆された。また、ソバの畑も分布していた。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.

辻誠一郎（1984）栃木県南部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集.第四紀研究,23，p.21-29

中村　純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書.

古谷・田井（1993）大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石．大阪層群，創元社，p.247-255.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス.東京大学出版会，p.269

安田喜憲・三好教夫（1998）関東地方の植生史.図説日本列島植生史.朝倉書店，p.73-81

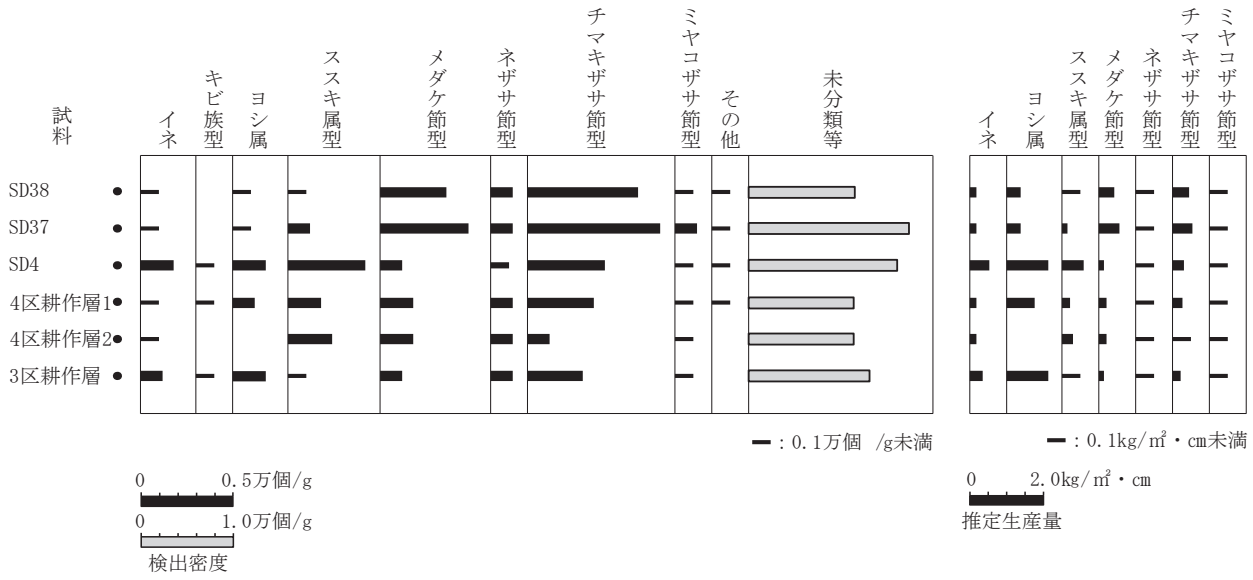
第１表　清水川六反田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

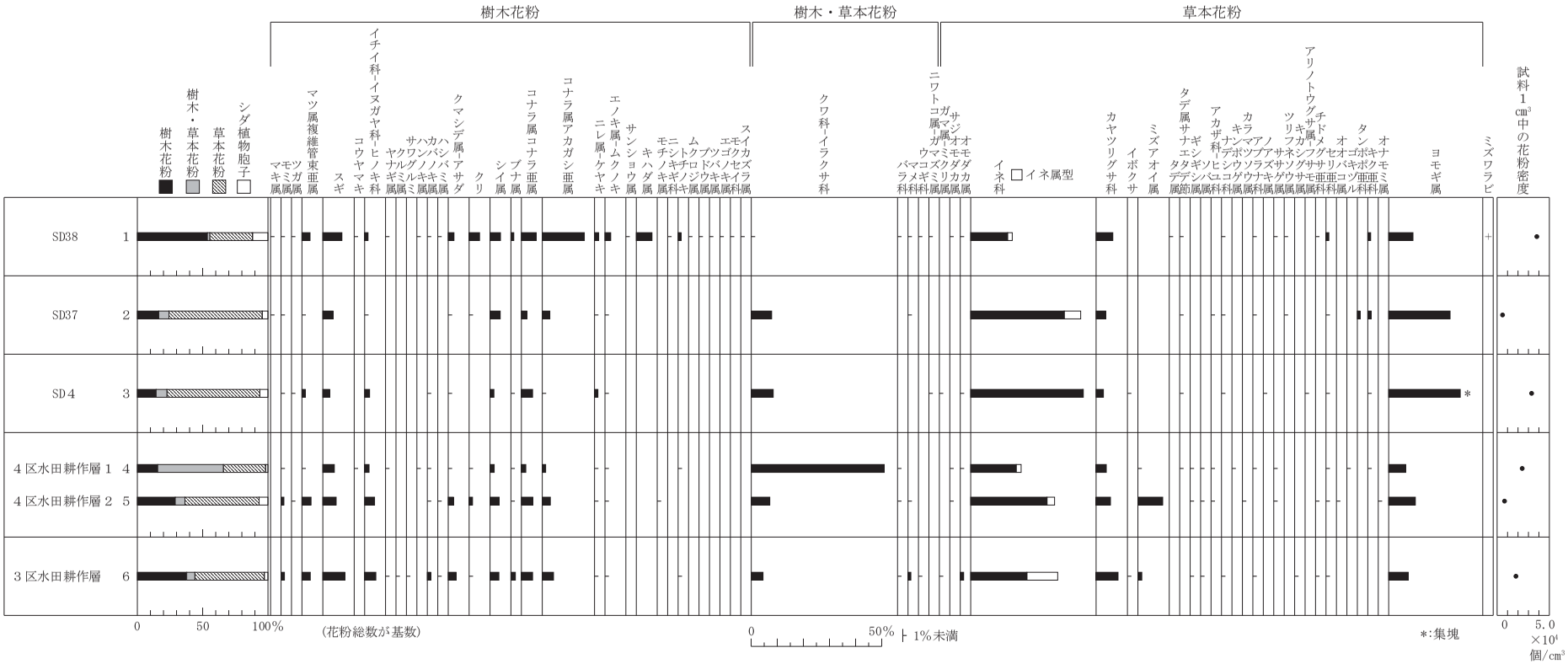
分類群（和名・学名）＼層位		ＳＤ38 No.１	ＳＤ37 No.２	ＳＤ４ No.３	４区耕作層１ No.４	４区耕作層２ No.５	３区耕作層 No.６
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イ　ネ	*Oryza sativa*	6	6	18	6	6	12
キビ族型	*Paniceae* type			6	6		6
ヨシ属	*Phragmites*	6	6	18	12		18
ススキ属型	*Miscanthus* type	6	12	48	18	24	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	36	48	12	18	18	12
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	12	12	6	12	12	12
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	60	72	42	36	12	30
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	6	12	6	6	6	6
その他	Others	6	6	6	6		
未分類等	Unknown	115	174	161	114	114	131
プラント・オパール総数	Total	253	348	323	234	192	233

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イ　ネ	*Oryza sativa*	0.18	0.18	0.53	0.18	0.18	0.35
ヨシ属	*Phragmites*	0.38	0.38	1.13	0.76		1.13
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.07	0.15	0.59	0.22	0.30	0.07
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.42	0.56	0.14	0.21	0.21	0.14
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.06	0.06	0.03	0.06	0.06	0.06
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.45	0.54	0.31	0.27	0.09	0.22
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02



第92図　清水川六反田遺跡のプラント・オパール分析結果



第93図　清水川六反田遺跡における花粉ダイアグラム

第２表　清水川六反田遺跡における花粉分析結果

分類群		ＳＤ38	ＳＤ37	ＳＤ４	４区水田耕作層１	４区水田耕作層２	３区水田耕作層
学名	和名	1	2	3	4	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉						
Podocarpus	マキ属	2	2				
Abies	モミ属	5	1	1	1	5	6
Tsuga	ツガ属	1		1		1	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	17	2	6	6	16	15
Cryptomeria japonica	スギ	40	15	12	28	23	39
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1			1		
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	7	3	9	11	17	20
Salix	ヤナギ属	1			1		2
Juglans	クルミ属						2
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ						1
Alnus	ハンノキ属	4			2		
Betula	カバノキ属	3		1	1	2	6
Corylus	ハシバミ属	1				1	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ	12	3	1	4	9	14
Castanea crenata	クリ	22	2		3	6	3
Castanopsis	シイ属	22	15	7	10	16	16
Fagus	ブナ属	6		2	4	4	8
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	31	8	20	11	20	20
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	88	11	4	8	14	20
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ	9	2	6	3	4	1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ	12	2	1	3	2	4
Zanthoxylum	サンショウ属	2					
Phellodendron	キハダ属	33					
Ilex	モチノキ属					1	
Celastraceae	ニシキギ科	1					
Aesculus turbinata	トチノキ	6			3		3
Sapindus	ムクロジ属	1					
Vitis	ブドウ属	1					
Camellia	ツバキ属	1					
Styrax	エゴノキ属	1					
Oleaceae	モクセイ科	1					
Lonicera	スイカズラ属	1					
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	4	30	39	323	32	21
Rosaceae	バラ科	2			2	3	3
Leguminosae	マメ科	2	1			1	5
Araliaceae	ウコギ科	2					1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属−ガマズミ属	1		2			
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Typha-Sparganium	ガマ属−ミクリ属			1			1
Alisma	サジオモダカ属	3			1	1	
Sagittaria	オモダカ属	1		2	1		6
Gramineae	イネ科	77	137	199	110	132	100
Oryza type	イネ属型	10	24	1	12	13	55
Cyperaceae	カヤツリグサ科	35	14	13	25	25	39
Aneilema keisak	イボクサ			1			2
Monochoria	ミズアオイ属				2	43	7
Polygonum	タデ属	1					
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	2	1	1	1		
Rumex	ギシギシ属				6	2	1
Fagopyrum	ソバ属				1	2	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科		2		2	2	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	2	1			1
Ranunculus	キンポウゲ属				1		
Thalictrum	カラマツソウ属					1	
Cruciferae	アブラナ科	1	2		1		3
Dunbaria	ノアズキ属			1			
Vigna	ササゲ属	1			1	1	
Impatiens	ツリフネソウ属	4	2				
Rotala	キカシグサ属						1
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属−フサモ属			1			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	4				2	1
Apioideae	セリ亜科	6	3	1	2	3	2
Plantago	オオバコ属					1	
Actinostemma lobatum	ゴキヅル				1		
Lactucoideae	タンポポ亜科		4				
Asteroideae	キク亜科	6	5	3	1		
Xanthium	オナモミ属					1	
Artemisia	ヨモギ属	51	90	127＊	41	46	35
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	63	10	29	6	27	6
Celatopteris	ミズワラビ	1					
Trilate type spore	三条溝胞子	9	8	1	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉	332	66	71	100	141	181
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	11	31	41	325	36	30
Nonarboreal pollen	草本花粉	203	286	352	209	275	255
Total pollen	花粉総数	546	383	464	634	452	466
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	3.8 ×10^4	5.7 ×10^3	3.3 ×10^4	2.4 ×10^4	7.1 ×10^3	1.8 ×10^4
Unknown pollen	未同定花粉	14	9	7	9	7	4
Fern spore	シダ植物胞子	73	18	30	11	33	13
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(++)	(+++)		(+)	(+)

＊:集塊

Ⅱ．寄生虫卵分析

１．はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究であり分析例も少ない。

２．試　　料

分析試料は、弥生時代前期のＳＤ37より採取された試料１（第26図の２層、灰褐色粘質土)、試料２（第26図の３層、暗灰色粘質土)、試料３（第26図の４層、灰色砂質土）の３点である。

３．方　　法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

１）試料から１㎤を採量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
４）25％フッ化水素酸を加え30分静置（２・３度混和）
５）水洗後サンプルを２分
６）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
８）検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

４．結　　果

ＳＤ37（試料１、試料２、試料３）では、いずれの試料からも寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった（第３表)。

５．考　　察

弥生時代前期のＳＤ37（試料１、試料２、試料３）ではいずれの試料においても、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。花粉分析では、堆積物１cc中に約14,000個から約670個程度の花粉が検出され、密度は低いものの分解は認められないことから、寄生虫卵のみが分解されたことは考えにくい。したがって、当初より寄生虫卵が堆積していなかったとみなされ、ＳＤ37はヒトの生活からの汚染の影響が低かったと考えられる。

第３表　清水川六反田遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		ＳＤ37		
学名	和名	1	2	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	5.2 $\times 10^3$	1.4 $\times 10^4$	6.7 $\times 10^2$
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(++)	(+)

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金子清俊･谷口博一（1987）線形動物･扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.９-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151-158.

金原正明・福富恵津子・金原正子（2005）糞石の基礎的研究,日本文化財科学会,第22回,p118-119

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

第２節　清水川六反田遺跡における種実同定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

２．試　　料

試料は、10～12世紀と考えられる水田を被覆する洪水堆積層（４区淡灰色粗粒砂層:第82図の22層）から採取された堆積物より水洗選別された種実である。

３．方　　法

同定は、形態的特徴および現生標本との対比によって行い、結果は同定レベルによって科、属、種などの階級で示す。

４．結　　果

（１）分類群

樹木９、草本１分類群が同定される。学名、和名および粒数を第４表に示し、主要な分類群を写真(図版50)に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K.Koch　種子　イヌガヤ科：長さ16.16㎜×幅10.56㎜×厚さ8.30㎜、長さ15.70㎜×幅9.54㎜×厚さ7.96㎜

茶褐色で長楕円形を呈す。表面には顆粒状の隆起がある。断面は両凸レンズ形である。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核　クルミ科：長さ22.83㎜×幅20.70㎜×厚さ19.15㎜

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　堅果　ブナ科：長さ17.85㎜×幅15.20㎜

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　殻斗　ブナ科

殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。

コナラ属　*Quercus*　堅果（未成熟）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

ウメ　*Prunus* mume S. et Z.　核　バラ科：長さ15.52㎜×幅12.62㎜×厚さ9.80㎜

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核　バラ科：長さ25.14㎜×幅20.47㎜×厚さ15.58㎜

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　種子・幼果　トチノキ科：長さ24.27㎜×幅22.92㎜×厚さ21.55㎜

楕円形を呈し、黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

エゴノキ　*Styrax japonica* S. et Z.　核　エゴノキ科：長さ11.71㎜×幅9.12㎜

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

〔草本〕

オモダカ科　Alismataceae　球茎

茶褐色で茎自身が肥大化して球状になったもの。

５．所見とまとめ

清水川六反田遺跡における種実同定の結果、樹木ではイヌガヤ、オニグルミ、イチイガシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、ウメ、モモ、トチノキ、エゴノキ、草本ではオモダカ科が同定された。

ウメ、モモは食用となる栽培植物であり、稲作とともに伝来した。西南日本を中心に多くの遺跡から出土し、弥生時代から古墳時代にかけて多くなる。イチイガシ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属は照葉樹林を構成する主要高木で、イチイガシはカシ類の中で渋抜きなしに食べられる唯一の種類である。イヌガヤは温帯に分布し、森林下の谷周辺などに生育し、適潤性の土壌を好む。オニグルミ、トチノキは温帯を中心に広く分布し、沢沿いなどの湿潤地を好み、ともに食用となる。草本種実であるオモダカ科は抽水植物で浅い池に自生し、変種のクワイは食用となる。

第４表　清水川六反田遺跡における種実同定結果

分類群		部位	4　区
学名	和名		淡灰色粗粒砂層
Arbor	樹木		
Cephalotaxus harringtonia K. Koch	イヌガヤ	種子	2
Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核	1
Quercus gilva Blume	イチイガシ	堅果	1
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	殻斗	1
Quercus	コナラ属	堅果(未成熟)	1
Prunus mume S. et Z.	ウメ	核	1
Prunus persica Batsch	モモ	核	1
Aesculus turbinata Blume	トチノキ	種子	1
Styrax japonica S. et Z.	エゴノキ	核	1
Herb	草本		
Alismataceae	オモダカ科	球茎	2
Total	合計		12

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15－19.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165－174.

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18－22.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.

渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

第３節　清水川六反田遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約６万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、清水川六反田遺跡で検出された炭化材、炭化物および木材を対象に加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代および土層の堆積年代について検討した。

２．試料と方法

測定試料の情報、調製データは第５表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

第５表　測定試料及び処理

試料名	出土箇所	種類	前処理・調整	測定法
№１	４区 淡灰色 粗粒砂層	炭化材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№２	４区 淡灰色 粗粒砂層	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№３	４区 淡灰色 粗粒砂層	炭化材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№４	２区 ＳＤ38底面 直上	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．測定結果

第６表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第94図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

第６表　測定結果

試料名	測定No.	δ^{13}C	暦年較正用年代	^{14}C年代	暦年代（西暦）	
	(PED-)	(‰)	(年BP)	(年BP)	１σ（68.2％確率）	２σ（95.4％確率）
No.１	15067	-27.71±0.19	929±23	930±25	AD1040-1060 (12.5％) AD1070-1160 (55.7％)	AD1030-1160 (95.4％)
No.２	15068	-28.72±0.11	1103±21	1105±20	AD895-920 (27.7％) AD940-980 (40.5％)	AD890-990 (95.4％)
No.３	15069	-27.34±0.14	920±24	920±25	AD1040-1100 (42.8％) AD1110-1160 (25.4％)	AD1030-1180 (95.4％)
No.４	15070	-23.94±0.12	2722±22	2720±20	BC895-830 (68.2％)	BC915-815 (95.4％)

ＢＰ：Before Physics（Present），ＡＤ：紀元前

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．所　　見

清水川六反田遺跡で出土した試料４点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、４区の淡灰色粗粒砂層（第82図の22層）より出土した炭化材２点は、930±25年ＢＰ（２σの暦年代でＡＤ1030～1160年）と920±25年ＢＰ（同ＡＤ1030～1180年）、同じく木材は1105±20年ＢＰ（同ＡＤ890～990年）、２区で検出された溝状遺構（ＳＤ38）より出土した炭化物は2720±20年ＢＰ（同ＢＣ915～815年）の年代値が得られた。

文　　献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

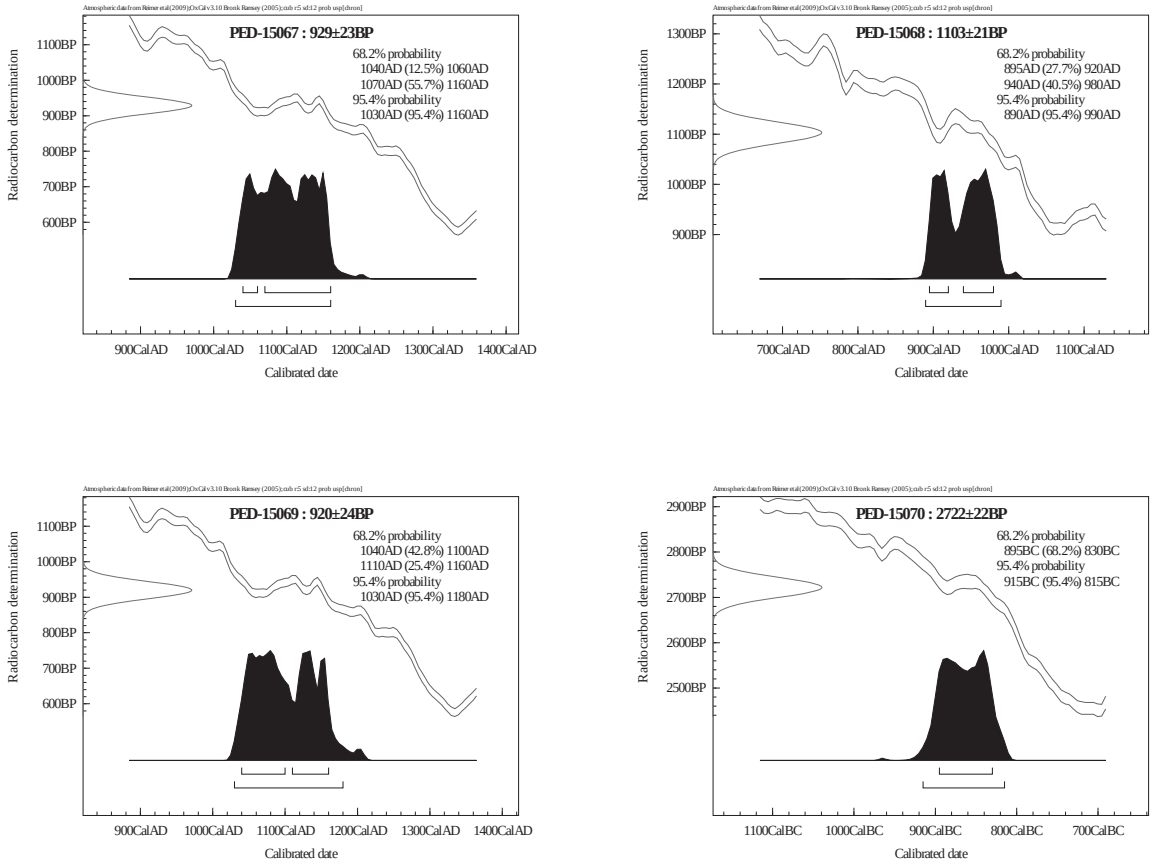
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代, p.3-20.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C.,

Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第94図　暦年較正結果

第４節　清水川六反田遺跡出土木材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試　　料

試料は、清水川六反田遺跡の４区淡灰色粗粒砂層（第82図の22層）より出土した中世（10～12世紀）と考えられる木材５点と、２区ＳＤ38より出土した縄文時代晩期～弥生時代前期の木材１点の計６点である。

３．方　　法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結　　果

第７表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版51・52に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　図版51　写真１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40ｍ、径２ｍに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　図版51　写真２

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、

九州に分布する。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科　図版51　写真３

横断面:小型の道管が､単独あるいは放射方向に数個複合して､ややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は８～25本ぐらいである。放射組織は同性である。道管と放射組織の間の壁孔は極めて小さく密である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、１～３細胞幅ぐらいである。道管相互の壁孔は極めて小さく密に配列する。

以上の形質よりカバノキ属に同定される。カバノキ属にはミズメ、ウダイカンバ、シラカンバ、オノオレカンバなどがある。その内ミズメは本州（新潟県、岩手県以南)、四国、九州（鹿児島県高隈山まで）に分布する落葉の高木である。材は重くて堅く、建築、器具、漆器木地などに用いられる。ウダイカンバ、シラカンバ、オノオレカンバなどの樹種は、主に北海道、本州（中部以北）に分布する落葉の高木または低木である。建築、器具などに用いられる。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版52　写真４

横断面：年輪のはじめにやや大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30ｍ、径２ｍに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸榾木など広く用いられる。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版52　写真５

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15ｍ、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　図版52　写真６

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんど

が平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は１～７細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25ｍ、径60～70㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径３ｍに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

第７表　清水川六反田遺跡出土木材の樹種同定結果

試料番号	出土場所	時　期	結果（学名／和名）	
1	４区　淡灰色粗粒砂層	中世（10～12世紀）	*Betula*	カバノキ属
2	４区　淡灰色粗粒砂層	中世（10～12世紀）	*Salix*	ヤナギ属
3	４区　淡灰色粗粒砂層	中世（10～12世紀）	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
4	４区　淡灰色粗粒砂層	中世（10～12世紀）	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
5	４区　淡灰色粗粒砂層	中世（10～12世紀）	*Zelkova serrata* Makino	ケヤキ
6	２区　ＳＤ38底面直上	縄文時代晩期～弥生時代前期	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節

５．所　　見

清水川六反田遺跡で出土した木材について樹種同定を行った。その結果、中世（10～12世紀）の木材５点は、スギ１点、ヤナギ属１点、カバノキ属１点、クリ１点、ケヤキ１点であった。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。ヤナギ属は耐朽性、保存性は低く、切削、加工の容易な材である。カバノキ属の内の温帯性のミズメと考えられ､材は弾力に富みやや強い材と言える。クリは重厚で保存性が良い材である。ケヤキは概して強く強靱、従曲性に富む材である。スギは温帯に広く分布し、特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する針葉樹である。ヤナギ属は、湿地や河辺などの水辺に生育する落葉高木から低木である。カバノキ属は温帯から亜寒帯の低地から山地に広く分布する落葉の高木から低木である。クリは、温帯に広く分布する落葉高木であり、暖温帯と冷温帯の中間域では純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。ケヤキは、温帯に分布する落葉広葉樹で、谷沿いなどの適潤な肥沃地に生育する。いずれの樹種も温帯域に広く分布する樹種であり、当時遺跡周辺か近隣地域に生育していたと推定される。

縄文時代晩期～弥生時代前期の木材１点は、コナラ属コナラ節であった。コナラ属コナラ節の木材は強靭で弾力に富む。日当たりの良い山野に生育し、温帯を中心に広く分布する落葉高木である。当時遺跡周辺に生育していたと推定される。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第１号, 植生史研究会, p.242

第５節　清水川六反田遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社　吉田生物研究所

１．試　　料

試料は、清水川六反田遺跡から出土した漆塗椀１点（Ｗ３：№１）と棒状木製品１点（Ｗ２：№２）である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡（Nikon DS-Fi１）で観察して同定した。

３．結　　果

樹種同定結果を顕微鏡写真（図版53）に示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

№1（Ｗ３：漆塗椀）　ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）　図版53　写真１

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270μm）が１列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

№２（Ｗ２：棒状木製品）　マツ科モミ属（Abies sp.）　図版53　写真２

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

島地 謙･伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙･伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎･村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ･Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

第６節　清水川六反田遺跡出土漆器の塗膜構造

株式会社　吉田生物研究所

１．はじめに

鳥取県西伯郡南部町清水川に所在する清水川六反田遺跡から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

２．調査資料

調査した資料は、第８表に示す黒色で無文の漆器１点である。

第８表　塗膜構造調査資料

No.	品　名	樹　種*	概　　要
1	漆　器	ケヤキ	内外両面とも黒色で、高台内には漆が塗布されていない椀。

＊：樹種については、第４章第５節を参照のこと。

３．調査方法

第８表の資料本体の内外面から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

４．断面観察結果

塗膜断面の観察結果を第９表に示す。

第９表　断面観察結果表

No.	器種	部位	写真 No.	塗膜構造（下層から）		
				下　地		漆　層　構　造
				膠着剤	混和材	
1	椀	内面	2	柿渋	木炭粉	透明漆１層
		外面	4	柿渋	木炭粉	透明漆１層

塗膜構造：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地：木胎の上に、濃褐色の柿渋に木炭粉が混和された下地が観察された。この下地層の上層部分には、柿渋のみが観察される部分が存在するが、この部分には器表面に垂直な方向に、亀裂が入っている様子が観察された。

漆層：下地層の上に、黄褐色を呈する透明漆層が１層観察された。

５．摘　　要

清水川六反田遺跡から出土した無文の黒色漆器椀１点について、塗膜断面を観察した。内外面とも同様な塗膜構造が観察された。木胎の上に、柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が施され、その上に透明漆が１層重ねられていた。

またこの資料の木胎の樹種はケヤキで、やや大ぶりな形状、底部外面の高台に漆が塗布されていない点などから、12世紀代の年代が与えられる。

第５章　総　　括

第１節　清水川六反田遺跡における遺構の変遷

清水川六反田遺跡では、縄文時代、弥生時代前期、古墳時代後期、中世、近世の遺構・遺物を検出した。また、遺構は確認できなかったが、弥生時代中期～後期、古代の遺物も少量出土した。

本節では、調査成果を基にして、時期毎に遺構の変遷を概観し、まとめとしたい。

縄文時代

縄文時代の遺構は、２区で溝状遺構１基、落し穴２基を検出した。

ＳＤ38は尾根状地形の裾に沿うようにのびている。溝内のプラント・オパール分析の結果と溝内から出土した縄文土器片（第30図　50）に籾状の圧痕が認められることから、周辺に水田の存在が推察される。ＳＤ38には人工的な構造物等は確認できなかったが、以上のことからも、水田の水路として利用されていた可能性がある。なお、花粉分析の結果、周辺ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が繁茂し、ササ類が分布する比較的乾燥した草地が広がり、小規模ながらササゲ属などの畑が営まれていたと考えられる。

ＳＫ３とＳＫ６は遺物が出土していないため、帰属時期は判然としないが、形態的に落し穴と考えられる。尾根状地形の裾部の標高23.4～23.5ｍの等高線に平行するように位置し、両者の間隔は13.8ｍを測る。いずれも0.8ｍ×0.7ｍの隅丸方形を呈し、底面には小ピットを有している。谷状地形部との比高差は0.2ｍ前後で、谷部の水辺に現れる動物を捕獲するためにつくられたと考えられる。

縄文時代から弥生時代への移行期には、周辺でも丘陵裾部の低地に立地する遺跡が散見され、低地への進出という動向が窺える。当遺跡でもこれらと同様に丘陵裾部の低地に居住し、未だ縄文時代の伝統的な狩猟に依存しながらも低地での農耕を指向するという新しい動きが遺構の立地からも窺える。

弥生時代前期後葉

弥生時代前期後葉は、当遺跡の最も中心とする時期で、出土遺物も当該期のものが大半を占める。この時期の遺構は、２区で溝状遺構17基、土坑４基を検出し、さらに遺構の切合関係から２時期（本節では、古段階、新段階と呼称する。）に大別できる。

古段階の遺構にはＳＫ１、２、４、５がある。これらは縄文時代の落し穴と同様に標高23.4～23.5ｍの等高線に平行するように位置し、ＳＫ１とＳＫ４との間隔は7.0ｍ、ＳＫ４とＳＫ２との間隔は6.9ｍとほぼ等間隔である。ＳＫ１、２、４はいずれも検出面からの深さは0.3ｍ前後であるが、平面形態と規模を比べてみると、ＳＫ１は0.8ｍ×0.8ｍの隅丸方形で、前代の落し穴と同様の平面形態と規模であるが、ＳＫ２とＳＫ４は五角形状を呈し、径1.1ｍ前後となっている。また、ＳＫ１からは完形の土器が出土していることからも、時期差あるいは性格の違いが想定される。

これらの土坑の性格は判然としないが、縄文時代の落し穴と同じライン上にあることから、縄文時代に存在したと思われる獣道を意識してつくられたと考えられる。

新段階になると溝状遺構が形成される。ＳＤ37、39、40以外は、標高の高い南側から標高の低い

北側に向かって流下し、形態的にも自然流路と考えられるが、ＳＤ37、39、40は標高23.4～23.6ｍの等高線に平行し、前代のＳＫ１、２、４、５と重複するように位置しており、ＳＤ37、39、40以外の溝状遺構とは性格が異なると考えられる。ＳＤ37、39、40が人為的に形成されたのかは明らかにはできなかったが、尾根状地形上に位置し、等高線に平行してのびていることと、前代の落し穴や土坑と重複するように、しかも同じような位置に溝を複数回形成していることから、この部分を意識して人為的に溝を形成したと考えたい。なお、切合関係からＳＤ37→ＳＤ40→ＳＤ39の変遷が考えられる。

ＳＤ37は長さ9.0ｍしか検出しておらず、その両端は調査区外にのび、溝の全体像は不明であるが、その形状から南東側に存在する空間を囲繞するものと推測されるが、その立地や断面形態から当地域に集中してみられる環濠とは異なるものと考えられる。

当遺跡の２区からは、前期後葉の土器が多量に出土し、石鏃や石鍬、楔形石器などの製品や石器の製作段階で生じた剥片が一定量出土していることから、２区の南東側にこの時期の生活あるいは生産活動の場が存在し、ＳＤ37がその空間を囲繞すると想定されたが、ＳＤ37の寄生虫卵分析の結果からは、人の生活からの汚染の影響が低かったという結果が得られた。清水谷遺跡の環濠からも多量の土器が出土しているが、環濠内には貯蔵穴４基が検出されているのみであることから、ＳＤ37の南東側には竪穴住居跡等の居住遺構は存在せず、清水谷遺跡と同様な状況を呈していた可能性がある。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、溝状遺構35基を検出した。いずれも自然流路と考えられ、土器とともに埴輪が数点出土している。調査地の南東に位置する要害山から派生する支尾根には現在９基の古墳が確認されており、これらから転落して流れ込んだか、あるいは周辺に既に削平された古墳が存在していたと推察される。

中　　世

中世（10～12世紀）には、３区の南西側から４区にかけて水田跡を検出した。

３区では畦畔は確認できなかったが、第２遺構面で棚田状の段状落差（段１）を検出し、その上層の第１遺構面ではこれと重複するように稲株痕や足跡と考えられる無数の小さな窪み穴を検出した。

４区では上下２面の水田跡を検出した。いずれも尾根状地形の緩斜面に沿うようにつくられた棚田状の小区画水田で、調査区が限られているため、全体像は不明であるが、水田の規模は幅2.8～5.8ｍを測る。２㎝等高線から推定される下層水田跡の水田区画は、等高線に沿うように北西－南東方向に長い形状を呈しており、標高の高い南西側では幅が５ｍ前後であるが、標高の低い北東側では幅が３ｍ前後と狭くなっている。

上層水田跡を検出した第２遺構面は、調査区の中央やや東寄りに小さな谷が入り込んでおり、２㎝等高線から推定される水田区画は、いずれも等高線に沿うように南西側では北西－南東方向に、北東側では南西－北東方向に長い形状を呈している。また、水田面上では稲株痕や足跡と考えられる無数の小さな窪み穴を検出したが、列をなすなどの規則性は認められなかった。

なお、花粉分析の結果、稲作とともにソバ属、ササゲ属などの畑作も行われていた可能性があり、下層水田跡の直下層には、オモダカ科のクワイの球茎のような植物遺体が多数検出されている。

第２節　法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代前期の遺跡について

清水川六反田遺跡２区では弥生時代前期の遺物と供にＳＤ37やＳＤ41の溝状遺構や突帯文土器が検出された。このため法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代前期の遺跡の様子を概観することにより、清水川六反田遺跡の弥生時代前期の遺跡の性格を考察してみたい。

１．米子平野域の弥生時代遺跡

米子平野域（註１）の弥生時代遺跡の分布状況は、散布地､包含層等を含めた数で約200か所が確認されている。遺跡数は一時期に限られた短期の遺跡や前期～後期の各期に渉るものなどを１か所と数えた数であるが、土器の散布地や墳墓・集落など性格、規模は様々である。

米子平野域で時期別に弥生時代遺跡の分布状況を見ると、前期の遺跡は約35か所確認されている。代表的な遺跡は低地では水田遺構が発見された目久美遺跡、丘陵地では環濠遺構の清水谷遺跡、諸木遺跡などがある。前期の遺跡の立地は山裾低地や砂丘上、低位台地上という傾向にあり、とくに加茂川水系・法勝寺川水系に多く見られる。

中期の遺跡は約93か所確認されており、代表的な遺跡は低地では前期から引き続いている目久美遺跡、丘陵地では宮尾遺跡や大型掘立柱建物が発見された茶畑山道第１遺跡などである。また下山南通遺跡や藍野遺跡など大山西山麓の高原にも遺跡が出現している。立地的には山裾低地や砂丘上、丘陵斜面、台地上、高原地帯に分布が広がっている。

後期の遺跡は約110か所確認され、低地に立地する遺跡は比較的少なく、中期後半期から引き続いて丘陵地上に営まれる遺跡が多い傾向にある。丘陵地上では青木遺跡、百塚第７遺跡、浅井土井敷遺跡などがある。また後期前半からの妻木晩田遺跡や越敷山遺跡群のような集住形態をとる大規模集落遺跡が、やや高い丘陵地上に出現するという特色が見られる。後期の遺跡は立地的に丘陵地上や台地上に多い傾向にある。

また地勢単位で分布状況を観察すると､東から①名和台地上に分布する名和台地地域。②淀江平野･所子扇状地上に分布する淀江大山地域。③佐陀川流域と丘陵台地上に分布する日野川右岸・佐陀川流域地域。④日野川中流域と大山西山麓の高原上に分布する日野川中流地域。⑤米子市新山を始源とする加茂川流域の小平野と砂丘地、丘陵地上に分布する加茂川・中海地域。⑥法勝寺川下流域の小平野と長者原台地に分布する長者原台地地域。⑦小松谷川流域の小平野と丘陵台地や越敷山に分布する小松谷川流域地域。⑧法勝寺川上・中流の小平野と丘陵台地に分布する法勝寺川上・中流地域。以上のような大まかな８地域に分布がまとまっていると考えられる。

また、遺跡立地と時期的な継続性の面から観察すると、①低地の微高地や山裾に立地し、前期から中期末に営まれた目久美遺跡や口陰田遺跡などの遺跡、②低位丘陵地に立地し、前期から中期前半に営まれた今津岸の上遺跡、諸木遺跡などの環濠遺跡、③丘陵地、高原上に立地し、中期から後期に営まれた下山南通遺跡、藍野遺跡などの遺跡、④丘陵や台地上に立地し、中期中葉から古墳時代まで営まれた青木遺跡や百塚遺跡群などの遺跡、⑤丘陵斜面や山裾に立地し、中期から後期に営まれた東宗像遺跡などの遺跡、⑥やや高い丘陵地上の集落で後期前半から後期末に営まれた妻木晩田遺跡群や越敷山遺跡群などの遺跡、⑦丘陵地上や斜面に立地し、後期後半に営まれた陰田第１遺跡や吉谷中馬場山遺跡などの遺跡の７類型が考えられる。

これらの遺跡の立地的な動向は、従来から言われているように低地から山裾へ、そして丘陵・山稜上の立地へ展開していることを示している。また、遺跡の時期的な継続状況には画期があり、おおまかに前期から中期に継続するものと中期末から後期末・古墳時代初頭に継続するものの大きく２つの傾向が認められる。清水川六反田遺跡は、法勝寺川上・中流の小平野と丘陵台地に分布する法勝寺川上・中流地域にあり、低地の山裾微高地に立地する前期から中期末に営まれた一遺跡であると位置づけられる。

２．法勝寺川上・中流域、小松谷川流域の弥生時代遺跡

当遺跡の所在する小松谷川流域と法勝寺川上中流域の弥生時代遺跡の分布状況を見ると、流域では第10表のように、44か所の弥生時代遺跡が確認される。

まず小松谷川流域では、流域の山裾や丘陵上に遺跡が分布しており、前期には天王原遺跡と諸木遺跡が丘陵上に立地し、両者とも環壕遺跡であり中期以後は営まれていない。また口朝金遺跡、天萬土井前遺跡、大袋丸山遺跡が山裾に立地している。口朝金遺跡では山裾低地の弥生時代後期～古墳時代の水田跡が確認されているが、前期の土器は水路状の溝状遺構の包含層から検出されている。天萬土井前遺跡では前期の遺構は、はっきりしないが土器溜まりから前期の土器が検出され、弥生時代～古墳時代の土坑や溝状遺構が確認されている。大袋丸山遺跡では明確な遺構は確認されず包含層から前期の土器が検出されている。

中期の遺跡は天万遺跡が山裾に立地し、朝金第２遺跡、宮尾遺跡、宮前遺跡、浅井土居敷遺跡、越敷山遺跡群が丘陵上に立地している。朝金第２遺跡では中期の土器包含層と土坑が検出され、宮尾遺跡では環壕から中期初頭の土器が検出されている。宮前遺跡は中期中葉から後葉にかけて営まれた木棺墓群の遺跡である。浅井土居敷遺跡は中期後葉の集落跡で後期まで存続する。越敷山遺跡群は中期後葉から古墳時代初頭にかけて営まれた山稜高地の集落跡群である。

後期の遺跡は丘陵上に立地するものが多く、田住桶川遺跡、田住松尾平遺跡、田住滝山遺跡、荻名第２遺跡など越敷山麓に展開する集落跡である。田住桶川遺跡では後期前半の木棺墓群が確認されている。また朝金小チヤ遺跡では後期末の在地系の特殊器台を出土した墳丘墓が調査されている。

次に法勝寺川の上・中流域でも山裾や丘陵上に遺跡が分布し、前期の遺跡は北方廣畑遺跡、枇杷谷遺跡、清水谷遺跡、境矢石遺跡、境内海道西遺跡、清水川六反田遺跡が確認される。北方廣畑遺跡は丘陵裾台地上にあり、古墳時代前期の集落跡で遺構外に前期末の土器が検出されている。清水谷遺跡は丘陵上に立地する環壕遺跡で環壕から前期の土器が検出されている。枇杷谷遺跡、境矢石遺跡、境内海道西遺跡、清水川六反田遺跡は山裾下斜面から低地に立地している。枇杷谷遺跡は善棚山裾に位置し、突帯文土器と弥生時代前期の土器と土坑が検出され、古墳時代の段状遺構や土坑も確認されている。境矢石遺跡は山裾下斜面から低地にかけて前期の土坑状溝や木棺墓群が確認されると伴に、丘陵上に弥生時代中期～古墳時代にかけて集落が営まれている。境内海道西遺跡は谷裾の包含層から弥生時代前期の土器が出土するが遺構は不明である。丘陵上には弥生時代後期～古墳時代にかけて集落が営まれている。

中期の遺跡は丘陵上に清水谷遺跡、境矢石遺跡、境内海道西遺跡が存続している。

後期の遺跡は丘陵上に立地するものが多く、八金清水田遺跡、八金小ブケ遺跡、北福王寺遺跡、福成石佛前遺跡、福成早里遺跡、境北井埒遺跡などの集落跡が確認されている。

以上のように両河川流域の弥生時代遺跡を概観しても、立地的傾向は低地から山裾へ、そして丘陵・山稜立地へ展開していること、また時期的な継続性も米子平野域の遺跡と同様な傾向が認められることから、法勝寺川上中流域・小松谷川流域の弥生時代遺跡も立地動向などに独自の地域的特色は認められない。

３．突帯文土器と弥生時代前期の遺跡

清水川六反田遺跡では突帯文土器と弥生時代前期の土器の出土が認められた。両河川流域での突帯文土器と弥生土器の出土関係を第10表で概観してみると、突帯文土器と弥生時代前期の土器を出土している遺跡は、小松谷川流域では口朝金遺跡、天王原遺跡、天萬土井前遺跡、大袋丸山遺跡であり、法勝寺川上中流域では清水川六反田遺跡、福成大坪上遺跡、枇杷谷遺跡、才ノ木遺跡、境矢石遺跡である。天王原遺跡を除いて、いずれの遺跡も丘陵裾低地という立地的共通性を持ち、突帯文期の後半から弥生時代前期の時期幅が見られる。突帯文土器を出土し弥生時代前期の土器が認められない遺跡は、小松谷川流域では朝金第２遺跡、金田堂ノ脇遺跡、御内谷向田遺跡、越敷山遺跡群、法勝寺川上中流域では福成早里遺跡が見られる。これらの遺跡の立地は全て丘陵上に立地しており、中期以降に営まれた遺跡である。このことは、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、突帯文土器と弥生時代前期の土器を持つ低地の遺跡のグループと、突帯文土器しか持たない丘陵地の遺跡のグループが存在したと考えられる。これは縄文時代から弥生時代への移行期に、流域でいち早く弥生文化と接触した集団と、そうでない集団が居た状況を物語っているのではないだろうか。清水川六反田遺跡の突帯文土器と弥生時代前期の土器の出土は、弥生文化と接触した集団が、清水川の山裾低地に居住し農耕の営みを始めたことを物語っているのではないかと推察したい。

４．弥生時代前期の溝状遺構について

清水川六反田遺跡２区から発見された溝状遺構ＳＤ37は、その形状から環壕の一部ではないかと想定された。そのため、米子平野域の環壕遺跡例から遺構の検討を行ってみた。

米子平野域の環壕遺構は名和台地地域では大塚岩田遺跡、淀江大山地域では今津岸の上遺跡、妻木晩田遺跡、日野川右岸・佐陀川流域地域では尾高御建山遺跡、尾高浅山遺跡、日下寺山遺跡が確認されている。小松谷川流域では天王原遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡の３遺跡が、法勝寺川上中流域では清水谷遺跡の１遺跡が確認されている。これら10遺跡の営まれた時期は弥生時代前期後葉から中期前葉の時期と後期前葉の時期の２時期に限られている。また、集落を囲っていたと考えられる環壕遺構は尾高浅山遺跡のみである。

法勝寺川上・中流域、小松谷川流域の環壕遺跡の様子を見ると、天王原遺跡は水田面との比高8.3ｍのなだらかな台地上にあり、弥生時代前期末とされる環壕は最大幅1.4ｍ、深さ1.1ｍの断面Ｖ字状で弓状に伸びる溝が長さ44.8ｍ確認されている。環壕規模は45×40ｍの楕円形を呈すると推定されている。環壕内に同時期の竪穴住居跡など居住遺構は発見されず、環壕内外に同時期の貯蔵穴が４基検出されている。諸木遺跡は水田面との比高10ｍのなだらかな台地上に立地し、弥生時代前期末とされる環壕は最大幅２ｍ、深さ1.5ｍの断面Ｖ字状で弓状に伸びる溝が長さ30ｍ前後調査されている。環壕規模、環壕内遺構は工事中発見のため不明である。宮尾遺跡は水田面との比高５ｍで、なだらかな台地上に位置し、弥生時代前期末～中期前葉とされている。環壕は最大幅1.4ｍ、深さ1.2ｍの断面

Ｖ字状で弓状に伸びる溝が長さ30ｍ調査されている。環壕規模は未調査区の試掘の結果44×39ｍの楕円形を呈すると確認されている。環壕内に同時期の遺構は調査区範囲の関係で確認されていない。清水谷遺跡は水田面との比高17ｍの丘稜上にあり、弥生時代前期末～中期前葉とされている。環壕は最大幅2.4ｍ、深さ1.2ｍの断面Ｖ字状で、環状の溝が46×31ｍの楕円形に巡る。環壕内に同時期の竪穴住居跡など居住遺構は発見されず、貯蔵穴が４基検出されている。

このように法勝寺川上・中流域、小松谷川流域の環壕遺跡例は、弥生時代前期後葉から中期前葉の時期の遺跡であり、断面Ｖ字状の溝で環壕内に同時期の竪穴住居跡など居住遺構は確認されていない。また、立地は全て水田面との比高が５ｍ以上のやや高い丘陵台地上にある。このことから清水川六反田遺跡２区の溝状遺構ＳＤ37は時期的には弥生時代前期の溝ではあるが、溝断面形がＶ字状ではないこと、立地が現水田面との比高０ｍという低地にあることなどの違いがみられる。調査区外に伸びていく全体像が不明であることや、流域の環壕遺構との比較からすると、溝状遺構ＳＤ37は環壕遺構とは想定できないとの結論を得た。

註・参考文献

註１）　旧名和町、旧大山町、米子市、南部町、伯耆町の範囲を米子平野域として設定した。

濵田竜彦　2005「山陰地方における縄文時代晩期土器について　－鳥取県、島根県東部を中心に－」『縄文時代晩期の山陰地方』　第16回中四国縄文研究会発表資料　中四国縄文研究会

小原貴樹ほか　1986『目久美遺跡』　米子市教育委員会

中原　斉ほか　1986『下山南通遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団

青木遺跡発掘調査団編　1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　青木遺跡発掘調査団

岩田文章ほか　1996『百塚遺跡群Ⅴ』　淀江町教育委員会

辻　信広　1999『茶畑山道遺跡』　名和町教育委員会

西川　徹ほか　2001『大塚岩田遺跡　大塚塚根遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団

中山和之　1991『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』　淀江町教育委員会

松本　哲ほか　2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』　大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団　大山町教育委員会

太田正康ほか　1994『尾高御建山遺跡　尾高古墳群』　財団法人鳥取県教育文化財団

米子市教育委員会編　1998「尾高浅山遺跡」『米子市文化財ガイド２』　米子市教育委員会

下高瑞哉　2004「日下寺山遺跡」『米子市内遺跡発掘調査報告書』　米子市教育委員会

永田祥二　1956「米子口陰田遺跡」『ひすい２５』　佐々木古代文化研究室

中原　斉ほか　1985『東宗像遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団

杉谷愛象ほか　1984『陰田』　米子市教育委員会

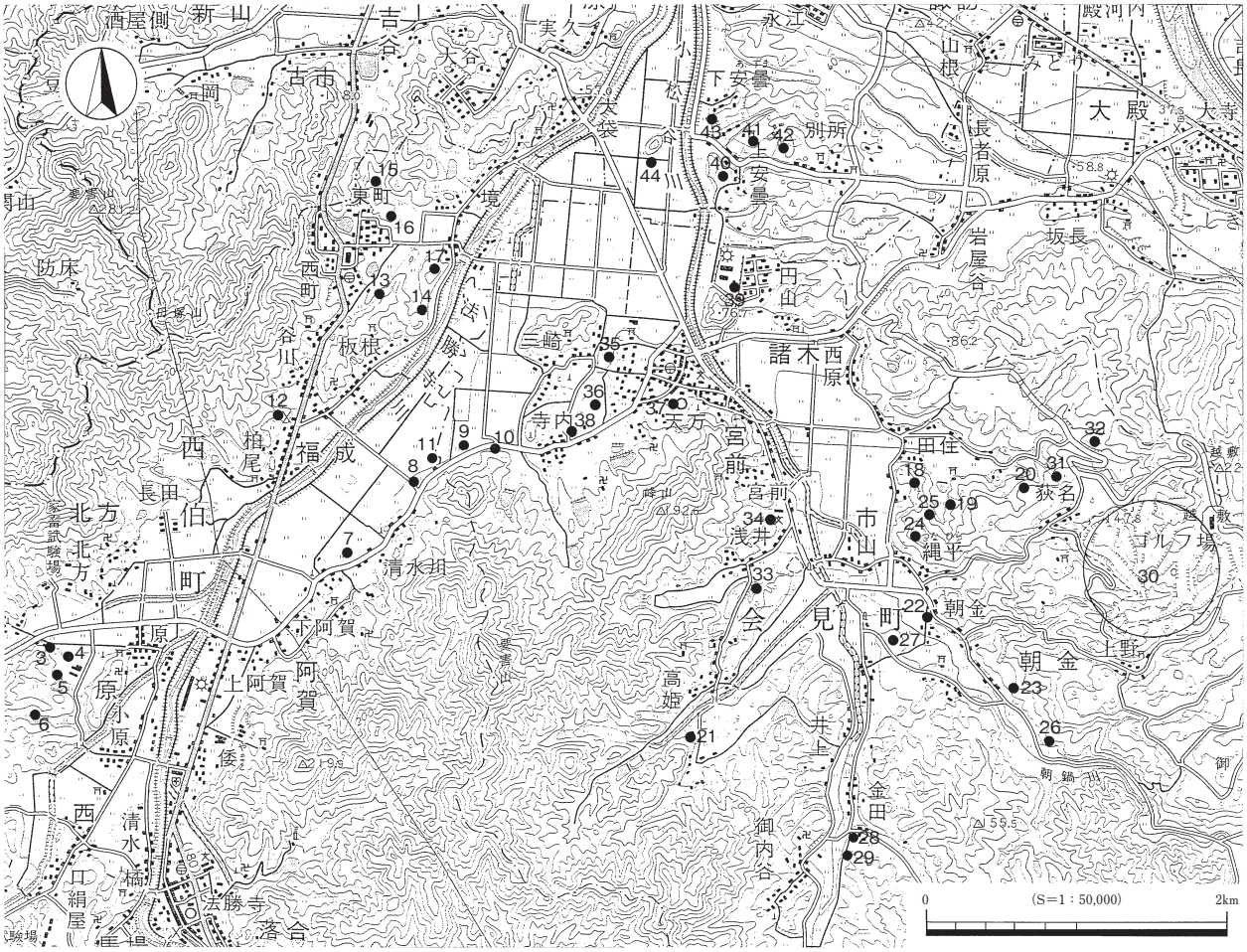
濵　隆造ほか　2003『吉谷遺跡群　吉谷中馬場山遺跡　吉谷屋奈ヶ埒遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団

その他の参考文献は第10表の文献欄のとおり

第10表　法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	突帯文	弥生					種別・遺構	立　地	主な遺物	文　　献	備　　考
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ					
法勝寺川水系													
1	八金清水田遺跡	南部町八金						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	八金小ブケ遺跡　八金清水田遺跡　2005 南部町教育委員会	
2	八金小ブケ遺跡	南部町八金						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	八金小ブケ遺跡　八金清水田遺跡　2005 南部町教育委員会	
3	北方廣畑遺跡	南部町北方		○				○	集落（土坑）	丘陵上	土器	北方廣畑遺跡　1998 西伯町教育委員会	
4	北福王寺遺跡	南部町原						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	マケン堀古墳群　北福王寺遺跡　1990 西伯町教育委員会	
5	マケン堀古墳群	南部町原						○	集落（竪穴・土坑）	丘陵上	土器	マケン堀古墳群　北福王寺遺跡　1990 西伯町教育委員会	
6	原竹山遺跡	南部町原						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	原竹山遺跡　1992 南部町教育委員会	
7	清水川六反田遺跡	南部町清水川	弥	○				○	集落（溝・土坑）	丘陵裾	土器　石器	清水川六反田遺跡現説資料　2009 米子市教育文化事業団	
8	清水川御崎前遺跡	南部町清水川						○	集落（溝・土坑）	丘陵裾	土器	町内遺跡発掘調査報告書　2010 南部町教育委員会	
9	枇杷谷遺跡	南部町寺内	Ⅵ	○					土坑	丘陵裾	土器　石器	枇杷谷遺跡　1987 会見町教育委員会	ドングリ遺体
10	才ノ木遺跡	南部町寺内	○					○	集落（竪穴）	山裾～丘陵	土器	才ノ木遺跡　2002 会見町教育委員会	岡田善治氏教示
11	福成大坪上遺跡	南部町福成	弥	○					集落（溝・土坑）	丘陵裾	土器　石器	埋蔵文化財調査室年報13　2012 米子市教育文化事業団	
12	清水谷遺跡	南部町福成		○	○		○	○	環壕・集落	丘陵上	土器　石器	清水谷遺跡　1992 西伯町教育委員会	環壕
13	福成石佛前遺跡	南部町福成						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器　石器	福成石佛前遺跡　1993 西伯町教育委員会	
14	福成早里遺跡	南部町福成	Ⅵ					○	集落（段状）	丘陵上	土器	福成早里遺跡　1998 鳥取県教育文化財団	
15	境北井埒遺跡	南部町境						○	集落（竪穴・段状）	丘陵上	土器　石器	境北井埒遺跡現説資料　2010 米子市教育文化事業団	
16	境矢石遺跡	南部町境	Ⅵ　弥	○	○		○	○	集落・墓（竪穴・段状・木棺墓）	丘陵裾	土器　石器	境矢石遺跡現説資料　2010 米子市教育文化事業団	
17	境内海道西遺跡	南部町境		○			○	○	集落（竪穴・段状）	丘陵裾	土器　石器	町内遺跡発掘調査報告書　2010 南部町教育委員会	
小松谷川水系													
18	田住桶川遺跡	南部町田住						○	墳墓（土壙墓）	丘陵上	土器	朝金第２遺跡他　1997 鳥取県教育文化財団	越敷山遺跡群
19	田住松尾平遺跡	南部町田住						○	集落（竪穴・段状）	丘陵上	土器	田住松尾平遺跡発掘調査報告書　1995 会見町教育委員会	越敷山遺跡群
20	田住滝山遺跡	南部町田住						○	集落（竪穴・掘立）	丘陵上	土器　石器	田住滝山遺跡　1995 会見町教育委員会	越敷山遺跡群
21	高姫近藤遺跡	南部町高姫						○	集落（竪穴・段状）	丘陵上	土器	高姫近藤遺跡　1988 会見町教育委員会	
22	口朝金遺跡	南部町朝金	Ⅴ　Ⅵ	○	○		○	○	生産（水田・畑）	丘陵裾	土器　石包丁	口朝金遺跡　1988 会見町教育委員会	
23	朝金小チヤ遺跡	南部町朝金						○	墳墓（墳丘墓）	丘陵上	土器	朝金小チヤ遺跡　1995 会見町教育委員会	在地系特殊器台
24	朝金第１遺跡	南部町朝金					○		集落（竪穴・土坑）	丘陵上	土器　石器	朝金第１遺跡　1997 会見町教育委員会	
25	朝金第２遺跡	南部町朝金	Ⅴ			○	○	○	土坑	丘陵上	土器	朝金第２遺跡他　1997 鳥取県教育文化財団	
26	朝金天田遺跡	南部町朝金						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	朝金天田遺跡　1996 会見町教育委員会	
27	天王原遺跡	南部町朝金 南部町金田	弥	○					環壕・陥穴・土坑	丘陵上	土器　石器	天王原遺跡発掘調査報告書　1993 会見町教育委員会	環壕
28	金田堂ノ脇遺跡	南部町金田	Ⅴ					○	包含層	丘陵上	土器	御内谷遺跡群　1998 鳥取県教育文化財団	
29	御内谷向田遺跡	南部町御内谷	Ⅳ			○		○	土坑	丘陵上	土器	御内谷遺跡群　1998 鳥取県教育文化財団	
30	越敷山遺跡群	南部町荻名	Ⅵ				○	○	集落・陥穴	丘陵上	土器　石器	越敷山遺跡群　1994 会見町教育委員会	大規模集落
31	荻名第５遺跡	南部町荻名						○	集落（竪穴・掘立）	丘陵上	土器	荻名第５遺跡　1993 会見町教育委員会	越敷山遺跡群
32	荻名越敷原第２遺跡	南部町荻名						○	集落（竪穴）	丘陵上	土器	荻名越敷原第２遺跡　1998 会見町教育委員会	越敷山遺跡群
33	浅井土居敷遺跡	南部町浅井					○	○	集落（竪穴・掘立・貯蔵穴・墓）	丘陵上	土器　石器	浅井土居敷遺跡現説資料　1981 会見町教育委員会	
34	宮前遺跡	南部町宮前				○	○		集落（竪穴・貯蔵穴・墓）	丘陵上	土器　石器	宮前遺跡　1979 会見町教育委員会	
35	宮尾遺跡	南部町宮尾		○	○				環壕	丘陵上	土器　石器	宮尾遺跡発掘調査報告書　1993 会見町教育委員会	環壕
36	天萬土井前遺跡	南部町天万	Ⅴ　Ⅵ	○		○	○	○	包含層	丘陵裾	土器	天萬土井前遺跡　1996 鳥取県教育文化財団	庄内系土器
37	天万遺跡	南部町天万	○			○			土坑・集落	丘陵裾	土器	宮尾・天万遺跡発掘調査報告書　1977 会見町教育委員会	
38	天万土井刈場遺跡	南部町天万						○	包含層	丘陵裾	土器	町内遺跡発掘調査報告書　2000 会見町教育委員会	
39	諸木遺跡	南部町諸木		○					環壕	丘陵上	土器	諸木遺跡他調査報告　1975 会見町教育委員会	環壕
40	上安曇第１遺跡	米子市上安曇						○	散布地	丘陵上	土器	米子市埋蔵文化財地図　1994 米子市教育委員会	
41	上安曇第４遺跡	米子市上安曇							散布地	丘陵上	土器	米子市埋蔵文化財地図　1994 米子市教育委員会	
42	荒神ノ峰遺跡	米子市上安曇						○	散布地	丘陵上	土器	米子市埋蔵文化財地図　1994 米子市教育委員会	
43	下安曇遺跡	米子市下安曇						○	散布地	丘陵上	土器	米子市埋蔵文化財地図　1994 米子市教育委員会	
44	大袋丸山遺跡	米子市下安曇	Ⅵ	○				○	包含層	丘陵裾	土器　石器	大袋丸山遺跡　1991 米子市教育委員会	朝鮮系無文土器

※　表中の番号は第95図の番号に対応する



第95図　法勝寺川・小松谷川流域の弥生時代遺跡分布図

第３節　清水川六反田遺跡出土の石器について

１．はじめに

清水川六反田遺跡では、総数410点の石器が出土した。これらの石器群との関連のある遺構は未確認であるが、共伴する土器は、弥生時代前期後葉を主体とするもので、当該期における石器製作のあり方を考えるうえでは貴重な資料となるものである。

そこで、本節では、当遺跡出土の石器群の器種・石材の組成について整理し、また、妻木法大神遺跡（大山町）の弥生時代前期の石器群との比較を行い、まとめとしたい。

２．石器の組成

まず、器種別の組成であるが、本遺跡で出土した石器製品類の総数98点のうち、剥片石器が69点（70.4％）を占め、そのうち、石鏃が31点（31.6％）、楔形石器が34点（34.7％）とこの２者で石器製品類全体の66.3％を占める。

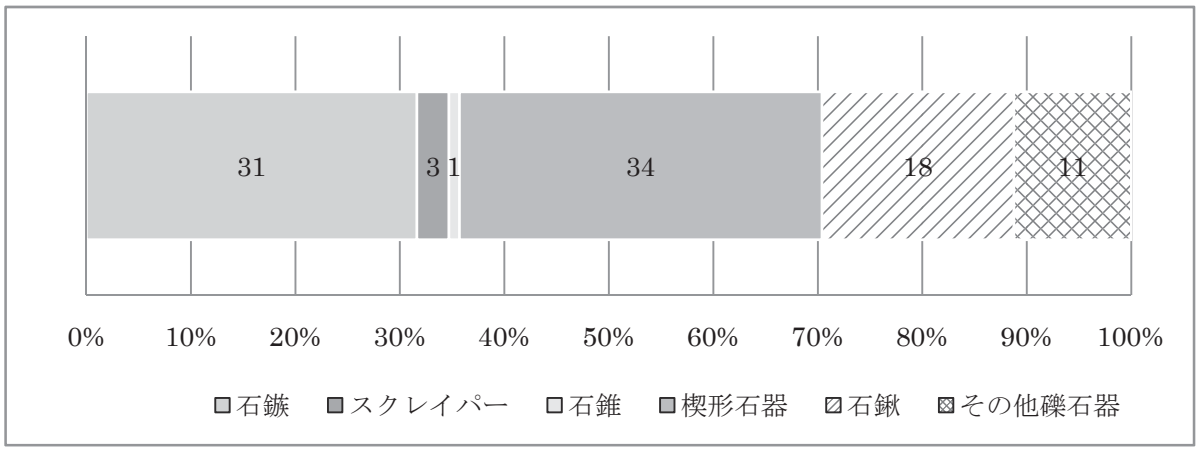
剥片石器には、石鏃（未製品を含む）31点、スクレイパー３点、石錐？１点、楔形石器34点があり、このうち、石鏃が44.9％、楔形石器が49.3％で、両者で94.2％を占め、当遺跡での石器製作の主体は石鏃と楔形石器であるが、楔形石器の比率が高いのが特徴である。

礫石器には、石鏃18点、磨製石斧３点、磨石・敲石２点、台石１点、石庖丁１点、砥石３点、磨製石剣１点があり、このうち、石鏃が62.1％を占め、磨石・敲石6.9％、台石3.4％と合わせると72.4％となり、主に根茎類の獲得、加工を指向するような組成となっている。

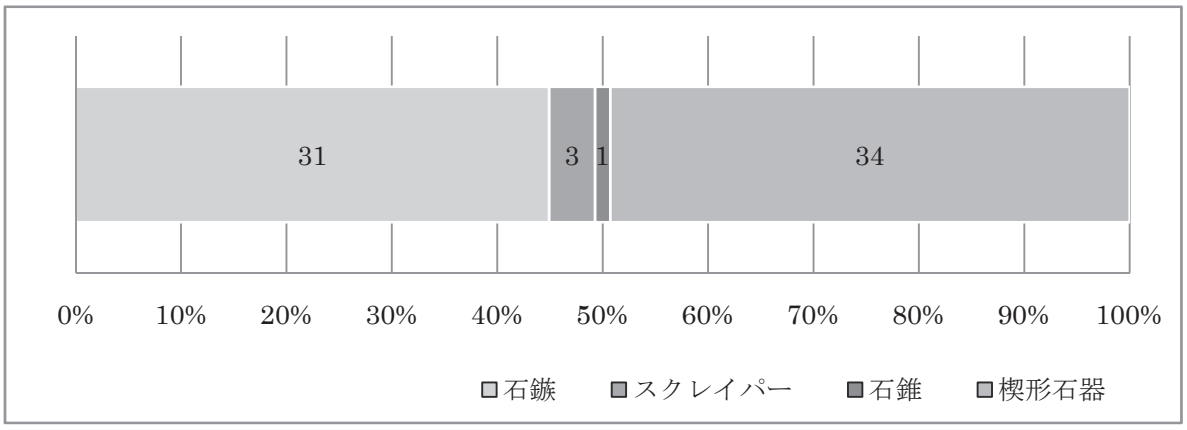
第11表　石器石材別組成表

石　材	製品					剥片			石核	石鏃	磨製石斧	磨石敲石	台石	石庖丁	砥石	磨製石剣	総　数
	AH	AHBk	Sc	Dr	PE	Fl	RF	UF									
黒曜石	49					211			7								267
	18	1	2	0	28	174	15	22	7								
サヌカイト	18					65			0								83
	12	0	1	1	4	65	0	0	0								
玉髄・瑪瑙・鉄石英	2					24			2								28
	0	0	0	0	2	23	1	0	2								
流紋岩	0					1			0								1
	0	0	0	0	0	1	0	0	0								
頁　岩	0					2			0								2
	0	0	0	0	0	2	0	0	0								
砂　岩											2						2
凝灰岩															3		3
凝灰角礫岩													1				1
安山岩										16							16
花崗岩												1					1
粘板岩										1						1	2
デイサイト												1					1
泥　岩										1							1
結晶片岩														1			1
閃緑岩											1						1
総　数	30	1	3	1	34	265	16	22	9	18	3	2	1	1	3	1	410

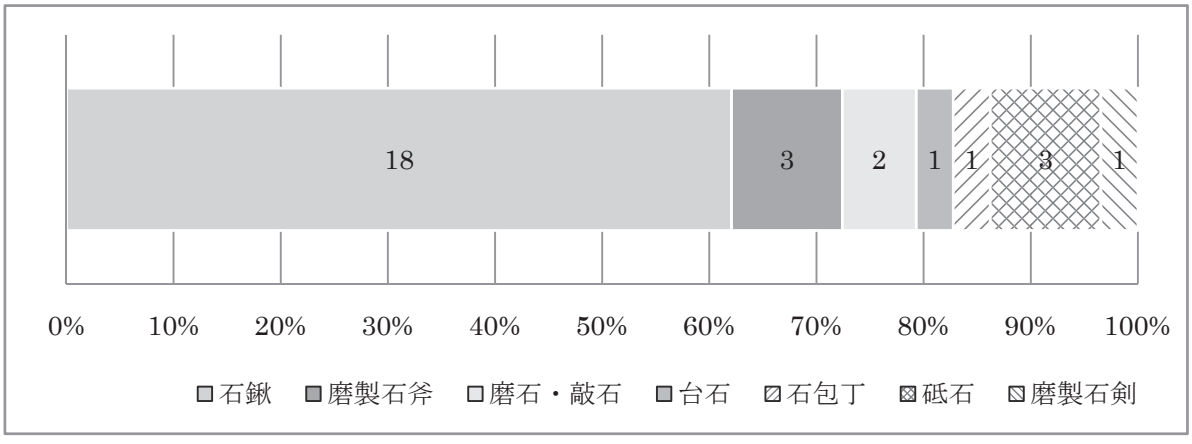
※　ＡＨ：石鏃、ＡＨＢｋ：石鏃未製品、Ｓｃ：スクレイパー、Ｄｒ：石錐、ＰＥ：楔形石器
ＲＦ：加工痕のある剥片、ＵＦ：使用痕のある剥片　Ｆｌにはチップを含む



全体器種組成（製品）



剥片石器器種組成（製品）



礫石器器種組成

第96図　器種組成

次に、石材の組成であるが、本遺跡で出土した石器の総数410点のうち、黒曜石が267点（65.1％）、サヌカイトが83点（20.2％）を占め、本遺跡では石材の大部分が黒曜石とサヌカイトで構成され、黒曜石が主として用いられていたことがわかる。

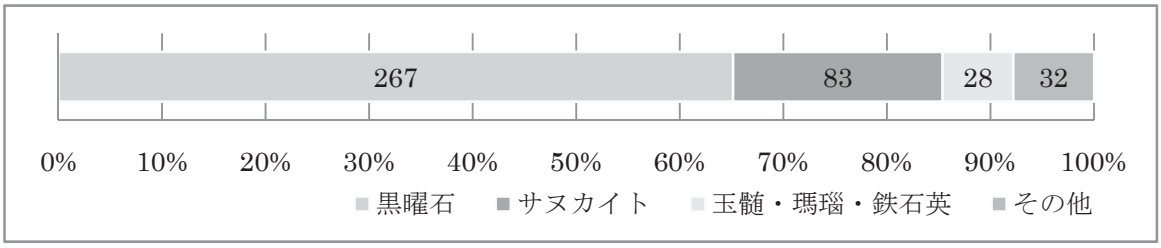
さらに、石材毎に器種の組成を見てみると、まず、黒曜石製の石器であるが、総数267点出土しており、このうち、剥片と石核が218点（81.6％）を占め、当遺跡周辺で石器製作が行われていたのは明らかである。また、加工痕のある剥片（ＲＦ）が15点、使用痕のある剥片（ＵＦ）が22点と剥片に対して一定の割合を有している。

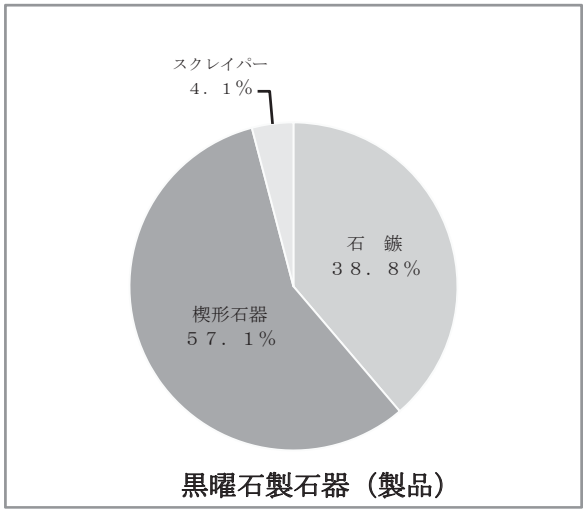
定形器種では小型器種が卓越し、石鏃、楔形石器、スクレイパーがあり、総数は49点である。そのうち、石鏃が未製品を含めると19点（38.8％）、楔形石器が28点（57.1％）を占め、石鏃と楔形石器に偏る傾向にあるが、楔形石器の方が優勢である。

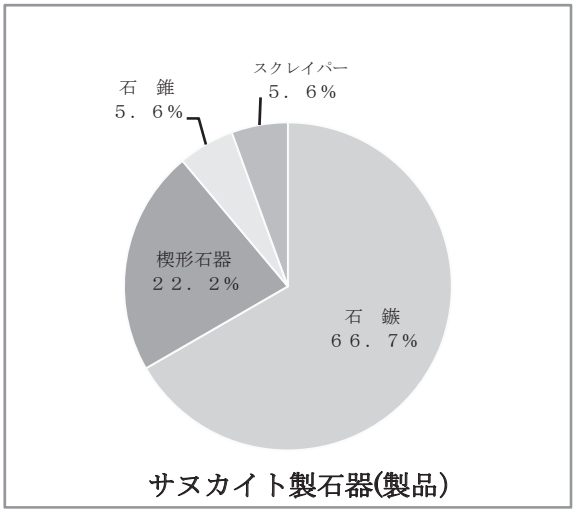
サヌカイト製の石器は、総数83点出土している。このうち、剥片が65点（78.3％）を占め、黒曜石と同様に当遺跡周辺で石器製作が行われていたのは明らかである。なお、加工痕のある剥片（ＲＦ）と使用痕のある剥片（ＵＦ）は１点も出土していない。

定形器種では小型器種が卓越し、石鏃、楔形石器、石錐？、スクレイパーがあり、総数は18点である。そのうち、石鏃が12点（66.7％）、楔形石器が４点（22.2％）と石鏃に偏る傾向にある。出土点数が少ないので比較はしがたいが、黒曜石製とは相反的な状況である。

礫石器を除いた黒曜石とサヌカイト以外の石材は、31点が出土している。石材には玉髄、瑪瑙、鉄石英、流紋岩、頁岩があり、製品としては楔形石器２点がある。また、残滓類である石核が２点、剥片が26点出土していることからも、僅かながらもこれらの石材を用いた石器製作が窺える。







第97図　石材組成及び石材別器種組成

３．妻木法大神遺跡出土の石器との比較

つづいて、妻木法大神遺跡から出土した弥生時代前期の石器との比較、検討を行いたい。

妻木法大神遺跡は、西伯郡大山町に所在し、現在の海岸線から約1.8㎞離れた標高30～35ｍの扇状地上に位置する。１区では縄文時代～近世の遺構、遺物が確認されているが、このうち、自然河道ＳＤ１は縄文時代後期～弥生時代前期に帰属するもので、その上層からは弥生時代前期の土器と共伴して石鏃16点、スクレイパー２点、石錐４点、石鏃17点、磨製石斧２点、敲石・磨石５点、石皿２点、石鎌１点、石錘２点が出土している。

まず、剥片石器の定形器種の組成であるが、妻木法大神遺跡では、石鏃が72.7％を占めているのに対して清水川六反田遺跡は44.9％と少ない。これは清水川六反田遺跡では楔形石器が49.3％と約半数を占めていることが反映していると考えられる。なお､妻木法大神遺跡では楔形石器は認められない。

以上のことから、剥片石器については、両遺跡ではスクレイパーと石錐を僅かに製作しながら、清水川六反田遺跡では、石鏃と楔形石器の両方を主体として製作していたと考えられ、これに対して、妻木法大神遺跡では、石鏃の製作を主体としていたと考えられる。

次に、礫石器の器種組成であるが、妻木法大神遺跡では石鏃が58.6％、清水川六反田遺跡では石鏃が62.1％と似通った比率を示している。その他に両遺跡とも敲石・磨石、石皿、台石が一定量出土しており、石鏃と合わせると、妻木法大神遺跡では82.7％、清水川六反田遺跡では72.4％を占めており、主に根茎類の獲得、加工を指向するような組成となっている。また、妻木法大神遺跡では石鎌が１点、清水川六反田遺跡では石庖丁が１点出土しており、稲等の茎植物の収穫も窺える。このように両遺跡の礫石器の組成は根茎類の獲得、加工を指向した石器を主体とし、僅かながらも稲等の茎植物の収穫用の石器が認められるという共通性がある。しかし、妻木法大神遺跡では石錘が２点、清水川六反田遺跡では砥石が３点と僅かではあるが出土しており、両遺跡の立地や生業形態の相違を示唆すると考えられる。

４．石鏃について

つづいて、出土石器に占める割合の高い石鏃について比較、検討を行いたい。なお、ここでは平成23・24年度に発掘調査を実施した福成大坪上遺跡から出土した石鏃も比較対象に加えたい。福成大坪上遺跡は、清水川六反田遺跡の北東約400ｍに位置し、弥生時代前期に帰属する石器が出土している。

まず、各遺跡の石材の組成であるが、清水川六反田遺跡では、未製品も含めて31点の石鏃が出土し、その内訳は黒曜石製が19点（61.3％）、サヌカイト製が12点（38.7％）である。

妻木法大神遺跡では、16点の石鏃が出土し、その内訳は黒曜石製が12点（75.0％）、サヌカイト製が４点（25.0％）である。

福成大坪上遺跡では、未製品も含めて16点の石鏃が出土し、その内訳は黒曜石製が10点（62.5％）、サヌカイト製が６点（37.5％）である。

石材の組成比率をみると、清水川六反田遺跡と福成大坪上遺跡は同じような比率を呈しているが、妻木法大神遺跡はこれらに比べると黒曜石の比率が高い。当然､時期差も考慮しなければならないが、いずれの遺跡も石材の産地同定を実施していないため断定はしかねるが、黒曜石は隠岐産と仮定した場合、妻木法大神遺跡は沿岸部に位置していることから、立地の優位性による黒曜石の入手の在り方が背景にある可能性がある。

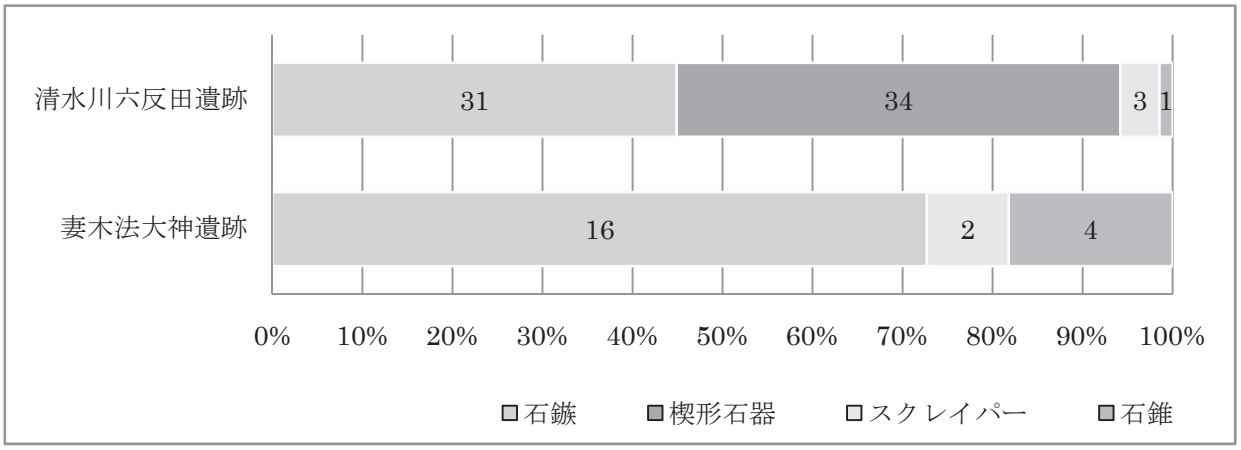
次に、石鏃の型式組成を比較してみたい。型式分類は、抉りの深い凹基式をⅠ類、抉りの浅い凹基式をⅡ類、凸基式をⅢ類、平基式をⅣ類とする。

清水川六反田遺跡では、Ⅰ類が９点（34.6％）、Ⅱ類が15点（57.7％）、Ⅲ類が１点（3.8％）、Ⅳ類が１点（3.8％）出土している。

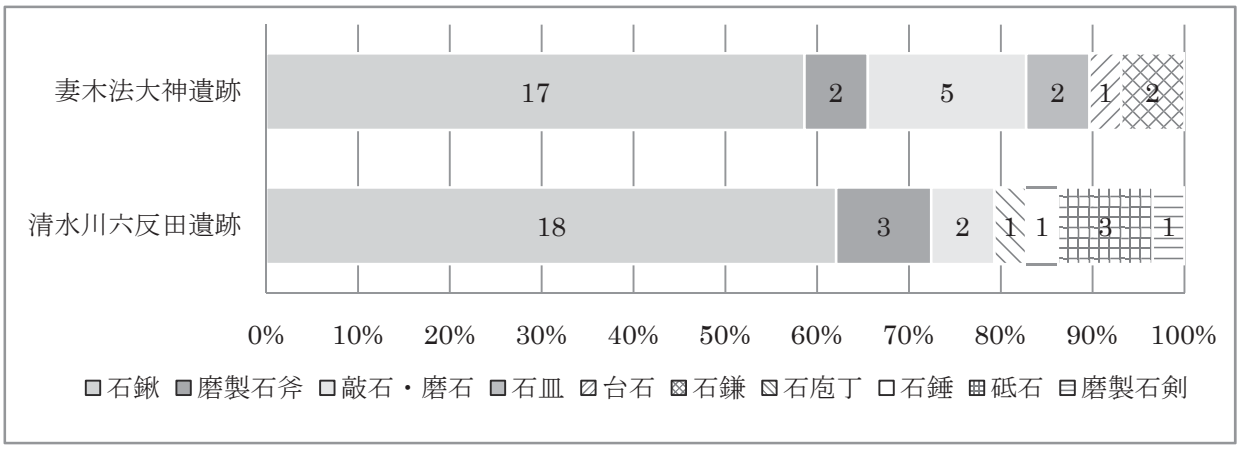
妻木法大神遺跡では、Ⅰ類が10点（62.5％）、Ⅱ類が６点（37.5％）出土しているが、Ⅲ類とⅣ類は認められない。

福成大坪上遺跡では、Ⅰ類が８点（57.1％）、Ⅱ類が２点（14.3％）、Ⅳ類が４点（28.6％）出土している。いずれの遺跡もⅠ類とⅡ類の凹基式が主体であるが、妻木法大神遺跡と福成大坪上遺跡ではⅠ類が60％前後を占め、これに対して、清水川六反田遺跡ではⅡ類が57.7％と相反的な状況である。

清水川六反田遺跡と妻木法大神遺跡を比較すると、Ⅰ類とⅡ類が相反的な状況であり、妻木法大神遺跡ではⅢ類とⅣ類が認められないのに対して、清水川六反田遺跡ではⅢ類とⅣ類が１点ずつ認められる。福成大坪上遺跡はⅠ類の組成が妻木法大神遺跡と似通った比率を呈しているが、Ⅳ類の比率が高く、Ⅳ類はサヌカイト製の比較的大型の石鏃にのみ認められるという傾向がある。

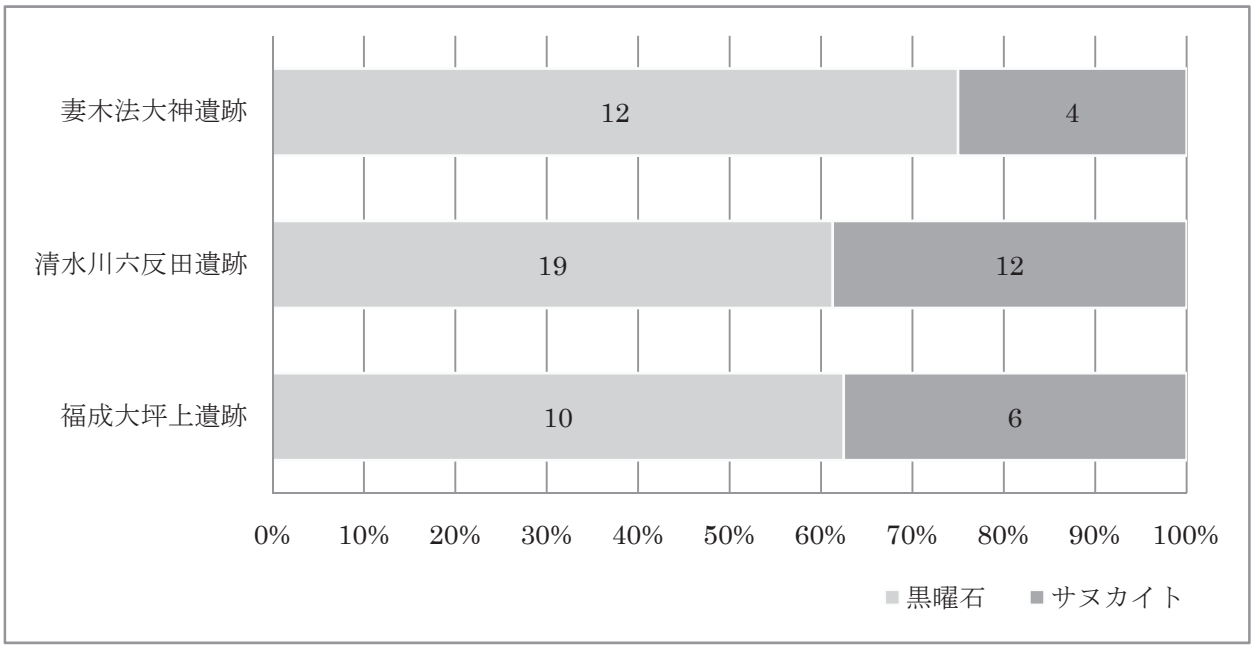


剥片石器（製品）

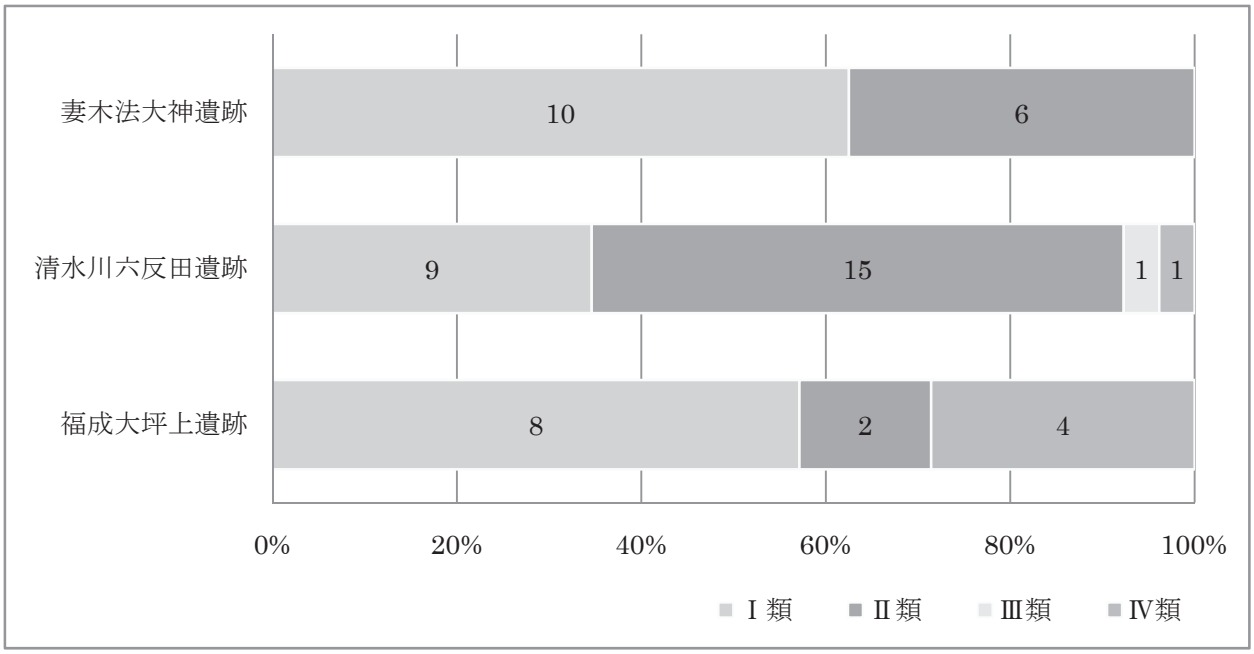


礫石器

第98図　清水川六反田遺跡と妻木法大神遺跡における器種組成



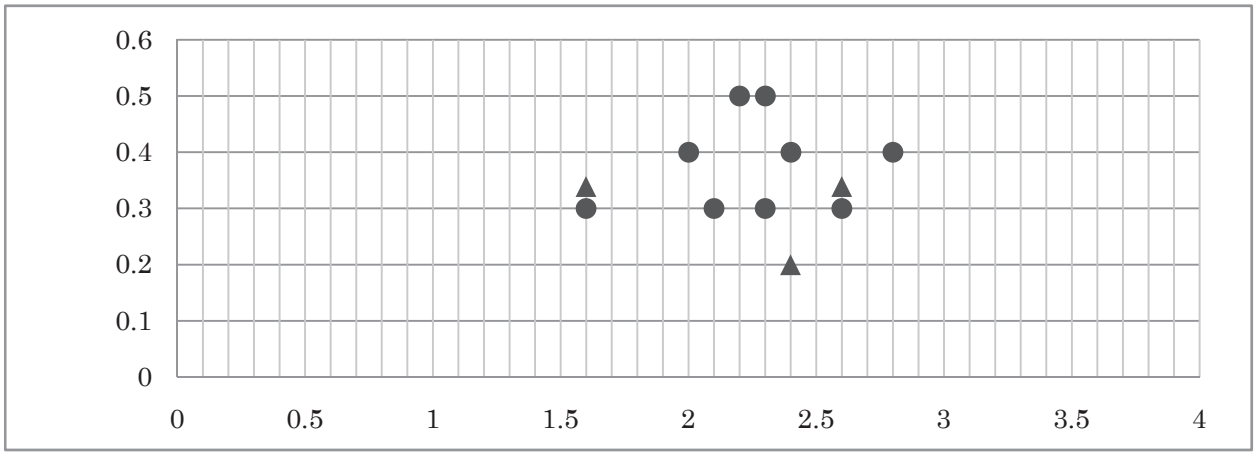
第99図　各遺跡における石鏃の石材組成



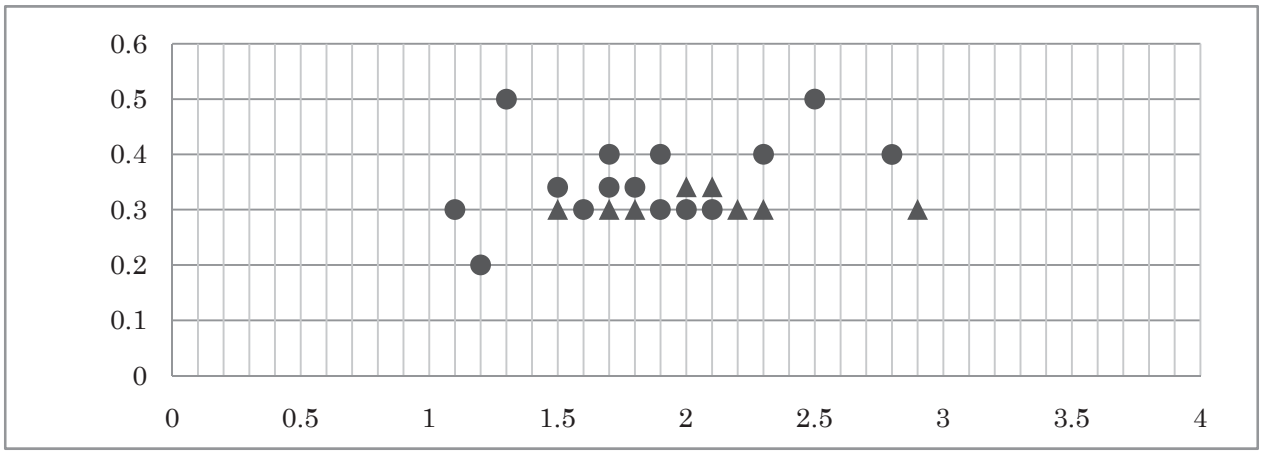
第100図　各遺跡における石鏃の型式組成

次に法量（長さ）を比較すると、清水川六反田遺跡では長さ1.5～2.3㎝に集中する。これに対して、妻木法大神遺跡では長さ2.0～2.6㎝に集中しており、清水川六反田遺跡の石鏃よりもやや大型である。また、福成大坪上遺跡では長さ1.9～2.5㎝に集中しており、妻木法大神遺跡と似通った様相を呈している。

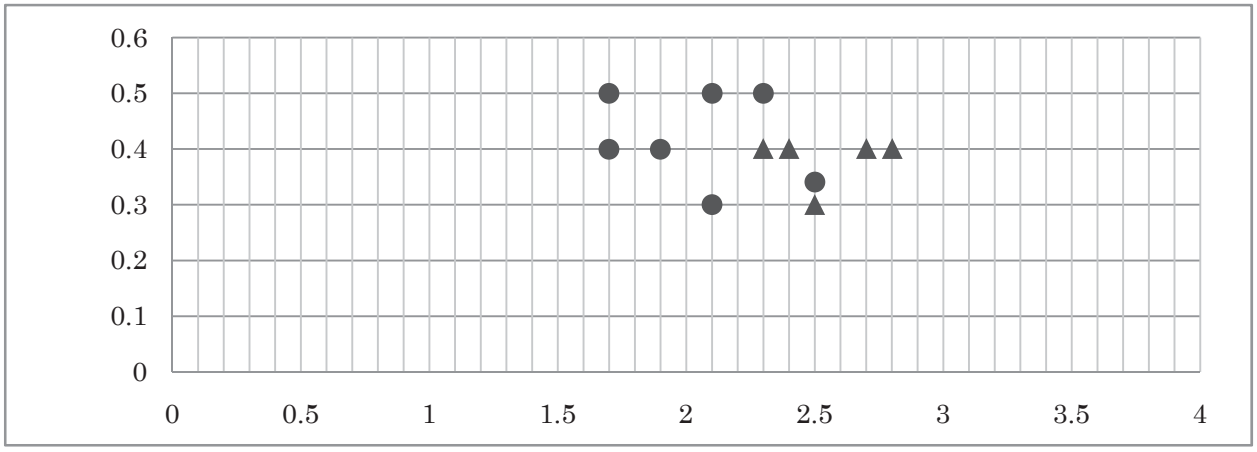
最後に、石材別に石鏃の長さに注目してみると、清水川六反田遺跡と妻木法大神遺跡では、黒曜石製、サヌカイト製とも、特定の長さに偏る傾向は認められないが、福成大坪上遺跡では、黒曜石製は長さ1.7～2.5㎝、サヌカイト製は長さ2.3～2.8㎝に集中しており、製作する石鏃の長さによって石材を選択している可能性がある。



妻木法大神遺跡



清水川六反田遺跡



福成大坪上遺跡

※　縦軸：厚さ(cm)　横軸：長さ(cm)

●　黒曜石　　▲　サヌカイト

第101図　各遺跡における石鏃の長さ

５．おわりに

清水川六反田遺跡では、黒曜石やサヌカイトをはじめとして、多種多様な石材を用いて石器製作を行っていたことが明らかとなった。また、石器の組成は石鏃と楔形石器が主体で、特に楔形石器が多いのが特徴である。礫石器については、石鏃、敲石・磨石、台石の根茎類の獲得、加工を指向した石器が主体で、鉄器の存在を窺わせる砥石が出土していることが注目される。

石鏃については、位置的に近く、同じような立地形態の福成大坪上遺跡と似通った石材組成比率であるが、型式組成や法量（長さ）が異なっており、特に福成大坪上遺跡では長さによって石材を選択している可能性があり、当然、時期差も考えられるであろうが、集団性を色濃く反映していると考えられる。

以上、３遺跡について比較、検討してきたが、遺跡によって様相が異なっており、遺跡の立地や石材の入手の在り方、製作技術、時期差等を反映していると考えられるが、今回は比較対象とした資料が少ないこともあり、その具体像まで踏み込むことができなかった。

また、当遺跡では、この時期、狩猟・採集に依存しながらも農耕を行っていた可能性があり、生業形態とともに、当該期の石器を伴わない遺跡との比較、検討も今後必要となってくるであろう。

今回の調査では、当該期の石器製作の様相を考えるうえでの一資料を提示できたものと思われる。今後､資料の増加により当該期の石器の製作及び使用の様相が明らかとなっていくことを期待したい。

参考文献

西川　徹ほか　2003 『妻木法大神遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団

第12表　土器・土製品・陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
1	16	1区 SD3	土師器 低脚坏	—	※2.2	△4.3	外面：底部ナデ、指押さえ 内面：摩耗のため調整不明	密	良	暗灰白色	
2	16	1区 SD3	須恵器 坏蓋	※11.8	—	3.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
3	16	1区 SD10	須恵器 坏蓋	※11.4	—	△2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
4	18	1区 SD4	円筒埴輪	胴部径 ※18.6	—	△5.1	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ	密	良	褐色	
5	18	1区 SD4	円筒埴輪	胴部径 ※20.5	—	△20.5	外面：ハケ 内面：ケズリ	密	良	褐色	
6	18	1区 SD4	須恵器 坏蓋	※14.4	—	△2.1	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
7	19	1区 SD5	土師器 高坏	—	—	△5.0	外面：ミガキ 内面：ナデ	密	良	灰茶色	
8	22	1区 Ⅳ層	弥生土器 甕	※25.0	—	△4.7	外面：口縁部ナデ、頸部ハケ、口縁端部２条の凹線 内面：ナデ	密	良	褐色	
9	22	1区 Ⅲ－１層	弥生土器 底部	—	※7.3	△6.5	外面：胴部摩耗のため調整不明、底部ケズリ後指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	やや密	やや良	褐色	
10	22	1区 Ⅳ層	土師器 低脚坏	—	※7.0	△2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
11	22	1区 Ⅳ層	土師器 高坏	—	—	△6.2	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ	密	良	橙褐色	
12	22	1区 Ⅳ層	須恵器 坏蓋	※8.6	—	△2.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
13	22	1区 Ⅳ層	須恵器 坏蓋	※11.9	—	2.9	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
14	22	1区 Ⅳ層	須恵器 坏身	※12.1	—	△4.5	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
15	22	1区 Ⅱ層	須恵器 坏身	—	※8.8	△2.4	外面：胴部回転ナデ、底部ヘラ切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
16	22	1区 Ⅲ－１層	須恵器 高坏	※15.5	—	△6.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
17	22	1区 Ⅲ－１層	白磁 碗	※14.3	—	△2.6	内面：櫛描平行線	密	良好	灰白色	森田Ⅳ類
18	22	1区 Ⅱ層	青磁 Ⅲ	※11.8	—	△2.4		密	良好	緑灰色	景徳鎮産
19	22	1区 Ⅱ層	青花 Ⅲ	※12.0	※6.8	6.8		密	良好	灰白色	景徳鎮産
20	22	1区 Ⅱ層	磁器 Ⅲ	※13.9	—	△2.6		密	良好	灰白色	肥前産
21	22	1区 Ⅱ層	磁器 碗	—	※4.6	△3.2	外面：一重網目文、貫入 内面：貫入	密	良好	灰白色	肥前産
22	22	1区 Ⅱ層	陶器 Ⅲ	※13.9	—	△1.7		密	良好	灰色	肥前産
23	22	1区 Ⅱ層	陶器 Ⅲ	※14.9	—	△2.2		密	良好	灰色	肥前産 被熱を受ける
24	22	1区 Ⅱ層	陶器 Ⅲ	※21.8	—	△2.1	外面：貫入 内面：刷毛目装飾、貫入	密	良好	黒茶色	肥前産
25	22	1区 Ⅲ－２層	陶器 塊	—	※5.0	△2.9	外面：高台及び高台内露胎、貫入 内面：貫入	密	良好	暗緑灰色	肥前産
26	22	1区 Ⅱ層	陶器 擂鉢	※24.5	—	△6.2	内面：擂目	密	良好	赤褐色	備前焼
27	22	1区 Ⅲ－２層	陶器 擂鉢	※28.9	—	△5.8	内面：擂目	密	良好	灰褐色	備前焼

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
28	22	1区 Ⅱ層	陶器 擂鉢	※33.2	—	△2.5	内面：擂目	密	良好	褐色	須佐唐津焼
29	22	1区 Ⅲ－2層	陶器 擂鉢	※20.4	—	△2.9	内面：擂目	密	良好	褐色	
30	22	1区 Ⅱ層	陶器 擂鉢	—	※7.3	△5.2	外面：底部～高台内露胎 内面：擂目	密	良好	黒茶色	
31	22	1区 Ⅱ層	陶器 鉢or甕	※24.8	—	△3.3		密	良好	褐色	
32	22	1区 Ⅲ－2層	瓦質土器 擂鉢	※28.4	—	△3.3	外面：ナデ 内面：擂目	密	不良	灰白色	
33	22	1区 Ⅲ－2層	瓦質土器 火鉢？	—	—	△4.2	外面：ナデ、スタンプ印文 内面：指おさえ	密	良	淡灰褐色	
34	27	2区 SD37	弥生土器 壺	※15.6	—	△2.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
35	27	2区 SD37	弥生土器 壺	※29.6	—	△14.6	外面：ナデ、頸部２条以上のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
36	27	2区 SD37	弥生土器 壺	※11.4	—	△13.0	外面：ナデ、頸部３条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	口縁部内外面・肩部外面煤付着
37	27	2区 SD37	弥生土器 壺	※17.6	—	△7.2	外面：ナデ、頸部３条のヘラ描沈線・２列の竹管文 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
38	27	2区 SD37	弥生土器 壺	※21.8	—	△3.2	外面：ナデ、口縁端部２条の凹線 内面：ケズリ	密	良	淡褐色	
39	27	2区 SD37	弥生土器 甕	※17.4	—	△3.4	外面：ナデ、指押さえ、頸部１条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
40	27	2区 SD37	弥生土器 甕	※15.6	—	△2.9	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部３条のヘラ描沈線、 内面：ナデ	密	良	褐色	外面煤付着
41	27	2区 SD37	弥生土器 甕	※18.4	—	△3.2	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
42	27	2区 SD37	弥生土器 甕	※21.6	—	△2.6	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部刺突文 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
43	27	2区 SD37	弥生土器 甕	※25.6	—	△2.1	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	褐色	
44	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※7.2	△2.8	外面：ナデ・指押さえ 内面：ナデ	密	良	褐色	
45	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※9.2	△3.5	外面：ナデ・指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	橙褐色	
46	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※8.8	△3.0	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
47	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※7.0	△4.8	外面：ナデ・指押さえ 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
48	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※10.0	△5.2	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
49	27	2区 SD37	弥生土器 底部	—	※7.0	△3.2	外面：ミガキ 内面：ナデ、指押さえ	密	やや良	淡褐色	内面炭化物付着
50	30	2区 SD38	縄文土器 鉢	—	—	△4.8	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	外面籾状圧痕あり
51	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※35.2	—	△8.4	外面：ミガキ、指押さえ、頸部３条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
52	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※19.0	—	△9.1	外面：口縁部～頸部ミガキ、肩部ナデ、 頸部３条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
53	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※19.7	—	△2.5	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	口縁部内外面煤付着 内面炭化物付着
54	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※13.2	—	△5.0	外面：ミガキ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	外面黒斑

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
55	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※13.9	—	△3.5	外面：ハケ、口縁部1条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
56	34	2区 SD41	弥生土器 壺	※17.4	—	△4.6	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
57	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	※7.0	△20.6	外面：頸部～肩部ハケ後ミガキ、胴部ミガキ、 頸部・胴部2条のヘラ描沈線 内面：頸部ミガキ、胴部ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	底部外面黒斑
58	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	—	△7.2	外面：ナデ、3条のヘラ描沈線、沈線間に連続刺突文 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
59	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	—	△5.3	外面：ケズリ後ナデ、刻み目をもつ2条の貼付突帯 内面：摩耗のため調整不明	やや密	やや良	灰褐色	
60	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	—	△4.0	外面：ナデ、刻み目をもつ1条の貼付突帯 内面：ナデ	密	良	褐色	
61	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	—	△2.6	外面：ナデ、刻み目をもつ1条の貼付突帯 内面：ナデ	密	良	褐色	外面煤付着
62	34	2区 SD41	弥生土器 壺	—	—	△2.4	外面：ナデ、刻み目をもつ1条の貼付突帯 内面：ナデ	密	良	褐色	
63	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※19.6	—	△5.3	外面：ハケ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部1条のヘラ描沈線 内面：ハケ、指押さえ	密	良	褐色	
64	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※20.8	—	△7.1	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部2条のヘラ描沈線 内面：ハケ、指押さえ	密	良	灰褐色	
65	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※19.6	—	△6.0	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部2条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
66	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※13.6	—	△3.8	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部2条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
67	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※16.8	—	△4.3	外面：ハケ、頸部2条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	外面煤付着
68	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※21.6	—	△6.8	外面：ハケ、ナデ、口縁端部刻み目、 頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	外面煤付着
69	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※19.6	—	△8.0	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	内面煤付着
70	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※15.8	—	△5.4	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ミガキ、ナデ	密	良	褐色	外面煤付着
71	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※27.0	—	△5.2	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	外面煤付着
72	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※23.0	—	△5.0	外面：ハケ、指押さえ、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ハケ、指押さえ	密	良	灰褐色	
73	34	2区 SD41	弥生土器 甕	※22.7	—	△8.4	外面：ナデ、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰茶色	外面煤付着
74	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※21.8	—	△5.9	外面：ハケ、ナデ、口縁端部刻み目、 頸部4条のヘラ描沈線 内面：ハケ	密	良	灰褐色	
75	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※25.2	—	△5.9	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部5条のヘラ描沈線 内面：ハケ、指押さえ	密	良	灰褐色	
76	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※20.4	—	△3.9	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部4条のヘラ描沈線 内面：ハケ後ナデ	密	良	灰褐色	外面煤付着
77	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※23.8	—	△7.0	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部5条のヘラ描沈線 内面：ハケ	密	良	灰褐色	外面煤付着
78	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※32.4	—	△9.8	外面：ハケ、ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部4条のヘラ描沈線 内面：ハケ、ナデ	密	良	黄灰白色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
79	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※23.8	—	△4.6	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部４条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	内外面煤付着
80	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※25.8	—	△6.7	外面：ハケ、指おさえ、口縁端部刻み目、 頸部４条のヘラ描沈線 内面：ケズリ後ナデ	密	良	褐色	外面煤付着
81	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※25.4	—	△3.5	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部６条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	外面煤付着
82	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※14.4	—	△3.3	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部４条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	淡褐色	外面煤付着
83	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※33.4	—	△5.9	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部５条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
84	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※24.6	—	△4.6	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部５条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	外面煤付着
85	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※23.0	—	△10.9	外面：ハケ、ナデ、指押さえ、頸部４条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	
86	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※16.7	—	△3.2	外面：ハケ、指押さえ、口縁端部刻み目、 頸部２条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	外面煤付着
87	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※22.2	—	△2.9	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部３条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
88	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※17.6	—	△2.8	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部４条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	
89	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※19.8	—	△3.4	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部２条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	褐色	
90	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※15.6	—	△2.3	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部２条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
91	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※29.0	—	△3.5	外面：ナデ、指押さえ、頸部２条のヘラ描沈線 内面：ケズリ後ナデ	密	良	黄灰白色	
92	35	2区 SD41	弥生土器 甕	※23.6	—	△1.9	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	褐色	
93	36	2区 SD41	弥生土器 甕	※35.6	—	△6.9	外面：ハケ後ナデ、指押さえ 内面：ハケ後ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
94	36	2区 SD41	弥生土器 甕	※20.7	—	△5.7	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	良	褐色	
95	36	2区 SD41	弥生土器 甕	※21.7	—	△3.4	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
96	36	2区 SD41	弥生土器 鉢	※15.4	—	△8.4	外面：ナデ、指押さえ 内面：ハケ後ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
97	36	2区 SD41	弥生土器 鉢	※24.6	—	△4.8	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
98	36	2区 SD41	弥生土器 鉢	※33.6	—	△6.6	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
99	36	2区 SD41	弥生土器 鉢	※37.4	—	△4.2	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黒茶色	外面煤付着
100	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.6	△3.3	外面：ハケ 内面：ケズリ後指押さえ後ハケ後ナデ	密	良	淡灰白色	
101	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.8	△4.1	外面：ケズリ後指押さえ後ナデ 内面：ハケ、指押さえ	密	良	黒褐色	
102	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.4	△6.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ハケ、指押さえ	密	良	灰褐色	
103	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※5.8	△4.6	外面：ナデ 内面：ハケ、指押さえ	密	良	淡褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
104	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.8	△5.6	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
105	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.5	△4.2	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
106	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.6	△4.6	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
107	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.8	△4.2	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
108	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.5	△5.5	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
109	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.4	△5.1	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
110	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.6	△4.3	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
111	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.5	△5.5	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
112	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.8	△2.5	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
113	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.1	△3.8	外面：ハケ 内面：ナデ	密	良	灰茶色	
114	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.6	△4.2	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
115	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.0	△4.8	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡灰色	
116	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.7	△6.3	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
117	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.0	△5.0	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
118	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.2	△4.6	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
119	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※5.6	△4.6	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
120	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.2	△5.3	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	褐色	
121	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.8	△5.3	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	内面炭化物付着
122	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.0	△5.3	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
123	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※5.2	△2.2	外面：ハケ 内面：ナデ	密	良	暗褐色	
124	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.2	△3.9	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
125	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.7	△6.0	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
126	36	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.0	△4.6	外面：ハケ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
127	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※12.0	△4.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
128	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.0	△4.0	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	橙褐色	
129	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.9	△3.5	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
130	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.2	△3.9	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	淡灰褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
131	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.8	△6.6	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	暗灰白色	
132	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.0	△4.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
133	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.8	△4.6	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	やや密	やや良	褐色	
134	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※14.0	△5.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
135	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.4	△4.4	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
136	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.8	△4.5	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
137	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.8	△4.5	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	黒茶色	
138	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.8	△3.5	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	橙褐色	
139	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.0	△4.0	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
140	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.8	△4.3	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
141	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.8	△2.6	外面：ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	橙褐色	
142	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.2	△3.2	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
143	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※10.0	△2.5	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
144	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.8	△3.8	外面：ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	褐色	
145	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.6	△3.5	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
146	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※5.6	△4.7	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰茶色	
147	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.5	△3.8	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
148	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.4	△3.7	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
149	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.4	△3.6	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
150	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※5.2	△3.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
151	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.2	△4.0	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰茶色	
152	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※8.2	△4.6	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
153	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.4	△3.6	外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
154	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※4.2	△4.8	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
155	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.2	△2.9	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
156	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.9	△5.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
157	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.2	△4.1	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
158	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※7.8	△7.3	外面：胴部ナデ、底部ミガキ、指押さえ 内面：ミガキ	密	良	黒色	
159	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.0	△3.9	外面：ナデ 内面：ミガキ、指押さえ	密	良	褐色	
160	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.8	△3.1	外面：ミガキ、ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
161	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※6.2	△5.9	外面：ミガキ、ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
162	37	2区 SD41	弥生土器 底部	—	※9.0	△5.4	外面：ミガキ、指押さえ 内面：ミガキ、指押さえ	密	良	灰褐色	
163	37	2区 SD41	土笛	※2.5	胴径 6.5	△6.3	外面：ケズリ後ナデ 内面：指押さえ	密	良	褐色	
164	37	2区 SD41	土錘	残存長 2.4	径2.9	重量 13.9ｇ	外面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰茶色	
165	40	2区 SD42	弥生土器 壺	※16.6	—	△5.2	外面：ナデ、頸部２条のヘラ描沈線 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
166	40	2区 SD42	弥生土器 甕	—	—	△3.0	外面：ハケ、口縁端部刻み目、頸部２条のヘラ描沈線 内面：ハケ	やや密	やや良	灰褐色	
167	40	2区 SD42	弥生土器 甕	—	—	△2.4	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
168	40	2区 SD42	弥生土器 甕	※22.6	—	△6.2	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ、口縁端部刻み目、頸部５条のヘラ描沈線 内面：口縁部ナデ、胴部ハケ	密	良	灰褐色	
169	40	2区 SD42	弥生土器 底部	—	※7.2	△5.9	外面：胴部ハケ後指押さえ、底部ケズリ後指押さえ 内面：ケズリ後指押さえ	やや密	やや良	灰褐色	
170	44	2区 SD49	弥生土器 壺	※17.8	—	△4.7	外面：ハケ後ナデ、指押さえ、口縁部１条の沈線 内面：ミガキ、指押さえ	密	良好	灰褐色	
171	44	2区 SD49	弥生土器 甕	※39.0	—	△6.2	外面：摩耗のため調整不明、口縁端部１条の沈線、口縁端部刻み目、頸部２条のヘラ描沈線 内面：摩耗のため調整不明	密	良好	灰褐色	
172	44	2区 SD49	弥生土器 甕	—	—	△1.6	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
173	44	2区 SD49	弥生土器 甕	※25.8	—	△6.0	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部３条のヘラ描沈線 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	暗灰白色	
174	44	2区 SD49	弥生土器 甕	※18.6	—	△5.0	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良好	黄灰白色	
175	44	2区 SD49	弥生土器 甕	※27.8	—	△7.0	外面：ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	灰褐色	
176	44	2区 SD49	弥生土器 甕	※31.2	—	△6.3	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	黄灰白色	
177	44	2区 SD49	弥生土器 鉢	※30.6	—	△5.5	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良好	灰褐色	
178	44	2区 SD49	弥生土器 底部	—	※6.7	△5.0	外面：ハケ、ナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	良好	灰褐色	
179	44	2区 SD49	弥生土器 底部	—	※7.1	△4.2	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良好	灰褐色	
180	44	2区 SD49	弥生土器 底部	—	※7.8	△5.0	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
181	44	2区 SD49	弥生土器 底部	—	※5.4	△3.2	外面：ミガキ 内面：指押さえ	密	良好	黒茶色	
182	44	2区 SD49	弥生土器 底部	—	※5.5	△4.1	外面：胴部ミガキ、底部ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良好	灰褐色	
183	45	2区 SD50	弥生土器 底部	—	※6.6	△2.4	外面：ハケ後指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	やや密	やや良	灰褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
184	51	2区 SK1	弥生土器 甕	24.2	7.2	28.4	外面：口縁部横方向のハケ、指押さえ、胴部縦方向のハケ 内面：ハケ、指押さえ	密	良	淡灰褐色	外面煤付着
185	55	2区 SK4	弥生土器 底部	—	※9.3	△5.4	外面：ハケ後指押さえ 内面：ケズリ後指押さえ	やや密	やや良	灰褐色	
186	62	2区 SD35	弥生土器 甕	※13.8	—	△3.8	外面：ナデ、口縁部凹線 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	灰褐色	
187	63	2区－A V層	突帯文土器 甕	—	—	△3.7	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	黄灰白色	
188	63	2区－C Ⅶ層	突帯文土器 甕	—	—	△3.7	外面：ケズリ 内面：ケズリ	密	良	灰茶色	
189	63	2区－C Ⅶ層	突帯文土器 甕	—	—	△3.0	外面：ケズリ 内面：ナデ	やや密	やや良	灰褐色	
190	63	2区－B Ⅶ層	突帯文土器 甕	—	—	△4.6	外面：ケズリ 内面：摩耗のため調整不明	やや密	やや良	灰褐色	
191	63	2区－B Ⅵ層	突帯文土器 甕	—	—	△2.3	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	やや良	淡褐色	
192	63	2区－B Ⅶ層	突帯文土器 甕	※26.2	—	△3.4	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	やや密	やや良	暗灰白色	
193	63	2区－C Ⅵ層	弥生土器 壺	※14.2	—	△3.6	外面：摩耗のため調整不明、頸部段あるいは沈線 内面：摩耗のため調整不明	密	やや良	淡褐色	
194	63	2区－A Ⅵ層	弥生土器 壺	※15.4	—	△3.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
195	63	2区－A 側溝	弥生土器 壺	※13.5	—	△4.5	外面：ミガキ、指押さえ、頸部3条のヘラ描沈線 内面：ミガキ、指押さえ	密	良	褐色	
196	63	2区－A Ⅶ層	弥生土器 壺	※34.0	—	△6.3	外面：ナデ、頸部1条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
197	63	2区－A Ⅶ層	弥生土器 壺	※36.2	—	△7.5	外面：指押さえ、頸部2条のヘラ描沈線 内面：ハケ後ナデ	密	良	黄灰白色	外面黒斑
198	63	2区－D Ⅵ層	弥生土器 壺	—	—	△4.2	外面：ナデ、刻み目をもつ1条の貼付突帯 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
199	63	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※37.6	—	△7.4	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、頸部5条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
200	63	2区－A Ⅳ層	弥生土器 甕	※21.4	—	△5.1	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部4条のヘラ描沈線 内面：摩耗のため調整不明	やや密	やや粗	暗灰白色	
201	63	2区－B Ⅶ層	弥生土器 甕	※17.4	—	△5.4	外面：ナデ、口縁端部刻み目、頸部6条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
202	63	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※25.4	—	△3.7	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、頸部5条のヘラ描沈線 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
203	63	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※23.2	—	△2.3	外面：ナデ、指押さえ、口縁端部刻み目、頸部5条のヘラ描沈線 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
204	63	2区－C 南西側溝	弥生土器 甕	※31.6	—	△7.1	外面：ハケ、頸部1条のヘラ描沈線 内面：ハケ、ケズリ後ナデ	密	やや良	褐色	
205	63	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※27.5	—	△2.6	外面：ナデ、頸部1条のヘラ描沈線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
206	63	2区－B V層	弥生土器 甕	※13.6	—	△3.5	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	密	良	褐色	
207	63	2区－B V層	弥生土器 甕	※13.6	—	△3.3	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	密	良	黄灰白色	
208	63	2区－D Ⅵ層	弥生土器 甕	※18.4	—	△2.9	外面：ハケ、指押さえ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
209	63	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※15.4	—	△3.0	外面：摩耗のため調整不明、口縁端部刻み目 内面：摩耗のため調整不明	密	良	黄灰白色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
210	63	2区－B Ⅶ層	弥生土器 甕	※21.6	—	△2.0	外面：ナデ、口縁端部刻み目 内面：ナデ	やや密	やや良	淡褐色	
211	64	2区－B Ⅴ層	弥生土器 甕	※26.2	—	△5.7	外面：ハケ 内面：ナデ	密	良	褐色	
212	64	2区－B Ⅵ層	弥生土器 甕	※24.6	—	△5.7	外面：口縁部ナデ、指押さえ、胴部ハケ 内面：口縁部ハケ後ナデ、胴部ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
213	64	2区－A Ⅴ層	弥生土器 甕	※22.6	—	△6.0	外面：ナデ、指押さえ 内面：指押さえ	密	良	黄灰白色	外面煤付着
214	64	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※33.1	—	△4.7	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
215	64	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※30.1	—	△4.8	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
216	64	2区－A Ⅵ層	弥生土器 壺	※13.5	—	△4.6	外面：ナデ、口縁部凹線 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	灰褐色	
217	64	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※25.2	—	△5.1	外面：摩耗のため調整不明、口縁端部刻み目 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
218	64	2区－A Ⅴ層	弥生土器 甕	※16.3	—	△2.5	外面：ナデ、口縁部４条の凹線 内面：ナデ	密	良	灰茶色	
219	64	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※19.0	—	△2.3	外面：ナデ、口縁部２条の凹線、刻み目、 頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：ナデ	密	良	黄灰白色	
220	64	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※18.2	—	△1.9	外面：ナデ、口縁部２条の凹線、刻み目、 頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：ナデ	密	良	褐色	
221	64	2区－D Ⅵ層	弥生土器 甕	※18.8	—	△2.4	外面：ナデ、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	淡褐色	
222	64	2区－D Ⅵ層	弥生土器 甕	※14.0	—	△3.6	外面：ナデ、口縁部２条の凹線 内面：ナデ	密	良	淡褐色	
223	64	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※13.8	—	△1.7	外面：ナデ、口縁部３条の凹線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
224	64	2区－A Ⅶ層	弥生土器 甕	※17.1	—	△2.5	外面：ナデ、口縁部３条の凹線 内面：ナデ	密	良	灰褐色	
225	64	2区－B Ⅴ層	弥生土器 甕	※18.0	—	△3.3	外面：ナデ、口縁部６条の凹線 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	褐色	
226	64	2区－C Ⅵ層	弥生土器 甕	※14.8	—	△2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	黄灰白色	
227	64	2区－C Ⅵ層	弥生土器 甕	※15.8	—	△3.3	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	やや良	淡褐色	
228	64	2区－C Ⅵ層	弥生土器 甕	※18.2	—	△4.1	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	灰褐色	
229	64	2区－C Ⅵ層	弥生土器 甕	※13.3	—	△3.6	外面：ナデ、口縁部６条の凹線 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	灰褐色	
230	64	2区－A Ⅵ層	弥生土器 甕	※14.8	—	△4.9	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良	淡褐色	
231	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※5.0	△8.5	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	暗灰白色	外面黒斑
232	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※9.6	△3.0	外面：ハケ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
233	65	2区－A Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※14.2	△4.3	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
234	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※12.8	△8.8	外面：ケズリ後指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
235	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※6.3	△4.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
236	65	2区－A Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※9.8	△3.8	外面：ケズリ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
237	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※8.4	△4.2	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明	密	良	灰褐色	
238	65	2区－A Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※7.6	△3.6	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
239	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※6.2	△3.1	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	外面煤付着
240	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※9.4	△4.0	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
241	65	2区－D Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※8.0	△3.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
242	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※7.4	△3.2	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
243	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※6.0	△4.5	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
244	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※9.2	△4.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
245	65	2区－C Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※8.0	△2.5	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
246	65	2区－B Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※7.2	△2.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや良	褐色	
247	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※6.0	△3.2	外面：ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
248	65	2区－A Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※8.9	△3.4	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡灰褐色	
249	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※8.0	△3.4	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
250	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※6.6	△2.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
251	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※6.0	△3.2	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
252	65	2区－C Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※8.4	△5.1	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後指押さえ	密	良	灰褐色	
253	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※7.8	△4.4	外面：ケズリ後ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
254	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※6.6	△3.2	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
255	65	2区－A Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※5.8	△3.1	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
256	65	2区－B Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※5.4	△6.5	外面：ミガキ 内面：ハケ、指押さえ	密	良	褐色	
257	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※6.5	△3.5	外面：ミガキ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
258	65	2区－A 側溝	弥生土器 底部	—	※6.2	△8.1	外面：ミガキ後ナデ、指押さえ 内面：ミガキ、指押さえ	密	良	黄灰白色	
259	65	2区－A Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※5.4	△4.5	外面：ハケ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	
260	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※5.8	△4.7	外面：摩耗のため調整不明 内面：摩耗のため調整不明、指押さえ	密	良	黒色	
261	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※5.1	△2.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	外面黒斑
262	65	2区－C Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※4.5	△3.2	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	淡褐色	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
263	65	2区－B Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※6.0	△2.1	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	やや良	淡褐色	
264	65	2区－A Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※5.6	△5.2	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
265	65	2区－C Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※4.8	△3.5	外面：ケズリ後ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
266	65	2区－A Ⅶ層	弥生土器 底部	—	※4.6	△5.2	外面：ケズリ 内面：ケズリ後ナデ、指押さえ	密	良	灰褐色	
267	65	2区－A Ⅵ層	弥生土器 底部	—	※6.3	△4.1	外面：ナデ、指押さえ 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
268	65	2区－B Ⅴ層	弥生土器 底部	—	※4.8	△4.3	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	
269	66	2区－F Ⅵ層	土師器 高坏	—	—	△2.3	外面：ハケ 内面：坏部ナデ、脚部ハケ	密	やや良	淡灰色	
270	66	2区－A Ⅴ層	須恵器 坏蓋	—	—	△1.6	外面：天井部回転ヘラケズリ、胴部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良	灰色	
271	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏蓋	※13.8	—	△3.8	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
272	66	2区－A Ⅴ層	須恵器 坏蓋	※12.5	—	3.5	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
273	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏蓋	※12.8	—	△3.5	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：天井部ナデ、口縁部回転ナデ	密	良好	灰色	
274	66	2区－A Ⅴ層	須恵器 坏蓋	※11.6	—	△3.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
275	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 高坏	※11.6	—	△5.8	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
276	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏身	※13.0	—	△4.2	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
277	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏身	※13.4	—	△3.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
278	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏身	※11.8	—	△4.0	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
279	66	2区－A Ⅵ層	須恵器 坏身	※14.2	—	△3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
280	66	2区－B Ⅴ層	須恵器 坏身	※14.4	—	△2.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
281	66	2区－D Ⅵ層	須恵器 坏身	—	※9.4	△3.2	外面：胴部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
282	66	2区－F Ⅳ層	須恵器 坏身	—	※7.8	△2.3	外面：胴部回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
283	66	2区－E Ⅵ層	須恵器 壺	—	※9.5	△3.6	外面：胴部ケズリ、底部ヘラ切り後未調整 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
284	66	2区－E Ⅱ層	磁器 碗	※10.6	—	△2.4	外面：口縁部二重圏線、「寿」字	密	良好	白色	肥前産
285	66	2区－D Ⅱ層	磁器 碗	—	※4.6	△3.6	外面：底部一重圏線 内面：見込み一重圏線	密	良好	灰白色	肥前産
286	66	2区－B Ⅱ層	磁器 皿	※11.8	—	△1.8		密	良好	白色	肥前産
287	66	2区－E Ⅱ層	陶器 塊	—	※4.7	△3.2	外面：貫入 内面：貫入	密	良好	淡灰褐色	肥前産
288	66	2区－D Ⅱ層	陶器 皿	—	※4.3	△2.0	内面：見込み胎土目	密	良好	灰白色	肥前産
289	66	2区－E Ⅱ層	陶器 皿	—	※5.0	△1.9	内面：見込み砂目	密	良好	淡灰褐色	肥前産

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
290	66	2区－F 側溝	陶器 擂鉢	—	—	△3.4	外面：３条の沈線	密	良好	淡茶色	須佐唐津焼
291	66	2区－F 側溝	土錘	長3.5	幅0.9	重量 2.2ｇ		密	良好	赤褐色	
292	78	3区 SD47	陶器 鉢	—	※8.9	△2.1	外面：露胎 内面：露胎	密	良好	黄灰白色	
293	80	3区－E Ⅳ層	弥生土器 底部	—	※4.9	△3.1	外面：摩耗のため調整不明 内面：ケズリ後ナデ	密	良	灰褐色	
294	80	3区－E Ⅳ層	円筒埴輪	—	—	△6.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	やや良	橙灰褐色	
295	80	3区－C Ⅳ層	土師質土器 坏身	※10.0	—	△1.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
296	80	3区－C Ⅳ層	須恵器 坏身	※10.7	5.6	3.2	外面：口縁部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良	灰色	
297	80	3区－B Ⅲ層	黒色土器 坏身	—	※4.0	△1.6	外面：胴部ナデ、底部回転糸切り 内面：ミガキ	密	良	黄褐色	
298	80	3区－B Ⅲ層	磁器 碗	※10.2	—	△3.3	外面：風景文 内面：口縁部二重圏線	密	良好	灰白色	肥前産 焼き継ぎ
299	80	3区 北東側溝	磁器 Ⅲ	※15.9	—	△2.4		密	良好	灰白色	肥前産
300	80	3区－C Ⅲ層	磁器 Ⅲ	※12.8	※6.8	3.1	内面：二重圏線、見込蛇ノ目釉剥ぎ	密	良好	灰白色	肥前産
301	80	3区－B Ⅲ層	陶器 鉢	※14.3	—	△2.5		密	良好	灰褐色	肥前産
302	80	3区－B Ⅲ層	陶器 擂鉢	※24.8	—	△3.1		密	良好	濃茶色	須佐唐津焼
303	87	4区 水田跡	須恵器 坏蓋	—	—	△1.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
304	91	4区 39層	土師器 高坏	—	—	△5.4	外面：ハケ 内面：ケズリ	やや密	やや良	黄灰白色	
305	91	4区 39層	土師器 坏身	—	※11.6	△2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	灰褐色	内外面赤彩
306	91	4区 39層	土製支脚	—	※11.4	△5.2	外面：ハケ、指押さえ 内面：ケズリ	密	良	褐色	
307	91	4区 39層	土師質土器 坏身	—	※5.7	△1.1	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	灰褐色	
308	91	4区 29層	土師質土器 坏身	—	※6.0	△1.5	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	淡褐色	
309	91	4区 29層	土師質土器 柱状高台	—	※4.7	△4.7	外面：脚部ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	灰褐色	
310	91	4区 39層	須恵器 坏身	—	※8.6	△1.6	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
311	91	4区 39層	須恵器 坏身	—	※7.8	△2.1	外面：胴部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	暗灰白色	

※４区の層位は第82図に対応する

第13表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S１	21	ＳＤ12	磨製石斧	5.8	3.9	3.9	83.4	砂　岩	
S２	23	１区　Ⅳ層	石　鏃	2.0	1.4	0.3	0.7	黒曜石	
S３	23	１区　Ⅳ層	石　鏃	2.3	1.3	0.3	0.8	サヌカイト	
S４	23	１区　Ⅲ－１層	楔形石器	1.6	2.3	0.6	2.1	黒曜石	
S５	23	１区　Ⅱ層	砥　石	8.0	3.4	3.0	61.5	凝灰岩	砥面３面
S６	28	ＳＤ37	石　鏃	2.3	0.9	0.3	0.5	サヌカイト	
S７	28	ＳＤ37	楔形石器	2.0	3.0	0.9	4.0	黒曜石	
S８	28	ＳＤ37	加工痕のある剥片	2.8	1.8	1.0	5.0	黒曜石	
S９	28	ＳＤ37	砥　石	3.5	1.4	1.3	9.1	凝灰岩	砥面４面
S10	28	ＳＤ37	石　鏃	5.9	6.0	1.7	88.0	安山岩	
S11	28	ＳＤ37	石　鏃	15.6	9.6	2.6	368.1	安山岩	
S12	28	ＳＤ37	石　鏃	9.8	12.4	1.3	212.0	安山岩	
S13	28	ＳＤ37	石　鏃	14.3	8.2	2.1	213.5	安山岩	
S14	28	ＳＤ37	石　鏃	11.7	7.9	1.8	161.2	安山岩	
S15	30	ＳＤ38	石　鏃	1.9	1.5	0.3	0.7	サヌカイト	
S16	30	ＳＤ38	石　鏃	12.8	6.3	1.6	217.6	安山岩	
S17	30	ＳＤ38	石　鏃	10.0	8.0	2.4	172.9	安山岩	
S18	30	ＳＤ38	磨製石斧	15.5	5.3	4.4	503.7	砂　岩	
S19	30	ＳＤ38	磨石・凹石	28.0	13.6	5.3	3520.0	白雲母花崗岩	
S20	38	ＳＤ41	石　鏃	2.8	1.4	0.4	1.0	黒曜石	
S21	38	ＳＤ41	楔形石器	2.5	2.2	0.8	4.5	黒曜石	
S22	38	ＳＤ41	楔形石器	2.8	1.6	0.9	4.1	黒曜石	
S23	38	ＳＤ41	楔形石器	2.4	2.1	0.7	3.3	玉　髄	
S24	38	ＳＤ41	磨製石剣	4.1	3.2	0.5	11.2	粘板岩	
S25	38	ＳＤ41	石　鏃	9.5	7.9	2.0	206.0	安山岩	
S26	38	ＳＤ41	石　鏃	9.2	6.9	1.7	181.1	安山岩	
S27	38	ＳＤ41	磨石・敲石	12.4	5.7	4.8	393.6	デイサイト	
S28	42	ＳＤ43	石　鏃	11.0	9.9	1.7	197.9	安山岩	
S29	45	ＳＤ50	楔形石器	1.8	2.7	1.3	5.6	黒曜石	
S30	55	ＳＫ４	石　鏃	6.7	8.7	1.9	136.4	安山岩	
S31	57	ＳＫ５	石　鏃	5.3	5.5	1.3	40.0	泥　岩	
S32	59	ＳＤ27	石　鏃	1.9	1.0	0.2	0.4	サヌカイト	
S33	59	ＳＤ27	楔形石器	1.8	1.8	1.0	2.0	黒曜石	
S34	59	ＳＤ30	楔形石器	2.9	3.3	1.7	12.4	黒曜石	
S35	62	ＳＤ34	楔形石器	2.1	3.2	0.7	4.8	黒曜石	
S36	67	２区－Ｂ　Ⅵ層	石　鏃	2.9	0.7	0.3	0.5	サヌカイト	
S37	67	２区－Ａ　Ⅵ層	石　鏃	1.5	1.6	0.3	0.4	サヌカイト	
S38	67	２区－Ｂ　Ⅴ層	石　鏃	2.2	1.5	0.3	1.0	サヌカイト	
S39	67	２区－Ａ　Ⅴ層	石　鏃	2.0	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	
S40	67	２区－Ｂ　Ⅶ層	石　鏃	1.6	1.5	0.4	0.7	サヌカイト	
S41	67	２区－Ｃ　Ⅵ層	石　鏃	1.5	1.2	0.3	0.3	サヌカイト	
S42	67	２区－Ｂ　Ⅶ層	石　鏃	1.8	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	
S43	67	２区－Ｂ　Ⅵ層	石　鏃	2.3	1.8	0.4	0.8	黒曜石	
S44	67	２区－Ａ　Ⅴ層	石　鏃	2.1	1.4	0.3	0.6	黒曜石	
S45	67	２区－Ａ　Ⅴ層	石　鏃	0.9	1.5	0.4	0.3	黒曜石	
S46	67	２区　Ⅳ層	石　鏃	2.5	1.7	0.5	1.4	黒曜石	
S47	67	２区－Ｃ　Ⅵ層	石　鏃	1.8	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
S48	67	２区－Ｅ　Ⅵ層	石　鏃	1.8	1.4	0.3	0.6	黒曜石	
S49	67	２区－Ｃ　Ⅵ層	石　鏃	1.7	1.1	0.4	0.4	黒曜石	
S50	67	２区－Ａ　Ⅵ層	石　鏃	1.3	1.4	0.5	0.5	黒曜石	
S51	67	２区－Ｅ　Ⅵ層	石　鏃	0.8	1.8	0.3	0.3	黒曜石	
S52	67	２区－Ｃ　Ⅵ層	石　鏃	1.1	1.2	0.3	0.1	黒曜石	
S53	67	２区－Ａ　Ⅴ層	石鏃未製品	1.4	1.1	0.3	0.4	黒曜石	
S54	68	２区	石　錐？	2.8	0.7	0.4	0.7	サヌカイト	
S55	68	２区－Ａ　Ⅶ層	石鏃or石錐未製品	3.8	1.2	0.8	3.0	玉　髄	

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S56	68	2区－A Ⅵ層	楔形石器	2.8	2.0	0.9	5.1	黒曜石	
S57	68	2区－B Ⅶ層	楔形石器	2.2	1.9	1.3	5.6	黒曜石	
S58	68	2区－B Ⅳ層	楔形石器	2.2	1.8	0.8	3.1	黒曜石	
S59	68	2区－D Ⅳ層	楔形石器	2.7	1.7	0.9	3.5	黒曜石	
S60	68	2区－D Ⅵ層	楔形石器	2.4	2.3	0.8	3.7	黒曜石	
S61	68	2区－A Ⅴ層	楔形石器	2.3	1.9	0.8	3.2	黒曜石	
S62	69	2区 南西側溝	スクレイパー	3.3	5.6	0.7	11.0	サヌカイト	
S63	69	2区－E Ⅵ層	スクレイパー	2.8	4.3	0.9	6.5	黒曜石	
S64	69	2区－D 南西側溝	石核	2.6	1.5	1.1	4.7	黒曜石	
S65	69	2区－A Ⅵ層	石核	3.4	4.9	1.6	19.6	黒曜石	
S66	69	2区－A Ⅶ層	石核	2.6	3.1	1.1	9.1	黒曜石	
S67	69	2区－A Ⅶ層	石核	3.0	3.7	2.1	19.1	黒曜石	
S68	69	2区－A Ⅴ層	石核	1.8	3.3	1.8	8.6	黒曜石	
S69	69	2区－C Ⅵ層	石核	3.0	4.0	1.6	21.5	玉髄	
S70	69	2区－A Ⅴ層	石核	3.3	3.3	1.8	16.2	玉髄	
S71	70	2区－D Ⅵ層	石鏃	5.6	6.8	1.1	56.5	安山岩	
S72	70	2区－B Ⅶ層	石鏃	6.7	7.8	1.3	90.6	安山岩	
S73	70	2区 排土	石鏃	11.4	8.9	1.7	270.0	安山岩	
S74	70	2区－B Ⅴ層	石鏃	7.8	9.1	2.0	177.8	安山岩	
S75	70	2区－B Ⅵ層	石鏃	6.8	8.5	2.0	131.6	安山岩	
S76	70	2区－C Ⅵ層	石包丁	4.5	7.8	0.7	38.4	結晶片岩	
S77	70	2区－C Ⅵ層	砥石	4.6	1.3	1.0	8.0	凝灰岩	砥面４面
S78	70	2区－A Ⅵ層	台石	24.8	15.5	3.7	2536.8	凝灰角礫岩	
S79	81	3区－C Ⅳ層	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.5	黒曜石	
S80	81	3区 Ⅵ－２層	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.5	黒曜石	
S81	81	3区－A Ⅲ層	石鏃	1.2	1.1	0.2	0.2	黒曜石	
S82	81	3区－F Ⅲ層	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.5	サヌカイト	
S83	81	3区 Ⅵ－２層	石鏃	2.1	1.6	0.3	0.9	サヌカイト	
S84	81	3区 Ⅵ－２層	使用痕のある剥片	1.6	2.7	0.8	2.3	黒曜石	
S85	81	3区 Ⅵ－１層	使用痕のある剥片	1.2	2.4	0.5	0.9	黒曜石	
S86	81	3区－A Ⅲ層	加工痕のある剥片	1.6	2.4	0.8	2.4	黒曜石	
S87	81	3区 Ⅵ－１層	剥片	2.2	2.1	0.6	1.7	黒曜石	
S88	81	3区 Ⅵ－１層	石鏃	8.1	4.9	1.4	77.8	粘板岩	
S89	91	4区 39層	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
S90	91	4区 39層	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
S91	91	4区 39層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
S92	91	4区 39層	磨製石斧	4.6	5.3	4.0	121.2	閃緑岩	

※ ４区の層位は第82図に対応する

第14表 木製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量（cm）			樹種	備考
				長さ	幅	厚さ		
W１	85	4区 自然流路１	板状木製品	47.5	2.5	0.6		上部１孔あり、表面下半墨付着
W２	85	4区 自然流路１	棒状木製品	104.9	11.3	9.6	マツ科モミ属	
W３	87	4区 水田跡	漆塗椀	残存高 4.2			ケヤキ	
W４	87	4区 水田跡	棒状木製品	9.0	1.8	0.8		先端部炭化
W５	91	4区 33層	棒状木製品	15.0	2.7	1.3		先端部炭化

※ Ｗ５の層位は第82図に対応する

第15表　金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	遺構層位	器種	法量（cm）		重量（g）	備考
				径	厚さ		
Ｌ１	66	２区－Ｂ　北東側溝	火縄銃弾丸	1.3	1.1	10.4	鉛製
Ｌ２	66	２区－Ｆ　Ⅱ層	火縄銃弾丸	1.3	1.1	10.9	鉛製
Ｂ１	81	３区－Ｅ　Ⅲ層	円板状製品	2.1	0.2	6.5	銅製、２孔あり

写 真 図 版

1区第２遺構面全景（北東から）

1区第２遺構面全景（南西から）

図版2

ＳＤ13（南から）

ＳＤ14・15（北西から）

ＳＤ16・17・18（北西から）

ＳＤ19・20・22（北西から）

1区第1遺構面全景（北東から）

1区第1遺構面全景（南西から）

図版4

ＳＤ３（南東から）

ＳＤ３土層（南東から）

ＳＤ10（東から）

ＳＤ11（北西から）

ＳＤ４・８・９（南東から）

ＳＤ４（北西から）

ＳＤ４土層（南東から）

図版6

ＳＤ４遺物出土状況

ＳＤ８（北西から）

ＳＤ９（南西から）

ＳＤ５・７（北西から）

ＳＤ５土層（南東から）

ＳＤ６土層（南東から）

図版8

ＳＤ６（北から）

ＳＤ７（北西から）

ＳＤ12（北西から）

ＳＤ12磨製石斧（Ｓ１）出土状況

２区第２遺構面全景（北東から）

２区第２遺構面全景（南西から）

図版10

ＳＤ37・39・40・50（南西から）

ＳＤ37・39・40・50（北東から）

ＳＤ37（北東から）

ＳＤ38（北東から）

ＳＤ38（南西から）

ＳＤ38磨製石斧（Ｓ18）出土状況

図版12

ＳＤ39（南西から）

ＳＤ40（南西から）

ＳＤ50（南西から）

ＳＤ41（南東から）

ＳＤ41遺物出土状況（西から）

ＳＤ41遺物出土状況（南東から）

図版14

ＳＤ42（北から）

ＳＤ43・44・45（北西から）

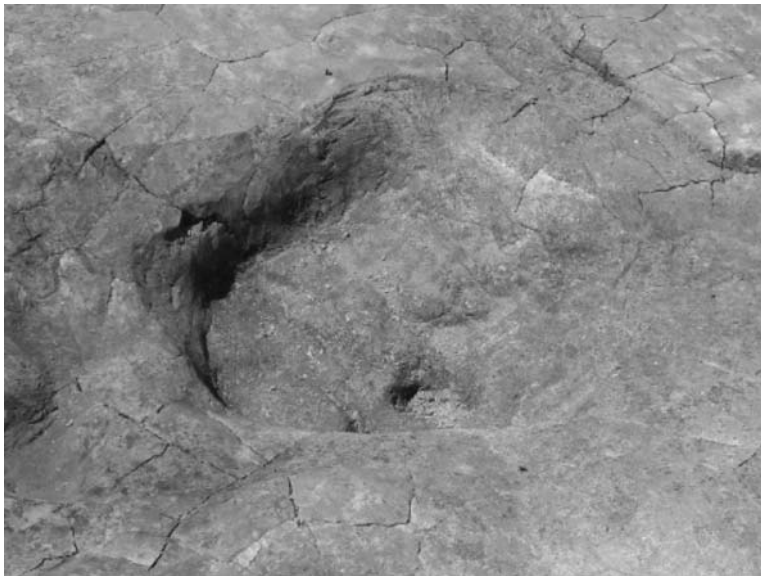
ＳＤ43石鍬（Ｓ28）出土状況

ＳＤ49（南西から）

ＳＤ49石出土状況

ＳＫ１遺物出土状況（北西から）

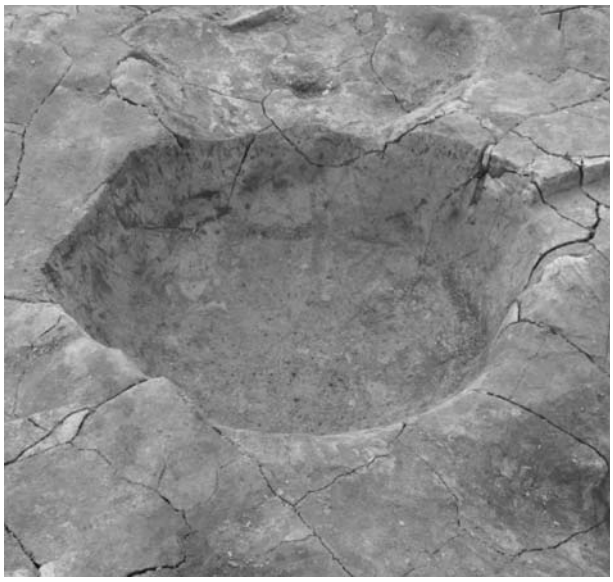
ＳＫ１（北西から）



ＳＫ２（南東から）

図版16

ＳＫ３（南から）



ＳＫ４（南から）

ＳＫ５（東から）

ＳＫ６（北東から）

２区第１遺構面全景（北東から）

２区第１遺構面全景（南西から）

図版18

ＳＤ24～30（南西から）

ＳＤ32～36（東から）

ＳＤ31（北から）

ＳＤ32・33（北西から）

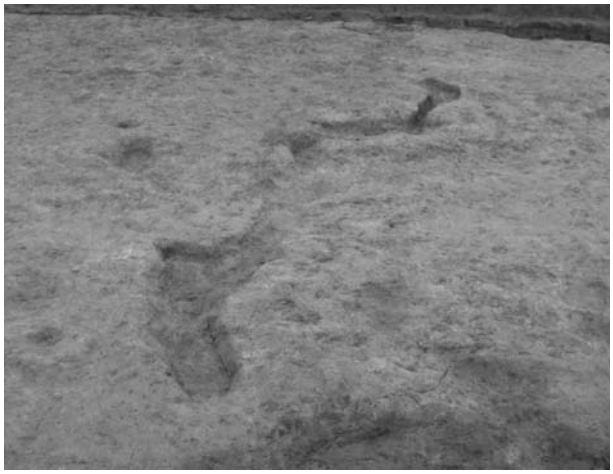
ＳＤ34・36（北東から）

ＳＤ35（北西から）

図版20

３区第２遺構面全景（南西から）

ＳＤ60（北西から）



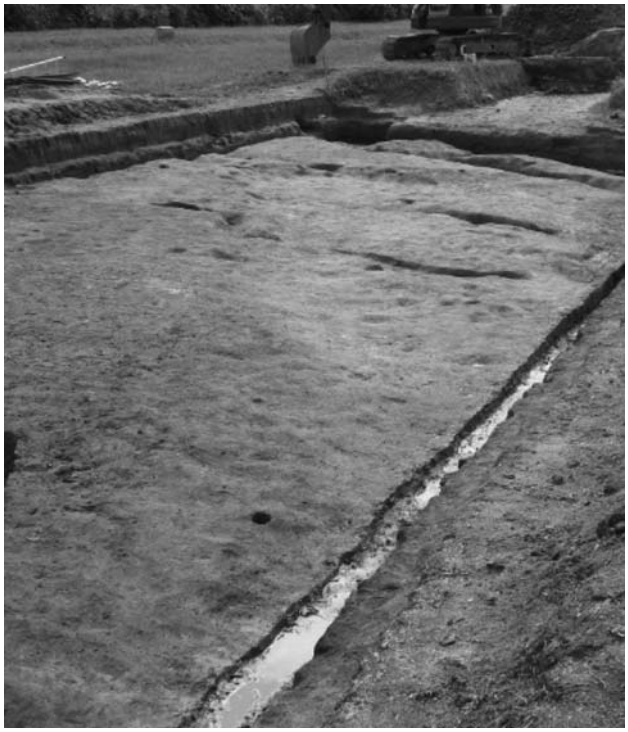
ＳＤ61（北から）

ＳＤ62（北西から）

ＳＤ63（東から）

３区第１遺構面全景（南西から）

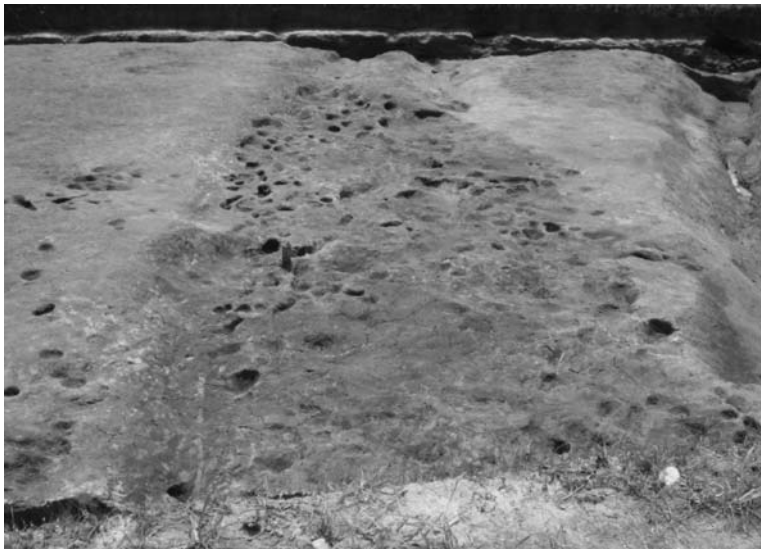
３区稲株痕、足跡検出状況
（北東から）



３区段状落差
（北東から）

図版22

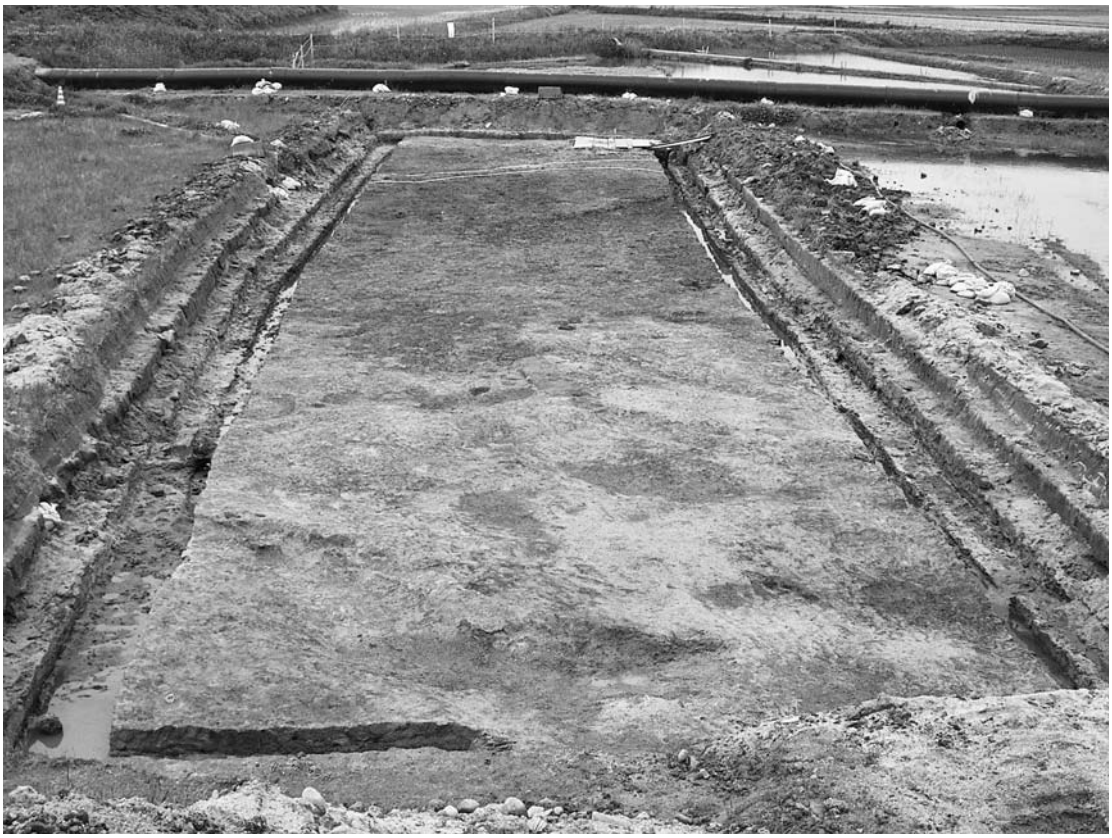
ＳＤ46・47・48（北から）



ＳＤ46・47（北から）

ＳＤ48（北から）

ＳＤ64（北東から）

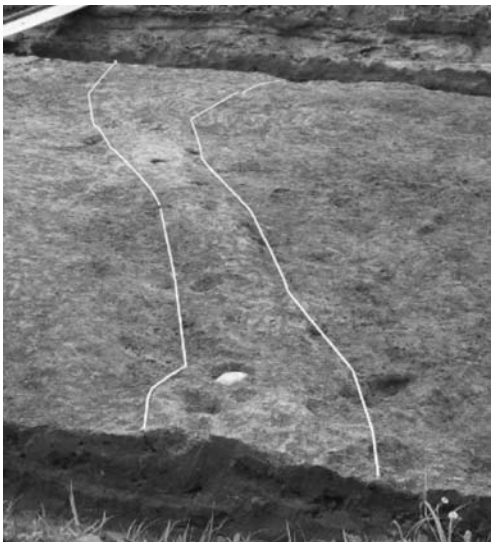


４区第３遺構面全景（東から）

４区第３遺構面全景（西から）

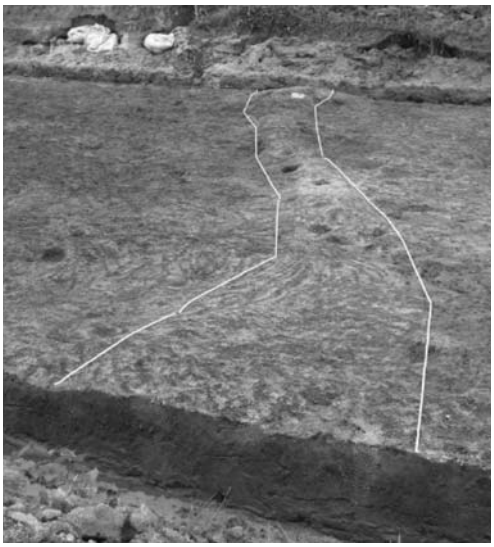
図版24

４区第３遺構面下層水田跡（北西から）



畦畔４（南東から）

４区第３遺構面下層水田跡（南東から）

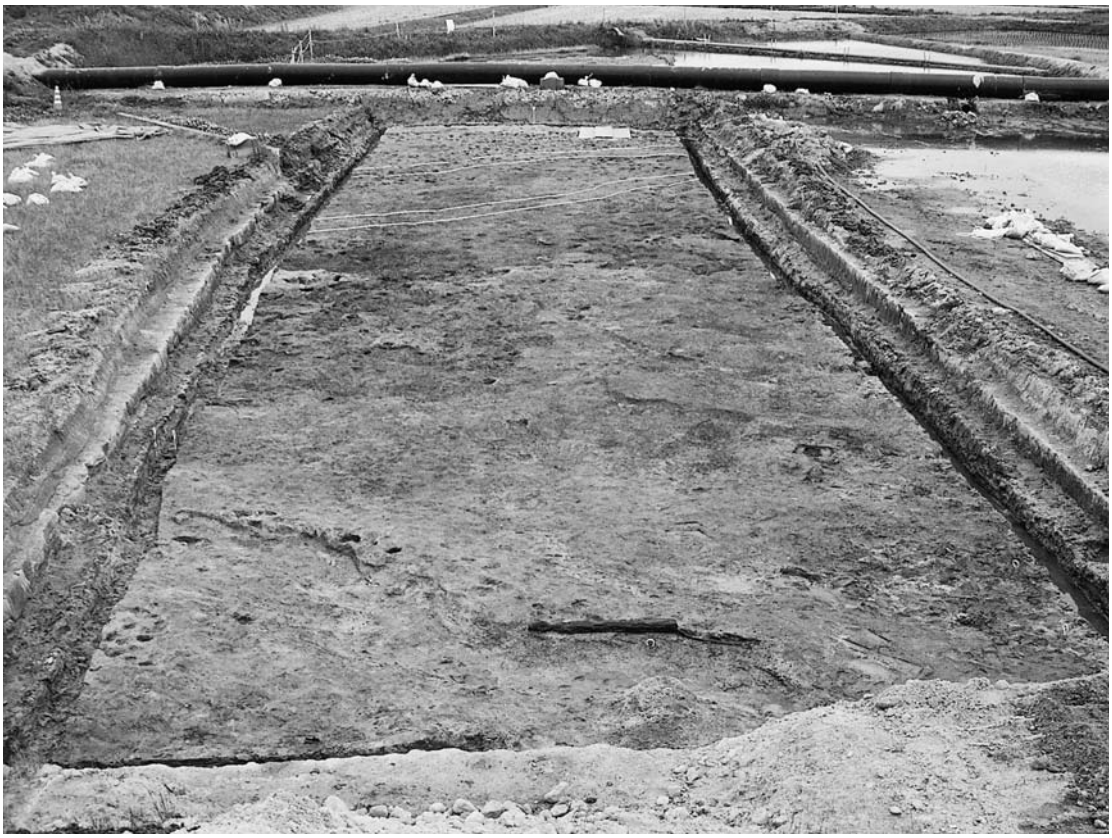


畦畔４（北西から）

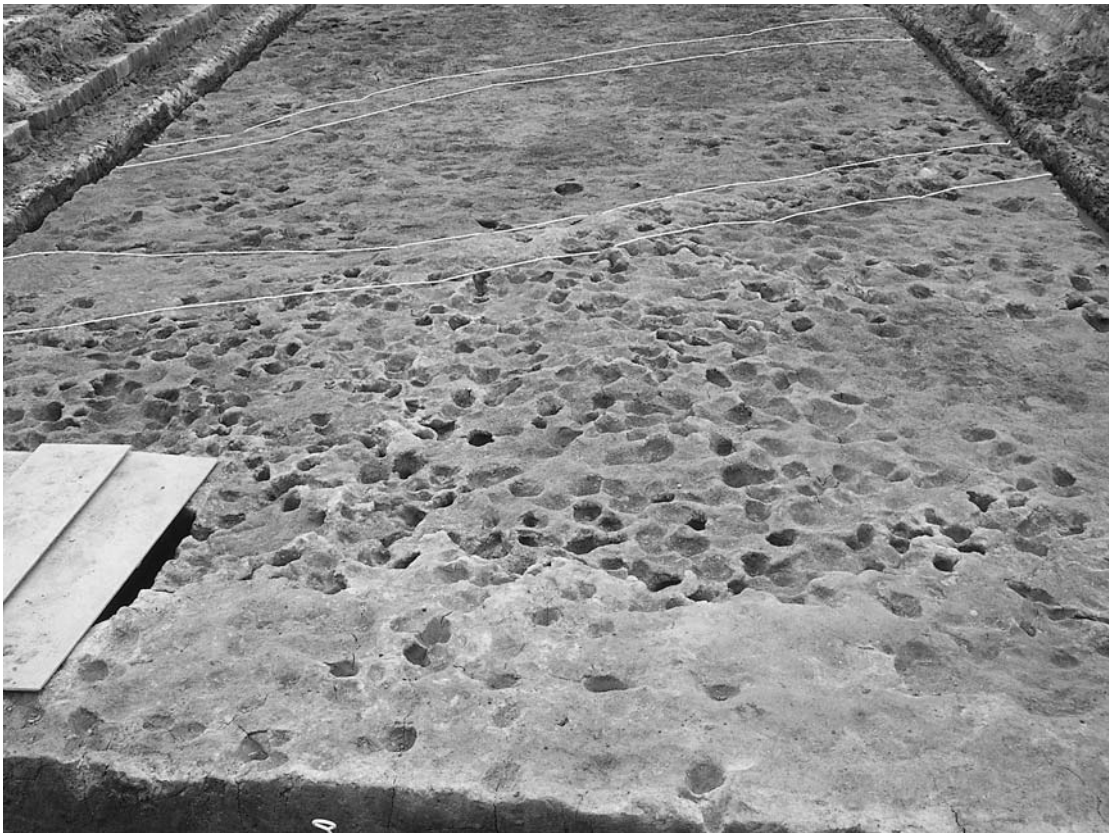
４区第３遺構面下層水田跡（南東から）

下層水田跡直下植物遺体検出状況（オモダカ科球茎の分布と近接写真）

図版26



４区第２遺構面全景（東から）

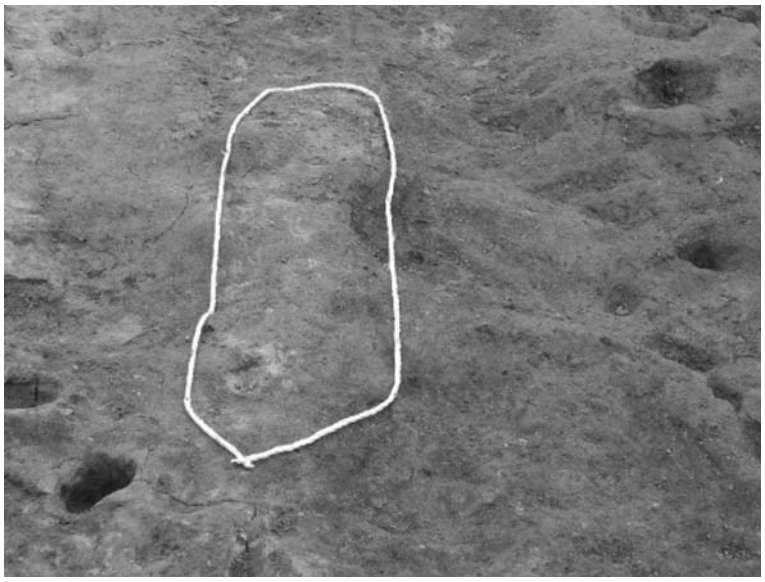


４区第２遺構面上層水田跡（西から）

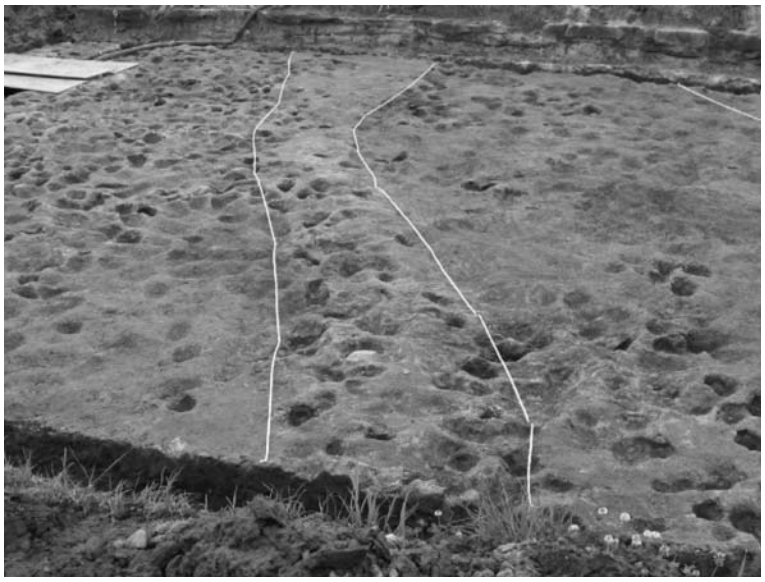
４区第２遺構面上層水田跡（北西から）

４区第２遺構面上層水田跡（東から）

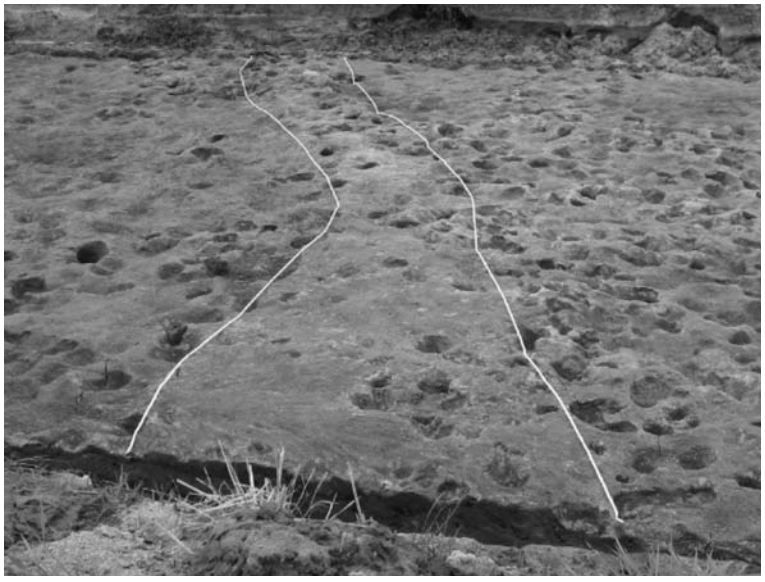
図版28



畦畔１（南から）

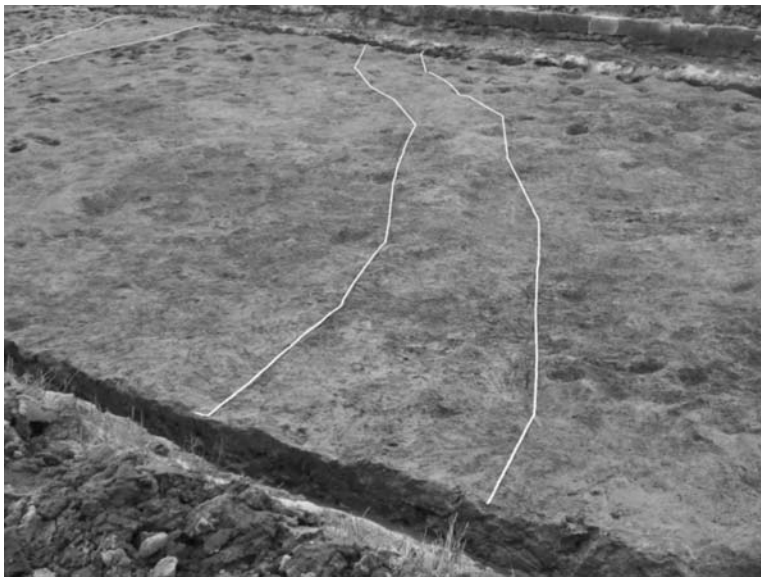


畦畔２（南東から）

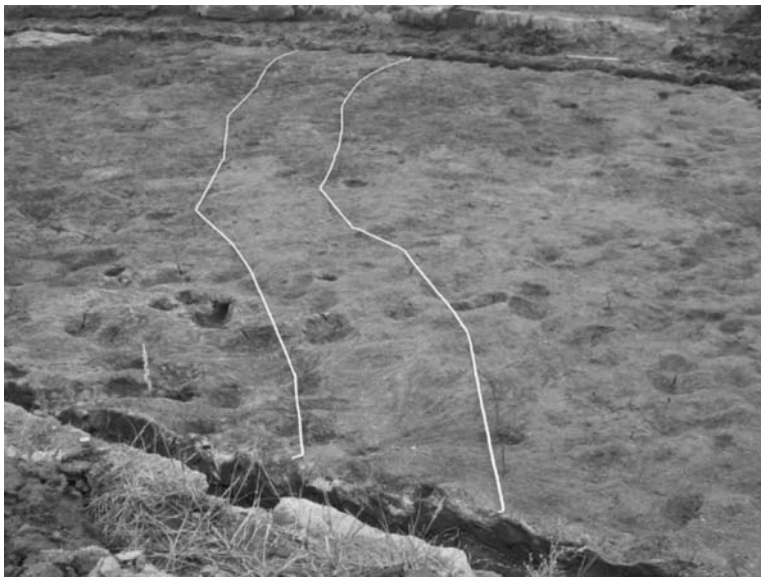


畦畔２（北西から）

４区第２遺構面上層水田跡畦畔



畦畔３（南東から）

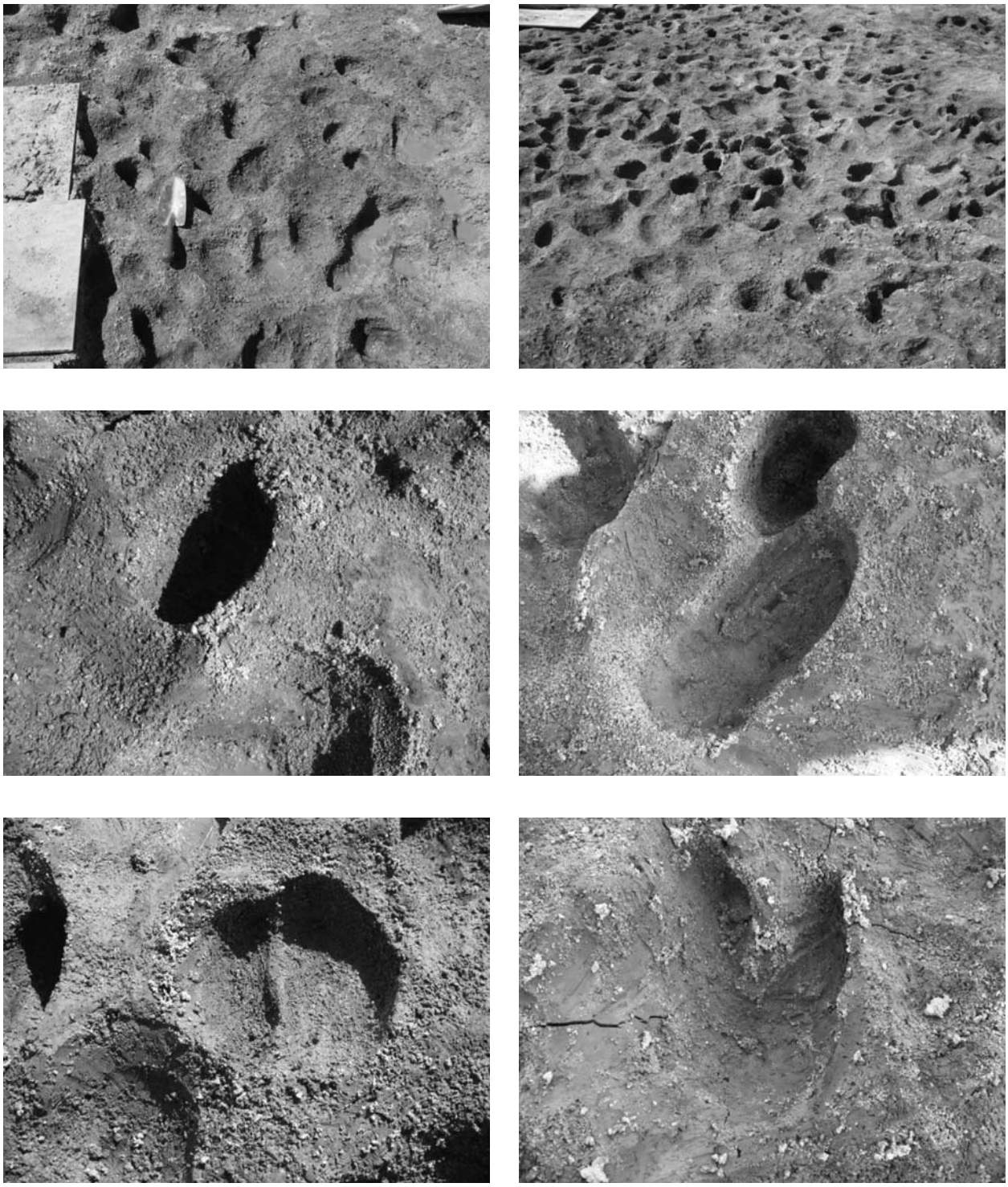


畦畔３（北西から）

ＳＤ23（南西から）

４区第２遺構面上層水田跡畦畔

図版30



4区第2遺構面上層水田跡稲株痕・足跡検出状況

棒状木製品（Ｗ２）出土状況（北から）

棒状木製品（Ｗ２）出土状況

漆器椀（Ｗ３）出土状況

棒状木製品（Ｗ１）出土状況

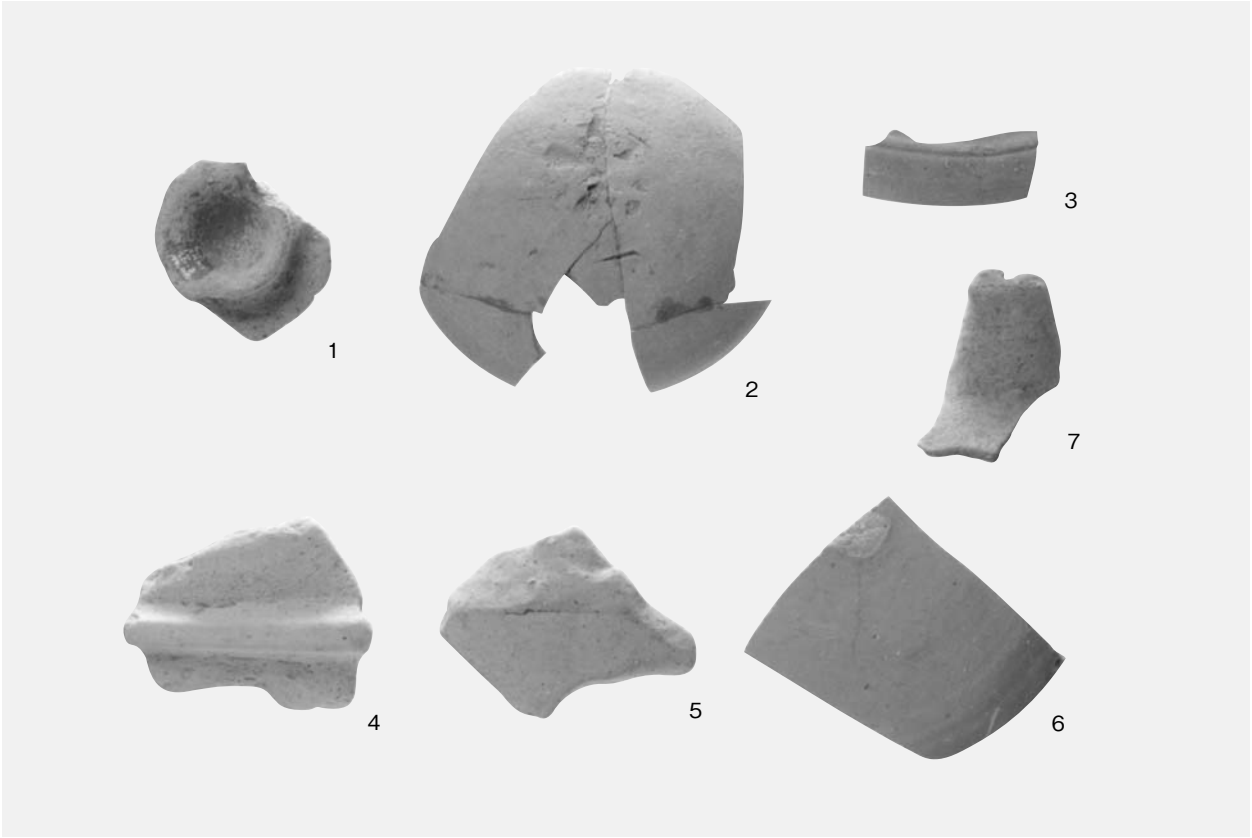
棒状木製品（Ｗ５）出土状況

図版32

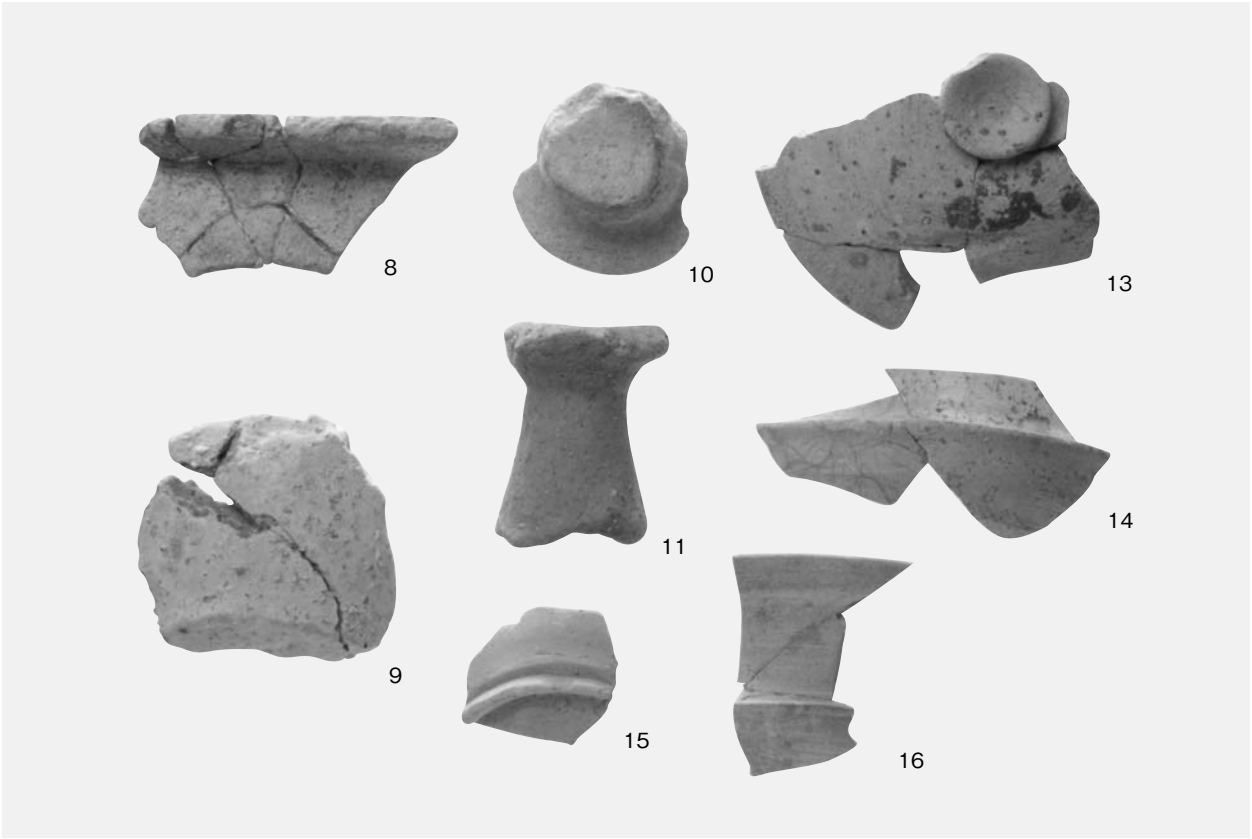
４区第１遺構面全景（東から）

ＳＤ１（北西から）

ＳＤ２（南から）

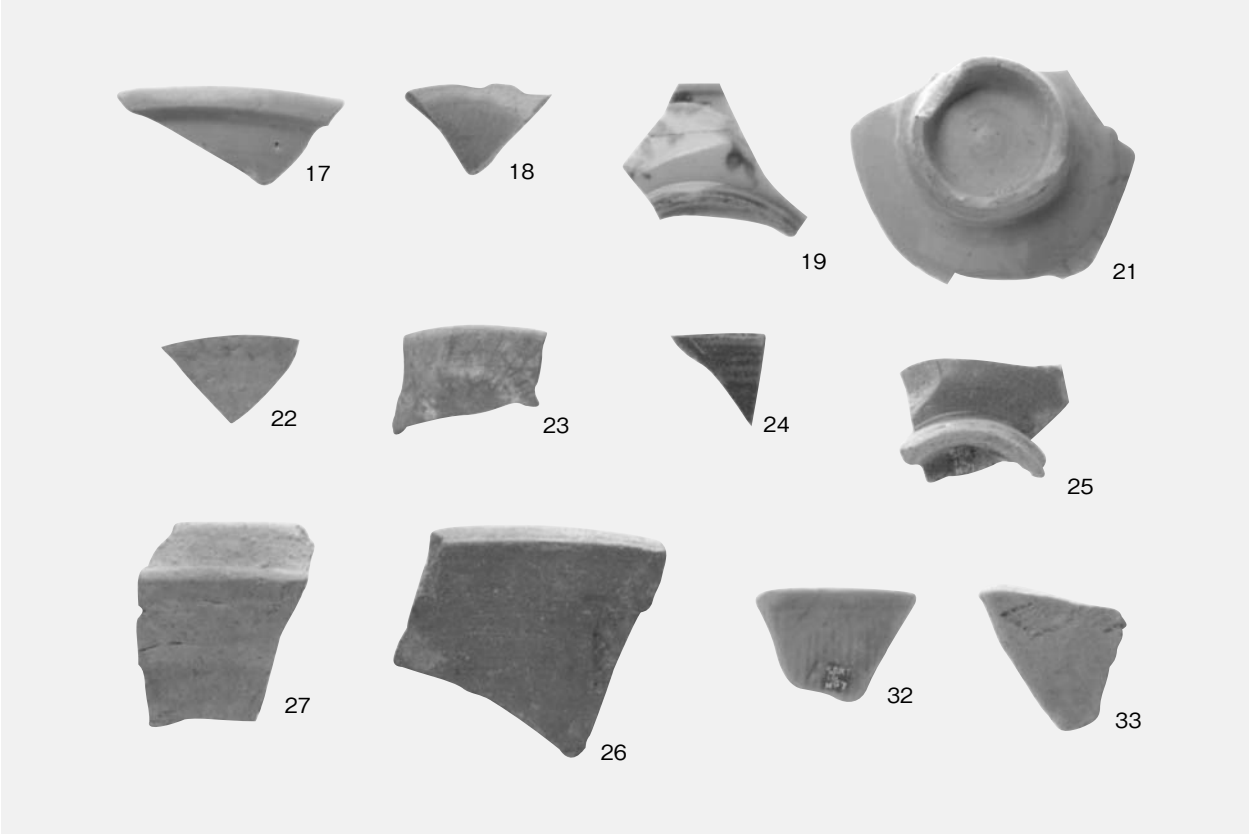


１区ＳＤ３・４・５・１０出土遺物

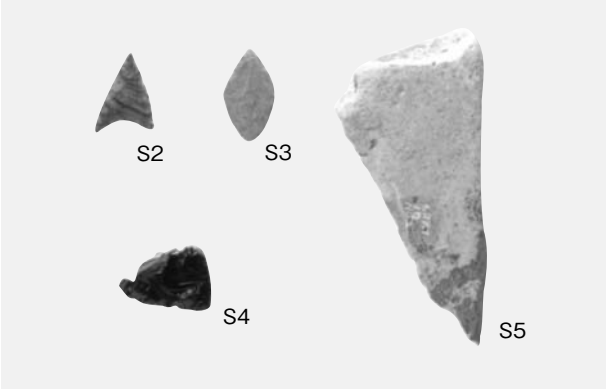


１区遺構外出土土器

図版34

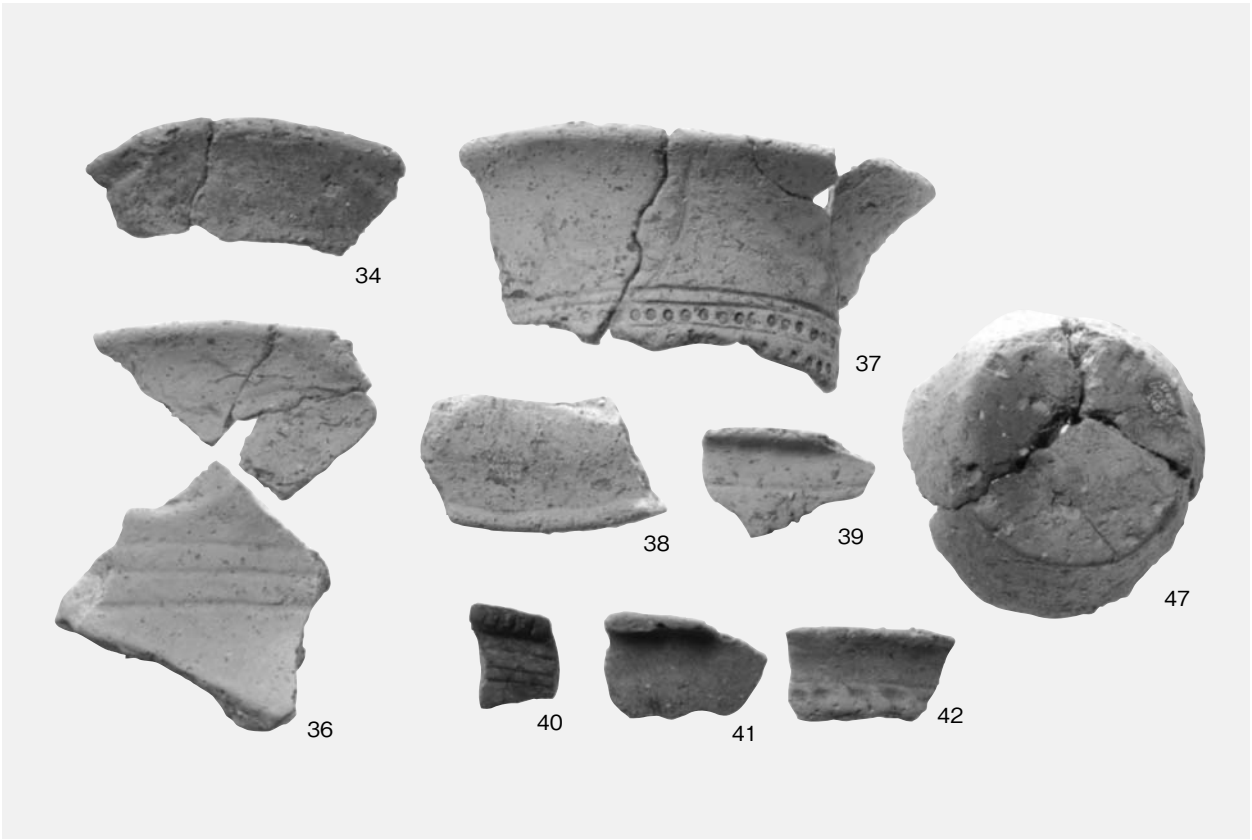


1区遺構外出土陶磁器



1区遺構外出土石器

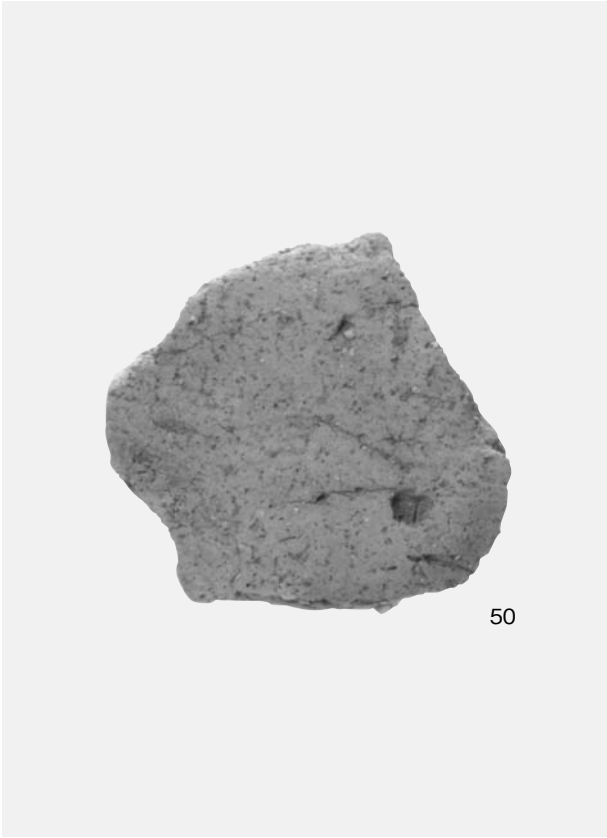
1区ＳＤ１２出土石器



２区ＳＤ３７出土土器

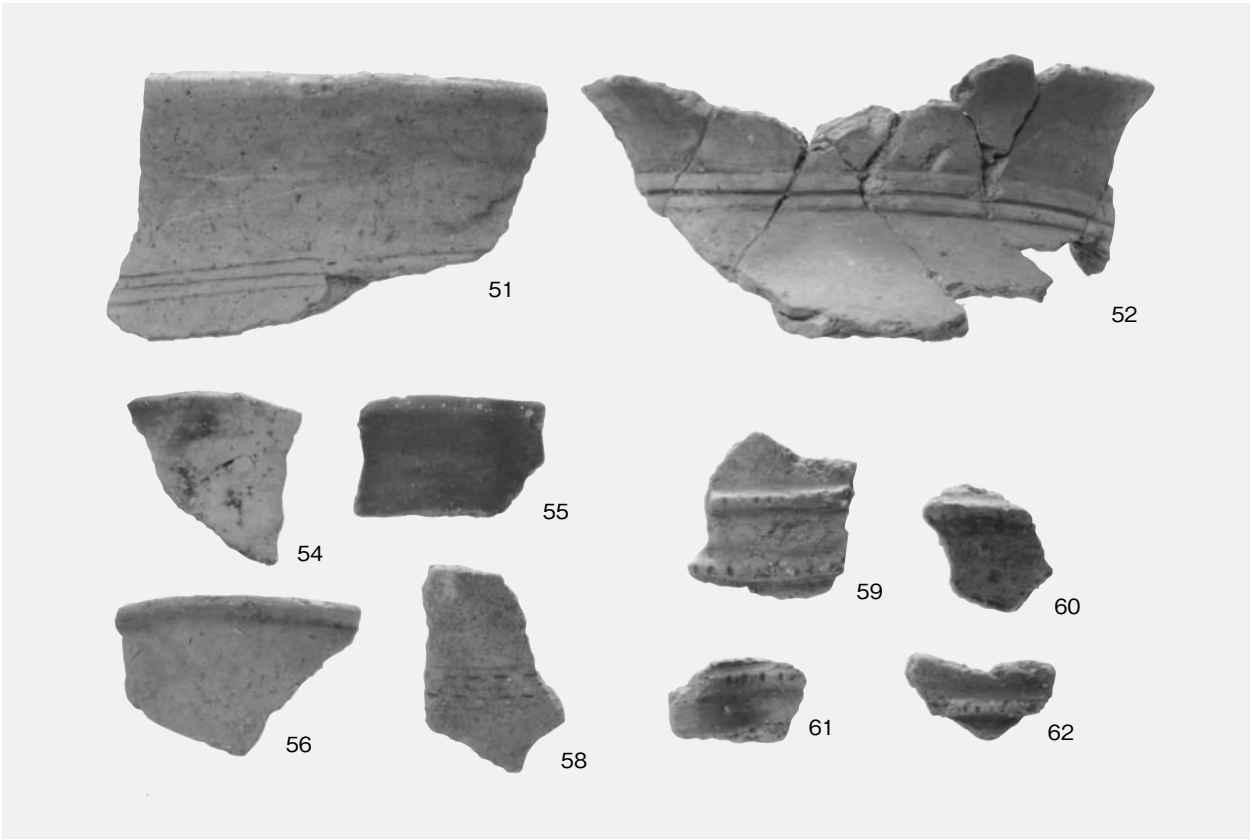
２区ＳＤ３７出土石器

図版36

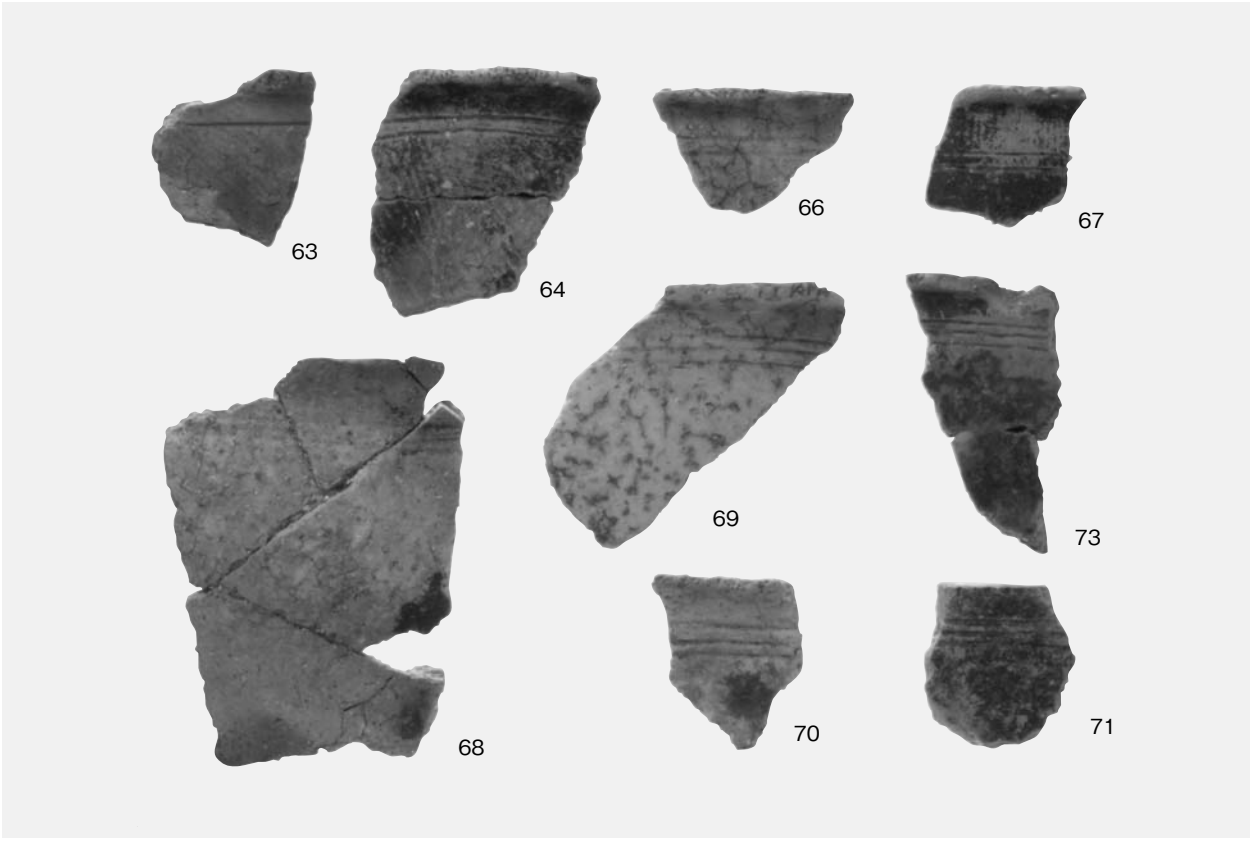


２区ＳＤ３８出土土器

２区ＳＤ３８出土石器

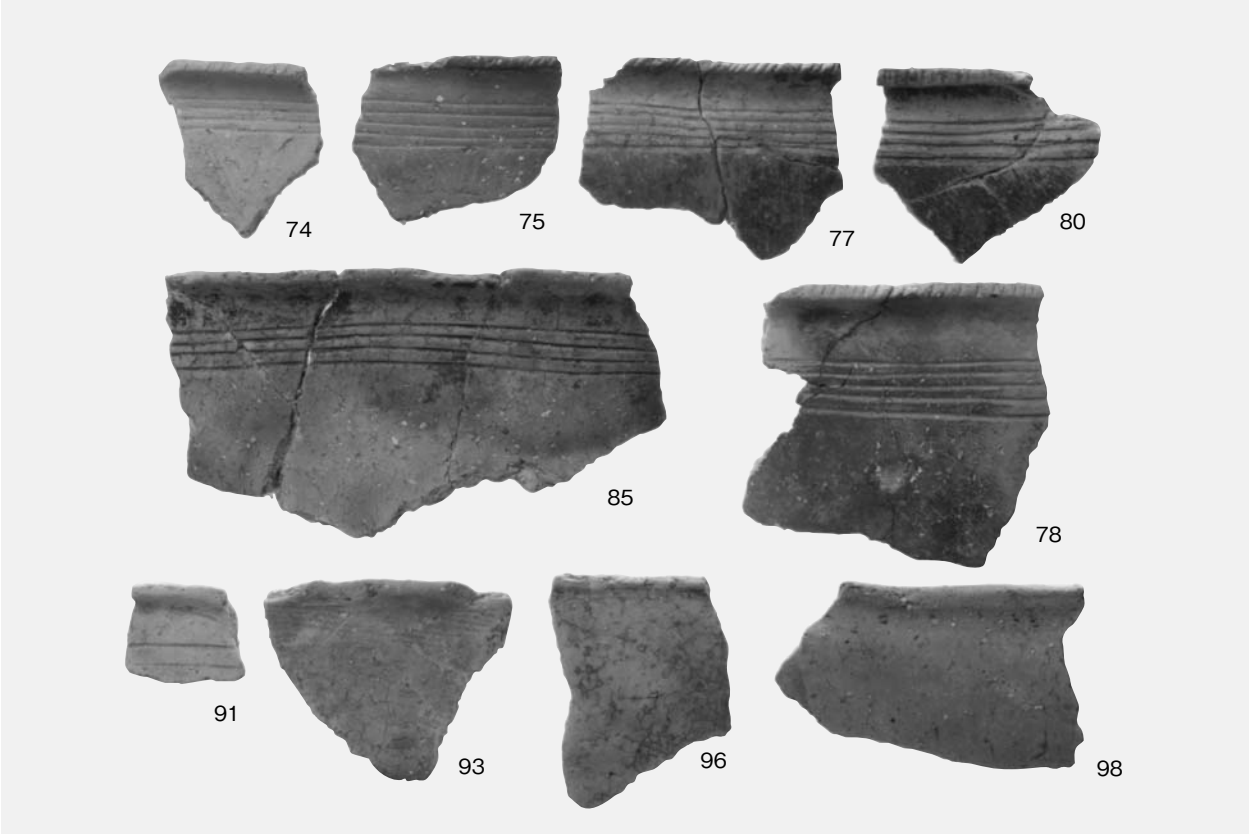


２区ＳＤ４１出土土器（１）

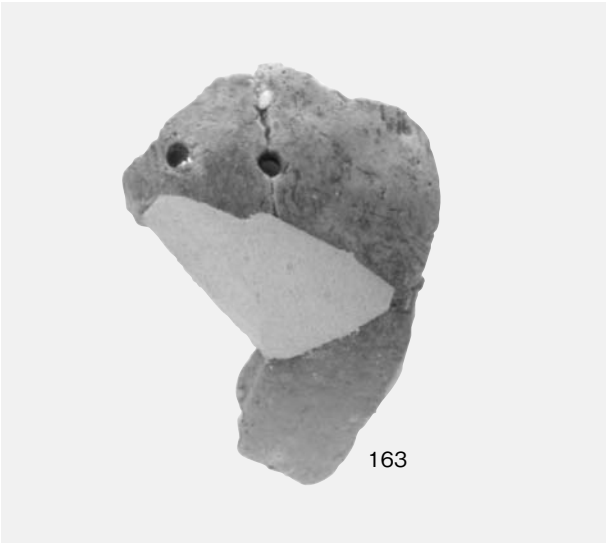


２区ＳＤ４１出土土器（２）

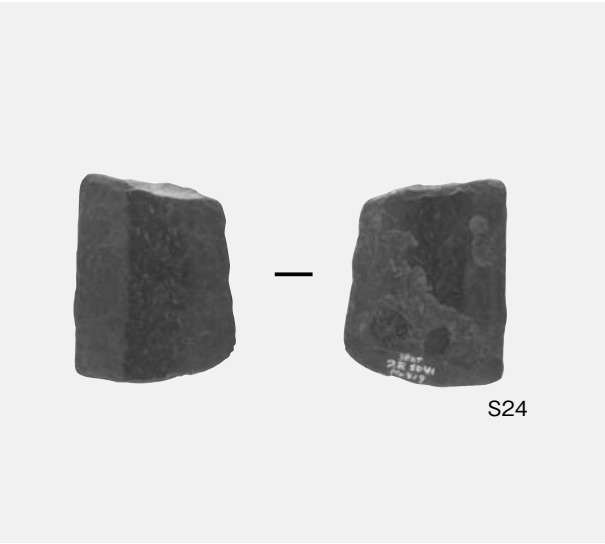
図版38



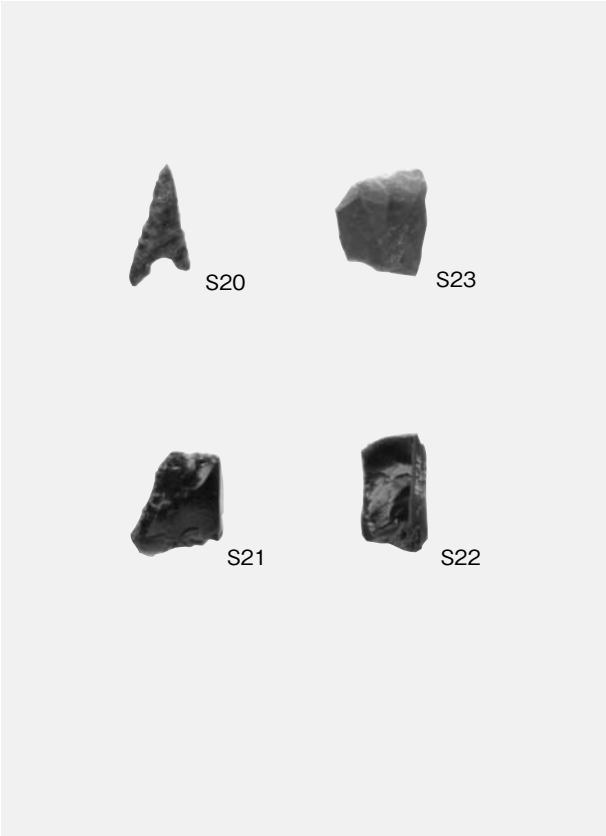
２区ＳＤ４１出土土器（３）



２区ＳＤ４１出土土笛

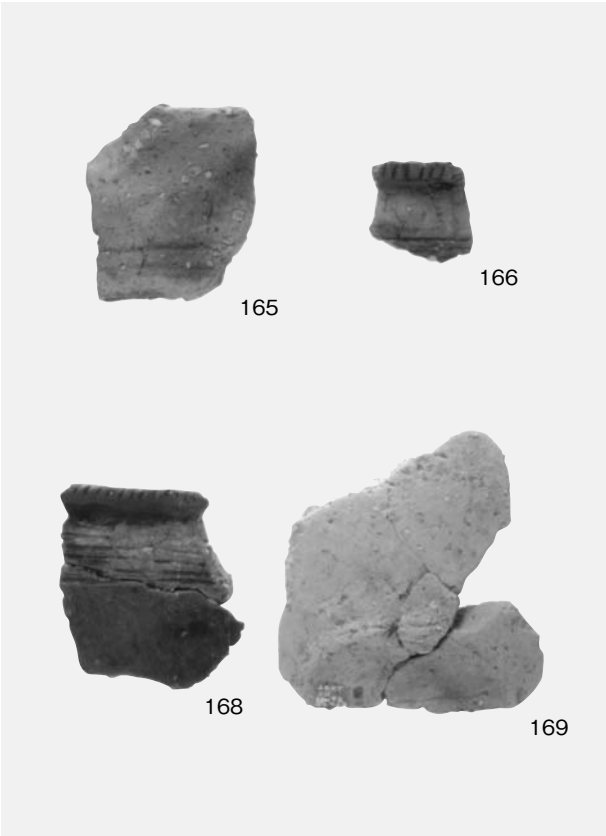


２区ＳＤ４１出土磨製石剣

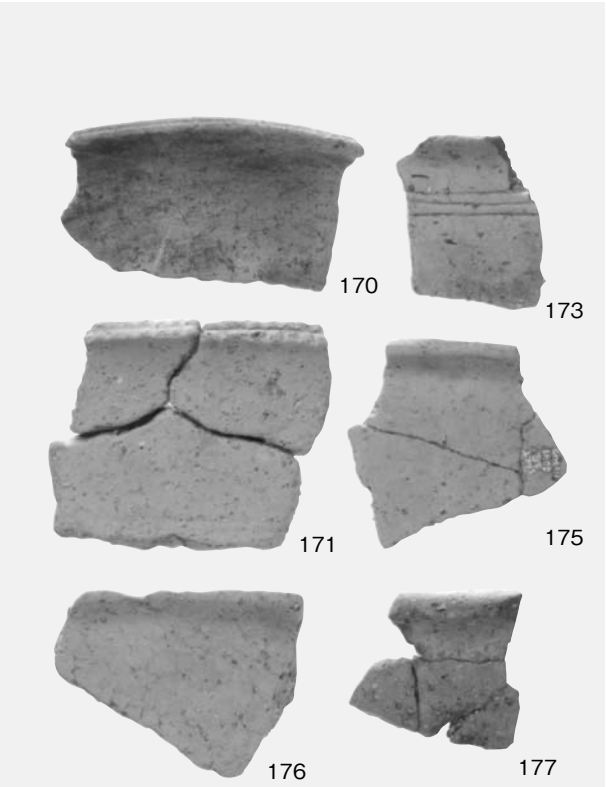


２区ＳＤ４１出土石器（１）

２区ＳＤ４１出土石器（２）



２区ＳＤ４２出土遺物

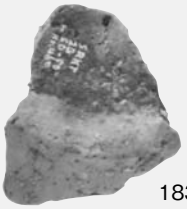


２区ＳＤ４９出土遺物

図版40

S28

２区ＳＤ４３出土石器



183

S29

２区ＳＤ５０出土遺物

184

２区ＳＫ１出土遺物

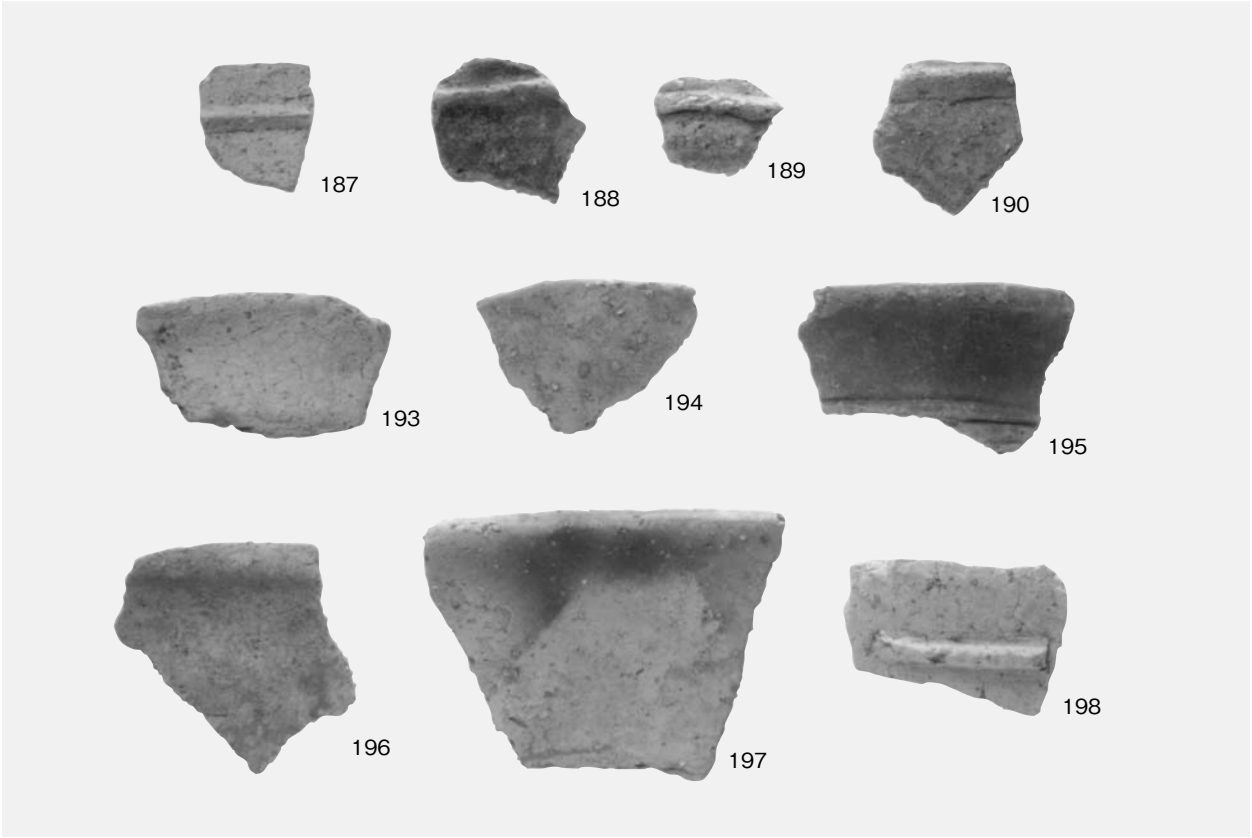
185

S30

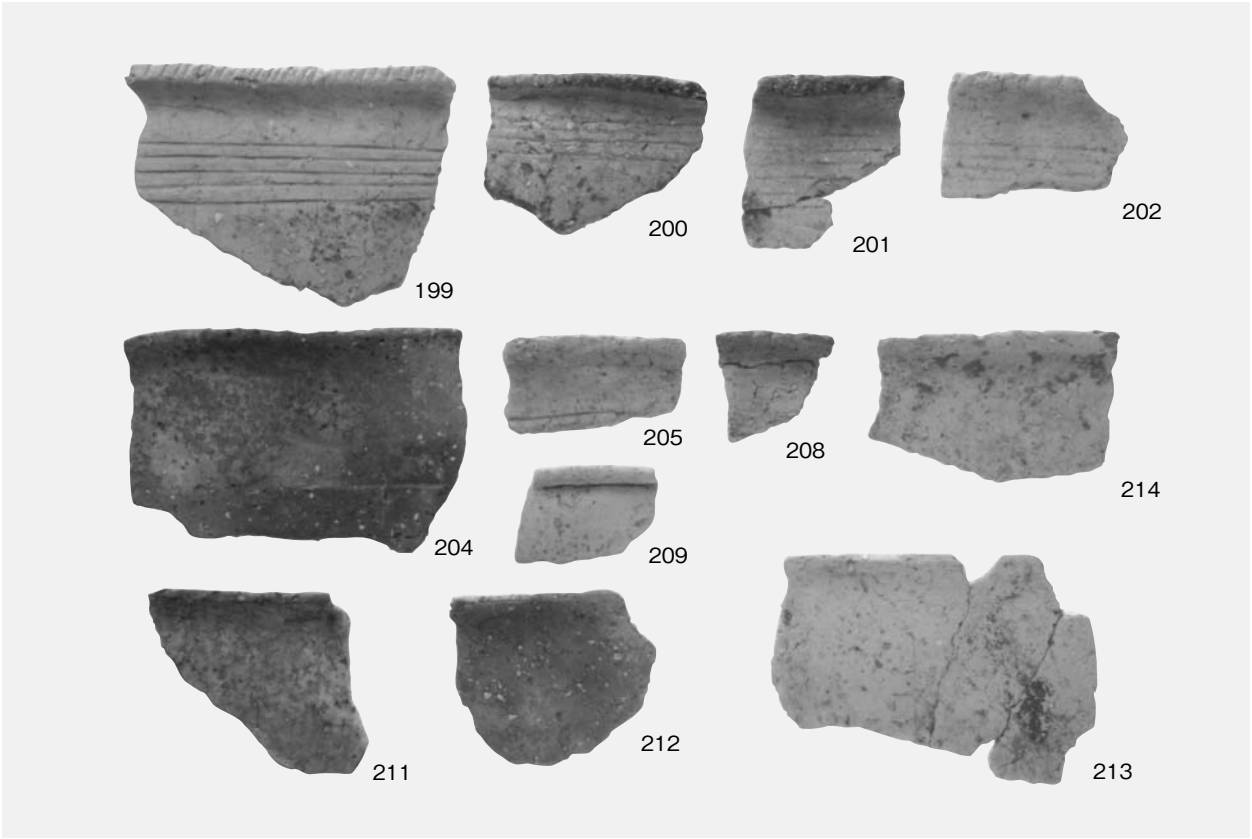
２区ＳＫ４出土遺物

S31

２区ＳＫ５出土石器

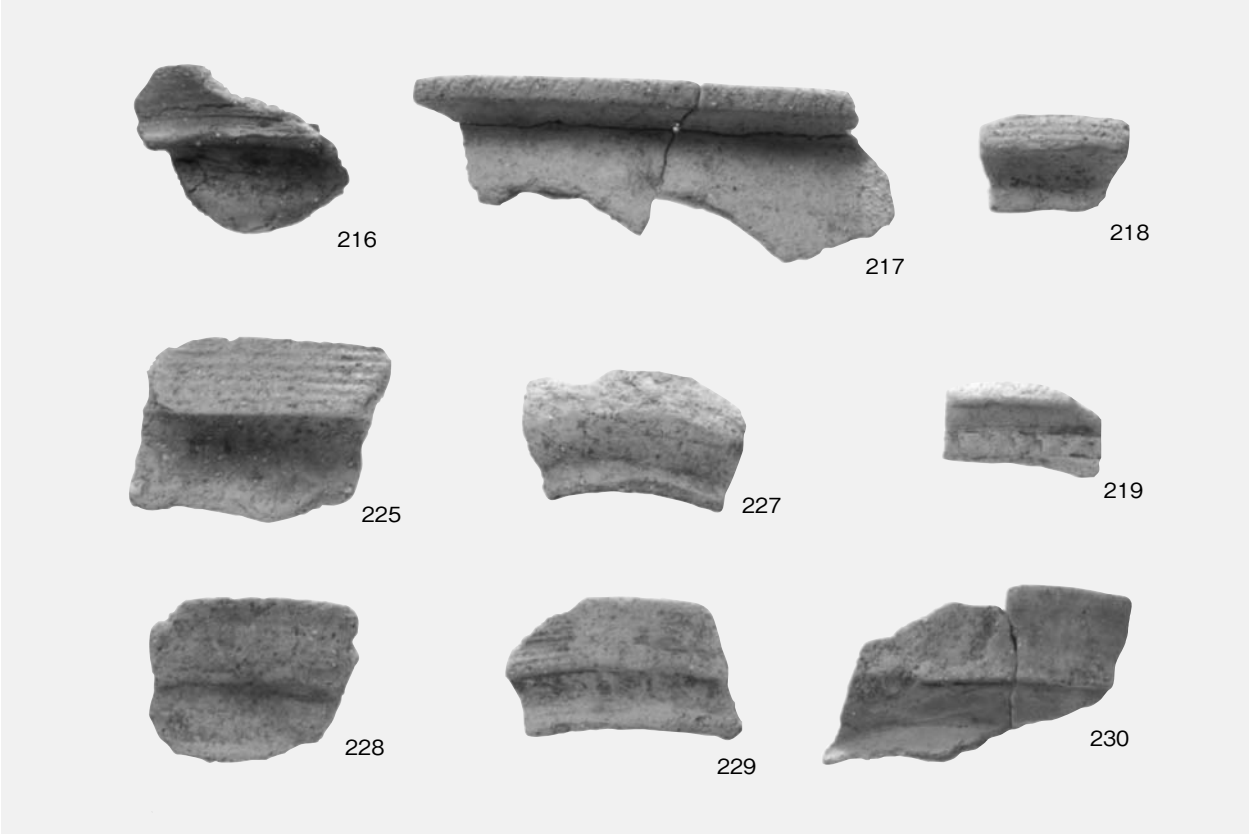


２区遺構外出土土器（１）

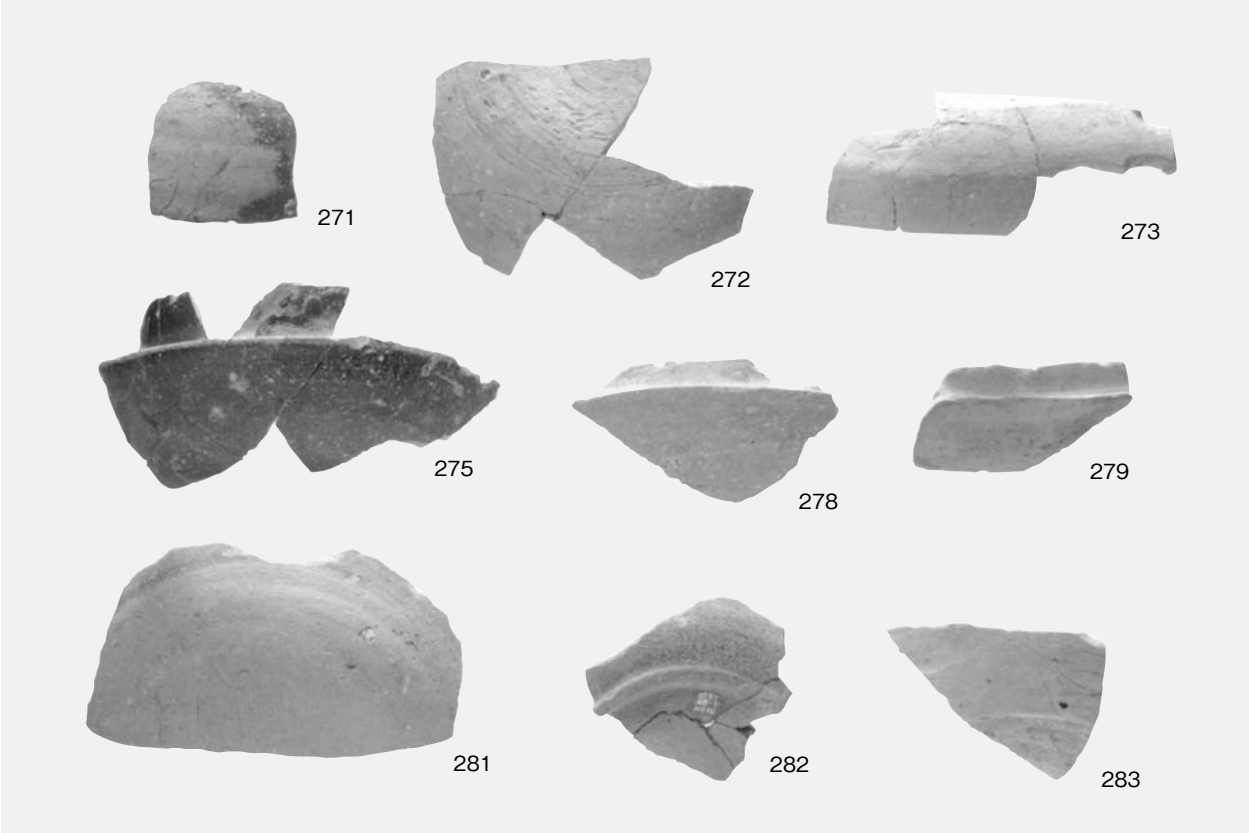


２区遺構外出土土器（２）

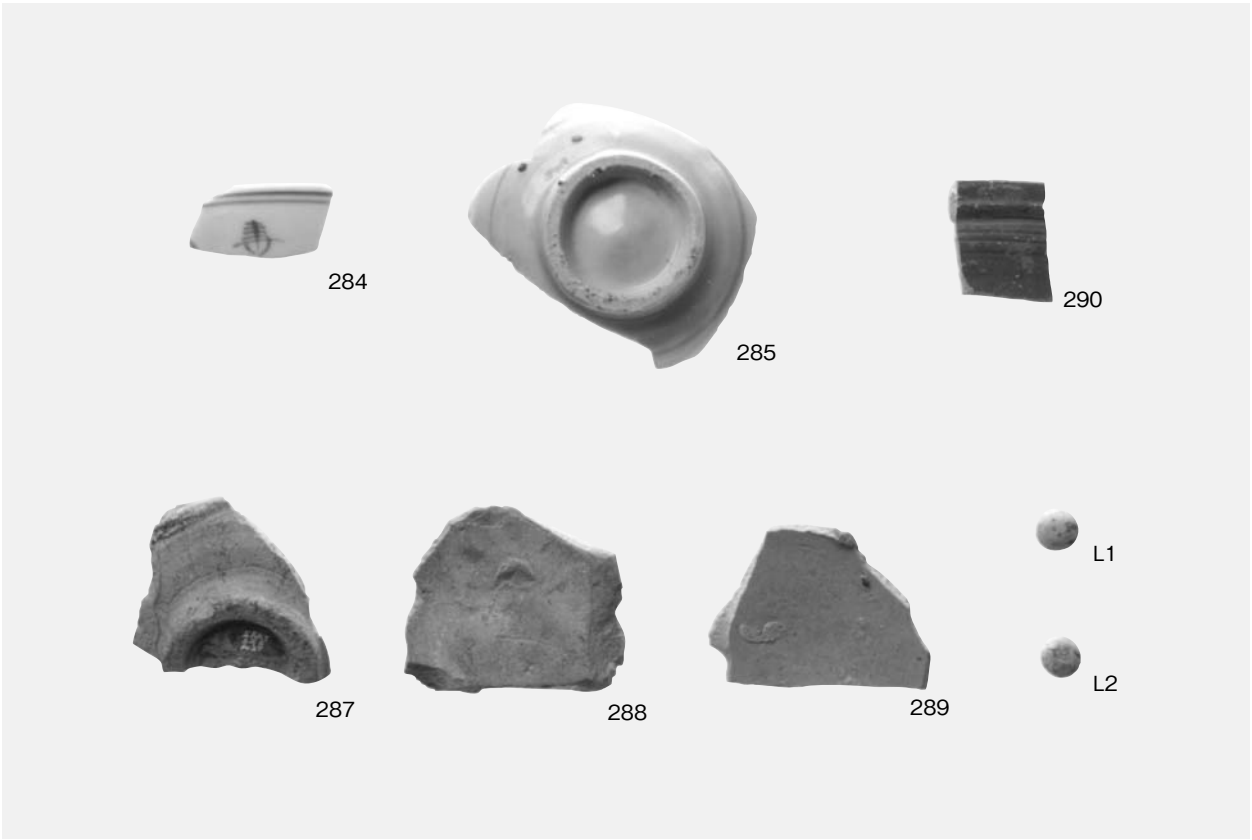
図版42



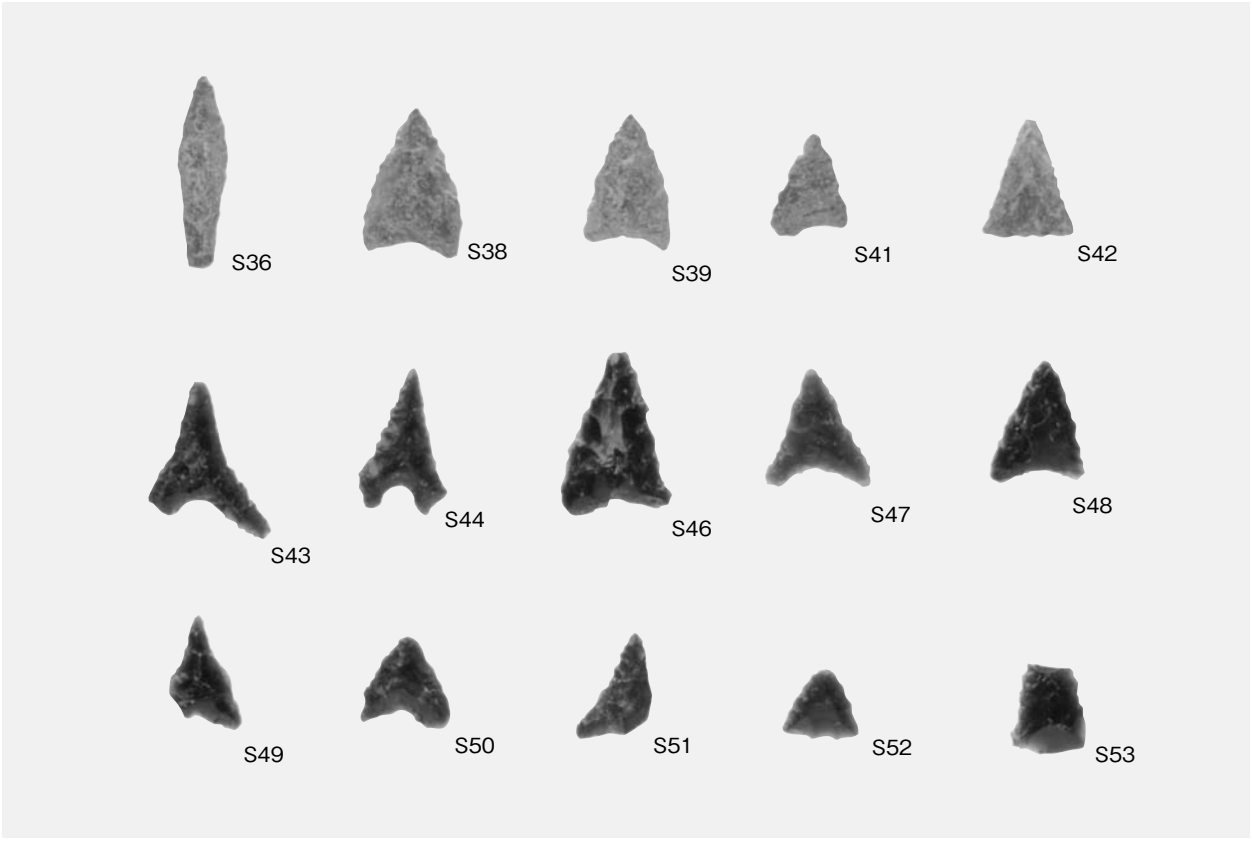
２区遺構外出土土器（３）



２区遺構外出土土器（４）

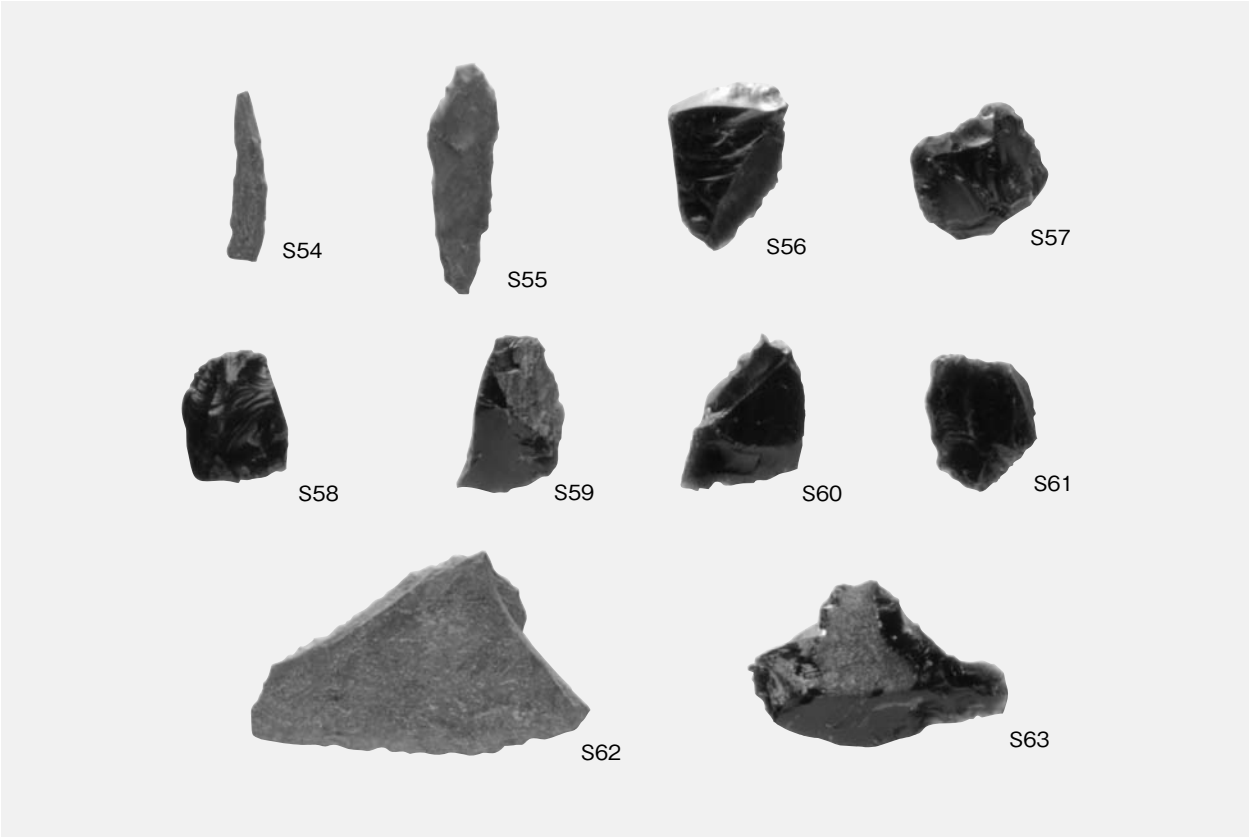


２区遺構外出土陶磁器、鉄砲玉



２区遺構外出土石器（１）

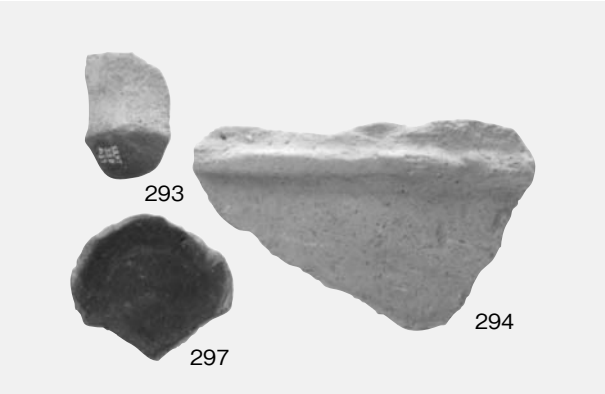
図版44



２区遺構外出土石器（２）

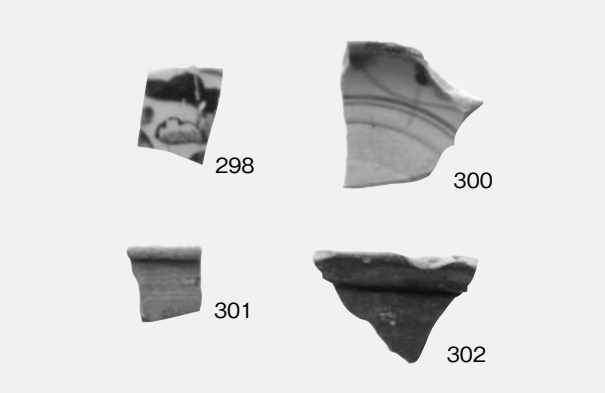
２区遺構外出土石器（３）

３区ＳＤ４７出土遺物

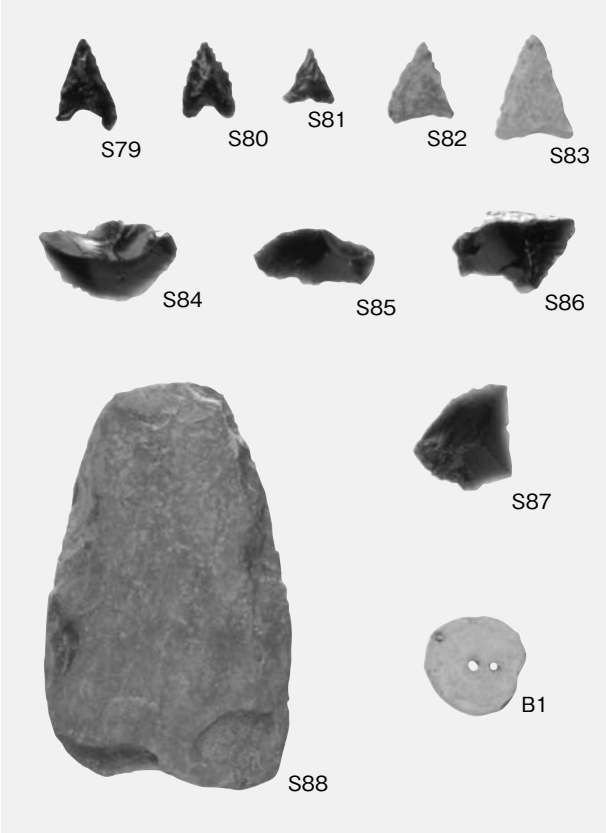


３区遺構外出土遺物（１）

３区遺構外出土遺物（２）



３区遺構外出土遺物（３）



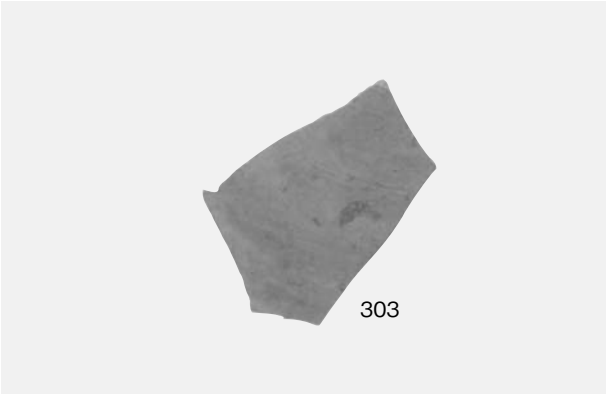
３区遺構外出土石器・金属製品

図版46

4区自然流路1出土木製品（1）

4区自然流路1出土木製品（2）

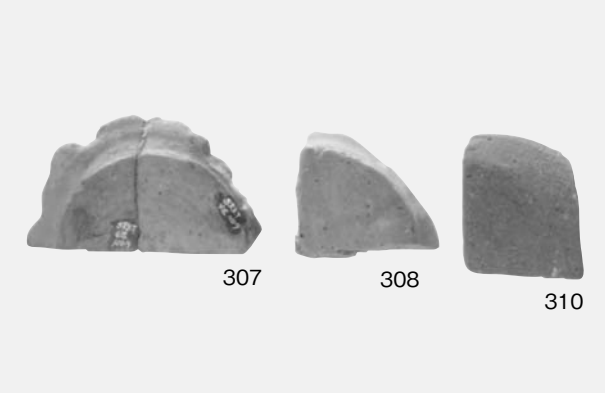
4区自然流路1出土木製品（W2）頭部拡大



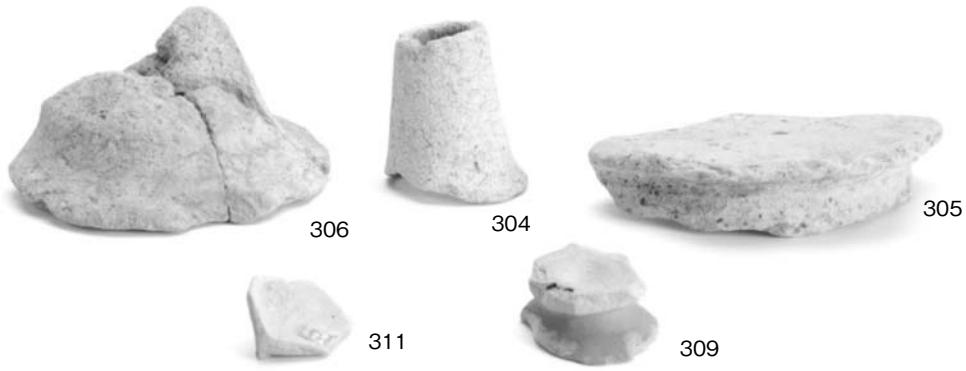
4区第2遺構面上層水田跡出土土器

4区第2遺構面上層水田跡出土漆器

4区第2遺構面上層水田跡出土木製品



4区遺構外出土土器（1）

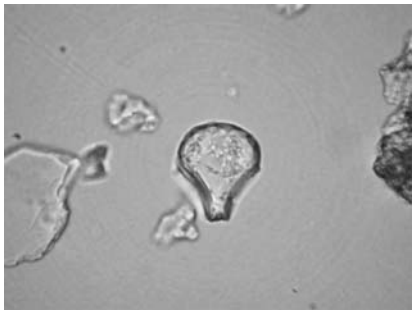


4区遺構外出土土器（2）

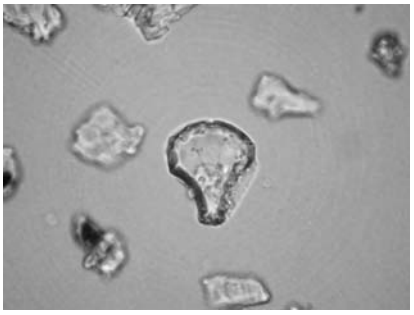
4区遺構外出土石器

4区遺構外出土木製品

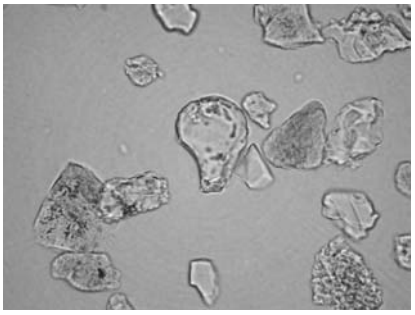
図版48



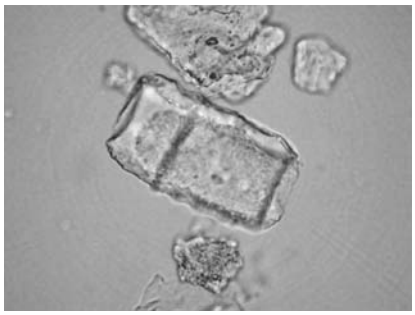
イネ



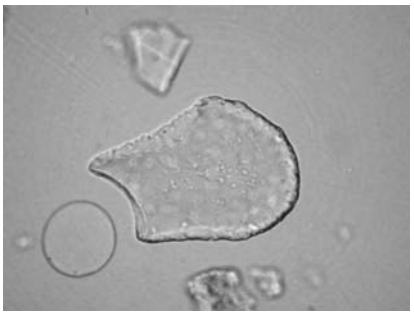
イネ



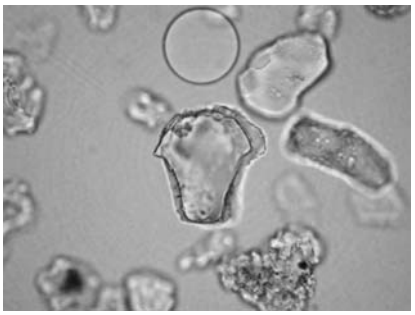
イネ



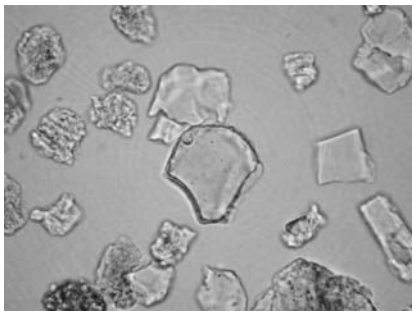
キビ族型



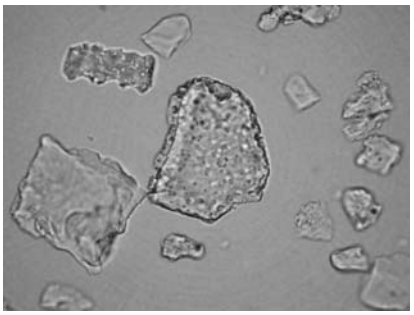
ヨシ属



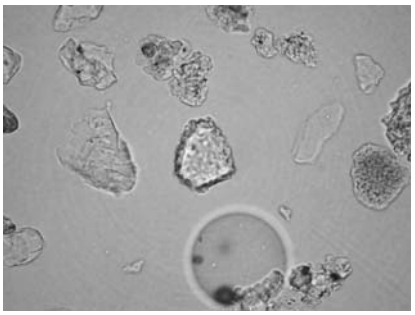
ネザサ節型



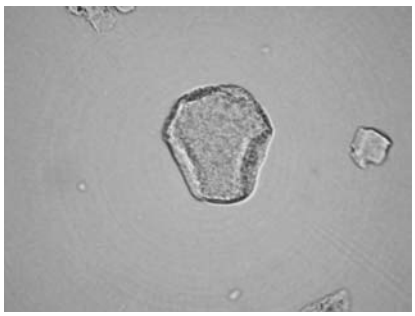
メダケ節型



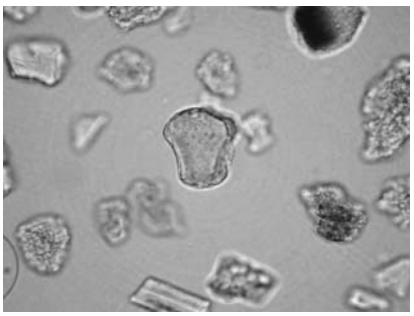
チマキザサ節型



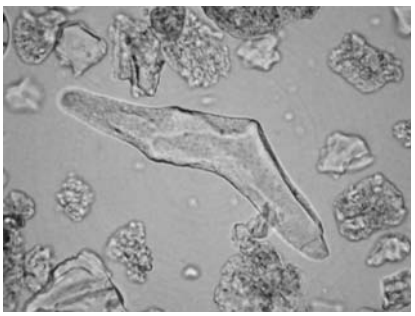
ミヤコザサ節型



ススキ属型



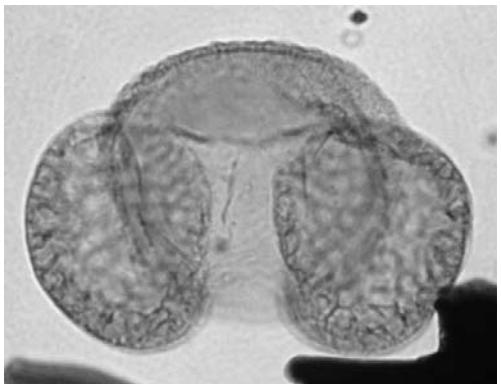
ススキ属型



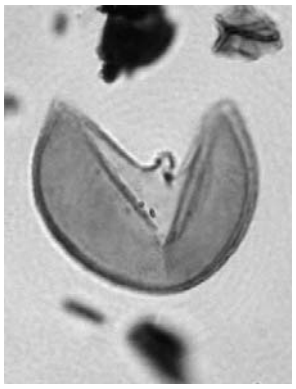
樹木起源

50 μm

清水川六反田遺跡のプラント・オパール顕微鏡写真



1　マツ属複維管束亜属



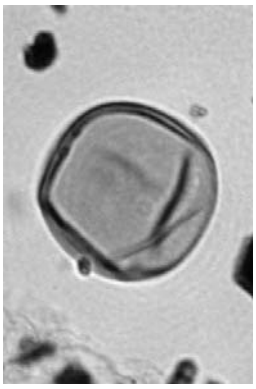
2　スギ

3　イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科

4　シイ属

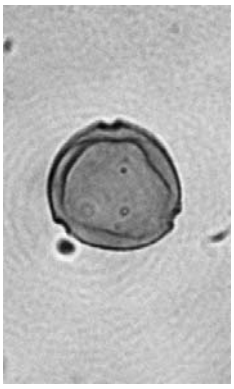
5　コナラ属
コナラ亜属

6　コナラ属
アカガシ亜属

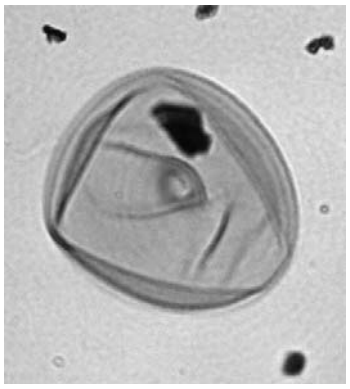


7　エノキ属ームクノキ

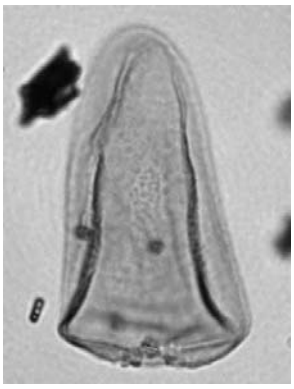
8　キハダ属



9　クワ科
ーイラクサ科



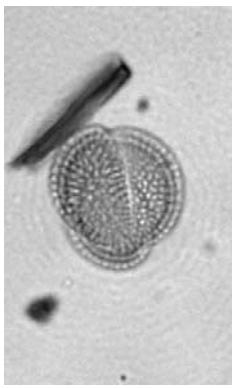
10　イネ属型



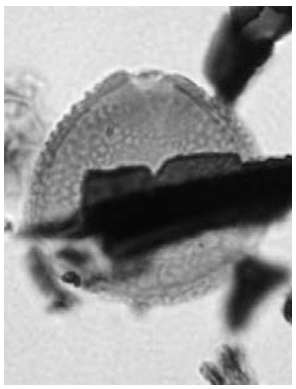
11　カヤツリグサ科

12　ミズアオイ属

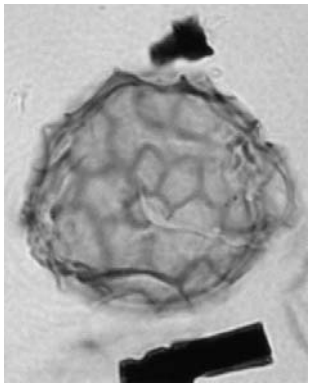
13　ソバ属



14　アブラナ科

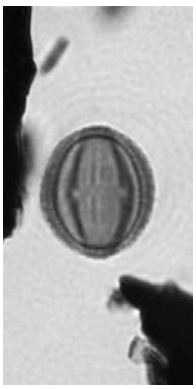


15　ノアズキ属



16　ササゲ属

17　セリ亜科



18　ヨモギ属

10 μm

清水川六反田遺跡の花粉顕微鏡写真

図版50

1　イヌガヤ種子　5.0㎜

2　オニグルミ核　5.0㎜

3　イチイガシ堅果　5.0㎜

4　コナラ属アカガシ亜属殻斗　5.0㎜

5　ウメ核　5.0㎜

6　モモ核　5.0㎜

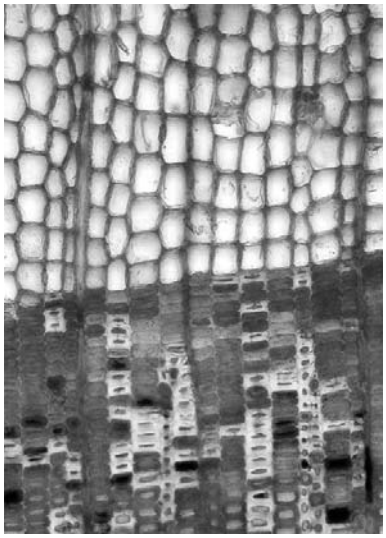
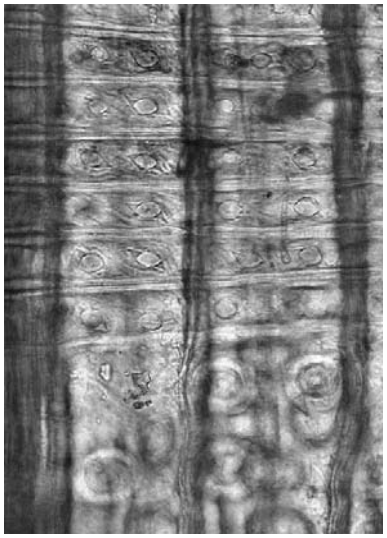
7　トチノキ種子　5.0㎜

8　エゴノキ核　5.0㎜

9　オモダカ科球茎　5.0㎜

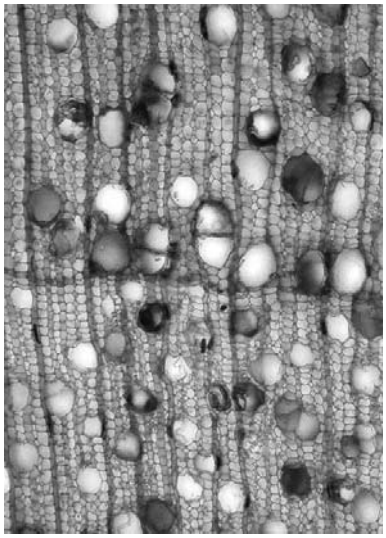
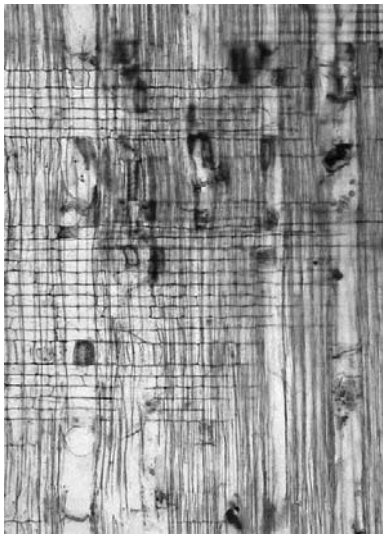
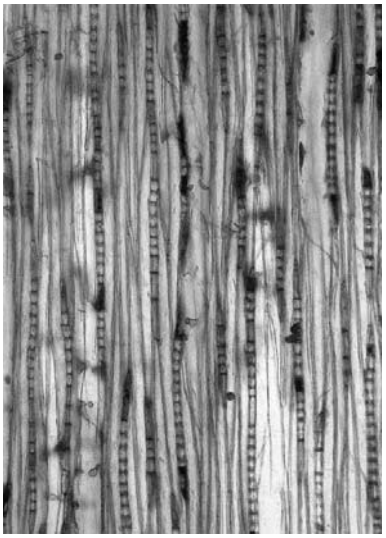
10　オモダカ科球茎　5.0㎜

清水川六反田遺跡出土の種実

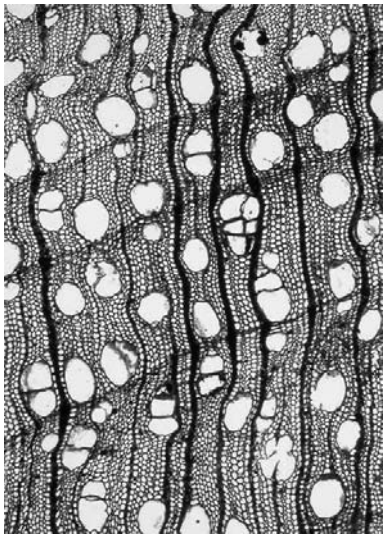
横断面 ―――― ： 0.2㎜　放射断面 ―――― ： 0.05㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

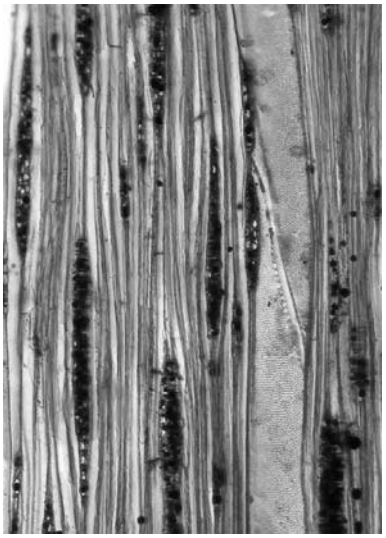
写真１　№３　４区　砂層　中世（12世紀上限）　スギ

横断面 ―――― ： 0.2㎜　放射断面 ―――― ： 0.2㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

写真２　№２　４区　砂層　中世（12世紀上限）　ヤナギ属



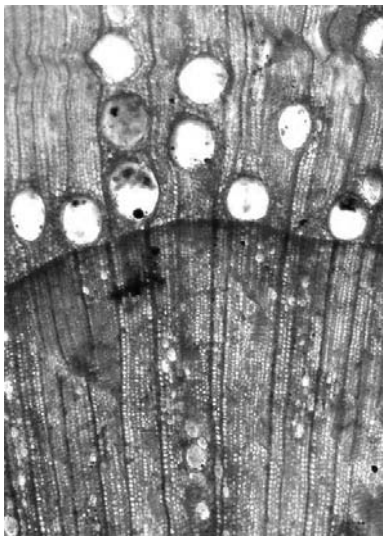
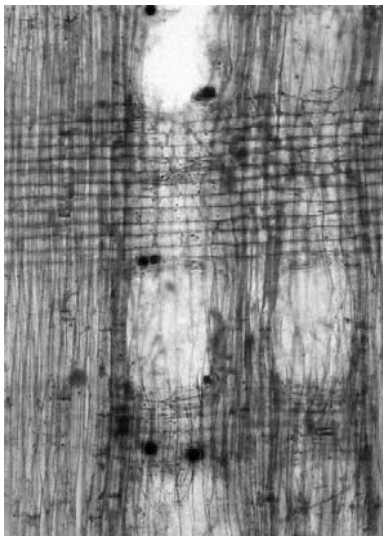
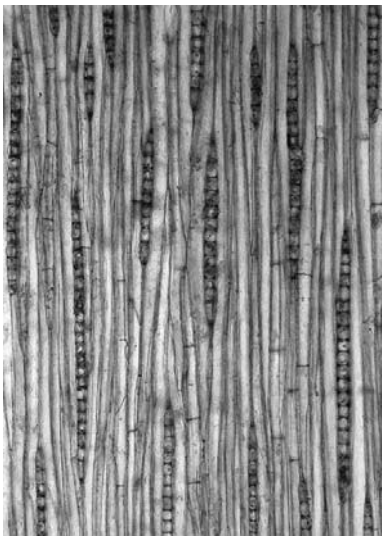


横断面 ―――― ： 0.5㎜　放射断面 ―――― ： 0.2㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

写真３　№１　４区　砂層　中世（12世紀上限）　カバノキ属

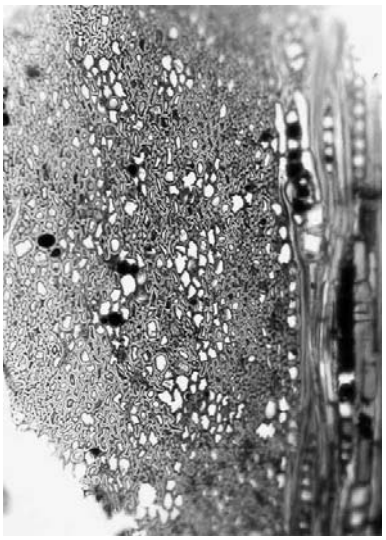
清水川六反田遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅰ

図版52

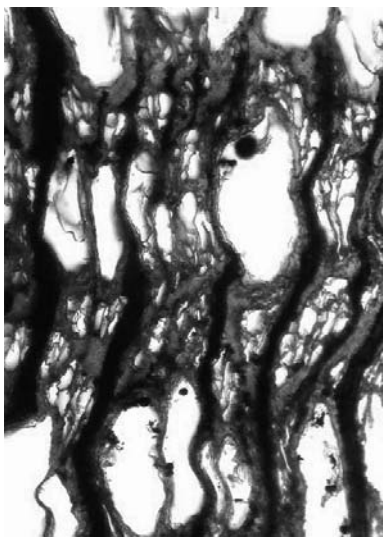
横断面 ―――― ： 0.5㎜　放射断面 ―――― ： 0.2㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

写真４　№４　４区　砂層　中世（12世紀上限）　クリ



横断面 ―――― ： 0.5㎜　放射断面 ―――― ： 0.2㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

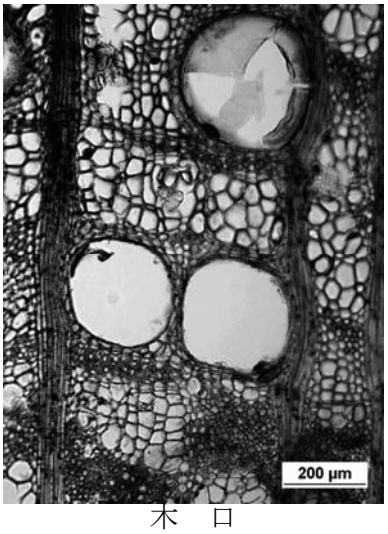
写真５　№６　２区　ＳＤ38床面直上　縄文時代晩期～弥生時代前期　コナラ属コナラ節



横断面 ―――― ： 0.2㎜　放射断面 ―――― ： 0.2㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

写真６　№５　４区　砂層　中世（12世紀上限）　ケヤキ

清水川六反田遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅱ

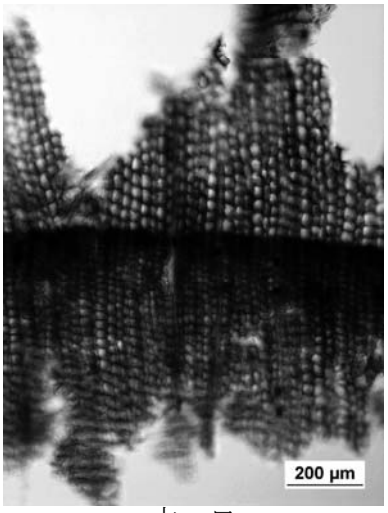


木　口

柾　目

板　目

写真１　№.１　　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



木　口

柾　目

板　目

写真２　№.２　　マツ科モミ属

清水川六反田遺跡出土木製品の顕微鏡写真

図版54

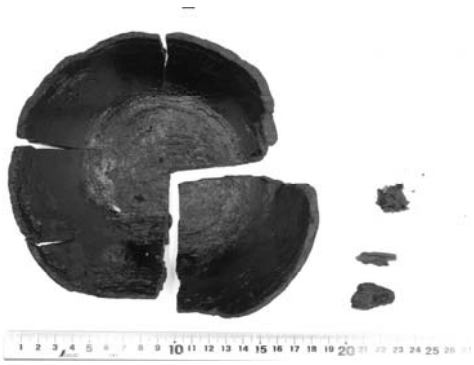


写真１　　内　　面

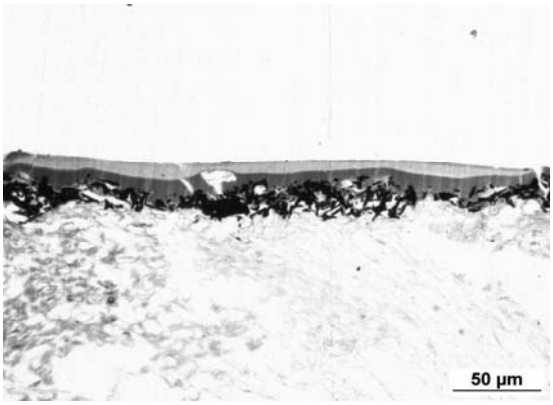


写真２　　内面の断面写真

写真３　　外　　面

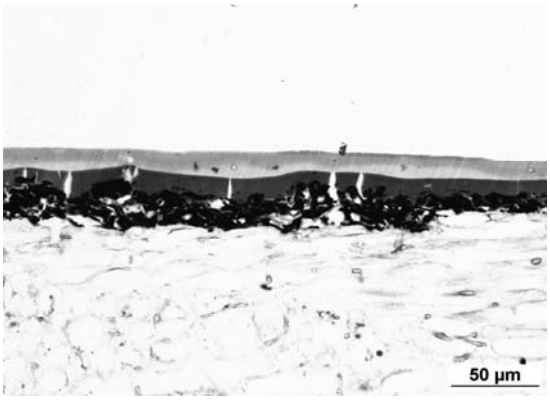


写真４　　外面の断面写真

清水川六反田遺跡出土漆器及び漆器の断面写真

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しみずがわろくたんだいせき
書 名	清水川六反田遺跡
副 書 名	一般国道180号(南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	1
編 著 者 名	高橋浩樹　　小原貴樹
編 集 機 関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒683－0011　鳥取県米子市福市281番地　　TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス　　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発 行 年 月 日	西暦２０１３年１２月２７日　　平成２５年１２月２７日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
清水川六反田遺跡	鳥取県西伯郡 南部町清水川	31389	南部町 ６５１	35度 21分 45秒	133度 20分 18秒	平成21年3月12日 ～ 平成21年9月29日	5,000㎡	道路建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水川六反田遺跡	散布地	弥生時代前期	溝状遺構 土坑	弥生土器、石器	
		古墳時代後期	溝状遺構	土師器、須恵器	
		中　　世	水田跡 溝状遺構	須恵器、土師質土器、 木製品	
		近　　世	溝状遺構	陶磁器	

要　　約

清水川六反田遺跡は、法勝寺川中流域の右岸にあり、標高23～25ｍの扇状地状の台地裾部に位置する。

調査の結果、縄文時代、弥生時代前期、古墳時代後期、中世、近世の遺構と遺物を確認した。

縄文時代には落し穴２基を検出した。また、プラント・オパール分析の結果と籾状の圧痕が付着した土器が認められることから、周辺に水田の存在が推察される。弥生時代前期には、尾根状地形に沿うように溝状遺構が巡り、さらに同じような位置に複数回形成されている。また、当該期の遺物が流れ込んだ状態で多量に出土していることから、調査地の南東側に集落の存在が想定される。古墳時代後期には、自然流路が35基確認された。中世（10～12世紀）には、上下２面の水田跡が確認され、花粉分析の結果、稲作とともにソバ属、ササゲ属などの畑作も行われた可能性がある。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書１
一般国道180号（南部バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡南部町

清水川六反田遺跡

２０１３年１２月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒６８３－００１１　鳥取県米子市福市２８１番地

ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５

印　　刷　有限会社米子プリント社